授業科目	論理学				
担当者	小林　信			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

大学の授業では、レポートを課される機会が多くあります。それは、社会人として世に出るに際して、必要不可欠な力でもあるからです。現状把握をきちんと整理し、問題点を分析し、その課題解決の方法や対策を考え、主張していくことが求められます。そのための講義と演習が学習の内容となります。

■ 到達目標

将来、どのような職業に就くにしても、いわゆるコミュニケーション能力の必要性はいうまでもありません。とりわけ文章による伝達は欠くべからざるものがあります。
ここではその効果的な方法を実践演習を通して身につけ、自分の武器の１つにしていく力を養成することをめざします。

■ 授業計画

第１回　はじめに
－レポートについての説明。授業計画、形態の説明。自己紹介。研究してみたいテーマを2,3考え、その理由を簡潔に記述し、発表する。
第２回　要約（1）
課題例文（1）を300字程度に要約記述。―主述の一貫性、一文の長さ、キーワード等に注意して―
第３回　主張・意見の提起
例文（1）に対する主張・意見を様々な視点から考え要約・記述（300～ 400字程度）。思いつくことをメモ。
第４回　要約（2）
課題例文（2）を300字程度に要約記述。―主述の一貫性、一文の長さ、キーワード等に注意して―
第５回　主張・意見の提起
例文（2）に対する主張・意見を様々な視点から考え要約・記述（300～ 400字程度）。思いつくことをメモ。
第６回　「課題１」について考える。
－ ex）「カレーについて」その作り方を要約・記述（800字程度）
第７回　「課題１」について考える。
－ ex）「おいしいカレーについて」要約・記述（800字程度）
おいしいカレーとは。その作り方（具材・調理法・盛りつけ等）
第８回　「課題１」について考える。
－ ex）「私流おいしいカレーについて」－主張・意見（800字程度）
私流とは（工夫、隠し味、問題、課題）
第９回　「課題１」のまとめ
－ ex）「私流おいしいカレーのつくり方」（題）
全体の構成、段落、章だて。推敲。清書。
第10回　「課題２」（研究テーマ）について考える（2000字～ 2500時）
ex）「介護離職」について、「子どもの貧困」、「選挙年齢」、「議員の育休」等。
第11回　調べる項目を考える
－実態、原因、問題、課題、対策、諸外国との比較等
第12回　参考文献を探す（数冊）
要約。「引用」の仕方に注意してノートに記述していく。

第13回　「全体の構成」、「章だて」を考える。「題」を決める。「段落」の意味を理解して、原稿用紙に記述していく。
第14回　推敲。清書。（課題２のまとめ）
第15回　まとめ
－授業のまとめ。自分自身の問題点、課題等の発表－

■ 評価方法

平常点50％　提出課題50％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前に教科書の指定されたページを呼んでくること。授業の課題に対する参考文献等を調べ借りておくこと。

■ 教　科　書

書　名：レポートの組み立て方
著者名：木下是雄
出版社：ちくま学芸文庫

■ 参考図書

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	コミュニケーション・リハビリテーション学Ⅰ				
担当者	山口　忍			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	２年	総単位数	１単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

コミュニケーションの基本的なスキルを身に着ける練習と、意味を考える

■ 到達目標

初対面の人に、不快感を与えず近づいてい行けるようになる　医療者としての発言の意味を知る

■ 授業計画

第１回　挨拶は何のためにする？
第２回　「聴く」とはどういうことか
第３回　コミュニケーションにおけるポジショニングと「聞く」
第４回　やまびこのレッスン
第５回　声を出す、話すということ
第６回　医療関係者に言われて嫌だったことば
第７回　医療関係者に言われて嫌だったことば―グループでまとめ発表
第８回　人間の本能

■ 評価方法

毎回の小テスト（70%）　最後の講義内で行う言語・聴覚・平衡に関する試験（30%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義中に、コミュニケーションに必要な発声機能・聴覚・平衡について説明するので、復習をし、知識の習得に励むこと

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	コミュニケーション・リハビリテーション学Ⅱ				
担 当 者	井口知也・清水大輔（オムニバス）			国家出題基準	
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、認知症、失語症、脳外傷による高次脳機能障害など、コミュニケーションに障害をもつ方々とのコミュニケーションのとり方をグループ活動を通して学び、臨床で応用できるように演習する。

■ 到達目標

①認知症、失語症、脳外傷の基礎知識を身につける。
②臨床で求められるコミュニケーション能力を身につける。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション（講義進行の説明，認知症・失語症・脳外傷の復習など）
第２回　認知症の概論
第３回　臨床場面における認知症患者とのコミュニケーションのとり方（1）
第４回　臨床場面における認知症患者とのコミュニケーションのとり方（2）
第５回　失語症、脳外傷による高次脳機能障害の概論
第６回　臨床場面における失語症者､脳外傷による高次脳機能障害者とのコミュニケーションのとり方（1）
第７回　臨床場面における失語症者､脳外傷による高次脳機能障害者とのコミュニケーションのとり方（2）
第８回　まとめ（講義の振り返り，達成度の確認など）

■ 評価方法

毎回提出するレポート60%、 平常点（演習への取り組みなど）20%、小テスト20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に、重要ポイントとして指摘した箇所は、次の授業までに復習をして下さい。

■ 教　科　書

適宜資料を配布

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	言語学				
担当者	松井　理直			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	２年生	総単位数	２単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

医療ミスを引き起こす原因の１つとなる論理判断の錯誤について、言語学の立場から考察を行う。

■ 到達目標

医療現場におけるコミュニケーション・ミスについて理解を深めることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　導入：医療ミスを引き起こす原因について
第２回　ことばと論理の関係（1）：連言判断における過誤
第３回　ことばと論理の関係（2）：選言判断における過誤
第４回　ことばと論理の関係（3）：排他的選言をめぐる過誤
第５回　ことばと論理の関係（4）：含意判断における過誤
第６回　ことばと論理の関係（5）：「言い換え」とトートロジー
第７回　ことばと確率：医療診断におけるエビデンス
第８回　擬陽性問題について
第９回　前提確率から見た患者の立場と治療者の立場の違い
第10回　仮説と錯誤
第11回　第一種のエラーと第二種のエラー
第12回　統計学の基礎
第13回　有意水準と第一種のエラー
第14回　検定力と第二種のエラー
第15回　授業のまとめと到達度の確認

■ 評価方法

授業内に毎回行うミニテスト：50%　到達度の確認試験：50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

基本的に授業中に全て理解することを目標とするが、復習に必要な時間として 50 分程度を目安とする。予習に関しては、特に必要としない。なお、授業内容に関しては教科書を用いず、適宜プリントを配布する。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	統計学				
担 当 者	周藤俊治			国家出題基準	
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	２年	総単位数	２単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

取得したデータを集計し有効に活用するには、統計の基礎を理解するとともに取り扱う能力を身につけることが必要である。そこで、本講義ではPCを利用しデータを実際にとり扱う。具体的には見やすい表の作り方やグラフの作り方から、検定・推定などの手法に関する授業を行う。

■ 到 達 目 標

代表値や散布度を算出できる
わかりやすい表・グラフを作成できる
推定や検定の内容を理解し適切な検定法を選択できる

■ 授 業 計 画

第１回　誤差と交絡
第２回　確率的推論
第３回　記述統計（Ⅰ）度数分布
第４回　記述統計（Ⅱ）代表値と散布度
第５回　推定（Ⅰ）　回帰直線
第６回　推定（Ⅱ）　区間推定（1）
第７回　推定（Ⅲ）　区間推定（2）
第８回　検定（Ⅰ）第一種過誤と第二種過誤
第９回　検定（Ⅱ）パラメトリック検定（1）
第10回　検定（Ⅲ）パラメトリック検定（2）
第11回　検定（Ⅳ）ノンパラメトリック検定（1）
第12回　検定（Ⅴ）ノンパラメトリック検定（2）
第13回　検定（Ⅵ）比率の検定（1）
第14回　検定（Ⅶ）比率の検定（2）
第15回　まとめ

■ 評 価 方 法

試験50％　授業内課題（到達度確認）　50％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義情報（http://www.medbb.net ）を確認し予習・復習すること。特に「到達度確認」は、確実に理解しておくこと。

■ 教　科　書

書　名：バイオ統計の基礎―医薬統計入門（バイオ統計シリーズ）
著者名：柳川堯，荒木由布子
出版社：近代科学社

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

講義情報は http://www.medbb.net に掲載します。

授業科目	文学				
担当者	伊東　和幸			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

日本の近現代の文学史を振り返りながら、明治期、大正期、昭和期（戦前、戦後）の代表的作家の作品を紹介しながら、その一部を鑑賞する。

■ 到達目標

日本の近現代の文学史の大枠を把握することにより、今後の学生生活、社会生活の中で、「日本の文学史上に残る代表的作家」､あるいは「知る人ぞ知る作家」の作品を読書するきっかけづくりとなることを望む。

■ 授業計画

第１回　授業ガイダンス（15コマの計画と大まかな授業の流れ）
第２回　明治期の自然主義小説と反自然主義小説
第３回　昭和期（戦前、戦後）文学全般について
第４回　夏目漱石文学について
第５回　夏目漱石「夢十夜」 CD 鑑賞
第６回　芥川龍之介文学について
第７回　芥川龍之介「蜘蛛の糸」､「トロッコ」､「尼堤」CD 鑑賞
第８回　川端康成文学について
第９回　川端康成「伊豆の踊子」CD 鑑賞
第10回　梶井基次郎文学について
第11回　梶井基次郎「檸檬」､「桜の木の下には」､「K の昇天」CD 鑑賞
第12回　三島由紀夫文学について
第13回　寺山修司文学について
第14回　戦後文学の潮流について（第１次戦後派、第２次戦後派、第３の新人、大江健三郎、村上春樹
第15回　レポート課題について　まとめ

■ 評価方法

半期の授業を通して、１～２回課題を与え、その提出されたレポートの内容と授業態度により評価する。（レポート50%、授業態度50%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習復習の必要はないが、授業で紹介した作家の作品（ＣＤ鑑賞外の作品）は、どこかの機会（土曜日曜、夏季休暇、春期休暇等）で出来れば１～２冊は読んでほしい。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：日本文学史―近代から現代へ
著者名：奥野健男
出版社：中央公論新書（212）

■ 留意事項

授業科目	**教育学**				
担 当 者	**加藤　啓一郎**			国家出題基準	
学 科 名	**理学療法学専攻**	学　　年	**２年**	総単位数	**２単位**
	作業療法学専攻	開講時期	**前期**	選択･必修	**選択**

■ 内　　容

本人の主体性の尊重、関係性の重視という視点に立って、発達、成長の過程を捉えなおし、教育的な働きかけについて実践研究を通して検討する

■ 到 達 目 標

教育についての問題を、社会とのかかわりの中で捉えなおすことを通して、医療関係者に必要とされる教育学的思考や手法を身につけることを目的とする

■ 授 業 計 画

第１回　イントロダクション
第２回　主体性、関係性の重視と教育
第３回　生涯発達の視点と障害について１
第４回　生涯発達の視点と障害について２
第５回　生涯発達の視点と障害について３
第６回　生涯発達の視点と障害について４
第７回　生涯発達の視点と障害について５
第８回　エピソード記述の方法
第９回　教育における主体性の問題を捉えなおす
第10回　家族、地域の問題について
第11回　実践的検討１
第12回　実践的検討２
第13回　実践的検討３
第14回　実践的検討４
第15回　エピソードの発表と討議

■ 評 価 方 法

レポート80%、発表20% で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

配布したプリントを読んでおくこと。

■ 教　科　書

授業中にプリントを配布

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	**法学概論**				
担 当 者	**家　正治**			国家出題基準	
学 科 名	**理学療法学専攻**	学　　年	**２年**	総単位数	**２単位**
	作業療法学専攻	開講時期	**後期**	選択･必修	**選択**

■ 内　　容

「社会あるところに法あり」という法格言があります。社会規範には、道徳規範、宗教規範、習俗規範、法規範等がありますが、それらの中で、法規範はどのような特徴を有するのかを把握し、また今日の国内法と国際法が当面する主要問題と課題を考察します。

■ 到 達 目 標

本講義を通じて、国内社会における「人の支配」に対する「法の支配」、また国際社会における「力の支配」に対する「法の支配」について理解することにいたします。その中で、リーガル・マインド、「法的ものの考え方」に接近することにいたします。

■ 授 業 計 画

第１回　「法学」をまなぶにあたって
第２回　法とは何か―とくに法と道徳について
第３回　法の発展と法の体系
第４回　近代国家と憲法
第５回　日本憲法と国民主権主義
第６回　日本憲法と基本的人権尊重主義
第７回　日本国憲法と平和主義
第８回　日本国憲法権力分立（三権分立）
第９回　法と裁判（とくに裁判基準について）
第10回　国内法と国際法の関係
第11回　戦争の違法化と安全保障
第12回　人権の国際的保障（国際人権保障）とその発展
第13回　人民の自決権とその発展（とくに経済的自決権について）
第14回　地球環境の保護とその発展
第15回　国内社会と国内社会における「法の支配」

■ 評 価 方 法

筆記試験60％　平常点40％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎回授業の始めに若干の時間を割き、社会で生起している法的問題の1つまたは2つを取り上げて、検討することにいたします。一般新聞のとくに政治、経済、社会面に留意しておいて下さい。

■ 教　科　書

書　名：法学入門〔第６版〕
著者名：末川博編
出版社：有斐閣

■ 参 考 図 書

書　名：現代法学入門〔第４版〕
著者名：伊藤正己・加藤一郎編
出版社：有斐閣

■ 留 意 事 項

問題意識を持つとともに日常的な勉学の努力を望みます。

授業科目	国際社会と日本				
担当者	家　正治			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	２年	総単位数	２単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

国際社会の構造と現状を理解し、現代国際社会が当面する戦争と平和の問題、途上国問題、人権問題、地球環境問題等の全人類的課題をとり上げながら、その中で占める日本の位置と役割について考察します。

■ 到達目標

国際社会の構造や実態を把握し、国際社会を規律している原則や規範について理解・認識するとともに、現代国際社会において日本の占める立場と係わりについて理解できるように努めます。

■ 授業計画

第１回　本授業に際しての注意および国際社会の成立とその中での日本
第２回　国際社会の発展と現代国際社会ならびに日本の位置と係わり
第３回　国際社会を動かす主要なアフターと日本の事例
第４回　戦争の違法化と国際紛争の平和的解決（日本との係わりを含めて）
第５回　勢力均衡政策から集団安全保障体制へ（日本との係わりを含めて）
第６回　平和維持活動（PKO）の役割と日本の位置
第７回　軍縮の現状と阻害要因および日本の役割
第８回　日米安全保障体制の展開と現状
第９回　先進国と途上国をめぐる経済問題　－歴史的展開
第10回　先進国と途上国をめぐる経済問題　－現状と実態
第11回　人権の国際的保障（国際人権保障）の発展
第12回　人権の国際的保障（国際人権保障）と日本
第13回　難民問題とその庇護と保護および日本の反応
第14回　地球環境の保護と国際協力（とくに日本の役割について）
第15回　今後の国際社会と日本

■ 評価方法

筆記試験　60％　　平常点　40％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

具体的な事例を取り上げながら、授業を行いたいと思います。できるだけ、毎日、一般新聞の国際面を読むように心掛けて下さい。

■ 教　科　書

書　名：国際関係〔全訂版〕
著者名：家　正治 、岩本　誠吾、桐山　孝信、戸田五郎、西村智朗、福島崇宏　著
出版社：世界思想社

■ 参考図書

書　名：国際機構〔第四版〕
著者名：家正治、小畑郁、桐山孝信　編
出版社：世界思想社

■ 留意事項

問題意識を持つとともに日常的な勉学への努力を望みます。

授業科目	生活科学（福祉住環境論）				
担当者	山田　隆人			国家出題基準	PT　専門Ⅳ-1-G OT　専門Ⅳ-1-G
学科名	理学療法学専攻	学　年	２年	総単位数	２単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　　容

OT・PT の職能の一つとして、日常生活活動の支援がある。環境因子である居住環境を改善することで、対象者の生活機能の維持・向上を計ります。本講義では、居住環境の改善に関連する制度や施策、関連する職能との連携および居住環境改善を行う為の基礎知識を学びます。

■ 到達目標

居住環境改善に関する法制度や社会状況を理解する
高齢者や障害者の暮らしの状況を理解する
障害の特性を理解し、環境支援の方法を理解する

■ 授業計画

第１回　高齢者を取り巻く社会状況と住環境
第２回　介護保険制度の概要
第３回　障害者を取り巻く社会状況と住環境
第４回　相談援助の考え方と福祉住環境整備の進め方　１節・２節
第５回　相談援助の考え方と福祉住環境整備の進め方　３節・４節
第６回　福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識　１節 AB
第７回　福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識　１節 C ～ J
第８回　福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識　２節 A
第９回　福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識　２節 B
第10回　福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識　２節 C
第11回　福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識　２節 D
第12回　福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識　２節 EFG
第13回　補節　福祉住環境整備の実践に必要な基礎知識　A
第14回　補節　福祉住環境整備の実践に必要な基礎知識　BC
第15回　まとめ

■ 評価方法

確認テスト（30％），課題・確認テスト（30％），出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価），の結果を総合的に評価する.

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前に教科書の該当ページを全て読んでくること。
確認のための課題・テストなどを実施する。
講義の進行は教科書の出版後に連絡します。

■ 教　科　書

書　名：福祉住環境コーディネーター検定試験®　２級公式テキスト＜改訂４版＞　2016年２月出版予定
著者名：東京商工会議所
出版社：東京商工会議所

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	チーム医療論				
担当者	井上　悟			国家出題基準	Ⅲ-2-D
学科名	理学療法学専攻	学　年	２年	総単位数	１単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

今改めて、チーム医療が求められる理由とチーム維持・発展のための条件を探る。
具体的なチーム医療の事例、現状について紹介する。

■ 到達目標

チーム医療が求められる理由とチーム医療の事例、現状について知る。

■ 授業計画

第１回　チーム医療論オリエンテーション（１年次リハ概論復習）
第２回　今更、なぜチーム医療が求められるのか？
第３回　チーム医療の意義とチーム作りのポイント
第４回　チーム医療の条件（心得）と事例１
第５回　チーム医療の条件（心得）と事例２
第６回　チーム医療の条件（心得）と事例３
第７回　チーム医療の条件（心得）と事例４
第８回　チームメンバーの専門性とスキル
第９回　チーム医療実践具体事例１：医療安全
第10回　チーム医療実践具体事例２：感染制御
第11回　チーム医療実践具体事例３：NST・がん
第12回　チーム医療実践具体事例４：リハビリテーション・チーム
第13回　チーム医療実践具体事例５：リハビリテーション・チーム
第14回　チーム医療の課題１
第15回　チーム医療の課題２：患者参加

■ 評価方法

筆記試験またはレポート　70%、授業態度　30%で総合評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業前には、教科書の授業該当範囲を予習しておくこと

■ 教　科　書

書　名：チーム医療を成功させる10か条
著者名：福原麻希
出版社：中山書店，2013年 ,3150円（最新版で）

■ 参考図書

書　名：チーム医療推進協議会ホームページ
著者名：（公社）　日本理学療法士協会
出版社：http://www.team-med.jp/

■ 留意事項

各回の講義テーマ、内容については、関連する講義の進行状況と関連して変更することがあります。

授業科目	スポーツ医学				
担当者	中村憲正・今柳田剛正（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	２年	総単位数	１単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

スポーツ医学の急性および慢性の内科的･整形外科的疾患について学ぶ。スポーツ選手の健康管理、トレーニングによる生理的適応現象、トレーニングによる病的現象、外傷、スポーツによる内科的・整形外科的障害とその対策。生活習慣病、フィットネスについて知識を得る。

■ 到達目標

スポーツ活動の場において、医療スタッフ、教育者、指導者として必要なスポーツ医学の知織を体得する。

■ 授業計画

第１回　スポーツ医学概論　スポーツと健康、治療について学ぶ
第２回　運動の生理、病理学　力学刺激による生体反応を学ぶ
第３回　スポーツ現場におけるメディカルサポートの実際１（外部講師）
第４回　部位別スポーツ障害　頭頸部・体幹
第５回　メディカルサポートの実際２（外部講師）
第６回　部位別スポーツ障害　上肢
第７回　メディカルサポートの実際３（外部講師）
第８回　アンチドーピング
第９回　スポーツ障害総論１　内科的なスポーツ障害について学ぶ
第10回　スポーツ障害総論２　外科的なスポーツ障害について学ぶ
第11回　部位別スポーツ障害　下肢
第12回　スポーツ傷害の予防とは
第13回　熱中症
第14回　スポーツと栄養
第15回　子供たちへのスポーツ指導

■ 評価方法

レポート100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後に教科書を精読し該当内容の復習を行うこと。

■ 教　科　書

書　名：アルレティックリハビリテーションガイド　競技復帰・再発予防のための実践的アプローチ
著者名：福林　徹
出版社：文光堂

■ 参考図書

書　名：新板スポーツ外傷・障害の理学診断・理学療法ガイド【改訂版】
著者名：臨床スポーツ医学編集委員会
出版社：文光堂

■ 留意事項

授業科目	作業療法概論				
担当者	辻　郁			国家出題基準	Ⅲ-2-D
学科名	理学療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　容

より良いチームアプローチが実践できるよう，歴史や理論的背景，種々の展開例から，作業療法実践の枠組みと実際を学ぶ

■ 到達目標

1．作業療法の枠組みを概観できる
2．作業療法の実践例を知ることで，その専門性を理解できる
3．チームアプローチについて具体的な考えが持てる

■ 授業計画

第1回　作業療法の枠組み　理論的背景
第2回　既存データから見える作業療法
第3回　作業療法の実際
第4回　作業療法の実際
第5回　作業療法の実際
第6回　作業療法の実際
第7回　作業療法の実際
第8回　作業療法の実際
第9回　作業分析の実際（演習）
第10回　作業分析の実際（演習）
第11回　作業ｊ療法のおける作業の意味
第12回　作業療法評価の実際（演習）
第13回　作業療法評価の実際（演習）
第14回　作業療法研究実際
第15回　作業療法全体像

■ 評価方法

筆記試験（100%）　取り組み態度（無断欠席、遅刻などは減点対象となる）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

作業療法に関連するトピックを読んでおくこと（授業時に配布する）
授業終了ごとに，授業内容を振り返り，リアクションペーパーを作成する

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：　標準作業療法学　作業療法概論
著者名：　岩崎テル子　編集
出版社：　医学書院

書　名：　作業療法の世界
著者名：　鎌倉矩子
出版社：　三輪書店

■ 留意事項

作業療法の専門性を理解し，よりよいチームアプローチが出来るような学習を進めてほしい．

授業科目	理学療法概論				
担当者	今井　公一			国家出題基準	Ⅱ-3, Ⅲ-2-D
学科名	作業療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法の歴史、概念、理学療法の実際を理解するために必要な基礎知識を振り返りながら、理学療法の理解を深めます。

■ 到達目標

1．理学療法の歴史的背景を説明できる。
2．理学療法の背景となる思想や理念について説明できる。
3．理学療法の実際について説明できる。

■ 授業計画

第1回　リハビリテーションと理学療法
第2回　理学療法プロセスと評価
第3回　理学療法理解に必要な基礎知識（1）
第4回　理学療法理解に必要な基礎知識（2）
第5回　理学療法理解に必要な基礎知識（3）
第6回　理学療法理解に必要な基礎知識（4）
第7回　姿勢と歩行
第8回　運動療法の実際（1）
第9回　運動療法の実際（2）
第10回　物理療法の実際
第11回　現代社会と理学療法
第12回　理学療法研究（1）
第13回　理学療法研究（2）
第14回　理学療法研究（3）
第15回　総括

■ 評価方法

提出物　50%　　筆記試験　50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜提示される課題に対して、自己学習を積極的に進めてください。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	言語聴覚学概論				
担当者	山口　忍・大西　環・吉機俊雄・大根茂夫・齋藤典昭・工藤芳幸・中村靖子（オムニバス）			国家出題基準	Ⅰ-2-E, Ⅱ-3-CG 他
学科名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚障害について基礎的知識を学び、言語障碍者とのコミュニケーションを実際に経験する

■ 到達目標

失語症・運動性構音障害を有する方の実際について知り、良好なコミュニケーション方法を学ぶ

■ 授業計画

第１回　言語聴覚障害概論：コミュニケーションの障害とは何か（山口）
第２回　小児領域：発達遅滞（斎藤）
第３回　小児領域：発達障害（工藤）
第４回　嚥下障害：基本的なメカニズム（解剖・生理）（大根）
第５回　嚥下障害：評価及び訓練（大根）
第６回　聴覚障害：難聴の疑似体験と補聴機器（山口）
第７回　失語症：発症のメカニズム症状の特徴（吉機）
第８回　失語症：特徴に応じたコミュニケーション（吉機）
第９回　言語障害を有する方とのコミュニケーションの工夫（大西）
第10回　疑似患者とのフリートーク（大西　吉機　大根　中村　山口）
第11回　対話会（大西　吉機　大根　中村　山口）
第12回　対話会（〃）
第13回　対話会（〃）
第14回　対話会（〃）
第15回　まとめ・レポート作成（山口）

■ 評価方法

「対話会」の出席を重視　各領域の学習内容を合わせた試験を実施　左記二つで100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

対話会に使用する物品を用意すること

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

資料を講義中に配布する　対話会は土曜日に実施　日程は開講後連絡する

授業科目	介護学概論				
担当者	橋本　卓也			国家出題基準	Ⅲ-1
学科名	理学療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

近年、重視されている「キュアからケアへ」という概念に内包されている「治療から全人間的ケアへ」「医学モデルから生活・社会モデルへの転換」という視点を共有するとともに、介護・介助実践におけるジレンマについても考察・言及する。また、重い障害をもつ人たちから提起された「介助者手足論」という考え方を通して利用者の尊厳を支えるケアのあり方や自立（自律）支援を目指すケアについて理解を深める。さらに「認知症」800万人時代といわれている現代における認知症高齢者に対する「家族介護」「在宅介護」のあり方を考える。

■ 到達目標

①日本が抱える介護問題の実態及びその要因について理解することができる。
②利用者本位、当事者本位の視点にたった介護・介助のあり方について考察することができる。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　日本が抱える介護問題の背景（日本の近代化と少子・高齢化問題）
第２回　介護・介助実践を通じて生起する「ジレンマ」について
第３回　介護の原理性（介護の本質及び全人間的視点にたったケアのあり方について）
第４回　アシュリー事件を通して見えてくる重い障害をもつ人たちに対する介助のあり方・価値等について
第５回　感情労働としてのケアワークについて
第６回　「介助者手足論」という理論から見えてくる利用者本位の視点に立ったケアのあり方とは
第７回　グリーフケアについて
第８回　認知症高齢者に対する家族介護・在宅介護のあり方について（NHK の映像を通して）

■ 評価方法

レポート（３回）を評価点とする。その他、出席率・授業中の態度等は減点対象とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

日頃から介護問題に関する記事・ニュース等について関心をもつこと。
回，第6回の授業については、予習する書籍を指定するので読んでおくこと。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：母よ殺すな
著者名：横塚晃一
出版社：生活書院

書　名：アシュリー事件
著者名：児玉真美
出版社：生活書院

■ 留意事項

授業への積極的参加を望む。他者に迷惑をかける等の態度については退出を求めるとともに減点の対象とする。

授業科目	地域医療実践学				
担 当 者	辻　郁・今井公一・山口　忍・有馬和代（オムニバス）			国家出題基準	Ⅲ-1
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	4年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

講義により，地域の医療や保健福祉領域での実践例を知る
臨床実習で担当した事例（症例）の居住地の社会資源等の概況を確認し，ニーズを充足するサービスや施策等を企画する
以上を通して，地域で理学療法・作業療法を実践するために必要な知識や方法を学ぶ

■ 到 達 目 標

1．実践例を聞くことでその現状を把握し，課題が推測できる
2．実習で担当した事例が暮す地域の現状がわかる
3．実習で担当した事例が豊かに暮らすためのニーズが抽出できる
4．3．のニーズを充足できる実際的なサービスを企画できる

■ 授 業 計 画

第1回　実践例を知る　1
第2回　実践例を知る　2
第3回　実践例を知る　3
第4回　実践例を知る　4
第5回　実践例を知る　5　（非常勤講師）
第6回　実践例を知る　6　（非常勤講師）
第7回　実践例を知る　7　（非常勤講師）
第8回　実践例を知る　8　（非常勤講師）
第9回　臨床実習で担当した事例が暮す地域の概況を明らかにする
第10回　担当事例のニーズを明らかにする
第11回　ニーズを充足するためのサービス企画
第12回　ニーズを充足するためのサービス企画案プレゼン準備
第13回　ニーズを充足するためのサービス企画案プレゼン準備
第14回　企画書のプレゼンテーション1
第15回　企画書のプレゼンテーション2

■ 評 価 方 法

取り組み態度：30%　課題レポート：50%　　報告内容の相互評価点：20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

第1回から第8回の講義終了後は，その内容を振り返り，自己学習内容を含めてレポートを作成する
第9回から第15回は演習でありその回の終了後は，実施内容を振り返りリアクションペーパーを作成する．
予習課題は定めないが，期間内に課題を終了させるよう準備をすること

■ 教　科　書

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	障害者福祉論				
担当者	橋本卓也・渕上賢治（オムニバス）	国家出題基準	Ⅲ-1-C, Ⅲ-2-BC		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

障害者福祉に関する理念・価値・法制度及び障害構造等を体系的に理解するとともに障害をもつ人たちの生活･教育･雇用･施設環境等の実態を通して彼らを排除する社会構造への関心と支援のあり方を模索する。また､障害をもつ人たちがおかれている現状を把握し､「医学モデル」という狭義の捉え方ではなく､「生活･社会モデル」の視点からこの問題を考える。

■ 到達目標

①障害者福祉の理念・価値及び障害をもつ人たちの生活実態を把握することができる。
②障害をもつ人たちの生活ニーズを解決するための制度・施策等を把握し、支援のあり方を考察することができる。
③障害者福祉に関する医学モデルと生活・社会モデルの差異を理解できる。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　障害者福祉の理念及び価値
第２回　障害の概念及び障害構造について（ICIDH モデルから ICF モデルへ）
第３回　障害者の法的定義と日本の障害者の実態
第４回　障害者福祉の史的展開及び動向（欧米と日本の差異）
第５回　日本の障害者福祉施策体系
第６回　障害者の雇用・就労の現状と課題
第７回　障害者の所得保障と経済的負担軽減
第８回　障害者制度・施策の変遷（支援費制度から障害者自立支援法へ）
第９回　障害者総合支援法
第10回　特別支援教育の変遷と課題
第11回　障害者施設論（世界の情勢と課題及び地域移行について）
第12回　障害者の権利擁護と障害者虐待防止法（権利侵害の実態と要因）
第13回　障害者のセルフヘルプ運動（理念と機能・役割）
第14回　障害者ケアマネジメントと障害者の意思決定支援について
第15回　ゲストスピーカー（障害当事者）による講義と交流（意見交換）

■ 評価方法

定期試験（筆記試験）100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各回の授業項目について「参考図書」その他の当授業に関連する書籍を読んだ上で、授業に臨むこと。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：よくわかる障害者福祉
著者名：小澤　温（編）
出版社：ミネルヴァ書房

■ 留意事項

授業への積極的参加を望む。

授業科目	高齢者福祉論				
担当者	橋本　卓也			国家出題基準	Ⅲ-1-CD
学科名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

現代日本の高齢者を取り巻く現状と福祉課題を考察するとともに、介護保険制度・地域包括ケアシステムについて理解する。また、権利擁護の視点から高齢者に対する虐待・孤立死等の要因を探る。さらに国の認知症施策としてある認知症初期集中支援チームについても学ぶ。

■ 到達目標

①高齢者福祉の社会的背景、理念、目標等について理解することができる。
②介護保険を中心とする高齢者福祉施策と、それに基づいた様々な施策・具体的実践について理解することができる。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション　　現代における高齢者の生活課題と福祉ニーズについて
第２回　孤立死・孤独死について
第３回　セルフ・ネグレクトについて
第４回　介護保険制度Ⅰ
第５回　介護保険制度Ⅱ
第６回　地域包括ケアシステムについて
第７回　高齢者の権利擁護（高齢者虐待）について
第８回　認知症初期集中支援チームについて

■ 評価方法

定期試験（筆記試験）100％　　その他、小テスト、授業中の態度等も評価の対象とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

参考図書等を用いて各授業項目に関する予習（読んでくる）をしておくこと。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：高齢者に対する支援と介護保険制度
著者名：岡田進一・橋本正明（編著）
出版社：ミネルヴァ書房

■ 留意事項

授業に積極的に参加すること

授業科目	健康科学概論				
担当者	今井公一・田坂厚志（オムニバス）			国家出題基準	Ⅱ-1-B
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

健康とは単に病気でないということではなく、肉体的、精神的、社会的に、すべてが満たされた状態を意味し、現代社会においては人々の安心安全な生活の実現のために、様々な取り組みが行われています。当該授業では、医療者を目指すものとして健康の概念に触れ、その理解　を深めようと試みます。

■ 到達目標

健康とは何か、またその実現のために必要な取り組みについて自身の考えを述べることができる。

■ 授業計画

第１回　健康とは何か（概念）
第２回　健康を支える心身機能（1）筋骨格系
第３回　健康を支える心身機能（2）筋骨格系
第４回　健康を支える心身機能（3）神経系
第５回　健康を支える心身機能（4）神経系
第６回　健康を支える心身機能（5）呼吸循環系
第７回　健康を支える心身機能（6）呼吸循環系　　課題１
第８回　健康実現のための取組み探究（1）
第９回　健康実現のための取組み探究（2）
第10回　健康実現のための取組み探究（3）
第11回　健康実現のための取組み探究（4）　　課題２
第12回　自身の健康を考える
第13回　自身の健康を考える
第14回　自身の健康を考える
第15回　自身の健康を考える　　課題３

■ 評価方法

課題１～３　100%　但　課題の未提出は10点の減点

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業は主に学生間の討議、文献調査、それらのまとめで進みます。必要に応じて時間外にも考え、調べて下さい。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	感染症学				
担当者	藤岡　重和			国家出題基準	Ⅱ-2
学科名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

感染症と人・微生物との関わり、感染防御機構、感染症の検査と診断、治療、そして感染予防策について学習する。感染症は、リハビリテーション領域において、特に注意が必要であり、各種感染症について基本的理解ができるように解説する。

■ 到達目標

1．微生物と感染症、感染防御機構について基本的理解ができる
2．代表的な感染症について、病原微生物とその感染経路、臨床像、診断と治療法を理解する
3．院内感染および感染予防対策について説明できる

■ 授業計画

第1回　感染症総論　(1)　微生物と感染症、 感染防御機構
第2回　感染症総論　(2)　感染症の検査と診断、 感染症の治療
第3回　感染症各論　(1)　呼吸器感染症、結核
第4回　感染症各論　(2)　消化器感染症、食中毒
第5回　感染症各論　(3)　肝炎
第6回　感染症各論　(4)　尿路感染症、 性感染症
第7回　感染症各論　(5)　皮膚、粘膜の感染症
第8回　感染症各論　(6)　人獣共通感染症、 寄生虫感染症
第9回　感染症各論　(7)　小児の感染症、 母子感染
第10回　感染症各論　(8)　高齢者の感染症、 日和見感染症
第11回　感染症各論　(9)　新興感染症、 感染症トピックス
第12回　感染制御学　(1)　院内感染、 標準予防策、 感染経路別予防策
第13回　感染制御学　(2)　術後感染症、 カテーテル関連感染症、 針刺しと感染症
第14回　感染制御学　(3)　薬剤耐性菌による感染症、その他
第15回　総復習（国家試験対策）

■ 評価方法

定期試験　80%　　小テスト　10%　　授業態度　10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業では、次回までに学習すべき課題を提示しますので、事前学習を必ずしておいてください。
次回授業までに、前回の授業内容を復習しておいてください。

■ 教　科　書

書　名：臨床微生物、医動物　（NURSING GRAPHICUS 疾患の成り立ち 3）
著者名：矢野久子、安田陽子
出版社：MC メディカ出版

■ 参考図書

書　名：病原体・感染・免疫　第2版
著者名：藤本秀士
出版社：南山堂

■ 留意事項

授業科目	医療安全学				
担 当 者	藤岡　重和			国家出題基準	Ⅲ-1-A
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

頻発する医療事故を概観し、医療現場の現状と医療職を取りまく社会的環境を理解する。次に、事故発生のメカニズムと事故分析、事故対策について学習する。また、事故事例の分析を通して医療機関における安全対策のありかたについて考える。

■ 到 達 目 標

1．医療事故の実際を知り、安全対策の必要性について理解する
2．事故の発生要因について説明できる
3．医療機関における安全対策を説明できる

■ 授 業 計 画

第1回　医療事故の疫学、頻度、医療事故事例の紹介
第2回　医療事故の定義、分類、医療事故の報告制度
第3回　医療事故発生のメカニズム
第4回　医療事故分析、事故対策
第5回　医療機関における安全対策　(1)
第6回　医療機関における安全対策　(2)
第7回　医療事故後の対応、医療事故に関する法的責任
第8回　リハビリテーション業務における安全対策

■ 評 価 方 法

定期試験　60%、 提出課題　20%、 授業態度　20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業で、次回までに学習すべき課題を提示しますので、事前学習を必ずしておいてください。
次回授業までに、前回の授業内容を復習しておいてください。

■ 教　科　書

書　名：医療安全　（NURSING GRAPHICUS 看護の統合と実践 2）
著者名：松下由美子、杉山良子、小林美雪
出版社：MC メデイカ出版

■ 参 考 図 書

書　名：リハビリテーション医療における安全管理・推進のためのガイドライン
著者名：日本リハビリテーション医学会診療ガイドライン委員会編
出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

授業科目	生理学実習				
担 当 者	木村　晃大			国家出題基準	Ⅰ-2-BCFHI
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

解剖学・生理学・運動学の講義を踏まえ、環境の変化・運動に対する生体の反応や恒常性維持について学習する。

■ 到達目標

人の生理機能を自らの手で計測し、その結果を解析・考察する事により、人体機能のダイナミクスやホメオスタシスが維持されるメカニズムを理解する。また、この実習を通して、医療従事者として必要な姿勢や洞察力を養う。

■ 授業計画

第１回　実習オリエンテーション
第２回　講義・機器取扱い実施確認１
第３回　講義・機器取扱い実施確認２
第４回　講義・機器取扱い実施確認３
第５回　講義・機器取扱い実施確認４
第６回　実習１
第７回　実習２
第８回　実習３
第９回　実習４
第10回　実習５
第11回　解説（講義）
第12回　解説（講義）

■ 評価方法

実習態度・レポート（50%）、試験（50%）により評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

出席や実習中の態度も成績評価に含みます。レポート提出は期限厳守のこと。レポート未提出は再履修とします。被験者の安全や守秘義務を守る事を念頭にして、真剣に取り組むこと。
また、全ての内容は国家試験に直結します。上記に限らず、積極的に沢山の参考書に目を通してレポートを作成し、各項目について理解を深める様に努める事。レポートの評価では①内容のオリジナリティと、②各項目について深く理解しようとする努力が認められるかどうか、を重視します。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：標準生理学（第７版）
著者名：小澤　瀞司　他
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	運動生理学				
担当者	伊禮　まり子	国家出題基準	専門分野 1-3-A ～ N		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

身体運動において、生体内の各種機構がどのように働いているかを講義する。

■ 到達目標

運動生理学の基礎的な知識および考え方を身につけることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
第２回　運動と筋骨格系（1）
第３回　運動と筋骨格系（2）
第４回　運動と神経系（1）
第５回　運動と神経系（2）
第６回　運動と神経系（3）
第７回　運動と呼吸（1）
第８回　運動と呼吸（2）
第９回　運動と循環（1）
第10回　運動と循環（2）
第11回　運動と代謝
第12回　運動と栄養
第13回　運動学習とトレーニング
第14回　運動と発育・発達・加齢
第15回　総括

■ 評価方法

筆記試験（90%）、小テスト（10%）に授業態度を併せて評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

運動・動作を治療手段とするPT・OTにとって、運動生理学は自らの治療が生体機能に及ぼす影響を理解する基礎となります。生理学、2年生の生理学実習とリンクする内容でもありますので、しっかりと学んでください。また、授業時間のみでは理解は深まりません。あらかじめ教科書を読んでから授業に臨む、授業後には講義内容をまとめる等、自分に適した自己学習方法を見つけ、積極的に予習・復習を行う習慣を身につけましょう。

■ 教　科　書

書　名：運動生理学の基礎と発展
著者名：春日 規克・竹倉 宏明
出版社：フリースペース

■ 参考図書

書　名：運動生理学20講　第２版
著者名：勝田　茂
出版社：朝倉書店

書　名：スポーツ・運動生理学概説
著者名：山地　啓司他
出版社：明和出版

書　名：改訂　身体活動と体力トレーニング
著者名：藤原勝夫・外山寛
出版社：日本出版サービス

書　名：身体機能の調節性
著者名：池上晴夫
出版社：朝倉書店

書　名：姿勢制御の神経生理機構
著者名：藤原勝夫
出版社：杏林書院

■ 留意事項

授業科目	運動学各論				
担当者	境　隆弘			国家出題基準	Ⅰ-3
学科名	理学療法学専攻	学　年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

下肢、体幹・頭頚部の機能解剖に立脚した運動の分析を関節運動学と運動力学の視点
から部位別に学ぶ。姿勢や歩行に関する運動学的、運動力学的分析と筋出力、運動学習について学ぶ。

■ 到達目標

下肢、体幹・頭頚部の関節運動学を理解し、触診やデモンストレーションが出来るようになる。
姿勢や歩行に関する運動学的、運動力学を理解し、観察や分析が出来るようになる。

■ 授業計画

第１回　コース・ガイダンス
　　講義の進め方、評定の他、前期に学んだ運動学総論、後期に学ぶ運動学実習との関連性を学ぶ
第２回　下肢の関節運動学①
　　股関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第３回　下肢の関節運動学演習①
　　股関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第４回　下肢の関節運動学②
　　膝関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第５回　下肢の関節運動学演習②
　　膝関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第６回　下肢の関節運動学③
　　足関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第７回　下肢の関節運動学演習③
　　足関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第８回　体幹の関節運動学
　　体幹に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第９回　体幹の関節運動学演習
　　体幹の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第10回　頭頚部・顔面の関節運動学
　　頭頚部・顔面に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第11回　頭頚部・顔面の関節運動学演習
　　頭頚部・顔面の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第12回　四肢と脊柱の運動連鎖
　　開放性運動連鎖（OKC）と閉鎖性運動連鎖（CKC）について学ぶ
第13回　四肢と脊柱の運動連鎖演習
　　OKC と CKC に関する演習を行い、理解を深める
第14回　筋トルク
　　様々な収縮形態により発揮される筋トルクについて学ぶ
第15回　筋トルク演習
　　実際に筋トルクを計測し、理解を深める
第16回　姿勢制御の神経機構
　　ヒトの姿勢反応について学ぶ
第17回　姿勢制御の神経機構演習
　　ヒトの姿勢反応について、演習を行い理解を深める

第18回　運動戦略
　　ヒトの運動戦略（ストラテジー）について学ぶ
第19回　運動戦略演習
　　ヒトの運動戦略（ストラテジー）について、演習を行い理解を深める
第20回　歩行の運動学①
　　歩行の運動学について、概論を学ぶ
第21回　歩行の運動学②
　　歩行の運動学的分析について学ぶ
第22回　歩行の運動学③
　　歩行の運動力学的分析について学ぶ
第23回　運動学習
　　ヒトの運動学習機能について学ぶ
第24回　運動学習演習
　　ヒトの運動学習について、演習を行い理解を深める
第25回　実技試験（口頭試問含む）①
　　学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
第26回　実技試験（口頭試問含む）②
　　学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
第27回　実技試験（口頭試問含む）のフィードバック①
　　実技試験の解説、講評を行う
第28回　実技試験（口頭試問含む）のフィードバック②
　　実技試験の解説、講評を行う
第29回　総括①　本講義で学んだ事について、復習、再確認を行う
第30回　総括②　本講義で学んだ事について、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験　80％
小テスト・実技テストで20％（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

（予習）
運動学は、解剖学、生理学、物理学（力学）の知識が無ければ、理解が進まない。
毎回、授業内容に応じた解剖学、生理学、物理学（力学）の復習をしてくること。
例：膝関節の授業の前は、膝関節の解剖の復習をしてくる。
（復習）
授業の翌週に必ず小テストを行うので、授業での学習内容が身に付くよう復習すること。

■ 教　科　書

書　名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版

書　名：基礎運動学 PT・OT のための運動学テキスト
著者名：小柳磨毅　他編
出版社：金原出版

■ 参考図書

書　名：解いてなっとく　使えるバイオメカニクス
著者名：前田哲男　他
出版社：医学書院

書　名：臨床歩行分析ワークブック
著者名：武田　功監修
出版社：メジカルビュー

■ 留意事項

理学療法の基礎学問として運動学総論から続く重要な科目であり、さらに運動学実習、臨床運動学と引き続く勉強なのでしっかり学んでほしい。

授業科目	運動学各論				
担 当 者	長谷川　昌士			国家出題基準	Ⅰ-3-BCDEF
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	２年	総単位数	２単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

生体力学の基礎を学習する。運動学的分析手法である床反力、体重心、関節モーメントについて理解を深める。その応用として立ち上がりや歩行における運動学的分析について理解を深める。
運動学習における理論について学習し、グループにて課題に取り組む。呼吸や心臓における運動療法について学習し、その技術を演習形式にて理解を深める。筋力増強について学習し、その技術を演習形式にて理解を深める。

■ 到 達 目 標

1．運動学的分析手法（床反力、体重心、関節モーメント）を理解する。
2．立ち上がりや歩行の運動学的分析を理解する。
3．運動学習における理論について理解する。
4．呼吸や心臓における運動療法について理解する。
5．筋力増強、ストレッチングにおける理論および方法について理解する。

■ 授 業 計 画

第１回　座位姿勢について学習する。
第２回　立位姿勢について学習する。
第３回　運動学的分析手法に必要な床反力、体重心について学習する。
第４回　運動学的分析手法に必要な関節モーメントについて学習する。
第５回　運動学的分析（立ち上がり動作）について学習する。
第６回　運動学的分析（歩き始め）について学習する。
第７回　運動学的分析（歩行）の歩行周期、ケイデンス、歩幅について学習する。
第８回　運動学的分析（歩行）の重心移動、床反力、筋活動について学習する。
第９回　運動学的分析（リーチ動作）についてグループにて学習する。
第10回　運動学的分析（トイレ動作）についてグループにて学習する。
第11回　作業分析（日常活動）についてグループにて学習する。
第12回　運動学的分析確認試験と振り返り
第13回　運動学習理論について学習する。
第14回　運動学習理論に基づいた練習と訓練について学習する。
第15回　運動学習における課題にグループで取り組む。
第16回　呼吸における運動学について学習する。
第17回　換気中の筋活動について学習する。
第18回　呼吸リハビリテーション（呼吸法）について学習する。
第19回　呼吸リハビリテーション（ストレッチング）について学習する。
第20回　身体運動のエネルギー代謝について学習する。
第21回　運動処方について学習する。
第22回　心臓リハビリテーション（運動療法）について学習する。
第23回　心臓リハビリテーション（生活指導）について学習する。
第24回　呼吸・心臓リハビリテーション確認試験と振り返り
第25回　筋力増強訓練の効果について学習する。
第26回　筋力増強訓練の訓練方法について学習する。
第27回　活動を用いた筋力増強訓練の訓練方法についてグループで取り組む。

第28回　ストレッチングの効果について学習する。
第29回　ストレッチングの方法について学習する。
第30回　最終確認試験と振り返り

■ 評価方法

筆記試験　80%　小テスト　20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内容は必ず教科書で見直し、学習したことを授業ノートに追記しておくこと。

■ 教　科　書

書　名：基礎バイオメカニクス
著者名：江原義弘、山本澄子、石井慎一郎
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	運動学実習				
担当者	島　雅人			国家出題基準	Ⅰ-3-CD
学科名	理学療法学専攻	学　年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

運動学総論、運動学各論により修得した基礎知識・技術を踏まえ、実際に行われている動作を観察し分析するといった実習を行うことで、理学療法・作業療法の基礎となる人体の運動のしくみについて理解を深める。

■ 到達目標

基本動作・歩行を観察する視点を身につけること
観察した動作を運動学的用語で説明することができるようになること
観察した動作を運動学・運動力学的に分析することができるようになること

■ 授業計画

第１回　①コース・ガイダンス：講義の進め方、評定方法、その他
　　②これまでに学んできた運動学総論、運動学各論の知識の確認
　　③体位、構えの（姿勢）の表現、動作分析の手順と方法
第２回　姿勢の観察・分析①
第３回　姿勢の観察・分析②
第４回　姿勢の観察・分析②
第５回　基本動作の観察・分析①
第６回　基本動作の観察・分析②
第７回　基本動作の観察・分析③
第８回　基本動作の観察・分析④
第９回　基本動作の観察・分析⑤
第10回　基本動作の観察・分析⑥
第11回　応用的動作の観察・分析①
第12回　応用的動作の観察・分析②
第13回　応用的動作の観察・分析③
第14回　応用的動作の観察・分析④
第15回　応用的動作の観察・分析⑤

■ 評価方法

定期試験70％　発表・提出課題・レポート30％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

本講義は、運動学の基礎知識をもとに、人の姿勢や動作を観察・分析し、運動学の理解を深めます。
身体機能の構造、機能、特に関節の構造や運動のしくみ、筋の起始停止、作用に関しては、運動を分析する際に最低限必要な知識となります。各回で実施する内容に必要と思われる知識をしっかりと確認、補充し授業に臨んでください。
また、観察や分析は学生１人ひとりが出来るようになることが目的であるため、各授業で与えられたテーマに対する課題レポートをしっかりと行ってください。さらに、観察・分析内容を相手へ伝える機会を設定します。指定された時間内に、分析した内容を伝えられるよう、事前練習を行ってください。

■ 教　科　書

書　名：観察による運動・動作分析演習ノート
著者名：藤澤 宏幸（著）, 長崎 浩（著）
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参 考 図 書

書　名：PT・OT のための運動学テキスト : 基礎・実習・臨床
著者名：小柳 磨毅 ほか
出版社：金原出版

書　名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：ブルンストローム臨床運動学　原著第 6 版
著者名：Peggy A.Houglum
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：日常生活活動の分析―身体運動学的アプローチ
著者名：藤澤 宏幸（編集）
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留 意 事 項

授業科目	人間発達学				
担 当 者	藪中　良彦			国家出題基準	Ⅰ-4-A
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法士・作業療法士として必要な子どもの発達の知識を、運動発達を中心に学習する。

■ 到 達 目 標

子どもの機能獲得の仕組みを知ることで、子どもの治療だけでなく、成人の治療にも発達の知識を利用できるようになることが、この科目の目標である。

■ 授 業 計 画

第１回　Ⅰ．発達概念　　Ⅱ．発達理論
第２回　Ⅱ．発達理論　　Ⅲ．発達検査
第３回　Ⅲ．発達検査
第４回　Ⅳ．姿勢反射 / 反応
第５回　Ⅳ．姿勢反射 / 反応　　Ⅴ．運動発達（０～３ヶ月）
第６回　Ⅵ．運動発達（４～６ヶ月）　　Ⅶ．運動発達（７～９ヶ月）
第７回　Ⅷ．運動発達（10～ 12ヶ月）　　Ⅸ．運動発達（13～ 18ヶ月）
第８回　XI．上肢機能の発達
第９回　XII．食事の発達
第10回　XII．排泄の発達
第11回　XII．更衣の発達
第12回　XII，XIII．遊び・感覚・知覚・認知・社会性の発達
第13回　X．姿勢反射 / 反応と６歳までの発達
第14回　X．姿勢反射 / 反応と６歳までの発達
第15回　XIV．学童・青年・成人・老年期の発達

■ 評 価 方 法

出席（欠席－4点、遅刻／早退－2点）
小テスト（50点）
定期試験（50点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

第1回目の授業を除き，毎回前回の授業内容に関する小テスト（30問程度の穴埋め問題）を行い，授業の復習を促す.

■ 教　科　書

書　名：イラストでわかる人間発達学
著者名：上杉雅之　監修
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書　名：コメディカルのための専門基礎分野テキスト　人間発達学
著者名：福田恵美子
出版社：中外医学社

書　名：標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　人間発達学
著者名：岩崎清隆，花熊暁，吉松靖文
出版社：医学書院

書　名：乳児の発達　写真でみる０歳児
著者名：髙橋孝文
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：機能的姿勢 - 運動スキルの発達
著者名：髙橋智宏
出版社：協同医書出版社

書　名：写真でみる乳児の運動発達
著者名：木本孝子、中村勇
出版社：協同医書出版社

書　名：乳幼児の運動発達検査　AIMS アルバータ乳幼児運動発達検査法
著者名：上杉雅之、嶋田智明、武政誠一
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：PEDI　リハビリテーションのための子どもの能力低下評価法
著者名：里宇明元、近藤和泉、問川博之
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：赤ちゃんの運動発達　絵でみる治療アプローチ
著者名：芝田利生、櫻庭修
出版社：協同医書出版社

書　名：遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法―九州大学小児科改訂新装版
著者名：遠城寺宗徳
出版社：慶應義塾大学出版会

書　名：新版 K 式発達検査法2001年版―標準化資料と実施法
著者名：新版 K 式発達検査研究会
出版社：ナカニシヤ出版

書　名：KIDS 乳幼児発達スケール
著者名：三宅和夫
出版社：達科学研究教育センター

書　名：1987年全訂版田中ビネー知能検査法
著者名：田中教育研究所
出版社：田研出版

書　名：WISC-IV の臨床的利用と解釈
著者名：上野 一彦
出版社：日本文化科学社

書　名：日本版デンバー式発達スクリーニング検査―JDDST と JPDQ
著者名：上田 礼子
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：DENVER II - デンバー発達判定法
著者名：Frankenburg WK 著，日本小児保健協会編
出版社：日本小児医時出版社

書　名：K・ABC アセスメントと指導―解釈の進め方と指導の実際
著者名：前川 久男
出版社：丸善メイツ

書　名：グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック
著者名：小林重雄
出版社：三京房

書　名：日本版フロスティッグ視知覚発達検査
著者名：飯鉢和子、鈴木陽子、茂木茂八
出版社：日本文化科学社

書　名：日本版ミラー乳児発達スクリーニング検査と JMAP 簡易版
著者名：土田玲子、岩永竜一郎
出版社：パシフィックサプライ株式会社

書　名：乳幼児精神発達診断法―０才～３才まで
著者名：津守 真、稲毛 教子
出版社：大日本図書

書　名：乳幼児精神発達質問紙（１～３才まで）
著者名：津守真 , 稲毛教子
出版社：大日本図書

書　名：乳幼児精神発達診断法―３才～７才まで
著者名：津守 真 , 磯部 景子
出版社：大日本図書

書　名：乳幼児精神発達質問紙 ３～７才まで
著者名：津守 真 , 稲毛 教子
出版社：大日本図書

書　名：視覚機能の発達障害
著者名：紀伊克昌
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：手の発達機能障害
著者名：紀伊克昌
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	臨床心理学				
担 当 者	非常勤講師			国家出題基準	Ⅱ -4-ABCD
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

臨床心理学は「こころの病」や「こころのメカニズム」について学ぶものです。私たちのこころは流動的で環境からの影響を受けながら形成され、揺らぎもします。そうした、こころのありようについて、身近な素材や具体的な話を用いて臨床心理学に関する理論や概念の基礎的素養を身につける機会にします。

■ 到 達 目 標

学んだことを今後の専門職としての活動の中や普段の生活に行かせるよう習得することを目指します。

■ 授 業 計 画

第１回　臨床心理学とは
第２回　臨床心理査定（1）：意義と方法（観察、面接、検査）
第３回　臨床心理査定（2）：発達検査・知能検査
第４回　臨床心理査定（3）：人格検査（概要）
第５回　臨床心理査定（4）：人格検査
第６回　こころの構造（1）：人格構造論の観点から
第７回　こころの構造（2）：発達論的観点から
第８回　精神病理（1）：統合失調症、気分障害
第９回　精神病理（2）：不安障害、身体表現性障害、人格障害
第10回　患者・障害者の心理
第11回　臨床心理面接（1）：目的、基本的技法（体験）
第12回　臨床心理面接（2）：来談者中心療法
第13回　臨床心理面接（3）：精神分析
第14回　臨床心理面接（3）：学習理論と行動療法
第15回　総合的ふりかえり

■ 評 価 方 法

講義への参加・貢献（レポート等）：30%　　筆記試験：70%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業終了後、授業で配布したプリントを見直し、復習しておくこと。

■ 教　科　書

特になし

■ 参 考 図 書

適宜紹介します

■ 留 意 事 項

授業科目	病理学概論				
担 当 者	奥野高裕・柴田雅朗（オムニバス）			国家出題基準	Ⅱ-2-A
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

疾病の分類と成り立ちを総論的に学ぶ。

■ 到達目標

病気が何故、どのようにして起こるか、身体にどのような異常を引き起こすかを理解し、説明が出来る。

■ 授業計画

第１回　病理学の目的と概要、病因論：内因、外因の概念、疾病の分類
第２回　傷害に対する細胞の反応：退行性病変及び進行性病変、再生と創傷の治癒
第３回　炎症・感染症：炎症の定義と原因、主に炎症の経時的変化について
第４回　免疫：免疫系の仕組みと働き、主に免疫応答の仕組みについて
第５回　炎症・感染症：感染による疾患、主に感染経路と病態、病原微生物の種類について
第６回　循環障害：循環系の構造と機能、主に局所循環障害について
第７回　老化：老化と寿命、主に老化に伴って増加する疾患について
第８回　代謝異常：代謝障害による疾患、主に脂質代謝異常症、糖質代謝異常、ビリルビン代謝について
第９回　放射線障害：放射線の副作用のため出現する病変
第10回　先天異常・奇形：　先天異常の概念と分類や代表的な先天異常、特に染色体異常について
第11回　腫瘍①：腫瘍の定義と分類、腫瘍の進展形式
第12回　腫瘍②：腫瘍発生の原因、国試対策のための臓器別の腫瘍
第13回　国試対策のための病理学各論（先天性疾患、循環器系疾患、呼吸器系疾患）
第14回　国試対策のための病理学各論（代謝異常疾患、自己免疫疾患）
第15回　国試対策のための病理学各論（神経系・運動器系疾患）

■ 評価方法

筆記試験　100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習は必要ありません。授業では大事な部分を集中的に講義する予定です。授業中に全ての範囲を網羅することは困難ですので、復習をかねて授業を行った範囲については教科書を読むようにして下さい。分からないことは自分で調べ、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　病理学
著者名：梶原博毅・横井豊治
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

欠席や遅刻がないように心がけること。

授業科目	一般臨床医学（救急医学・外科）				
担当者	藤岡　重和　他（オムニバス）			国家出題基準	Ⅱ-2
学科名	理学療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

本講義では、救急医学の概要と救急措置法について学ぶ。次に、外科、産婦人科、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科の代表的疾患について、その病因、病態、特徴的に現れる症状、一般的に行われる検査、治療について基礎的な学習をする。

■ 到達目標

1．救急疾患の病態を理解し、蘇生法、止血法、固定法、運搬法等の救急措置法を修得する。
2．外科、産婦人科、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科の代表的疾患について、病態、特徴的に現れる症状、治療法を説明できる。
3．外科、産婦人科、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科疾患におけるリハビリテーション留意事項を説明できる。

■ 授業計画

第1回　救急医学総論（1）　（岡本）
第2回　救急医学総論（2）　（岡本）
第3回　救急医学各論（1）　ショック、心肺停止　（神納）
第4回　救急医学各論（2）　意識障害、吐血、下血と腹痛　（神納）
第5回　救急医学各論（3）　外傷、環境障害　（神納）
第6回　外科学総論　（中井）
第7回　外科学各論　（中井）
第8回　婦人科疾患　（福山）
第9回　産科学　（福山）
第10回　皮膚の構造、発疹学、皮膚科学的検査、老化に伴う皮膚の変化　（池上）
第11回　皮膚科で遭遇する感染症、皮膚腫瘍、糖尿病性足病変　（池上）
第12回　眼科学　静止画と動画を用いた解説①　（岡村）
第13回　眼科学　静止画と動画を用いた解説②　（岡村）
第14回　難聴の種類と難聴と関連する疾患　（矢吹）
第15回　総復習　（藤岡）

■ 評価方法

定期試験　100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業では、学習すべき課題を提示しますので、事前学習を必ずしておいてください。
次回授業までに、前回の授業内容を復習しておいてください。
教科書の耳鼻咽喉科領域の耳科学を読んでおくと理解がより進みます。（矢吹）
配布資料を読んでおくこと。（池上）

■ 教科書

書　名：PT・OT のための一般臨床医学
著者名：明石　謙
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書　名：救急診療指針　改訂第４版
著者名：日本救急医学会監修
出版社：へるす出版

書　名：あたらしい皮膚科学第２版
著者名：清水　宏
出版社：中山書店

■ 留意事項

授業科目	**内科学**				
担 当 者	**藤岡　重和**			国家出題基準	Ⅱ-11-ABCDE
学 科 名	**理学療法学専攻**	学　　年	**２年**	総単位数	**２単位**
	作業療法学専攻	開講時期	**通年**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

循環器疾患、呼吸器疾患、代謝疾患など生体内部の障害について、その病因、病態、特徴的に現れる症候、一般的に行われる検査と診断、治療法、予後などについて基礎的な学習をする。

■ 到 達 目 標

1．代表的な内科疾患について、疫学、予後、病因、病態、臨床像、評価、検査（画像、生理機能検査、血液検査を含む）、診断、治療法を説明できる
2．内科疾患患者のリハビリテーション留意事項を説明できる

■ 授 業 計 画

第１回　内科学総論
第２回　循環器総論　（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
第３回　循環器疾患　(1)　高血圧、虚血性心疾患
第４回　循環器疾患　(2)　弁膜症、先天性心疾患、心筋疾患
第５回　循環器疾患　(3)　心不全、不整脈、その他
第６回　循環器疾患　(4)　大動脈疾患、末梢動脈疾患、静脈、リンパ管疾患
第７回　呼吸器総論　（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
第８回　呼吸器疾患　(1)　感染性肺疾患、アレルギー性肺疾患
第９回　呼吸器疾患　(2)　慢性閉塞性肺疾患、間質性肺疾患
第10回　呼吸器疾患　(3)　肺腫瘍、肺循環障害
第11回　呼吸器疾患　(4)　呼吸不全、呼吸調節の異常、胸膜疾患、その他
第12回　消化器総論　（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
第13回　消化器疾患　(1)　食道疾患、胃の疾患
第14回　消化器疾患　(2)　小腸、大腸の疾患
第15回　消化器疾患　(3)　肝疾患
第16回　消化器疾患　(4)　胆道疾患、膵疾患、その他
第17回　代謝、内分泌総論　（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
第18回　代謝、内分泌疾患　(1)　糖尿病、脂質代謝異常、栄養障害、その他
第19回　代謝、内分泌疾患　(2)　下垂体疾患、甲状腺疾患、副甲状腺疾患、副腎疾患
第20回　腎、泌尿器総論　（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
第21回　腎、泌尿器疾患　(1)　糸球体疾患、全身性疾患と腎障害
第22回　腎、泌尿器疾患　(2)　腎不全、電解質異常、泌尿器疾患、その他
第23回　免疫、アレルギー総論　（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
第24回　免疫、アレルギー疾患　(1)　アレルギー疾患
第25回　免疫、アレルギー疾患　(2)　自己免疫疾患
第26回　血液、造血器疾患　(1)　赤血球系疾患
第27回　血液、造血器疾患　(2)　白血球系疾患、出血性疾患
第28回　中毒および環境要因による疾患
第29回　リハビリテーションと内科臨床について
第30回　総復習（国家試験対策）

■ 評価方法

定期試験　80%　　小テスト　10%　　授業態度　10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業では、次回までに学習すべき課題を提示しますので、事前学習を必ずしておいてください。
次回授業までに、前回の授業内容を十分に復習しておいてください。
国家試験出題基準の基づき、実地臨床に則した内容を中心に授業を展開します。
発展的内容を探求したい時、理解できない内容がある場合は、オフィスアワー等を活用し、担当教員に質問、相談するようにしてください。

■ 教　科　書

書　名：ナースの内科学　第９版
著者名：奈良信雄
出版社：中外医学社

■ 参考図書

書　名：標準理学療法学作業療法学　専門基礎分野　内科学　第３版
著者名：大成浄志
出版社：医学書院

書　名：看護のための臨床病態学　第２版
著者名：浅野嘉延、吉山直樹
出版社：南山堂

■ 留意事項

内科学を学習するにあたって、解剖学、生理学、病理学をよく理解しておく必要があります。授業の前に、十分復習をしておいてください。感染症については、三年生後期の感染症学において詳しく学習します。

授業科目	整形外科学				
担当者	中村　憲正			国家出題基準	Ⅱ-6-ABCDE
学科名	理学療法学専攻	学　年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

人体の運動器にかかわる疾患の診断と治療について学習する。

■ 到達目標

運動器疾患の基礎となる骨・関節，筋・神経の構造や病態について充分な知識を得る。特に、外傷学については、重点的に学習し、臨床の場で必要とされる知識体系を構築する。また、整形外科的な診断法や治療法について臨床に必要な知識を得る。

■ 授業計画

第１回　整形外科総論１　　歴史、筋骨格系組織（骨、軟骨、靭帯、筋肉など）の生理学につき学ぶ
第２回　整形外科総論２　　歴史、筋骨格系組織（骨、軟骨、靭帯、筋肉など）の生理学につき学ぶ
第３回　骨折と脱臼１　骨折と脱臼につき総括的に述べ、その治癒のメカニズムや治療に対する取り組み方を学ぶ
第４回　骨折と脱臼２　骨折と脱臼につき総括的に述べ、その治癒のメカニズムや治療に対する取り組み方を学ぶ
第５回　骨と関節の感染症　骨と関節の感染症につき学ぶ。
第６回　関節リウマチ
　　関節リウマチとその類縁疾患につき学ぶ。
第７回　慢性関節疾患――― 退行変性による慢性関節疾患につき学ぶ。
第８回　壊死性骨疾患――― 骨壊死の特徴につき学ぶ。
第９回　骨系統疾患――― 骨系統疾患につき学ぶ。
第10回　代謝性骨疾患――― 代謝性骨疾患につき学ぶ。
第11回　腫瘍　１
　　――― 筋骨格系腫瘍につき学び、現代の治療に触れる。
第12回　腫瘍　２
　　――― 筋骨格系腫瘍につき学び、現代の治療に触れる。
第13回　予備日
第14回　予備日
第15回　脊椎と脊髄　１　――― 脊椎と脊髄疾患、外傷につき学ぶ。
第16回　脊椎と脊髄　２　――― 脊椎と脊髄疾患、外傷につき学ぶ。
第17回　股関節　――― 股関節疾患、外傷につき学ぶ。
第18回　膝関節　――― 膝関節疾患につき述べ、固有の治療法につき学ぶ。
第19回　膝のスポーツ傷害　１――― 膝のスポーツ傷害につき述べ、最新治療法につき学ぶ。
第20回　膝のスポーツ傷害　２――― 膝のスポーツ傷害につき述べ、最新治療法につき学ぶ。
第21回　足と足関節　１――― 足と足関節の傷害につき学ぶ。
第22回　足と足関節　２――― 足と足関節の傷害につき学ぶ。
第23回　下腿――― 下腿の傷害につき学ぶ。
第24回　肩　――― 肩関節スポーツ傷害を中心に学び、最新治療に触れる。
第25回　肘　――― 肘関節疾患、傷害につき学ぶ。
第26回　手　１　――― 手の外科につき学ぶ。
第27回　手　２　――― 手の外科につき学ぶ。

第28回　予備日
第29回　予備日
第30回　予備日

■ 評 価 方 法

試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

問題演習を与えるので随時学習する事

■ 教　科　書

書　名：標準整形外科
出版社：医学書院

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床神経学				
担当者	片岡　豊・岩田　篤（オムニバス）			国家出題基準	Ⅱ-8・9-ABCDE
学科名	理学療法学専攻	学　　年	２年	総単位数	２単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

リハビリテーションに深く関係する神経・筋系統の障害が現れる疾患についてセラピストの視点から解説をし，病態について理解しリハビリテーションに活かしていただきます。

■ 到達目標

リハビリテーション医療に携わる職種として必要な神経学の知識を身につける。

■ 授業計画

第１回　臨床神経学総論
第２回　神経症候学
第３回　各種検査について（画像検査を含む）
第４回　脳血管障害
第５回　認知症
第６回　脳腫瘍
第７回　頭部外傷
第８回　脊髄疾患
第９回　変性疾患（パーキンソン病など)、脱髄疾患、筋疾患
第10回　末梢神経障害
第11回　てんかん
第12回　筋疾患
第13回　感染性疾患
第14回　中毒・小児疾患
第15回　総括
第16回　神経学の基礎（神経の構造および伝導の仕組みとその特徴）
第17回　臨床神経学の基礎①（大脳皮質局在と血管支配域）
第18回　臨床神経学の基礎②（伝導路とその機能）
第19回　臨床神経学の基礎③（上位・下位運動ニューロン障害の特徴および脳神経障害）
第20回　脳血管障害①（脳出血、脳梗塞）
第21回　脳血管障害②（くも膜下出血および正常圧水頭症）
第22回　頭部外傷（硬膜下血腫、硬膜外血腫含む）
第23回　脳腫瘍
第24回　パーキンソン病
第25回　脊髄小脳変性症（多系統萎縮症含む）
第26回　多発性硬化症、ギラン・バレー症候群
第27回　その他、ニューロパチー
第28回　筋萎縮性側索硬化症
第29回　重症筋無力症、ポリオ、筋疾患
第30回　総括

■ 評価方法

筆記試験：80%，小テスト：20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義の初めに毎回小テストを行います。配布した資料をもとに復習を必ず行っておいてください。

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　神経内科
著者名：川平　和美　他
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：病気がみえる　vol.7 脳神経
著者名：医療情報科学研究所（編集）
出版社：メディックメディア

■ 留意事項

制度は時代の変遷とともに見直され常に変化するものである。特に社会保障関連はここ数年来のトピックスであり，ニュースで取り上げられることも少なくない。今後直面する現実問題として強く関心を持つとともに，積極的な情報へのアクセスを行い，地域を考える一助としていただきたい。

授業科目	臨床運動学				
担当者	島　雅人			国家出題基準	Ⅰ-3, Ⅱ-3-CG
学科名	理学療法学専攻（必修）	学　　年	２年	総単位数	１単位
	作業療法学専攻（選択）	開講時期	後期	選択･必修	必修 / 選択

■ 内　　容

運動学総論、運動学各論、運動学実習で修得した知識を踏まえ、疾病や外傷により生じる心身機能・身体構造の変化や活動の変化について学ぶ。実際の運動を教材等で観察し、模倣しながら、障害のある対象者の運動特性を学ぶ。

■ 到達目標

疾病や外傷により生じる心身機能・身体構造の変化、運動・活動を理解できる。
障がい者の姿勢や動作を観察し、その特徴や要因を検討することができる。
機能障害と能力障害の関連を理解できる

■ 授業計画

第１回　コース・ガイダンス：講義の進め方、評定の他、これまでに学んだ基礎運動学との関連性を学ぶ
　　関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第２回　関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第３回　関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第４回　関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第５回　関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第６回　筋力低下（廃用性・末梢神経障害　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第７回　筋力低下（廃用性・末梢神経障害　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第８回　筋力低下（廃用性・末梢神経障害　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第９回　筋力低下（廃用性・末梢神経障害　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第10回　筋力低下（廃用性・末梢神経障害　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第11回　筋力低下（廃用性・末梢神経障害　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第12回　疾患（中枢神経障害、神経筋疾患　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第13回　疾患（中枢神経障害、神経筋疾患　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第14回　疾患（中枢神経障害、神経筋疾患　等）による運動や活動の変化を学ぶ
第15回　本講義で学んだことについて復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験：80％　　小テスト20％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

第2回～第5回においては、各関節の構造、機能をあらかじめ学習しておくこと。
第6回～ 11回においては、各関節に作用する筋について、起始、停止、作用、支配神経をあらかじめ学習しておくこと。
第12回～ 14回においては、特に中枢神経系の障害について、その特徴を学習しておくこと。
小テストを実施し、定期的に理解状況を確認する。毎回の授業で学習したことを復習し、小テストに臨んでください。

■ 教　科　書

書　名：PT・OT のための運動学テキスト : 基礎・実習・臨床
著者名：小柳 磨毅 ほか
出版社：金原出版

■ 参考図書

書　名：ブルンストローム臨床運動学　原著第６版
著者名：Peggy A.Houglum
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：カラー版　筋骨格系のキネシオロジー原著弟２版
著者名：Donald A.Neumann 著 / 嶋田智明ほか　監訳
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	精神医学Ⅰ				
担当者	髙橋　清武			国家出題基準	Ⅱ-5-ABCDE
学科名	理学療法学専攻	学　年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　容

主な精神疾患の症状・診断・治療について学ぶ

■ 到達目標

精神医学に関心を持ち、基本的な知識を身につける。

■ 授業計画

第１回　精神医学総論　精神医学とは　精神疾患の分類
第２回　精神医学総論　診断・検査
第３回　精神医学総論
第４回　統合失調症
第５回　気分障害
第６回　神経症性障害・ストレス関連障害・身体表現性障害
第７回　パーソナリティ障害
第８回　アルコール、薬物関連障害
第９回　器質性精神障害
第10回　児童青年期精神障害：精神遅滞、発達障害
第11回　摂食障害
第12回　てんかん
第13回　睡眠障害
第14回　治療
第15回　まとめ

■ 評価方法

筆記試験70%　出席・受講態度30%（欠席や遅刻はマイナス評価）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

当日受講した該当項目については、テキストを読むなどして、より理解を深めておくこと

■ 教　科　書

書　名：精神医学マイテキスト
著者名：西川隆・中尾和久・三上章良
出版社：金芳堂

■ 参考図書

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください.

授業科目	精神医学Ⅱ				
担当者	足立　一			国家出題基準	Ⅱ-5-ABCD
学科名	理学療法学専攻（選択）	学　年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻（必修）	開講時期	後期	選択･必修	選択 / 必修

■ 内　容

教科書に沿った講義と定期的な小テストを中心に進めていく。
※教科書は必ず購入し、持参すること。

■ 到達目標

精神医学の変遷や現状，基本概念，疾患別の特性や支援の実際についての知識を深める。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
第２回　精神医学の基礎
第３回　精神症状
第４回　精神症状
第５回　精神科治療
第６回　精神科リハビリテーション
第７回　統合失調症
第８回　感情障害
第９回　神経症性障害
第10回　摂食障害
第11回　人格障害
第12回　てんかん
第13回　精神作用物質による精神および行動の障害
第14回　器質性精神障害
第15回　まとめ

■ 評価方法

小テスト40%　定期テスト60%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

定期的に小テストを行うため、その都度、復習を促す。

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　精神医学
著者名：奈良勲　鎌倉矩子　監修
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：臨床家のための DSM-5 虎の巻
著者名：森 則夫（著，編集），杉山登志郎（著，編集），岩田泰秀（著，編集）
出版社：日本評論社

■ 留意事項

授業科目	小児科学				
担当者	田平　公子			国家出題基準	Ⅱ-10
学科名	理学療法学専攻	学　年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	選択

■ 内　容

小児の成長・発達、形態的特徴・生理的特徴、よくみられる疾患、見逃せない疾患を中心とした小児の病気及び予防接種・母子保健について述べる。

■ 到達目標

小児の成長・発達、生理・病理上の特徴の把握、小児疾病、小児保健等を理解すること

■ 授業計画

第１回　小児の発育・発達、生理的特徴
第２回　小児の発育・発達、生理的特徴
第３回　出生前小児科学
第４回　新生児学、周産期学
第５回　新生児・乳幼児の栄養と生活
第６回　母子保健、予防接種
第７回　小児の感染症
第８回　中枢性疾患及び運動器疾患
第９回　中枢性疾患及び運動器疾患
第10回　小児の内科学　　循環、呼吸
第11回　小児の内科学　　アレルギー、免疫、内分泌代謝
第12回　小児の内科学　　消化器、腎臓、泌尿器
第13回　発達障害
第14回　小児治療の特徴、事故、救急
第15回　まとめ

■ 評価方法

筆記100％（小テスト20％本テスト80％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書を必ず熟読すること。

■ 教　科　書

書　名：最新育児小児病学
著者名：黒田恭弘
出版社：南江堂

書　名：小児・思春期診療　最新マニュアル
著者名：五十嵐　隆
出版社：日本医師会

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	老年医学				
担当者	藤岡重和・大中玄彦・藤本宜正・森田婦美子（オムニバス）			国家出題基準	Ⅱ-13-ABCDE
学科名	理学療法学専攻	学　年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

老年期にみられる障害の特性を理解するため、老化のメカニズムや高齢者の生理的特性を学習する。老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化、高齢者を取りまく地域の問題についても幅広く解説する。また、加齢に伴い特徴的に現れる疾患・障害について、その疫学、予後、病態、臨床像、評価、検査 （画像、生理機能検査、血液検査を含む)、診断、治療の基礎的な学習する。

■ 到達目標

1．加齢に伴う生理機能の変化、老年症候群、老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化を説明できる。
2．加齢に伴い特徴的に現れる疾患・障害について、その疫学、予後、症候、評価、検査
（画像、生理機能検査を含む)、診断、治療を説明できる。

■ 授業計画

第1回　老年医学総論（1）　老化と老年病の考え方　　藤岡
第2回　老年医学総論（2）　加齢に伴う生理機能変化　　藤岡
第3回　老年医学総論（3）　高齢者に多い症候とそのアセスメントについて　　森田
第4回　老年医学総論（4）　老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化と高齢者へのアプローチ　　森田
第5回　老年医学総論（5）高齢者の医療、介護、福祉、ターミナルケア　　森田
第6回　老年医学各論（1）精神機能の老化と精神疾患（うつ状態、せん妄、認知症、その他）　　森田
第7回　老年医学各論（2）　心、血管機能の老化と循環器疾患（心不全、末梢循環障害、その他）　大中
第8回　老年医学各論（3）　呼吸機能の老化と呼吸器疾患（誤嚥性肺炎、閉塞性肺疾患、その他）　大中
第9回　老年医学各論（4）消化機能の老化と消化器疾患（摂食、嚥下障害、消化器癌、その他）　大中
第10回　老年医学各論（5）　腎機能、内分泌、代謝機能の老化と疾患（腎不全、糖尿病、その他）　大中
第11回　老年医学各論（6）　加齢による免疫機能の変化、高齢者の感染症　　大中
第12回　老年医学各論（7）　骨、運動機能の老化と疾患（骨粗鬆症、骨折他)、感覚機能の老化と疾患
藤岡
第13回　泌尿器科総論（解剖と生理、診断と検査法)、代表的な泌尿器疾患（尿路感染症、尿路結石症）
藤本
第14回　代表的な泌尿器疾患（尿路・生殖器の腫瘍、神経因性膀胱）　藤本
第15回　総復習 （国家試験対策）　藤岡

■ 評価方法

定期試験　80%　小テスト　10%　　授業態度　10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

次回の授業までに、前回の授業内容を十分に復習しておいてください。
国家試験出題基準の基づき、実地臨床に則した内容をを中心に授業を展開します。

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学作業療法学　専門基礎分野　老年学　第4版
著者名：大内尉義
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：新老年学　第３版
著者名：大内 尉義、秋山 弘子、折茂 肇
出版社：東京大学出版社

書　名：PT・OT のための一般臨床医学　第３版（第５章泌尿器・生殖器疾患）
著者名：明石　謙　編集
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	高次脳機能障害学Ⅰ				
担当者	清水　大輔			国家出題基準	Ⅱ-3-C、Ⅱ-8-D
学科名	理学療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　容

本講義では、大脳機能との関連から高次脳機能障害の基本的知識を習得する。

■ 到達目標

1．正常の大脳機能を学び、各領域の損傷に出現する臨床像を理解できる。
2．各々の高次脳機能障害について、症状および病巣を説明することができる。

■ 授業計画

第1回　高次脳機能障害の概要：高次脳機能に関わる中枢神経系の機能と大脳の情報処理
第2回　注意機能の基本概念と特性、他の高次脳機能との関連
第3回　記憶のメカニズムと記憶障害の症状
第4回　失行と行為・行動の障害
第5回　失認．身体意識と病態認知
第6回　失語・失読・失書の症状
第7回　視空間機能と半側空間無視
第8回　前頭葉機能と遂行機能

■ 評価方法

定期試験80%、平常点（小テスト、授業への取り組みなど）20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に指定した箇所を復習すること。また、次回授業の領域について、教科書を読んで予習をしておくこと。

■ 教　科　書

書　名：高次脳機能障害学　第2版
著者名：石合純夫
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	高次脳機能障害学Ⅱ				
担当者	清水　大輔			国家出題基準	Ⅱ-3-C、Ⅱ-8-D
学科名	理学療法学専攻（選択）	学　　年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻（必修）	開講時期	前期	選択･必修	選択 / 必修

■ 内　　容

本講義は、高次脳機能のスクリーニング検査や簡易検査を用いて、症状の捉え方を学ぶとともに、脳画像、他の臨床的情報から、障害像を適切にまとめる能力を習得することを目的とする。

■ 到達目標

1．症状に応じて、必要なスクリーニング検査や簡易検査を選択することができる。
2．各検査の目的と実施方法を正しく理解し、演習を通して実施できるようになる。
3．各検査を正しく解釈し、脳画像、他の臨床的情報から臨床像をまとめることができる。
4．総合検査や掘下げ検査実施の必要の有無を判断できる。

■ 授業計画

第1回　知的機能の評価（1）：HDS-R、MMSE
第2回　知的機能の評価（2）：コース立方体組合せ検査、RCPM
第3回　注意機能の評価：ストループテスト・TMT・仮名ひろい検査
第4回　記憶機能の評価：三宅式記銘力検査、Rey 複雑図形検査
第5回　行為障害の検査：失行の鑑別検査
第6回　行為障害の検査：失行の鑑別検査
第7回　視空間機能の評価：半側空間無視の評価
第8回　前頭葉機能と遂行機能の評価：FAB・WCST

■ 評価方法

定期試験80％、平常点（提出物、検査演習への取り組み態度など）20％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に指定した箇所を復習すること。また、次回授業の領域の教科書を読んで予習をしておくこと。

■ 教　科　書

書　名：高次脳機能障害学　第2版
著者名：石合純夫
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	高次脳機能障害学Ⅲ				
担当者	清水　大輔			国家出題基準	Ⅱ-3-C、Ⅱ-8-D
学科名	作業療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

本講義では、高次脳機能障害の各総合検査について、目的を理解し、演習を通して実施技術を習得し、結果より症状をまとめ、障害機序に沿った治療プログラムの立案を学ぶ。

■ 到達目標

1．高次脳機能の総合検査の目的を理解し、実施できるようになる。
2．総合検査結果から症状を分析し、障害機序について考察する力を身につける。
3．障害機序に対応したリハビリテーションプログラムを立案する力を身につける。

■ 授業計画

第1回　注意機能検査（標準注意検査法・標準意欲検査法）の演習
第2回　注意機能検査の結果の分析とリハビリテーションプログラムの立案
第3回　記憶検査（リバミード行動記憶検査など）の演習
第4回　記憶検査の結果の分析
第5回　記憶障害のリハビリテーションプログラムの立案
第6回　半側空間無視検査（BIT 行動性無視検査など）の演習
第7回　半側空間無視検査の結果の分析
第8回　半側空間無視のリハビリテーションプログラムの立案

■ 評価方法

定期試験70%、平常点（提出物、検査演習への取り組み態度など）30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

実施する検査手順は、事前に勉強しておくこと。

■ 教　科　書

書　名：高次脳機能障害学　第2版
著者名：石合純夫
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	理学療法障害学				
担当者	伊禮　まり子	国家出題基準	専門分野 I-1-D, II-7-H, III-3-E		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	２年	総単位数	１単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法と障害について学ぶ。国際障害分類（ICIDH）と国際生活機能分類（ICF）について学び、ICFに基づく障害の捉え方を理解する。理学療法において対象となる障害について、障害像・原因・評価・アプローチの概要を学ぶ。

■ 到達目標

理学療法と障害について理解する。国際障害分類（ICIDH）と国際生活機能分類（ICF）の違いを理解し、ICF に基づいた障害の捉え方を経験する。理学療法において対象となる障害について、障害像･原因･評価･アプローチの概要を理解する。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション・理学療法と障害
第２回　国際障害分類（ICIDH）と国際生活機能分類（ICF）
第３回　障害各論（痛み）
第４回　障害各論（関節可動域制限）
第５回　障害各論（筋力低下）
第６回　障害各論（筋緊張異常）
第７回　障害各論（運動麻痺）
第８回　障害各論（協調運動障害①）
第９回　障害各論（協調運動障害②）
第10回　障害各論（感覚障害）
第11回　障害各論（平衡機能障害）
第12回　障害各論（基本動作障害）
第13回　障害各論（歩行障害）
第14回　障害各論（ADL 障害）
第15回　まとめ

■ 評価方法

筆記試験（80%）、小テスト（20%）、欠席・遅刻・早退は減点の対象（欠席：－4点、遅刻・早退：－2点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各回で提示する小テストの範囲を復習すること。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：リハビリテーションビジュアルブック
著者名：落合慈之監修　稲川利光編集
出版社：学研

書　名：ビジュアルレクチャー　基礎理学療法学
著者名：大橋ゆかり　編集
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：機能障害学入門
著者名：沖田実，松原貴子，森岡周　編集
出版社：神陵文庫

書　名：ICF の理解と活用
著者名：上田敏
出版社：きょうされん

■ 留意事項

授業科目	総合理学療法学（管理・総括）				
担当者	今井公一・文野勝利・西田宗幹・安倍浩之・新家寿貴（オムニバス）			国家出題基準	専門分野 Ⅰ～Ⅳ
学科名	理学療法学専攻	学　　年	４年	総単位数	１単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

臨床実習も終了しほぼすべての履修内容を習得した段階で、理学療法士に必要な知識と能力の総括を行います。

■ 到達目標

理学療法を行うにあたって必要な能力を系統的に整理し、不足があれば自ら補うように行動することができる

■ 授業計画

第１回　代表的な症例の検討（1）運動器（佐藤）
第２回　代表的な症例の検討（2）脳血管障害（岩田）
第３回　代表的な症例の検討（3）脊髄と神経（島）
第４回　代表的な症例の検討（4）難病（岩田）
第５回　代表的な症例の検討（5）内部障害（田坂）
第６回　代表的な症例の検討（6）発達障害（薮中）
第７回　代表的な症例の検討（7）切断と義肢　その他（井上）
第８回　日常生活活動学（牧之瀬）
第９回　理学療法治療学（物理療法、運動療法の基礎）（棚）
第10回　運動学（境）
第11回　セラピストに求められる基礎知識（今井，島，棚，伊禮）
第12回　理学療法業務と管理（1）安倍
第13回　理学療法業務と管理（2）西田
第14回　理学療法業務と管理（3）新家
第15回　理学療法業務と管理（4）文野

■ 評価方法

提出物　20%　筆記試験（国家試験レベル）　80%　　無断欠席（個別指導を含む）は１回５点減点

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

１～14回のテーマは各々独立していると同時に、理解に不足のある場合には時間を延長しての学習を必須としますので、それぞれの指示に従って補講を受講する、もしくは課題を学習してください。

■ 教　科　書

書　名：理学療法士・作業療法士　国家試験必須ポイント
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

15回の各テーマは順不同であり各々独立した内容となります。

授業科目	理学療法研究法				
担当者	伊禮　まり子	国家出題基準	専門分野 Ⅰ-1-F		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	２年	総単位数	１単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法学における研究の意義、目的および研究を遂行する際の具体的な方法論について学ぶ。また、本専攻教員のこれまでの研究活動および現在の研究テーマやゼミでの活動に触れ、今までの学習内容などに基づく興味と合わせて、卒業研究（特別演習）において希望する分野について整理する。

■ 到達目標

・理学療法学における研究の意義、目的および研究を遂行する際の具体的な方法論について理解することができる。
・今までの学習内容および教員の研究活動などに基づいて、自分の興味のある分野について考え、希望する研究テーマについて整理することができる。

■ 授業計画

第１回　理学療法研究の必要性（EBM・EBPT、診療ガイドライン）
第２回　研究デザイン
第３回　研究計画・研究倫理
第４回　データの処理
第５回　データ特性の表現（代表値）
第６回　データ特性の表現（ばらつき）
第７回　データ特性の表現（Excel 演習）
第８回　推測統計①
第９回　推測統計②
第10回　文献検索
第11回　卒業研究ゼミ（特別演習）、教員研究活動紹介
第12回　卒業研究ゼミ（特別演習）、教員研究活動紹介
第13回　卒業研究ゼミ（特別演習）、教員研究活動紹介
第14回　感度・特異度
第15回　レポートまとめ

■ 評価方法

レポート（70%）、課題の提出（30％）、欠席・遅刻・早退は減点の対象（欠席：－4点、遅刻・早退：－2点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各回で提示する課題を行うこと。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：はじめての研究法　コメディカルの研究法入門
著者名：千住秀明・玉利光太郎
出版社：神陵文庫

書　名：標準理学療法学専門分野　理学療法研究法
著者名：内山靖　編集
出版社：医学書院

書　名：理学療法科学シリーズ　理学療法研究法入門第３版
著者名：理学療法科学学会　監修
出版社：アイペック

書　名：健康・スポーツ科学のための研究方法　研究計画の立て方とデータ処理方法
著者名：出村愼一
出版社：杏林書院

書　名：医療系研究論文の読み方・まとめ方
著者名：対馬栄輝
出版社：東京図書

書　名：保健・医療のための研究法入門
著者名：Diana M. Bailey 著　朝倉隆司監訳
出版社：協同医書出版社

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法評価学Ⅱ（評価プロセス）				
担当者	今井　公一	国家出題基準	専門分野 II-3 ～ 4		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法評価学Ⅰで学んだ個々の検査・測定方法に加えて、各論的に重要な評価方法を学び、最後に実際の臨床適応について考えます。

■ 到達目標

1．理学療法評価学Ⅰで学んだ内容を含めて各論で学んだ個々の評価方法について説明できる
2．治療プログラムの立案との関連性について説明できる。

■ 授業計画

第1回　内部障害（呼吸・循環・代謝障害）の評価
第2回　呼吸障害と評価
第3回　循環・代謝障害と評価
第4回　痛み・高次脳機能障害と評価
第5回　発達と評価（1）
第6回　発達と評価（2）
第7回　関節可動域測定法（下肢）
第8回　関節可動域測定法（頸部　胸腰部）
第9回　関節可動域測定法（総括）
第10回　徒手筋力検査法　（上肢）
第11回　徒手筋力検査法（手指）
第12回　徒手筋力検査法　（下肢・体幹）
第13回　徒手筋力検査法　総括
第14回　姿勢と歩行
第15回　臨床適応・総括

■ 評価方法

筆記試験　80%　提出物　20%　但し課題の未提出は10点の減点

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習として毎回主たる教科書及び授業資料をしっかりと読み確実に理解してください。

■ 教　科　書

書　名：理学療法評価学
著者名：松澤　正、江口　勝彦
出版社：金原出版

書　名：絵でみる脳と神経
著者名：馬場元毅
出版社：医学書院

書　名：新・徒手筋力検査法
著者名：津山直一他訳
出版社：協同医書出版

書　名：リハビリテーション評価
著者名：正門由久
出版社：医歯薬出版

書　名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎　義昭
出版社：南山堂

■ 参考図書

書　名：理学療法評価学Ⅰ、Ⅱ
著者名：石川　朗
出版社：中山書店

書　名：運動療法のための機能解剖学的触診技術　上肢 / 下肢・体幹
著者名：林　典雄
出版社：メジカルビュー社

書　名：筋骨格系のキネシオロジー
著者名：嶋田智明　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：ブルンストローム臨床運動学
著者名：武田　功　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：オーチスのキネシオロジー
著者名：山﨑　敦　他　監訳
出版社：有限会社　ラウンドフラット

書　名：know the body 筋・骨格の理解と触診のすべて
著者名：日高　正巳　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：筋骨格系の触診マニュアル
著者名：丸山　仁司　監修
出版社：ガイアブック

書　名：バランス評価
著者名：星　文彦　他
出版社：三輪書店

書　名：形態測定・感覚検査・反射検査
著者名：伊藤　俊一　他
出版社：三輪書店

書　名：ROM ナビ（DVD）
著者名：青木主税　他
出版社：Round　Flat

■ 留意事項

各テーマ毎の順は不同です。

授業科目	理学療法評価学実習				
担 当 者	牧之瀬　一博	国家出題基準	専門分野 II-1 ～ 5		
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法士作業療法士国家試験出題基準における，Ⅱ理学療法評価学内の１-A，２-A/C/D/E/F/G，３-A/C/D/E/F/H，４-A/B，５-B などに対応している．
３年次で行う理学療法評価学実習は，臨床場面で求められる評価技能の獲得を目指す．
特に，症例検討を通した活動制限と身体機能障害の関係性の理解を通して，動作分析の基礎となる思考過程をトレーニングする．
また，代表的な疾患に対する病態の理解から評価の選択などの臨床思考過程を学び，症例像に合わせた実技までを体系的に学ぶ．
これらの実施を通して，総合臨床実習に向けた臨床思考能力及び評価技術をトレーニングする場とする．

■ 到 達 目 標

・グループでの学修を通して，協同的な活動に参加し，クラス全体の能力向上に寄与することが出来る．
・症例検討を通して臨床思考の理解を深め，活動制限と機能障害の関係について説明できる．
・動作観察から機能障害を推測する事ができる．
・代表的な疾患に対して，障害像の理解と理学療法評価を選択できる．
・総合臨床実習に向けた基本的な評価技術を修得する．

■ 授 業 計 画

第１回　オリエンテーション
　　理学療法評価学実習の目指すところ（症候障害学ならびにクリニカル・リーズニング）
第２回　症例検討と模擬カンファレンス①
第３回　症例検討と模擬カンファレンス①
第４回　症例検討と模擬カンファレンス①
第５回　理学療法評価の思考過程（Top down 評価と Bottom up 評価）
　　脳血管症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈①
第６回　脳血管症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈②
第７回　神経変性疾患（パーキンソン病など）症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈
第８回　運動器疾患（腰椎ヘルニアなど）症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈
第９回　運動器疾患（大腿骨頚部骨折など）症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈
第10回　その他の疾患に関する評価実習
　　例として、呼吸循環器疾患・脊髄損傷・脳性麻痺の障害像の理解と理学療法評価
第11回　動作観察・分析①（逸脱動作を抽出する）
第12回　動作観察・分析②（逸脱動作から機能障害を推論する）
第13回　動作観察・分析③（逸脱動作から機能障害を推論する）
第14回　基本的なクリニカルリーズニングの知識のまとめ
第15回　総合臨床実習に向けたオリエンテーション
　　実習に向けた演習（レポートなどの記載方法）

■ 評 価 方 法

実技試験（50%），筆記試験（30%），発表と提出物（20%）
出席：学則で認められていない欠席や遅刻については減点する（欠席：－4点、遅刻：－2点）
その他，不真面目な受講態度についても減点対象とする

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

理学療法評価学実習は理学療法評価の総まとめである．この科目を履修し終える頃には，評価過程を独力で実施出来る状態となることが求められる．その為，授業時間外の学修にも真摯に臨むこと．
予習に関しては都度必要な内容について提示する．
第２～４回，第11～13回の講義については，参考図書基礎運動学の第5章『運動と動作の分析 pp287～294』，第7章『姿勢』，第8章『運動と動作の分析 pp361～382』を読み，それぞれの活動における関節運動や筋活動が頭の中で再現できるような状態である必要がある．特に，こういった運動分析が苦手な学生は，まず基本的な解剖（筋の走行）・運動学（筋の作用）について理解度を確認する必要がある．これらの基本が押さえられてれば，例えば歩行の専門書（例えば参考図書の観察による歩行分析）を読み通し，繰り返しの思考のトレーニングが必要である．
第５～10回の講義においては，それぞれの疾患の病態や臨床症状について理解しておく予習が求められる．

■ 教　科　書

書　名：症候障害学序説　理学療法の臨床思考過程モデル
著者名：内山　靖
出版社：文光堂

書　名：標準理学療法学 専門分野　理学療法　臨床実習とケーススタディ
著者名：中島　喜代彦（編集）
出版社：医学書院

■ 参 考 図 書

書　名：理学療法評価法
著者名：中島　喜代彦（編集）
出版社：神陵文庫

書　名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎　義昭
出版社：南山堂

書　名：新・徒手筋力検査法
著者名：津山直一，他（訳）
出版社：共同医書出版

書　名：神経診察クローズアップ　正しい病巣診断のコツ
著者名：鈴木則宏（編集）
出版社：メジカルレビュー社

書　名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版

書　名：観察による歩行分析
著者名：月城 慶一，他（訳）
出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法評価学演習				
担 当 者	牧之瀬　一博			国家出題基準	専門分野 II-3
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法士作業療法士国家試験出題基準における，Ⅱ理学療法評価学内の１-A，２-C/E/F/G，３-A/C/E/F，５-B などに対応している．
「理学療法評価学」で学んだ基本的な検査測定手技（各種神経学的検査 / 片麻痺運動機能テスト / 感覚検査 /MMT/ROM 測定 / 痛みの評価 / 形態測定）に関する講義・演習・実技を行う．
各種検査を注意点を理解し，学生同士で正確に実施する．また，それぞれの検査測定結果の臨床的な意義について解説する．
その他，臨床場面を意識して，ペーパーペイシェントを用いた演習で障害構造について講義・演習を行う．
必要に応じてグループ学習を行い，他者との関わりの中で思考を深める．
演習は実技トレーニングと思考能力トレーニングから構成する．

■ 到 達 目 標

・各種検査法の測定法・注意点について説明できる．
・各種検査法を学生同士で正確に実施することができる．
・各種検査法の臨床的意義を説明できる．
・理学療法評価における解剖学・運動学・生理学に基づいた身体運動を理解する．
・ペーパーペイシェントの障害像から評価すべき項目を挙げることができる．
・ペーパーペイシェントの障害構造について説明することが出来る．

■ 授 業 計 画

第１回　オリエンテーション，理学療法評価学演習の目指すところ
　　筋力測定の代償動作に関する講義と課題説明
第２回　関節可動域検査（上肢・体幹）
　　関節可動域制限に関する演習・実技
第３回　関節可動域検査（下肢・体幹）
　　関節可動域制限に関する演習・実技
第４回　徒手筋力検査
　　注意点に関する演習
第５回　徒手筋力検査
　　注意点に関する演習
第６回　徒手筋力検査
　　筋力測定の実技（下肢）
第７回　カルテ情報の診方 : 情報収集とコミュニケーション演習
　　バイタルサインの診方（測定実技）
第８回　神経学的検査（腱反射・筋緊張検査・病的反射・片麻痺運動機能テスト）
　　中枢性麻痺と末梢性麻痺の理解
第９回　神経学的検査（腱反射・筋緊張検査・病的反射・片麻痺運動機能テスト）
　　神経学的検査の実技
第10回　関節可動域測定，徒手筋力検査
　　まとめと実技
第11回　感覚の評価
　　感覚検査の意義と病態との兼ね合い / 感覚検査の実技

第12回　痛みの基本的評価
　　形態測定
第13回　ペーパーペイシェントを用いた運動器疾患の障害像の理解
第14回　ペーパーペイシェントを用いた脳血管障害の障害像の理解
第15回　ベーシックなバイタルサインの測定，関節可動域測定，徒手筋力検査，各種基本的検査法
　　まとめと実技

■ 評価方法

提出課題（30%），実技試験（30%），筆記試験（40%）
出席：学則で認められていない欠席や遅刻については減点する（欠席：－4点、遅刻：－2点）
その他，不真面目な受講態度についても減点対象とする

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習に関しては都度必要な内容について細かく提示する．大まかには以下の通りである．
第２・３回講義には，ROM 測定における基本軸・移動軸を理解し説明できる状態で講義に臨むこと．
第４回講義には，下肢筋の走行と作用を理解した上で，それぞれの MMT について概略が説明できる状態で講義に臨むこと．また，個別に課題を課すため，それを行って参加すること．
第５回講義には，グループ内で学生同士での教え合いを行うため，それぞれの担当課題について説明できる状態で講義に臨むこと．
第６回講義では，前回のグループ内での教え合いの内容を全員が理解した状態で参加する事．
第７回講義には，上腕動脈と橈骨動脈の走行と触知部位について復習し，自身の身体で触知できる状態で講義に臨むこと．
第８回講義には，中枢神経･末梢神経，錐体路･伸張反射の経路について説明できる状態で講義に臨むこと．
第11回講義には，感覚の経路（温痛覚の脊髄視床路，深部感覚の後索路）について説明できる状態で講義に臨むこと．
第13・14回講義では，それぞれの症例の臨床像を理解するための課題を個別に課すため，それらについて説明できる状態で講義に臨むこと．

■ 教　科　書

書　名：理学療法評価学
著者名：金原出版
出版社：松澤 正 ／ 江口 勝彦

書　名：神経診察クローズアップ　正しい病巣診断のコツ
著者名：鈴木則宏（編集）
出版社：メジカルレビュー社

書　名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎　義昭
出版社：南山堂

書　名：新・徒手筋力検査法
著者名：津山直一，他（訳）
出版社：共同医書出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	運動療法学Ⅰ（概論）				
担当者	棚　千磨			国家出題基準	専門分野 I-3
学科名	理学療法学専攻	学　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

理学療法における運動療法の位置づけと基本的概念を学ぶ.
解剖学・運動学・生理学などの基礎科目に立脚した学びを通して，運動療法を理解する.

■ 到達目標

疾患・症状に対応する各種運動療法の理論・目的・方法・適応について理解出来る.
各種運動療法を解剖・生理・運動学に基づいて理解し，論理的に解説できる.
関節拘縮の様々な因子について理解し、それらに対する関節可動域運動を説明することができる.
筋力調節・増強に関わる因子について理解し，整理して論理的に解説する事が出来る.
筋力増強運動の原則について理解し，適切な筋力増強運動について思考することが出来る.

■ 授業計画

第１回　運動療法の概念：定義や目的，対象疾患，方法，EBM
第２回　関節可動域障害に対する運動療法：関節の構造と運動
第３回　関節可動域障害に対する運動療法：関節拘縮・関節可動域運動
第４回　関節可動域障害に対する運動療法：モビライゼーション，ストレッチング
第５回　筋力低下に対する運動療法：筋の構造・収縮様式
第６回　筋力低下に対する運動療法：筋張力の規定因子，筋力増強の原則
第７回　筋力低下に対する運動療法：筋力増強の効果，エネルギー機構
第８回　持久力増強運動（筋持久力，全身持久力）
第９回　運動と呼吸・循環・代謝
第10回　協調性障害に対する運動療法：運動の協調性 / バランス障害
第11回　運動学習を目的とした運動療法
第12回　基本動作練習，歩行練習
第13回　痛みに対する運動療法，治療体操，各種の治療手技
第14回　組織の病態生理と修復
第15回　その他（全身調整運動、筋再教育、感覚・知覚再教育）

■ 評価方法

小テスト：30%　筆記試験：70%　　※遅刻欠席、受講態度により減点あり。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各学生は授業後十分に復習を行い、2回目授業以降、小テストで理解度の確認を行ってもらいます。

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学 専門分野 運動療法学 総論
著者名：吉尾　雅春
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

基本的に座学ですが、随時実技も織り交ぜて授業を進めていきます。

授業科目	運動療法学Ⅱ（各論）				
担当者	島　雅人	国家出題基準	専門分野 III-1, III-2-A, III-3		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

動療法学Ⅰで学んだ知識をもとに、学生間での実技演習を通して各運動療法の基本的な技術を身につける。また、障害を有する対象者に対して、どのようにリスクを管理しながら効果的な運動療法を実施していくかを思考し模擬的に実施する。そのため、本学の履修においては、運動療法の原則や疾患の知識を復習しながら学んでいく。

■ 到達目標

1．運動療法に必要な解剖・運動・生理学の知識及び運動療法の原則について理解を深める
2．学生同士で各運動療法技術を実施することができる
3．各運動療法技術を障害のある対象者に実施する際の注意点（リスク）を理解できる
4．各障害を想定した運動療法を模擬的に実施できる

■ 授業計画

第1回　コースガイダンス
　　運動療法Ⅰで学習した内容の確認 / 四肢・体幹の触れ方、他動運動の仕方
第2回　四肢・体幹の触れ方、他動運動の仕方
第3回　関節可動域制限の要因と治療の実際
第4回　関節可動域制限の要因と治療の実際
第5回　関節可動域制限の要因と治療の実際
第6回　関節可動域制限の要因と治療の実際
第7回　関節可動域制限の要因と治療の実際
第8回　関節可動域制限の要因と治療の実際
第9回　自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促通
第10回　自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促通
第11回　自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促通
第12回　自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促通
第13回　抵抗運動の方法
第14回　抵抗運動の方法
第15回　筋力・筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
第16回　筋力・筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
第17回　筋力・筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
第18回　筋力・筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
第19回　筋力・筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
第20回　筋力・筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
第21回　全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
第22回　全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
第23回　全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
第24回　全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
第25回　協調性障害に対する運動療法の実際
第26回　協調性障害に対する運動療法の実際
第27回　実技の到達度確認
第28回　実技の到達度確認
第29回　実技の到達度確認
第30回　本講義のまとめ

■ 評価方法

定期試験60％　課題20％　実技テスト20％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

本講義は、運動療法学の基礎知識をもとに、運動療法の各技術に関して実技を多く用いながら理解を深めていきます。そのため、各授業前には該当する運動療法学の知識を復習して臨んでください。
また、運動療法の技術を習得するためには、実技の練習を何回も繰り返して行う必要があります。授業中に実技に真剣に取り組むことはもちろん、授業後も技術を習得するための自主練習を行い、理学療法士の主要な治療技術の基本を身につけてください。

■ 教　科　書

書　名：運動療法学テキスト改訂第２版
著者名：細田多穂
出版社：南江堂

■ 参考図書

書　名：標準理学療法学 専門分野　運動療法学総論　第３版
著者名：シリーズ監修：奈良　勲　編集：吉尾　雅春
出版社：医学書院

書　名：最新　運動療法大全“基礎と実践”＆“エビデンス情報”＜ DVD 付＞ペーパーバック普及版
著者名：キャロリン・キスナー / リン・アラン・コルビー　他
出版社：ガイアブックス

■ 留意事項

授業科目	小児期理学療法治療学				
担 当 者	藪中　良彦	国家出題基準	専門分野 I-3-M, II-3-G, III-3-G, III-6-D		
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

正常発達と共に各疾患別の発達を理解し、小児理学療法評価法を学び、各小児疾患別の治療プログラム立案について学習する。

■ 到達目標

脳性麻痺や二分脊椎や筋ジストロフィー等の小児理学療法対象疾患のある子ども達に対して、適切な評価･治療が行えるようになること。

■ 授業計画

第１回　姿勢反射 / 反応と６歳までの発達
第２回　脳性麻痺概論，粗大運動能力分類システム
第３回　脳性麻痺概論，脳性麻痺の手指操作能力分類システム
第４回　脳性麻痺概論，小児理学療法評価法
第５回　脳性麻痺概論，小児理学療法評価法
第６回　脳性麻痺概論，小児理学療法評価法
第７回　脳性麻痺　痙直型片麻痺
第８回　脳性麻痺　痙直型両麻痺
第９回　脳性麻痺　痙直型四肢麻痺
第10回　脳性麻痺　アテトーゼ型
第11回　脳性麻痺　アテトーゼ型，失調型小児整形疾患
第12回　小児整形疾患
第13回　子どもの遺伝性疾患
第14回　重症心身障害
第15回　子どもの呼吸障害

■ 評価方法

出席（欠席－4点、遅刻／早退－2点)、小テスト（50点)、定期試験（50点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

第1回目の授業を除き，毎回前回の授業内容に関する小テスト（30問程度の穴埋め問題）を行い，授業の復習を促す.

■ 教　科　書

書　名：イラストでわかる小児理学療法
著者名：上杉雅之　監修
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書　名：小児理学療法学テキスト
著者名：細田多穂
出版社：南江堂

書　名：理学療法　Mook 15　子どもの理学療法
　　脳性麻痺の早期アプローチから地域理学療法まで
著者名：黒川幸雄、高橋正明、鶴見隆正
出版社：三輪書店

書　名：PT マニュアル　小児の理学療法
著者名：河村光俊
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：発達障害児の新しい療育　こどもと家族とその未来のために
著者名：今川忠男
出版社：三輪書店

書　名：モーターコントロール　原著第４版　運動制御の理論から臨床実践へ
著者名：田中 繁、高橋 明
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：乳児の発達　写真でみる０歳児
著者名：髙橋孝文
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：GMFM －粗大運動能力尺度
著者名：近藤 和泉、福田 道隆、青山 香
出版社：医学書院

書　名：Clinics in Developmental Medicine Gross Motor Function Measure（GMFM-66 & GMFM-88）
　　User's Manual　2 nd Edition
著者名：Dianne J. Russell、Peter L. Rosenbaum、Lisa M. Avery、Marilyn Wright
出版社：Mac Keith Press

書　名：Gross Motor Function Measure（GMFM）Self-Instructional Training CD-ROM
著者名：Mary Lane、Dianne Russell
出版社：Mac Keith Press

書　名：PEDI　リハビリテーションのための子どもの能力低下評価表
著者名：里宇明元、近藤和泉、問川博之
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：脳性まひ児の24時間姿勢ケア－ The Chailey Approach to Postural Management
著者名：今川忠男
出版社：三輪書店

書　名：脳損傷による異常姿勢反射活動
著者名：梶浦 一郎
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：脳性麻痺の運動障害　原著第２版
著者名：梶浦 一郎
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：脳性麻痺の類型別運動発達
著者名：梶浦 一郎
出版社：医歯薬出版株式会社

授業科目	呼吸器障害理学療法治療学				
担当者	野村　卓生	国家出題基準	専門分野 I-3-D, II-3-B, III-3-B,　III-6-E		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

「呼吸と運動」に関する解剖学・生理学的な基本知識を整理し、呼吸器疾患の病態およびその基本治療を学ぶ。酸素化能障害や換気能力障害などの呼吸器の障害に対する評価と理学療法について、その禁忌やリスク管理をふまえて講義し、実技実習を行う。

■ 到達目標

1）運動器障害や神経障害と同様に理学療法士が対処する主要な障害として関心をもつ。
2）内部障害領域における理学療法士の存在意義と役割を考える。
3）呼吸器系の障害を有する患者の運動耐容能を評価できる。
4）呼吸器系の障害を有する患者に理学療法を行う上でリスク管理ができる。
5）運動時の呼吸器系の適応について説明できる。
6）呼吸器系の障害が運動を制限するメカニズムを説明できる。
7）呼吸器系の障害を有する患者の急性期・回復期・生活期理学療法について説明できる。

■ 授業計画

第1回　「運動と呼吸」
内部障害の範囲と特徴を理解する。呼吸器系の役割と運動時の適応、呼吸器系の障害が運動を制限するメカニズムを学習する。

第2回　「酸素化能、換気能力」
酸素化能障害、換気能力障害の基本的概念をふまえ理解する。酸素化能、換気能力の基本的な評価法について学習する。

第3回　「呼吸理学療法における評価1」
基本となる胸部の観察、呼吸困難の評価方法、打診、聴診の実際を学習する。

第4回　「呼吸理学療法における評価2」
呼吸機能、運動耐容能の評価方法について、その実際を学習する。

第5回　「慢性閉塞性肺疾患（COPD）の理学療法」
COPD における障害、呼吸器疾患患者の ADL および QOL 低下の特徴を理解し、特有の評価方法について学習する。他部門からの情報、理学療法評価結果に基づいた理学療法を学習する。

第6回　「拘束性肺疾患、外科手術後、その他呼吸器疾患の理学療法」
疾患、病態の特徴を理解し、特有の評価方法、理学療法について学習する。外科手術が生体に与える影響を理解し、術前後および急性増悪例への理学療法を学習する。

第7回　「排痰法」
呼吸リハビリテーションにおける排痰法の目的とその適応、徒手的および体位肺痰法の実際を学習する。

第8回　「理学療法士による吸引行為」
吸引プロトコル第2版（日本理学療法士協会）に沿って吸引のための基礎知識、実際の概要を学習する。

■ 評価方法

期末試験　70%、提出課題（場合によっては小テスト）　30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

以下のキーワードを参考に、事前・事後の学習に取り組むこと。指定教科書にそった内容で、また、参考図書の内容を取り込んだ授業資料を毎回準備する。とくに復習が重要であり、授業1コマに対して同じ1コマ分の復習を必ず行うこと。国家試験の過去問題を調べることも有用である。
学習キーワード: 呼吸運動の調節中枢、肺・気道の解剖学、酸素化能、閉塞性換気障害を呈する疾患、拘束性換気障害を呈する疾患、呼吸機能検査（スパイロメトリー）、肺気量分画、フローボリューム曲線、健常人の呼吸量、健常人の呼吸パターンと呼吸数、肺気腫患者の呼吸機能、肺気腫患者の臨床症状、動脈血液ガス、胸部 X 線像の特徴、PaO2 と SPO2 の関連、換気能力の評価、肺・胸郭コンプライアンス、肺呼吸モデル（ペットボトルと風船を使用して作成し実習した内容）、酸素搬送系とその障害、呼吸器疾患患者の運動障害の要因、呼吸器疾患患者の運動耐容能、呼吸器疾患患者の栄養障害、標準体重、% 標準体重、低体重・低栄養の判定、理学療法の専門的内容、呼吸理学療法における他部門からの情報収集、F-H-J 分類、MRC 息切れスケール、カルボーネン式、Borg scale、修正 Borg scale、フィールドテスト、6 分間歩行テスト（実施手順を含む）、シャトルウォーキングテスト、運動負荷試験、運動負荷試験の絶対的禁忌、中止基準、評価指標、体位排痰法の排痰姿勢と痰貯留部位、体位排痰法の禁忌、COPD の呼吸機能検査の特徴、呼吸器疾患患者の ADL の特徴、呼吸器疾患患者への理学療法（運動療法）、生活指導、開胸腹前後の呼吸理学療法、人工呼吸器からの離脱（ウィーニング）、人工呼吸器の換気モード、人工呼吸器装着患者の理学療法、標準予防策（standard precaution）、吸引

■ 教　科　書

書　名：内部障害理学療法学テキスト　改訂第２版
著者名：細田多穂　監、山崎裕司・川俣幹雄・丸岡　弘　編集
出版社：南江堂

■ 参 考 図 書

書　名：ビジュアルレクチャー　内部障害理学療法学
著者名：高橋哲也　編集
出版社：医歯薬出版

書　名：ゴールド・マスター・テキスト　内部障害系理学療法学
著者名：柳澤　健　編集
出版社：メジカルビュー社

書　名：動画でわかる呼吸リハビリテーション　第３版
著者名：高橋仁美・塩谷隆信・宮川哲夫
出版社：中山書店

書　名：呼吸・心臓リハビリテーション　ビジュアル実践リハ
著者名：高橋哲也・間瀬教史
出版社：羊土社

書　名：理学療法テキスト 内部障害理学療法学 呼吸
著者名：石川朗・玉木　彰
出版社：中山書店

書　名：DVD で学ぶ呼吸理学療法テクニック　呼吸と手技のタイミングがわかる動画91
著者名：玉木　彰
出版社：南江堂

書　名：呼吸リハビリテーションの理論と技術　改訂第２版
著者名：本間生夫　監修、田中一正、柿崎藤泰　編集
出版社：メディカルビュー社

書　名：心肺運動負荷テストと運動療法
著者名：谷口興一、伊東春樹　編集
出版社：南江堂

書　名：標準理学療法学　専門分野　理学療法　臨床実習とケーススタディ　第２版
著者名：奈良　勲　シリーズ監修、鶴見隆正・辻下守弘　編集
出版社：医学書院

書　名：呼吸リハビリテーションマニュアル　運動療法　第２版
著者名：日本呼吸管理学会、日本呼吸器学会、日本理学療法士協会　編
出版社：日本呼吸管理学会、日本呼吸器学会、日本理学療法士協会

書　名：呼吸機能検査ガイドライン、呼吸機能検査ガイドラインⅡ
著者名：日本呼吸器学会
出版社：メディカルレビュー社

書　名：酸素療法ガイドライン
著者名：日本呼吸器学会、日本呼吸管理学会　編
出版社：メディカルレビュー社

■ 留意事項

授業では、個人情報に関わる資料を提示する場合がある。取り扱いには十分に留意しなければならないことを認識して望むこと。授業には出席することが必須の前提であり、無断欠席、遅刻には十分に注意し、実習にも積極的に参加すること。実習を行う際には大学指定のジャージや白衣（KC）など実技を行いやすい衣服を着用し、爪は短く切っておくこと。

授業科目	代謝障害理学療法治療学				
担 当 者	野村　卓生	国家出題基準	専門分野 II-3-B, II-7-G, III-3-B, III-6-G		
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

「代謝と運動」に関する生理学・生化学的な基本知識を整理し、代表的な代謝障害である糖尿病の病態およびその基本治療を学ぶ。長期にわたる糖代謝障害によって発症する糖尿病特有の合併症や足病変への理学療法、理学療法士の関わりについて講義し、実技実習を行う。

■ 到 達 目 標

1）運動器障害や神経障害と同様に理学療法士が対処する主要な障害として関心をもつ。
2）内部障害領域（ここでは「がん」を含める）における理学療法士の存在意義と役割を考える。
3）代謝疾患（とくに糖尿病）の運動耐容能を評価できる。
4）代謝疾患（とくに糖尿病）に理学療法を行う上でリスク管理ができる。
5）運動時の代謝系の適応について説明できる。
6）代謝疾患（とくに糖尿病）の運動を制限するメカニズムを説明できる。
7）代謝疾患（とくに糖尿病）の急性期・回復期・生活期理学療法について説明できる。

■ 授 業 計 画

第1回　「代謝と運動」「科目オリエンテーション」
代謝障害に対する理学療法において何を学ばなければならないかを示したうえで、運動時における代謝系の適応、代謝系の障害が運動を制限するメカニズムを学習する。

第2回　「代謝疾患総論」
糖尿病、肥満症、メタボリックシンドローム、脂質異常症等について、日本における患者数、疾患の概要と診断基準等の概略について学習する。

第3回　「糖尿病合併症」
低血糖に代表される急性合併症、糖尿病特有の慢性合併症（網膜症・腎症・神経障害）について学習する。

第4回　「糖尿病管理」
糖尿病の基本的治療法、とくに運動療法についてその概要を学習する。また、自己管理を支援するための患者教育の重要性を理解する。

第5回　「糖尿病理学療法1（導入編）」
一般的な糖尿病患者、および糖尿病合併症を有する患者への理学療法、理学療法士の関わりについて、その具体を演習形式で学習する。

第6回　「糖尿病理学療法2（実践編）」
実際に自己血糖測定を行い、理学療法を効果的かつ安全に進める上で必要な血液生化学的データの理解を深める。

第7回　「糖尿病理学療法3（応用編）」
振動覚検査、アキレス腱反射など糖尿病神経障害の簡易診断基準の一つともなる身体評価について演習形式で学習する。また、その結果を如何に患者教育に活用するかについて学習する。

第8回　「糖尿病理学療法4（総合演習）」
仮想症例を提示し、問題点の抽出、プログラムの作成から効果判定をどのように行うかまでの一連の理学療法介入の思考プロセスを経験する。

■ 評 価 方 法

定期試験　70%、提出課題（場合によっては小テスト）　30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

以下のキーワードを参考に、事前・事後の学習に取り組むこと。指定教科書にそった内容で、また、参考図書の内容を取り込んだ授業資料を毎回準備する。とくに復習が重要であり、授業1コマに対して同じ1コマ分の復習を必ず行うこと。国家試験の過去問題を調べることも有用である。

学習キーワード: 生活習慣病の定義､脂質異常症診断基準､メタボリックシンドローム診断基準､BMI（Body Mass Index）判定基準（日本肥満学会)、肥満症診断基準、肥満症の概要、糖尿病診断基準とコントロール指標　＊ HbA1c の JDS 値および NGSP 値に注意、糖尿病の概要　＊全ての糖尿病患者が持つ糖尿、病連携手帳に記載されている内容は必須、糖尿病の急性合併症、糖尿病の慢性合併症、低血糖の症状（交感神経症状，中枢神経症状)、糖尿病神経障害の分類、糖尿病自律神経障害の症状、糖尿病多発神経障害の簡易診断基準　＊臨床上も重要なのでしっかりと覚えておくこと、糖尿病足病変の定義、糖尿病足病変の予防と管理方法の概要、糖尿病網膜症の概要と管理、糖尿病腎症の概要と概要、糖尿病合併症（動脈硬化性疾患)、糖尿病合併症（手の病変･歯周病)、ヒトの代謝（運動時を含む）の概要、筋繊維別での代謝特性、脂肪と消費カロリー、糖尿病の運動療法、運動の種類と METs、エクササイズガイド2006、アクティブガイド、Non-exercise activity thermogenesis（NEAT）

■ 教　科　書

書　名：糖尿病治療における理学療法　戦略と実践
著者名：野村卓生
出版社：文光堂

■ 参 考 図 書

書　名：糖尿病の理学療法
著者名：清野　裕・門脇　孝・南條輝志男　監修、大平雅美・石黒元康・野村卓生　編集
出版社：メジカルビュー社

書　名：内部障害理学療法学テキスト　改訂第２版
著者名：細田多穂　監、山崎裕司・川俣幹雄・丸岡　弘　編集
出版社：南江堂

書　名：考える理学療法 内部障害編 評価から治療手技の選択
著者名：丸山仁司・竹井　仁・黒澤和生　常任編集、石黒友康・高橋哲也　ゲスト編集
出版社：文光堂

書　名：標準理学療法学　専門分野　内部障害理学療法学
著者名：奈良　勲　シリーズ監修、吉尾雅春・高橋哲也　編集
出版社：医学書院

書　名：標準理学療法学　専門分野　病態運動学
著者名：奈良勲　シリーズ監修、星文彦・新小田幸一・臼田滋　編集
出版社：医学書院

書　名：運動療法学　第２版
著者名：市橋則明　編集
出版社：文光堂

書　名：歩行を診る　観察から始める理学療法実践
著者名：奈良　勲　監修、松尾善美　編集
出版社：文光堂

書　名：糖尿病療養指導ガイドブック2015
著者名：日本糖尿病療養指導士認定機構　編集
出版社：メディカルレビュー社

書　名：糖尿病療養指導の手引き　改訂第４版
著者名：日本糖尿病学会　編集
出版社：メディカルレビュー社

書　名：糖尿病治療ガイド2014-2015
著者名：日本糖尿病学会　編集
出版社：文光堂

書　名：科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン2013
著者名：日本糖尿病学会　編集
出版社：南江堂

書　名：生活習慣病改善指導士ハンドブック
著者名：日本肥満学会　編集
出版社：日本肥満学会

書　名：腎臓リハビリテーション
著者名：上月正博　編集
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業では、個人情報に関わる資料を提示する場合がある。取り扱いには十分に留意しなければならないことを認識して望むこと。授業には出席することが必須の前提であり、無断欠席、遅刻には十分に注意し、実習にも積極的に参加すること。実習を行う際には大学指定のジャージや白衣（KC）など実技を行いやすい衣服を着用し、爪は短く切っておくこと。血糖測定の実習では、穿刺器具を使用するため取扱いに留意し、感染に関しては特に注意すること。

授業科目	神経障害理学療法治療学				
担当者	岩田　篤	国家出題基準	専門分野 II-B/C/K, III-6-B/C/K		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

神経筋疾患の理学療法における神経科学の重要性を説き，根拠ある理学療法を展開するための基礎知識の習得とその方法論を学習する。

■ 到達目標

神経筋疾患による理学療法において，検査・測定結果から科学的根拠に基づいた臨床推論ができることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　中枢神経系理学療法の基礎知識
第２回　運動と感覚の中枢機能と構造
第３回　脳損傷の定義と病態
第４回　脳の損傷とその回復
第５回　脳血管障害における医学管理
第６回　脳血管障害におけるリハビリテーションの流れ
第７回　脳血管障害後片麻痺患者の運動障害の特徴（1）
第８回　脳血管障害後片麻痺患者の運動障害の特徴（2）
第９回　脳血管障害後片麻痺に対する評価（1）－ impairment
第10回　脳血管障害後片麻痺に対する評価（2）－ activity limitation
第11回　脳血管障害後片麻痺患者に対するトレーニング（1）
－課題指向型トレーニングと運動学習の理論的背景
第12回　脳血管障害後片麻痺患者に対するトレーニング（2）
－課題指向型トレーニングと運動学習の理論的背景
第13回　脳血管障害後片麻痺患者に対するトレーニング（3）　－歩行に向けて：座位，立位を中心に
第14回　脳血管障害後片麻痺患者に対するトレーニング（4）　－歩行に向けて：座位，立位を中心に
第15回　脳血管障害後片麻痺患者に対するトレーニング（5）　－歩行を中心に
第16回　脳血管障害後片麻痺患者に対するトレーニング（6）　－歩行を中心に
第17回　高次脳機能障害と理学療法－ pusher 現象
第18回　高次脳機能障害と理学療法－半側空間無視
第19回　パーキンソン病の病態
第20回　パーキンソン病に対する理学療法・リハビリテーションの実際
第21回　運動失調症の病態
第22回　運動失調症に対する理学療法・リハビリテーションの実際
第23回　頭部外傷・脳腫瘍の病態
第24回　頭部外傷・脳腫瘍に対する理学療法
第25回　多発性硬化症の病態
第26回　多発性硬化症に対する理学療法・リハビリテーションの実際
第27回　筋萎縮性側索硬化症の病態
第28回　筋萎縮性側索硬化症に対する理学療法・リハビリテーションの実際
第29回　末梢神経障害・筋疾患の病態
（ギランバレー症候群・重症筋無力症・筋炎を中心に）
第30回　末梢神経障害・筋疾患に対する理学療法・リハビリテーションの実際
（ギランバレー症候群・重症筋無力症・筋炎を中心に）

■ 評価方法

筆記試験：80%，小テスト：20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義は，基本的には教科書の章立てに合わせた形で行います。理解度を促進するために，次の講義で小テストを行いますので，翌週までに該当する箇所を教科書および配布資料をもとに必ず復習しておいてください。

■ 教　科　書

書　名：15レクチャーシリーズ　神経障害理学療法学Ⅰ
著者名：石川　朗（総編集）
出版社：中山書店

書　名：15レクチャーシリーズ　神経障害理学療法学Ⅱ
著者名：石川　朗（総編集）
出版社：中山書店

■ 参考図書

書　名：標準理学療法学　神経理学療法学
著者名：吉尾雅春・他（編集）
出版社：医学書院

書　名：病気がみえる
著者名：医療情報科学研究所（編集）
出版社：メディックメディア

書　名：脳卒中ビジュアルテキスト　第２版
著者名：高木康行
出版社：医学書院

書　名：脳の機能解剖と画像診断
著者名：真柳佳昭
出版社：医学書院

■ 留意事項

脳神経解剖学，脳神経生理学の復習をしておくことを希望する。

授業科目	老年期理学療法治療学				
担当者	今井公一・田坂厚志・山崎宏大・奥野泰介（オムニバス）	国家出題基準	専門分野 III-1 ～ 3，III-6-M		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

老年期における心身機能の特徴をふまえて理学療法による治療について学びます。

■ 到達目標

1．老年期の心身機能の特徴について説明できる。
2．生活期の理学療法について説明できる。
3．急性期・回復期における老年期理学療法について説明できる。

■ 授業計画

第1回　ライフステージと身心機能について（社会的変化）
第2回　老年期の運動器・神経系の機能（生理的変化）
第3回　老年期の呼吸・循環・代謝機能（1）
第4回　老年期の呼吸・循環・代謝機能（2）
第5回　生活期理学療法の実際（1）
第6回　生活期理学療法の実際（2）
第7回　老年期の急性期・回復期理学療法の実際（1）
第8回　老年期の急性期・回復期理学療法の実際（2）

■ 評価方法

レポート　30%　筆記試験　70%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜与えられる課題について、しっかりと資料を読む時間を作り熟知できるように学習を進めてください。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

テーマ毎に順は不同です。

授業科目	循環器障害理学療法治療学				
担 当 者	田坂　厚志	国家出題基準	専門分野 II-3-C, III-3-B, III-6-F		
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	３年	総単位数	１単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

代表的な循環器疾患の病態，症状，運動機能評価，理学療法プログラムについて学習する。不整脈の種類や心電図を用いた不整脈の判読手順を解説し，リスク管理について学習する。また，理学療法をすすめる際に必要となる心臓リハビリテーションについて解説する。

■ 到 達 目 標

１．循環器疾患の病態について説明できる。
２．循環器疾患患者に対する評価や不整脈，リスク管理について説明できる。
３．心臓リハビリテーションについて説明できる。

■ 授 業 計 画

第１回　心臓リハビリテーションの概念
第２回　心臓の解剖・生理
第３回　心電図（不整脈）
第４回　運動負荷試験による運動処方１
第５回　運動負荷試験による運動処方２
第６回　循環器疾患の病態と運動療法（心筋梗塞）
第７回　循環器疾患の病態と運動療法（心不全）
第８回　循環器障害の理学療法まとめ

■ 評 価 方 法

提出物20%　筆記試験80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜提示する課題を確実に学習してください。
提出を求められた場合は確実に提出して下さい。

■ 教　科　書

書　名：理学療法学テキスト　内部障害理学療法学　循環・代謝
著者名：石川　朗　総編集，木村雅彦　責任編集
出版社：中山書店

■ 参 考 図 書

書　名：呼吸・心臓リハビリテーション　改訂第２版
著者名：居村茂幸　監修，高橋哲也・間瀬教史　編著
出版社：羊土社

■ 留 意 事 項

授業科目	リウマチ・有痛性障害・脊髄損傷理学療法治療学				
担 当 者	井上　悟・加藤直樹（オムニバス）	国家出題基準	専門分野 II-7-A, II-7-L,III-7-A, III-7-L		
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	３年	総単位数	１単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

有痛性障害・関節リウマチの PT 治療の現在の臨床について解説する。

■ 到 達 目 標

有痛性障害・関節リウマチの PT 治療の実際を知る。

■ 授 業 計 画

第１回　疼痛性疾患１（阪大：加藤）
第２回　疼痛性疾患２（阪大：加藤）
第３回　疼痛性疾患３：腰痛
第４回　疼痛性疾患４：肩痛
第５回　関節リウマチ１
第６回　関節リウマチ２
第７回　関節リウマチ３
第８回　関節リウマチ４

■ 評 価 方 法

筆記試験　70%、授業態度　30%　（遅刻・欠席は減点対象）で総合評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業前には、教科書の授業該当範囲を予習しておくこと

■ 教　科　書

書　名：骨関節理学療法学
著者名：吉尾雅春・小柳磨毅
出版社：医学書院，2013年 ,4800円

■ 参 考 図 書

書　名：運動器疾患の理学療法テクニック
著者名：林　義孝
出版社：南江堂

■ 留 意 事 項

各回の講義テーマ、内容については関連する講義の進捗状況により変更することがあります。

授業科目	運動器障害・スポーツ傷害理学療法治療学				
担 当 者	佐藤睦美・高木啓至（オムニバス）	国家出題基準	専門分野 II-7-A, J, M, III-6-A, J, M		
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	３年	総単位数	２単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

運動器障害およびスポーツ傷害の疾患の概念および理学療法評価・治療について学ぶ

■ 到達目標

運動器障害およびスポーツ傷害に対する理学療法評価計画，治療プログラムが立案できる

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション，骨折総論
第２回　肩関節障害の理学療法１
第３回　肩関節障害の理学療法２
第４回　肩関節障害の理学療法３（実技・演習）
第５回　肘・手関節障害の理学療法１
第６回　肘・手関節障害の理学療法２（実技・演習）
第７回　股関節障害の理学療法１
第８回　股関節障害の理学療法２（実技・演習）
第９回　股関節障害の理学療法３
第10回　股関節障害の理学療法４（実技・演習）
第11回　膝関節障害の理学療法１
第12回　膝関節障害の理学療法２（実技・演習）
第13回　膝関節障害の理学療法３
第14回　膝関節障害の理学療法４（実技・演習）
第15回　足関節障害の理学療法１
第16回　足関節障害の理学療法２（実技・演習）
第17回　脊柱障害の理学療法１
第18回　脊柱障害の理学療法２（実技・演習）
第19回　スポーツ傷害に対するリハビリテーション：　アスレチックリハビリテーション総論
第20回　スポーツ傷害に対するリハビリテーション：　上肢の外傷・障害１（実技・演習）
第21回　スポーツ傷害に対するリハビリテーション：　上肢の外傷・障害２
第22回　スポーツ傷害に対するリハビリテーション：　下肢の外傷・障害１（実技・演習）
第23回　スポーツ傷害に対するリハビリテーション：　下肢の外傷・障害２
第24回　スポーツ傷害に対するリハビリテーション：　下肢の外傷・障害３（実技・演習）
第25回　整形外科的徒手検査１（実技・演習）
第26回　整形外科的徒手検査２（実技・演習）
第27回　骨関節腫瘍に対する理学療法１
第28回　骨関節腫瘍に対する理学療法２
第29回　まとめ
第30回　まとめ

■ 評価方法

筆記試験 80%，小テスト・課題 20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

・Moodle に掲示される「講義の前に」の項に書かれている内容を事前に学習する。
・Moodle に掲示される「講義のポイント」を参考に、講義内容を整理する。

■ 教　科　書

書　名：15レクチャーシリーズ　運動器障害理学療法学Ⅰ
著者名：河村廣幸（責任編集）
出版社：中山書店

書　名：15レクチャーシリーズ　運動器障害理学療法学Ⅱ
著者名：河村廣幸（責任編集）
出版社：中山書店

書　名：実践 PT ノート 第２版　運動器障害の理学療法
著者名：小柳磨毅（編）
出版社：三輪書店

■ 参 考 図 書

書　名：標準理学療法学　専門分野　理学療法学　各論　第３版
著者名：吉尾雅春（編）
出版社：医学書院

書　名：整形外科 術後理学療法プログラム　改訂第２版
著者名：島田洋一，高橋仁美（編）
出版社：メジカルビュー社

書　名：スポーツ膝の臨床（第２版）
著者名：史野根生
出版社：金原出版

書　名：理学療法 MOOK 9 スポーツ傷害の理学療法 第２版
著者名：福井勉・小柳磨毅（編）
出版社：三輪書店

書　名：ビジュアル実践リハ　整形外科リハビリテーション
著者名：相澤純也・中丸宏二（編）
出版社：羊土社

書　名：整形外科疾患ビジュアルブック
著者名：落合慈之（監修），下出真法（編）
出版社：学研

書　名：PT・OT のための画像診断マニュアル
著者名：百島祐貴
出版社：医学教育出版社

書　名：リハビリテーションのための画像の読み方
著者名：本間光信・高橋仁美（編）
出版社：MEDICAL VIEW

■ 留 意 事 項

実技実習を行う際には事前に連絡をするので、動きやすい服装で出席すること。

授業科目	健康増進理学療法学				
担 当 者	今井公一・田坂厚志（オムニバス）		国家出題基準	専門分野 II-8, III-7	
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

我が国は超高齢社会にあって、疾病や障害の予防が注目されています。その中で理学療法はどのように貢献できるのか、その意義について考えます。

■ 到達目標

1．予防的理学療法の必要性について説明できる。
2．予防的理学療法における評価について説明できる。
3．予防的理学療法に関する代表的なプログラムについて説明できる。

■ 授業計画

第1回　健康増進と理学療法（概念）
第2回　健康理解のための身体構造と機能（1）
第3回　健康理解のための身体構造と機能（2）
第4回　健康理解のための身体構造と機能（3）
第5回　健康理解のための身体構造と機能（4）
第6回　健康理解のための身体構造と機能（5）
第7回　健康理解のための身体構造と機能（6）
第8回　介護予防と理学療法（1）
第9回　介護予防と理学療法（2）
第10回　廃用症候群の予防と理学療法
第11回　日常生活・就労による障害予防と理学療法（含　産業理学療法）
第12回　循環器疾患の発症予防と理学療法（1）
第13回　循環器疾患の発症予防と理学療法（2）
第14回　予防のための理学療法プログラム（課題）
第15回　予防のための理学療法プログラム（課題）

■ 評価方法

提出物30%　筆記試験70%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜提示する課題を確実に学習してください。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	物理療法学				
担当者	棚　千磨		国家出題基準	専門分野 III-2-B	
学科名	理学療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　容

まずは、物理療法機器によってもたらされる身体への生理学的作用を理解してもらいます。その上で、それに伴うリスク・適応・禁忌などを考えてもらいます。実際の機器の操作は、物理療法学実習で行います。

■ 到達目標

1．理学療法における物理療法の位置づけと意義を理解する。
2．各物理療法の生理学的作用を理解する。
3．各物理療法のリスクを想起することができる。
4．生理学的作用、リスクを勘案して、適切な物理療法機器の選択ができる。
5．各物理療法機器の設定値の意味を理解する。

■ 授業計画

第1回　物理療法の意義・位置づけ
第2回　生理学的作用
第3回　炎症・痛みに対する理学療法
第4回　温熱療法
第5回　寒冷療法
第6回　光線療法
第7回　光線療法・電磁波療法
第8回　超音波療法
第9回　電気刺激療法①
第10回　電気刺激療法②
第11回　その他の電気療法
第12回　牽引療法
第13回　マッサージ
第14回　水治療法
第15回　リスク管理その他

■ 評価方法

小テスト：30%　筆記試験：70%　　※遅刻欠席、受講態度により減点あり。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各学生は授業後十分に復習を行い、2回目授業以降、小テストで理解度の確認を行ってもらいます。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

受動的に暗記するのではなく、自ら能動的に考える姿勢で臨んでください。

授業科目	物理療法学実習				
担当者	棚　千磨		国家出題基準	専門分野 III-2-B	
学科名	理学療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

物理療法学実習では、実際に物理療法機器を操作し、生体の反応を体感してもらいます。それに際しては、出力や温度などの物理療法機器の設定、適応・禁忌などのリスク管理などを重点的に学習してもらいます。また、機器を操作するにあたっては、それを扱うに足る知識があることを確認してから、機器操作の許可を出します。
グループに分かれ、各物理療法機器をローテーションで実習してもらいます。

■ 到達目標

1．物理療法機器操作に際し、リスク管理を行えるようになる。
2．適切に物理療法機器を選択できるようになる。
3．適切に物理療法機器を操作できるようになる。
4．物理療法施行後の生体反応を見極めることができるようになる。
5．物理療法と生体反応の関係性に考察が及ぶようになる。

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション（①ホットパック、②パラフィン、③寒冷療法、④極超短波、⑤超音波）
第2回　オリエンテーション（⑥低周波、⑦干渉波、⑧牽引［頚椎･腰椎］、⑨水治療法［渦流浴］、⑩マッサージ）
第3回　実習 第1回目　　実習前に指定された各班が、ローテーションで治療手段の実習を行う。
翌週の実習開始前に各自レポートにまとめて提出する。2回目以後も同様とする。
第4回　実習 第2回目
第5回　実習 第3回目
第6回　実習 第4回目
第7回　実習 第5回目
第8回　実習 第6回目
第9回　実習 第7回目
第10回　実習 第8回目
第11回　実習 第9回目
第12回　実習 第10回目
第13回　実習 第11回目
第14回　まとめ
第15回　実技テスト

■ 評価方法

筆記試験30% 実技テスト10% レポート60%　※遅刻欠席、受講態度により減点あり。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

1．「実習の手引き」をあらかじめ十分に熟読･予習してきて、実習開始後速やかに行動ができるようにする。
2．実習第1回目から第10回目までのグループ実習では、10回の実習項目について全員がレポートを提出する。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

1．学生全員が験者、被験者を必ず体験すること。
2．リスク管理事項を絶対に遵守すること。

授業科目	義肢装具学				
担当者	井上　悟		国家出題基準	専門分野 II-6, II-7-A	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

義肢装具に関する基本的事項を学習し、各種義肢装具の特性と構造を紹介する。

■ 到達目標

臨床で用いる義肢装具の基本的知識を増やす。
臨床で使用される義肢装具の種類、特徴、機能が説明できる。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション（授業計画の概要と成績判定方法の説明）
　　義肢学１　切断総論１
第２回　義肢学２　切断総論２
第３回　義肢学３　義足総論１
第４回　義肢学４　義足総論２
第５回　義肢学５　下腿切断と下腿義足１（ソケット）
第６回　義肢学６　下腿義足２（足部、足継手）
第７回　義肢学７　下腿義足３（適合とアライメント）
第８回　義肢学８　大腿切断と大腿義足１（ソケット）
第９回　義肢学９　大腿義足２（ソケットと懸垂）
第10回　義肢学10　大腿義足３（膝継手）
第11回　義肢学11　大腿義足４（適合とアライメント）
第12回　装具学１　装具総論（下肢装具を中心に）
第13回　装具学２　下肢装具の基本構造
第14回　装具学３　下肢装具のアライメント
第15回　装具学４　靴と靴型装具（FO）

■ 評価方法

筆記試験　70%、授業態度　30%で総合評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業前には、教科書の授業該当範囲を予習しておくこと

■ 教　科　書

書　名：義肢装具学（第４版）
著者名：川村次郎・他編
出版社：医学書院、定価：7350円、2009年（注：最新版で）

■ 参考図書

書　名：切断と義肢
著者名：澤村誠志
出版社：医歯薬出版、定価：7350円、2007年

■ 留意事項

授業科目	義肢装具学実習				
担当者	井上　悟・高木啓至・西野誠一（オムニバス）	国家出題基準	専門分野　III-2-C, III-6-A, III-6-L		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

義肢装具に関する基本的事項を学習し、各種義肢装具の特性と構造を紹介する。臨床で用いる義肢装具の基本的知識を増やす。

■ 到達目標

対象者の障害レベルに応じた義肢装具の類別ができる。
各種障害に対する義肢装具の選択と適合判定ができる。

■ 授業計画

第１回　義肢学実習１　股関節離断と股義足
第２回　義肢学実習２　膝離断と膝義足
第３回　義肢学実習３　サイム切断とサイム義足
第４回　義肢学実習４　足部切断と足部義足
第５回　義肢学実習５　切断者の理学療法１
第６回　義肢学実習６　切断者の理学療法２
第７回　義肢学実習７　切断者の理学療法３
第８回　義肢学実習８　切断者の理学療法４（高木 PT）：実技指導含
第９回　義肢学実習９　がんリハビリテーションと義肢装具（高木 PT）
第10回　装具学実習１　疾患・障害別装具１　CVA 片麻痺の装具
第11回　装具学実習２　疾患・障害別装具２　頚随損傷、対麻痺、二分脊椎の装具
第12回　装具学実習３　疾患・障害別装具３　体幹・頸椎装具、側弯症装具
第13回　装具学実習４　疾患・障害別装具４　小児疾患用装具、整形外科的治療用装具
第14回　装具学実習５　疾患・障害別装具５　末梢神経損傷の上肢装具、その他
第15回　装具学実習６　義肢・装具の最新情報（最新の支給制度含む）（西野 PO）

■ 評価方法

筆記試験　70%、授業態度　30%で総合評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業前には、教科書の授業該当範囲を予習しておくこと

■ 教　科　書

書　名：義肢装具学（第４版）
著者名：川村次郎・他編
出版社：医学書院、定価：7350円、2009年

■ 参考図書

書　名：切断と義肢
著者名：澤村誠志
出版社：医歯薬出版、定価：7350円、2007年

■ 留意事項

外来講師の都合により、講義日時の変動があり得ます。

授業科目	日常生活活動学				
担当者	牧之瀬　一博	国家出題基準	専門分野　II-4-C/D, II-5,　III-4,　III-5		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法士作業療法士国家試験出題基準における，Ⅰ基礎理学療法学内の3-P/Q，Ⅱ理学療法評価学内の4-C/D，5-A/B/C，Ⅲ理学療法治療学内の4-A/B/C/D，5-A/B などに対応している．
日常生活活動学では，普段意識する事無く行っている日常生活が，理学療法において重要な評価・介入対象である事，専門的な視点からみた活動の捉え方を学ぶ．日常生活に関与する諸活動の概念，生活関連活動，運動学との関係，各種評価法などの理解を深める．主な疾患や病態の日常生活活動の特徴並びに介助法や指導法について学修する．

■ 到達目標

・日常生活活動が理学療法における重要な評価介入対象である事を理解する．
・日常生活に関与する諸活動の概念，分析，評価及び練習についての知識を深める．
・代表的な自助具や福祉・生活支援機器についての知識を習得する．
・代表的疾患の日常生活活動の特徴並びに介助法や指導法について修得する．

■ 授業計画

第1回　総論①日常生活活動（ADL）の概念と範囲（基本的 ADL，生活関連活動）
第2回　総論② ADL と障害（ICF）
第3回　総論③基本的 ADL と生活の質（QOL）
第4回　総論④ ADL と運動学
第5回　総論⑤ ADL 評価（代表的評価法）
第6回　総論⑥ ADL と周辺機器（自助具や歩行補助具など）
　　各論①片麻痺の ADL（前半）
第7回　各論①片麻痺の ADL（後半）
　　各論②脊髄損傷の ADL（前半）
第8回　各論②脊髄損傷の ADL（後半）
第9回　各論③脳性麻痺の ADL
第10回　各論④神経筋疾患・難病の ADL
第11回　各論⑤関節リウマチの ADL
第12回　各論⑥人工股関節術後の ADL
第13回　各論⑦内科疾患（呼吸器疾患・循環器疾患）の ADL
第14回　各論⑧切断の ADL
　　⑨高齢者の ADL
第15回　まとめ

■ 評価方法

提出課題（20%），確認テストとノート類の提出（20%），筆記試験（60%）
出席：学則で認められていない欠席や遅刻については減点する（欠席：－4点、遅刻：－2点）
その他，不真面目な受講態度についても減点対象とする

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

理学療法と密接に関わる科目であり，新しい専門用語が多く出てくる事から，講義後の復習が重要である．
大学設置基準に定められているとおり，おおよそ講義時間と同等程度の復習時間を確保すること．
復習方法が分からない学生に対しては，復習方法を提案するため，その方法を参考に復習を行うこと．
小テストを行うが，その時だけの学習に留まらず，それまでの学習内容を総合的に見返すこと．
単純な暗記をすべき事と理解すべき事，応用が出来る様になる事があるため，深い理解を求め，取り組むこと．
講義内容の理解には予習も有効である．予習に関しては指定の教科書の対応する各章（10～ 20ページ程度）を読んでおくこと．

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学 専門分野 日常生活活動学・生活環境学（第４版）
著者名：鶴見隆正（編集）
出版社：医学書院

■ 参 考 図 書

書　名：新版　日常生活活動（ADL）―評価と支援の実際―
著者名：土屋弘吉等
出版社：医歯薬出版

書　名：姿勢と動作　― ADL その基礎から応用まで―（第３版）
著者名：斉藤宏他著
出版社：メヂカルフレンド社

■ 留 意 事 項

授業科目	日常生活活動学実習				
担 当 者	牧之瀬　一博		国家出題基準	専門分野 II-4-C/D, III-4	
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法士作業療法士国家試験出題基準における，Ⅱ理学療法評価学内の４-C/D，Ⅲ理学療法治療学内の４-A/B/C などに対応している．
日常生活活動学実習では，姿勢と動作の基礎的知識，起居・移動・移乗及び段差・階段・歩行に関わる自力動作と介助法を修得する．特に正常動作における運動学・運動力学を押さえた上で，障害が加わった場合の理学療法士として適切な介助技術について学ぶ．
車いす操作法，及び車いすのキャスター上げを体得する．
各論として，主な疾患者の特徴的動作を習得させる．

■ 到 達 目 標

・姿勢と動作の基礎的知識が理解できる．
・起居・移動・移乗動作に関わる身体構造・機能の視点に基づいた，自力動作が理解できる．
・動作指導・運動学習の視点から適切な介助法を理解し，安全に実践できる．
・車いす操作，及び車いすキャスター上げができる．
・主な疾患者の特徴的動作が理解でき，指導方法も理解できるようになる．

■ 授 業 計 画

第１回　オリエンテーション
　　姿勢と動作の基礎知識（概念，身体力学，姿勢と身体構造、姿勢反射）
第２回　基本の姿勢，移動
　　理学療法士としての日常生活活動への関わり
第３回　日常生活活動における姿勢と動作
　　ベッド上移動（水平移動）・起居動作（寝返り・起き上がり）の自力動作と介助法
第４回　日常生活活動における姿勢と動作
　　立ち上がり・移乗動作の自力動作と介助法
第５回　平地歩行，段差・階段昇降（自力，介助）
第６回　各論①－1片麻痺者の特徴的動作
　　寝返り，起き上がり，立ち上がり，移乗
第７回　各論①－2片麻痺者の特徴的動作
　　歩行，階段昇降，更衣，入浴，
　　キャスター挙げ体験とレポート課題の説明
第８回　各論②脊髄損傷（四肢麻痺，対麻痺）者の特徴的動作
　　寝返り，起き上がり，移乗
第９回　各論②脊髄損傷（対麻痺）者の特徴的動作
　　歩行，ADL
第10回　片麻痺者・対麻痺者の車いす操作法（自力）
　　車いす操作（介助）・キャスター上げ
第11回　自力でのキャスター上げの修得
第12回　各論③関節リウマチ者，人工股関節者の特徴的動作
第13回　各論④筋萎縮性疾患（筋ジストロフィー，筋萎縮性側索硬化症）の特徴的動作
　　神経筋疾患（脊髄小脳変性症，パーキンソン病，多発性硬化症）の特徴的動作

第14回　各論⑤内科疾患（呼吸器疾患・循環器疾患）の ADL
　　脳性麻痺（児，者），切断（下肢，上肢）者，高齢者の特徴的動作
第15回　トランスファーや介助法などの実技

■ 評価方法

提出課題（30%）, 実技試験（30%），筆記試験（40%）
出席：学則で認められていない欠席や遅刻については減点する（欠席：-4点、遅刻：-2点）
その他，不真面目な受講態度についても減点対象とする

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

前期の日常生活活動学で学んだ内容を復習した状態で参加すること.
実技については，まず正常な動作の理解に努める必要がある．その際，特に自身の身体を用いて理解を深めるような体験を講義内で行う事から，それらを講義外での時間でも実施して，自分の身体で重要なことを学んで欲しい．また，理学療法学生同士では分からない事も多いことから，家族や学外の知人などにも協力してもらい，動作を学んでいく事が必要である．その上で，それぞれの疾患の特徴に合わせた動作方法などを学ぶため，疾患によって生じる臨床症状の理解が欠かせない.

■ 教　科　書

書　名：姿勢と動作　― ADL その基礎から応用まで―（第３版）
著者名：斉藤宏他著
出版社：メヂカルフレンド社

■ 参考図書

書　名：標準理学療法学 専門分野 日常生活活動学・生活環境学（第４版）
著者名：鶴見隆正編
出版社：医学書院

書　名：新版　日常生活活動（ADL）―評価と支援の実際―
著者名：土屋弘吉等
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	地域理学療法学				
担当者	岩田　篤			国家出題基準	専門分野 IV
学科名	理学療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

地域医療の成り立ち（歴史）を概観しつつ，そこでの理学療法士の役割や，種々（職種間，施設間）の連携の重要性を整理し，地域での暮らしを支えるに必要な基礎知識について学修する。

■ 到達目標

地域医療における理学療法士の役割と方法論，またそれを支えるシステム（制度と社会資源）の重要性について理解することを目標とする。

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション
第2回　地域リハビリテーション（地域の概念およびノーマライゼーション）
第3回　地域理学療法（理念と目的）
第4回　法・制度と地域社会（関連法規）
第5回　法・制度と地域社会（介護保険制度）
第6回　法・制度と地域社会（地域包括ケアシステム）
第7回　地域理学療法（訪問理学療法の実際）
第8回　地域理学療法（通所・施設理学療法の実際）
第9回　住環境および社会環境（社会資源）
第10回　福祉用具
第11回　法・制度と地域社会（国際生活機能分類）
第12回　介護予防
第13回　高齢者の身体特性
第14回　事例検討
第15回　総括

■ 評価方法

筆記試験：80%，小テスト：20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

理解度を促進するために，小テストを行います。
配布資料をもとに必ず復習しておいてください。

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学　地域理学療法学　第3版
著者名：牧田光代，金谷さとみ（編集）
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

制度は時代の変遷とともに見直され常に変化するものである。特に社会保障関連はここ数年来のトピックスであり，ニュースで取り上げられることも少なくない。今後直面する現実問題として強く関心を持つとともに，積極的な情報へのアクセスを行い，地域を考える一助としていただきたい。

授業科目	生活環境論				
担当者	田中　仁		国家出題基準	専門分野 IV-1-G/H	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

リハビリテーションに関わる生活環境を、患者（利用者）を取り巻く生活地域に視点をおいて考える。

■ 到達目標

現在日本における患者（利用者）の在宅環境（家屋、福祉用具等）を、医療保険、介護保険の現行制度を通して、リハビリテーションの視点で理解する。

■ 授業計画

第１回　生活環境論について
第２回　日本の社会保障について
第３回　日本のリハビリテーションについて
第４回　医療保険制度と介護保険制度について
第５回　医療保険制度と介護保険制度について
第６回　地域包括ケアシステムとリハビリテーション
第７回　居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・一般知識）
第８回　居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・移乗移動関係）
第９回　居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・移乗移動関係：実技編）
第10回　居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・ベッド関係）
第11回　居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・褥瘡関係）
第12回　居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・排泄、入浴関係）
第13回　居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・その他）
第14回　居住環境（住宅改修）
第15回　その他、生活環境の視点からのリハビリテーション（認知症予防、身体活動量、栄養改善等）について

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

前回の資料を必ず見直すこと。

■ 教　科　書

書　名：福祉用具専門相談員研修用テキスト第７訂（2015発行）
著者名：一般社団法人シルバーサービス振興会（編集）
出版社：中央法規

■ 参考図書

書　名：生活環境論　第６版 生活支援の視点と方法
著者名：木村 哲彦　　監修
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	理学療法研究特別演習（卒業研究）				
担当者	（共通）島　雅人・牧之瀬一博（オムニバス） （卒業研究）オムニバス			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	３年～４年	総単位数	４単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

卒業研究 / 特別演習は，『基礎教育分野の共通』と『各卒業研究・特別演習』から構成されている．
（共通部分）第１回～ 30回
理学療法教育の中で基礎となり，国家試験においても多く出題されている解剖学・生理学・運動学・人間発達学に関する総復習と知識の定着を図る内容である．この科目の履修により，卒業研究や分野別特別演習の円滑な理解を促すとともに，国家試験合格に必要な基礎知識を学ぶ．
知識の定着・深い理解・主体的で協同的な学習などを目的として，個々に役割を持ったグループ活動を通しての学び合いを基本とする．
（卒業研究）第31～ 60回
理学療法に関する研究を通じて、研究手法や現象に対する考察の手順を学ぶ。

■ 到達目標

（共通部分）
・グループ活動の中で自身の与えられた役割を責任もって遂行する．（主体的で協同的な学習）
・国家試験頻出の解剖学・生理学・運動学・人間発達学の領域の問題について，頻出項目を把握する．
・単純に覚えるといった浅い理解でなく，他者へ説明できるレベルでの理解を目標とし，知識を定着する．
（深い理解）
・頻出の分野における国家試験過去問に関しては，最低でも８割以上の正答率となる．（知識の定着）
（卒業研究）
・研究手法の基礎を理解し、自ら考察する力を養う。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　国家試験の傾向と学習方法（グループ学習の意図，進め方）
第２回　解剖生理学（植物機能）１
第３回　解剖生理学（植物機能）２
第４回　解剖生理学（植物機能）３
第５回　解剖生理学（植物機能）４
第６回　解剖生理学（植物機能）５
第７回　解剖生理学（植物機能）６
第８回　解剖生理学（植物機能）総まとめ
第９回　解剖生理学（動物機能）１
第10回　解剖生理学（動物機能）２
第11回　解剖生理学（動物機能）３
第12回　解剖生理学（動物機能）４
第13回　解剖生理学（動物機能）５
第14回　解剖生理学（動物機能）６
第15回　解剖生理学（動物機能）総まとめ
第16回　解剖生理学（植物・動物機能）総まとめ
第17回　運動機能学１
第18回　運動機能学２
第19回　運動機能学３

第20回　運動機能学４
第21回　運動機能学５
第22回　運動機能学６
第23回　運動機能学７
第24回　運動機能学８
第25回　運動機能学９
第26回　運動機能学総まとめ
第27回　人間発達学１
第28回　人間発達学２
第29回　総まとめ　全範囲のまとめ
第30回　総まとめ　全範囲のまとめ
第31回　オリエンテーション
第32回　文献検索の方法：　インターネットを利用した論文の検索方法について学ぶ
第33回　先行研究論文の抄読：　各グループで発表を行い、研究テーマや手法について考える １
第34回　先行研究論文の抄読：　各グループで発表を行い、研究テーマや手法について考える ２
第35回　先行研究論文の抄読：　各グループで発表を行い、研究テーマや手法について考える ３
第36回　研究計画書の作成：　規定の書式に従い計画書を作成し、担当教員の指導を受ける １
第37回　研究計画書の作成：　規定の書式に従い計画書を作成し、担当教員の指導を受ける ２
第38回　研究計画書の作成：　規定の書式に従い計画書を作成し、担当教員の指導を受ける ３
第39回　研究データを収集する（文献、資料、実験・測定）１
第40回　研究データを収集する（文献、資料、実験・測定）２
第41回　研究データを収集する（文献、資料、実験・測定）３
第42回　研究データを収集する（文献、資料、実験・測定）４
第43回　研究データを収集する（文献、資料、実験・測定）５
第44回　収集した研究データを整理・解析する：　結果をまとめグループ内で発表する １
第45回　収集した研究データを整理・解析する：　結果をまとめグループ内で発表する ２
第46回　収集した研究データを整理・解析する：　結果をまとめグループ内で発表する ３
第47回　収集した研究データを整理・解析する：　結果をまとめグループ内で発表する ４
第48回　収集した研究データを整理・解析する：　結果をまとめグループ内で発表する ５
第49回　得られた結果について考察する：得られた結果に対する考察をまとめグループ内で発表する １
第50回　得られた結果について考察する：得られた結果に対する考察をまとめグループ内で発表する ２
第51回　得られた結果について考察する：得られた結果に対する考察をまとめグループ内で発表する ３
第52回　得られた結果について考察する：得られた結果に対する考察をまとめグループ内で発表する ４
第53回　論文を作成する：　規定の書式に従い論文を作成し、担当教員の指導を受ける １
第54回　論文を作成する：　規定の書式に従い論文を作成し、担当教員の指導を受ける ２
第55回　論文を作成する：　規定の書式に従い論文を作成し、担当教員の指導を受ける ３
第56回　研究報告会用のプレゼンテーション資料、配付資料を作成する １
第57回　研究報告会用のプレゼンテーション資料、配付資料を作成する ２
第58回　研究報告会：　全体で報告会を実施し、他者の発表に対して積極的に質問をする １
第59回　研究報告会：　全体で報告会を実施し、他者の発表に対して積極的に質問をする ２
第60回　卒業研究論文を完成させる：　研究報告会での質疑応答や指摘をふまえて論文を修正する

■ 評価方法

（共通部分）確認テスト（30％）
　出席（欠席：－2点、遅刻：－1点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする.
（卒業研究）ゼミへの参加態度（20%），研究報告会での発表状況（30%），卒業研究論文（50%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

（共通部分）一回の講義内では，各グループ内で複数の領域について学習する．それぞれの学習領域に各グループの中で担当者を配置し，担当領域の学習については，その学生が責任を持って解説を行えるようになる必要がある．そのため，事前学習が必須である．
担当した領域の国家試験過去問題について，各設問の正誤や解説だけでなく，頻出項目，重要点，理解の仕方・覚え方などを他者に講義出来るようになる必要がある．解説をする際に必要となる資料なども各自で用意する必要がある．
（卒業研究）それぞれの研究分野に対する知識が必要となります。ゼミ以外の時間も積極的に活用し、研究を進めるようにしてください。

■ 教　科　書

■ 参 考 図 書

書　名：入門はじめての統計解析
著者名：石村貞夫
出版社：東京図書

書　名：すぐわかる統計解析
著者名：石村貞夫
出版社：東京図書

書　名：すぐわかる統計処理の選び方
著者名：石村貞夫・石村光資郎
出版社：東京出版

書　名：学生・研究者のための 使える！PowerPoint スライドデザイン 伝わるプレゼン1つの原理と3つの技術
著者名：宮野公樹
出版社：化学同人

書　名：これから学会発表する若者のために - ポスターと口頭のプレゼン技術 -
著者名：酒井聡樹
出版社：共立出版

書　名：これから論文を書く若者のために
著者名：酒井聡樹
出版社：共立出版

■ 留 意 事 項

授業科目	内部障害理学療法特別演習				
担当者	基礎部分：島　雅人・牧之瀬一博 演習部分：田坂厚志　（オムニバス）		国家出題基準	専門分野 Ⅱ-3-B, Ⅲ-3-B, Ⅲ-6-E ～ G	
学科名	理学療法学専攻	学　年	3年～4年	総単位数	4単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

（共通）
卒業研究 / 特別演習は，『基礎教育分野の共通』と『各卒業研究・特別演習』から構成されている．共通部分では，理学療法教育の中で基礎となり，国家試験においても多く出題されている解剖学・生理学・運動学・人間発達学に関する総復習と知識の定着を図る内容である．この科目の履修により，卒業研究や分野別特別演習の円滑な理解を促すとともに，国家試験合格に必要な基礎知識を学ぶ．
深い理解を目的としたグループ活動を通しての学び合いを基本とする．
（領域毎の復習）
内部障害に対する理学療法を考える上で必要となる病態などの知識を臨床的な視点を踏まえて学ぶ．

■ 到達目標

（共通）
・グループ活動の中で自身の与えられた役割を責任もって遂行する．
・国家試験頻出の解剖学・生理学・運動学・人間発達学の領域の問題について，他者へ説明できるレベルでの理解を目標とする．
・頻出の分野における国家試験過去問に関しては，最低でも８割以上の正答率となる．
・一つ一つの領域を単なる暗記とするような浅い記憶でなく，複数の領域を統合して臨床に活用できるような知識にする．
（領域毎の演習）
内部障害に対するリスク管理・評価・治療等を学び，考える能力を身に付けることを目標とする．

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション（共通）　国家試験の傾向と学習方法（グループ学習の意図，進め方）
第２回　解剖生理学（植物機能）1（共通）　循環器系の基礎と臨床の関係領域
第３回　解剖生理学（植物機能）2（共通）
第４回　解剖生理学（植物機能）3（共通）
第５回　解剖生理学（植物機能）4（共通）
第６回　解剖生理学（植物機能）5（共通）
第７回　解剖生理学（植物機能）6（共通）
第８回　解剖生理学（植物機能）総まとめ　（共通）
第９回　解剖生理学（動物機能）1（共通）　神経系の基礎と臨床の関係領域
第10回　解剖生理学（動物機能）2（共通）
第11回　解剖生理学（動物機能）3（共通）
第12回　解剖生理学（動物機能）4（共通）
第13回　解剖生理学（動物機能）5（共通）
第14回　解剖生理学（動物機能）6（共通）
第15回　解剖生理学（動物機能）総まとめ（共通）
第16回　解剖生理学（植物・動物機能）総まとめ（共通）
第17回　運動機能学 1（共通）　運動器の基礎と臨床の関係領域
第18回　運動機能学 2（共通）
第19回　運動機能学 3（共通）
第20回　運動機能学 4（共通）

第21回　運動機能学 5（共通）
第22回　運動機能学 6（共通）
第23回　運動機能学 7（共通）
第24回　運動機能学 8（共通）
第25回　運動機能学 9（共通）
第26回　運動機能学総まとめ（共通）
第27回　人間発達学 1（共通）
第28回　人間発達学 2（共通）
第29回　総まとめ　全範囲のまとめ（共通）
第30回　総まとめ　全範囲のまとめ（共通）
第31回　オリエンテーション（領域毎の復習）
第32回　心大血管の解剖学（心臓と大血管の構造）（領域毎の演習）
第33回　心大血管の解剖学（骨格筋と末梢血管の構造）（領域毎の演習）
第34回　心大血管の生理学（心臓と大血管の役割）（領域毎の演習）
第35回　心大血管の生理学（骨格筋と末梢血管の役割）（領域毎の演習）
第36回　呼吸器の解剖学（肺と周辺血管の構造）（領域毎の演習）
第37回　呼吸器の生理学（呼吸のメカニズム）（領域毎の演習）
第38回　症例を用いた呼吸循環器疾患の病態生理 1（領域毎の演習）
第39回　症例を用いた呼吸循環器疾患の病態生理 2（領域毎の演習）
第40回　症例を用いた呼吸循環器疾患の病態生理 3（領域毎の演習）
第41回　症例を用いた呼吸循環器疾患の病態生理 4（領域毎の演習）
第42回　内部障害の統合と解釈：演習 1（領域毎の演習）
第43回　内部障害の統合と解釈：演習 2（領域毎の演習）
第44回　内部障害の統合と解釈：演習 3（領域毎の演習）
第45回　内部障害の統合と解釈：演習 4（領域毎の演習）
第46回　文献検索の方法：インターネットを利用した論文の検索方法について学ぶ（領域毎の演習）
第47回　研究論文等の抄読 1
第48回　研究論文等の抄読 2
第49回　問題解決能力の育成　（国家試験症例問題を中心に）1（領域毎の演習）
第50回　問題解決能力の育成　（国家試験症例問題を中心に）2（領域毎の演習）
第51回　問題解決能力の育成　（国家試験症例問題を中心に）3（領域毎の演習）
第52回　問題解決能力の育成　（国家試験症例問題を中心に）4（領域毎の演習）
第53回　各評価法の演習 1（領域毎の演習）
第54回　各評価法の演習 2（領域毎の演習）
第55回　各評価法の演習 3（領域毎の演習）
第56回　各評価法の演習 4（領域毎の演習）
第57回　まとめ 1（領域毎の演習）
第58回　まとめ 2（領域毎の演習）
第59回　まとめ 3（領域毎の演習）
第60回　まとめ 4（領域毎の演習）

■ 評価方法

（共通）領域別の確認テスト及び全体の確認テスト（30%）
出席（欠席：−4点、遅刻：−2点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする.
（領域毎の演習）課題40%，グループディスカッションへの参加40%，小テスト20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

（共通）
一回の講義内で複数の領域について学習する．それぞれの領域について学生毎に担当者を決め，それぞれのグループ内での担当領域についての学習については，その学生が責任を持って解説を行えるようになる必要がある．そのため，事前学習が必須である．
担当した領域の国家試験過去問題について，各設問の正誤だけでなく，問題の解説や，どういった点が重要な点であるのか，理解の仕方・覚え方などを他者に解説出来るようになる必要がある．解説する際に必要となる資料なども各自で用意する必要がある．
（領域毎の演習）
講義終了時に，予習すべき内容を指示する．
呼吸循環器に関する解剖・生理は復習しておくこと．

■ 教　科　書

書　名：（領域毎の演習）内部障害理学療法学テキスト　改訂第２版
著者名：細田多穂　監修，山崎裕司・川俣幹雄・丸岡　弘　編集
出版社：南江堂

書　名：（共通）PT/OT 国家試験必修ポイント　専門基礎分野基礎医学＜2015＞
著者名：医歯薬出版
出版社：医歯薬出版

■ 参 考 図 書

書　名：（領域毎の演習）呼吸・心臓リハビリテーション　改訂第２版
著者名：居村茂幸　監修，高橋哲也・間瀬教史　編著
出版社：羊土社

■ 留 意 事 項

授業科目	運動器理学療法特別演習				
担当者	基礎部分：島　雅人・牧之瀬一博 演習部分：佐藤睦美　（オムニバス）		国家出題基準	専門分野 Ⅱ-7-A, Ⅲ-6-A	
学科名	理学療法学専攻	学　年	3～4年	総単位数	4単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　容

卒業研究 / 特別演習は，『基礎教育分野の共通』と『各卒業研究・特別演習』から構成されている．
【共通部分】第１回～ 30回
理学療法教育の中で基礎となり，国家試験においても多く出題されている解剖学・生理学・運動学・人間発達学に関する総復習と知識の定着を図る内容である．この科目の履修により，卒業研究や分野別特別演習の円滑な理解を促すとともに，国家試験合格に必要な基礎知識を学ぶ．
知識の定着・深い理解・主体的で協同的な学習などを目的として，個々に役割を持ったグループ活動を通しての学び合いを基本とする．
【演習部分】第31回～ 60回
運動器疾患について疾患の理解を深め、評価や治療プログラムの立案と治療実施を
症例を通じて学ぶ。

■ 到達目標

【共通部分】
・グループ活動の中で自身の与えられた役割を責任もって遂行する．（主体的で協同的な学習）
・国家試験頻出の解剖学・生理学・運動学・人間発達学の領域の問題について，頻出項目を把握する．
・単純に覚えるといった浅い理解でなく，他者へ説明できるレベルでの理解を目標とし，知識を定着する．（深い理解）
・頻出の分野における国家試験過去問に関しては，最低でも８割以上の正答率となる．（知識の定着）
【演習部分】
運動器障害に対して、各疾患に応じたリスク管理・評価・治療が実施できるようになる

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　国家試験の傾向と学習方法（グループ学習の意図，進め方）
第２回　解剖生理学（植物機能）１
第３回　解剖生理学（植物機能）２
第４回　解剖生理学（植物機能）３
第５回　解剖生理学（植物機能）４
第６回　解剖生理学（植物機能）５
第７回　解剖生理学（植物機能）６
第８回　解剖生理学（植物機能）総まとめ
第９回　解剖生理学（動物機能）１
第10回　解剖生理学（動物機能）２
第11回　解剖生理学（動物機能）３
第12回　解剖生理学（動物機能）４
第13回　解剖生理学（動物機能）５
第14回　解剖生理学（動物機能）６
第15回　解剖生理学（動物機能）総まとめ
第16回　解剖生理学（植物・動物機能）総まとめ
第17回　運動機能学１
第18回　運動機能学２

第19回　運動機能学３
第20回　運動機能学４
第21回　運動機能学５
第22回　運動機能学６
第23回　運動機能学７
第24回　運動機能学８
第25回　運動機能学９
第26回　運動機能学総まとめ
第27回　人間発達学１
第28回　人間発達学２
第29回　総まとめ　全範囲のまとめ
第30回　総まとめ　全範囲のまとめ
第31回　オリエンテーション
第32回　肩関節の運動器疾患：疾患の理解
第33回　肩関節の運動器疾患：理学療法評価
第34回　肩関節の運動器疾患：治療
第35回　肩関節の運動器疾患：症例検討
第36回　肩関節の運動器疾患：まとめ
第37回　肘・手関節の運動器疾患：疾患の理解
第38回　肘・手関節の運動器疾患：理学療法評価
第39回　肘・手関節の運動器疾患：治療
第40回　肘・手関節の運動器疾患：症例検討
第41回　肘・手関節の運動器疾患：まとめ
第42回　股関節の運動器疾患：疾患の理解
第43回　股関節の運動器疾患：理学療法評価
第44回　股関節の運動器疾患：治療
第45回　股関節の運動器疾患：症例検討
第46回　股関節の運動器疾患：まとめ
第47回　膝関節の運動器疾患：疾患の理解
第48回　膝関節の運動器疾患：理学療法評価
第49回　膝関節の運動器疾患：治療
第50回　膝関節の運動器疾患：症例検討
第51回　膝関節の運動器疾患：まとめ
第52回　脊椎の運動器疾患：疾患の理解
第53回　脊椎の運動器疾患：理学療法評価
第54回　脊椎の運動器疾患：治療
第55回　脊椎の運動器疾患：症例検討
第56回　脊椎の運動器疾患：まとめ
第57回　まとめ１
第58回　まとめ２
第59回　まとめ３
第60回　まとめ４

■ 評価方法

【共通部分】
確認テスト（30％）
出席（欠席：－2点、遅刻：－1点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする.
【演習部分】
課題40%，小テスト20%，プレゼンテーション40%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

【共通部分】

一回の講義内では，各グループ内で複数の領域について学習する．それぞれの学習領域に各グループの中で担当者を配置し，担当領域の学習については，その学生が責任を持って解説を行えるようになる必要がある．

そのため，事前学習が必須である．

担当した領域の国家試験過去問題について，各設問の正誤や解説だけでなく，頻出項目，重要点，理解の仕方・覚え方などを他者に講義出来るようになる必要がある．

解説をする際に必要となる資料なども各自で用意する必要がある．

【演習部分】

適宜指示を行います。

■ 教　科　書

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	脳血管理学療法特別演習				
担当者	基礎部分：島　雅人・牧之瀬一博 演習部分：岩田　篤（オムニバス）	国家出題基準	専門分野 II-7-B, III-6-B		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	３～４年	総単位数	４単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

共通部分：
卒業研究 / 特別演習は，『基礎教育分野の共通』と『各卒業研究・特別演習』から構成されている．
共通部分）第１回～ 30回
理学療法教育の中で基礎となり，国家試験においても多く出題されている解剖学・生理学・運動学・人間発達学に関する総復習と知識の定着を図る内容である．この科目の履修により，卒業研究や分野別特別演習の円滑な理解を促すとともに，国家試験合格に必要な基礎知識を学ぶ．
知識の定着・深い理解・主体的で協同的な学習などを目的として，個々に役割を持ったグループ活動を通しての学び合いを基本とする．
演習部分：
脳血管障害における理学療法を考える上で必要な基礎知識を臨床の視点から網羅する。

■ 到達目標

共通部分：
・グループ活動の中で自身の与えられた役割を責任もって遂行する．（主体的で協同的な学習）
・国家試験頻出の解剖学・生理学・運動学・人間発達学の領域の問題について，頻出項目を把握する．
・単純に覚えるといった浅い理解でなく，他者へ説明できるレベルでの理解を目標とし，知識を定着する．（深い理解）
・頻出の分野における国家試験過去問に関しては，最低でも８割以上の正答率となる．（知識の定着）
演習部分：
脳血管障害による理学療法において，科学的根拠に基づいた臨床推論ができることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　国家試験の傾向と学習方法（グループ学習の意図，進め方）
第２回　解剖生理学（植物機能）１
第３回　解剖生理学（植物機能）２
第４回　解剖生理学（植物機能）３
第５回　解剖生理学（植物機能）４
第６回　解剖生理学（植物機能）５
第７回　解剖生理学（植物機能）６
第８回　解剖生理学（植物機能）総まとめ
第９回　解剖生理学（動物機能）１
第10回　解剖生理学（動物機能）２
第11回　解剖生理学（動物機能）３
第12回　解剖生理学（動物機能）４
第13回　解剖生理学（動物機能）５
第14回　解剖生理学（動物機能）６
第15回　解剖生理学（動物機能）総まとめ
第16回　解剖生理学（植物・動物機能）総まとめ
第17回　運動機能学１
第18回　運動機能学２

第19回　運動機能学３
第20回　運動機能学４
第21回　運動機能学５
第22回　運動機能学６
第23回　運動機能学７
第24回　運動機能学８
第25回　運動機能学９
第26回　運動機能学総まとめ
第27回　人間発達学１
第28回　人間発達学２
第29回　総まとめ　全範囲のまとめ
第30回　総まとめ　全範囲のまとめ
第31回　脳解剖・脳機能：神経の構造と仕組み
第32回　脳解剖・脳機能：大脳皮質の脳溝および脳回（前頭葉，頭頂葉，側頭葉，後頭葉）
第33回　脳解剖・脳機能：確認テストおよびグループディスカッション①
第34回　脳解剖・脳機能：上位運動ニューロン（ホムンクルス，内包局在），下位運動ニューロン
第35回　脳解剖・脳機能：大脳基底核，小脳
第36回　脳解剖・脳機能：確認テストおよびグループディスカッション②
第37回　脳解剖・脳機能：大脳辺縁系，視床
第38回　脳解剖・脳機能：脳幹（脳神経，中脳，橋）
第39回　脳解剖・脳機能：確認テストおよびグループディスカッション③
第40回　脳解剖・脳機能：脳幹（延髄（ワレンベルグ症候群））
第41回　脳解剖・脳機能：脊髄（ブラウンセカール症候群）
第42回　脳解剖・脳機能：確認テストおよびグループディスカッション④
第43回　脳解剖・脳機能：自律神経（交感神経，副交感神経）
第44回　脳解剖・脳機能：脳血管支配（ウィリス動脈輪含む）
第45回　脳解剖・脳機能：確認テストおよびグループディスカッション⑤
第46回　各論：被殻出血患者に対する理学療法評価および治療の検討
第47回　各論：視床出血患者に対する理学療法評価および治療の検討
第48回　各論：まとめおよびグループディスカッション⑪
第49回　各論：脳幹出血患者に対する理学療法評価および治療の検討
第50回　各論：小脳出血患者に対する理学療法評価および治療の検討
第51回　各論：まとめおよびグループディスカッション⑫
第52回　各論：前頭葉皮質下出血患者に対する理学療法評価および治療の検討
第53回　各論：頭頂葉皮質下出血患者に対する理学療法評価および治療の検討
第54回　各論：まとめおよびグループディスカッション⑬
第55回　各論：側頭葉および後頭葉皮質下出血患者に対する理学療法評価および治療の検討
第56回　各論：ラクナ梗塞患者に対する理学療法評価および治療の検討
第57回　各論：まとめおよびグループディスカッション⑭
第58回　各論：びまん性軸索損傷患者に対する理学療法評価および治療の検討
第59回　各論：前脊髄動脈梗塞患者に対する理学療法評価および治療の検討
第60回　各論：まとめおよびグループディスカッション⑮

■ 評価方法

共通部分：30％（確認テスト（30％），出席（欠席：－2点、遅刻：－1点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする.）
演習部分：70％（事前準備10％，小テスト20％，ディスカッションへの参加貢献度およびレポート課題70％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

共通部分：
一回の講義内では，各グループ内で複数の領域について学習する．それぞれの学習領域に各グループの中で担当者を配置し，担当領域の学習については，その学生が責任を持って解説を行えるようになる必要がある．そのため，事前学習が必須である．
担当した領域の国家試験過去問題について，各設問の正誤や解説だけでなく，頻出項目，重要点，理解の仕方・覚え方などを他者に講義出来るようになる必要がある．解説をする際に必要となる資料なども各自で用意する必要がある．
演習部分：
授業ごとに，当該授業で参考になりそうな本や文献などを集め，持参すること。
また，理解度を促進するために小テストを行うこともある。
授業で活用した資料をもとに必ず復習しておくこと。

■ 教　科　書

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	小児理学療法特別演習				
担当者	（全体）島　雅人・牧之瀬一博 （演習）藪中良彦　　（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	３年～４年	総単位数	４単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

卒業研究 / 特別演習は，『基礎教育分野の共通』と『各卒業研究・特別演習』から構成されている．
【共通部分】第１回～ 30回
理学療法教育の中で基礎となり，国家試験においても多く出題されている解剖学・生理学・運動学・人間発達学に関する総復習と知識の定着を図る内容である．この科目の履修により，卒業研究や分野別特別演習の円滑な理解を促すとともに，国家試験合格に必要な基礎知識を学ぶ．
知識の定着・深い理解・主体的で協同的な学習などを目的として，個々に役割を持ったグループ活動を通しての学び合いを基本とする．
【領域毎の演習】第31回～ 60回
・「脳性まひ児の家庭療育　原著第４版」の各章を分担してまとめ，発表する．
・「脳性まひ児の家庭療育　原著第４版」を使用して，ハンドリングの練習を行う．練習を写真に撮り，各ハンドリングに関してまとめる．

■ 到達目標

【共通部分】
・グループ活動の中で自身の与えられた役割を責任もって遂行する．（主体的で協同的な学習）
・国家試験頻出の解剖学・生理学・運動学・人間発達学の領域の問題について，頻出項目を把握する．
・単純に覚えるといった浅い理解でなく，他者へ説明できるレベルでの理解を目標とし，知識を定着する．（深い理解）
・頻出の分野における国家試験過去問に関しては，最低でも８割以上の正答率となる．（知識の定着）
【領域毎の演習】
①脳性まひ児の両親とスムーズにコミュニケーションが取れ，脳性まひ児の ADL を援助するための基礎知識を獲得する．
②脳性まひ児を的確にハンドリングする準備として，健常者においてハンドリングによって的確な反応を促せるようになる．

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　国家試験の傾向と学習方法（グループ学習の意図，進め方）
第２回　解剖生理学（植物機能）１
第３回　解剖生理学（植物機能）２
第４回　解剖生理学（植物機能）３
第５回　解剖生理学（植物機能）４
第６回　解剖生理学（植物機能）５
第７回　解剖生理学（植物機能）６
第８回　解剖生理学（植物機能）総まとめ
第９回　解剖生理学（動物機能）１
第10回　解剖生理学（動物機能）２
第11回　解剖生理学（動物機能）３
第12回　解剖生理学（動物機能）４
第13回　解剖生理学（動物機能）５
第14回　解剖生理学（動物機能）６

授業科目	臨床実習Ⅰ				
担当者	棚　千磨･伊禮まり子（オムニバス）	国家出題基準	専門分野 V-1，V-2（G を除く）		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	２年	総単位数	１単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

１．国内医療・介護等施設における１回の見学実習を行う。
２．協力医療施設で、スタッフ・教員指導の下、１週間の臨床実習を行う。

■ 到達目標

１．医療・介護等様々な分野の理学療法を理解する。
２．スタッフ・教員と連携を図りながら、対象者の障害について、実際の生活像と共にそれを阻害している機能的な問題の実像を、医療面接、PT 見学、観察、触知、検査・測定などを通じて理解する。

■ 授業計画

１．見学実習
実習施設：学生自身が見学依頼をした医療・介護等施設
実習期間：１回
実習形態：学生自身が領域の異なる２施設に見学依頼をして、所定の日に当該施設の理学療法場面を見学しに行く。
実習の進め方：見学中は、礼儀に十分注意を払いながら、積極的に理学療法場面の見学を行う。

２．臨床実習
学内オリエンテーション：安全管理、個人情報保護、事故・過誤の対応、対人関係技法、医療面接、基本的臨床技能について取り上げる。
実習施設：協力医療施設
実習期間：１週間
実習形態：協力医療施設において､専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下､これまでに修得した検査･測定技術を駆使し、対象者様の障害像に迫る。専任教員は学生の臨床実習現場を観察し、学生の学習課題などを適切に把握し、臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。
実習の進め方：理学療法評価学Ⅰ、Ⅱで学んだ問診、情報収集、ROM-T、MMT、感覚検査などの基本的な測定、評価をなるべく多く体験する。また、解剖学、生理学、運動学、臨床医学等の知識を基に、一人の対象者様に対して適切な機能障害の検査測定項目を選択し、的確に実施する。実習の進め方は、臨床現場実習と専任教員のフォローを織り交ぜて実施する。尚、事前に病院スタッフとのミーティングを行い、学生・対象者・スタッフ相互にとって利益が発生するよう、人員配置や実習の進め方について打ち合わせを行っておく。

医療施設スタッフ・対象者の利益：
　協力医療施設スタッフに於いても、当連携に参加することにより、その資質向上が得られることが期待されている。学生指導を通して対象者の障害像把握が明確化され、更には教員との情報交換も経て、より良いリハビリテーション提供に繋がるものと考えられる。
　これらの事項は結果的に対象者の利益にも繋がり、学生･スタッフ･対象者三者の利益を得るという点に、本科目は主眼を置いている。

■ 評価方法

1．【見学実習】出席、レポートで判定する。
2．【臨床実習】出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

総点数配分は、【見学実習】20%・【臨床実習】80% とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

1．施設見学に際しては、事前に当該施設自体の情報及び当該領域の理学療法について下調べをして臨む。見学終了後は、得られた知見をレポートにまとめ、以後の学習に活かせるようにしておく。
2．実習前には、解剖学・運動学・生理学・評価学等の知識を再度整理し、評価に関する実技を十分練習しておくこと。実習終了後は、自己の課題を整理し次の実習に繋げる事ができるようにしておくこと。

■ 教　科　書

書　名：PT 臨床実習ルートマップ
著者名：柳澤健
出版社：メジカルビュー社

書　名：症候障害学序説　理学療法の臨床思考過程モデル
著者名：内山　靖
出版社：文光堂

■ 参考図書

■ 留意事項

臨床実習Ⅰは、実際の臨床現場での実習となる。臨床実習実施要綱には、臨床実習の目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	臨床実習Ⅱ				
担当者	岩田　篤・棚　千磨（オムニバス）			国家出題基準	専門分野Ⅴ
学科名	理学療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

学生は、専任教員と共に協力医療機関で臨床実習を行う。臨床実習実施にあたっては、専任教員－臨床実習指導者で綿密に連携し、学生に主体的に取り組んでもらう。

■ 到達目標

1．臨床実習指導者および専任教員の指導の下、対象者の生活上の問題点を理解することができる。
2．臨床実習指導者および専任教員の指導のもと、生活上の問題点に関連した機能障害を理解することができる。

■ 授業計画

実習施設：協力医療機関
実習期間：５日間
実習形態：
　協力医療機関において、専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下、これまでに修得した検査・測定技術を駆使し、対象者の障害像に迫る。具体的には、臨床医学、理学療法治療学、日常生活活動学等の知識を基に評価項目を選択し、理学療法評価学等で学んだ問診、情報収集、ROM-T、MMT、感覚検査、動作観察などの基本的な検査・測定を実施する。次に、得られた評価結果に対して解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法治療学、日常生活活動学等の知識を基に解釈を行い、機能障害と能力障害の結びつきを理解する。
　専任教員は学生の臨床実習現場を観察し、学生の学習課題などを適切に把握し、臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら適宜必要なフォローを実施する。
　また、事前に病院スタッフとのミーティングを行い、学生・対象者・スタッフ相互にとって利益が発生するよう、人員配置や実習の進め方について打ち合わせを行う。

医療施設スタッフ・対象者の利益：
　臨床実習指導者に於いても、当連携に参画することにより、その資質向上が得られることを視野に入れている。若手スタッフにとっては、対象者の臨床像をまとめ的確に人に伝えるトレーニングになる。加えて、対象者にとっては、学生とコミュニケーションをとることにより、それが良い刺激になり、機能面・精神面の改善、ひいてはQOLの向上に資することとなる。

■ 評価方法

評価表および症例発表：60%、デイリーノート：５%、課題（レジュメ等）：５%、OSCE：30%で判定する。欠席は減点。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

臨床実習Ⅰの課題を再度見返し、健常者同士での検査・測定技術はマスターしておくこと。
また、能力障害と機能障害との関係を理解していくために、運動学および臨床運動学等の知識を整理しておくこと。

■ 教　科　書

書　名：症候障害学序説　理学療法の臨床思考過程モデル
著者名：内山　靖
出版社：文光堂

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	総合臨床実習Ⅰ				
担当者	藪中　良彦　他（オムニバス）			国家出題基準	専門分野Ⅴ
学科名	理学療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

国内医療施設または介護老人保健施設で３週間の臨床実習を行う。

■ 到達目標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム立案までのプロセスを経験する。具体的には、ICF（又は ICIDH）の枠組みの中で､参加､個人因子､環境因子を考慮して問題点を抽出し､目標設定を行い、具体的治療プログラム立案が行えるようになる。

■ 授業計画

実習施設　近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院、介護老人保健施設
実習期間　３週間
実習形態　臨床実習指導者の監督の下に､対象者様に合わせた評価項目を選択･実施し､統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を行い、治療プログラムを立案する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。
実習の進め方　解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法学等の知識を駆使して、評価を行い、ICF（又は ICIDH) の枠組みの中で統合と解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評価方法

出席（欠席－6点，遅刻・早退－2点)、実習内容及び態度（70%)、総合臨床実習症例レジメと ICF/ICIDH 枠組み図の内容及び学内症例発表会の発表（30%）等を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎日の経験と疑問に対する自己学習についてまとめるデイリーノートが毎日の自宅学習の課題である．また，実習期間で経験した症例についてレジメまたはレポートにまとめることも自宅学習の課題である．

■ 教　科　書

書　名：PT 臨床実習ルートマップ
著者名：柳澤健
出版社：メジカルビュー社

書　名：理学療法臨床実習サポートブック
著者名：岡田慎一郎　他
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

総合臨床実習実施要綱には、総合臨床実習Ⅰの目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	総合臨床実習Ⅱ				
担当者	藪中　良彦　他（オムニバス）			国家出題基準	専門分野Ⅴ
学科名	理学療法学専攻	学　　年	4年	総単位数	9単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

国内医療施設で9週間の臨床実習を行う。

■ 到達目標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム立案、プログラム実施のまでの一連の理学療法プロセスを経験する。具体的には、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定、具体的治療プログラム立案、適切なプログラム実施が行えるようになる。

■ 授業計画

実習施設　近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院
実習期間　9週間
実習形態　臨床実習指導者の監督の下に、対象者様に合わせた評価項目を選択･実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を設定し、治療プログラム立案し、治療プログラム実施する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。
実習の進め方　解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法学等の知識を駆使して、評価を行い、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で統合と解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案し実施する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評価方法

出席（欠席－1点，遅刻・早退－0.5点）、実習内容及び態度（70％）、総合臨床実習症例レジメとICF/ICIDH枠組み図の内容及び学内症例発表会の発表（30％）等を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎日の経験と疑問に対する自己学習についてまとめるデイリーノートが毎日の自宅学習の課題である．また，実習期間で経験した症例についてレジメまたはレポートにまとめることも自宅学習の課題である．

■ 教　科　書

書　名：PT臨床実習ルートマップ
著者名：柳澤健
出版社：メジカルビュー社

書　名：理学療法臨床実習サポートブック
著者名：岡田慎一郎　他
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

総合臨床実習実施要綱には、総合臨床実習Ⅱの目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	総合臨床実習Ⅲ				
担当者	藪中　良彦　他（オムニバス）			国家出題基準	専門分野Ⅴ
学科名	理学療法学専攻	学　　年	4年	総単位数	9単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

国内医療施設で9週間の臨床実習を行う。

■ 到達目標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム実施のまでの一連の理学療法プロセスを経験する。具体的には、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定、具体的治療プログラム立案、適切なプログラム実施、治療効果判定に基づく治療プログラムの変更が行えるようになる。

■ 授業計画

実習施設　近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院
実習期間　9週間
実習形態　臨床実習指導者の監督の下に、対象者様に合わせた評価項目を選択･実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を設定し、治療プログラム立案し、治療プログラム実施する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。
実習の進め方　解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法学等の知識を駆使して、評価を行い、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で統合と解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案し実施する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評価方法

出席（欠席－1点，遅刻・早退－0.5点）、実習内容及び態度（70％）、総合臨床実習症例レジメとICF/ICIDH枠組み図の内容及び学内症例発表会の発表（30％）等を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎日の経験と疑問に対する自己学習についてまとめるデイリーノートが毎日の自宅学習の課題である．また，実習期間で経験した症例についてレジメまたはレポートにまとめることも自宅学習の課題である．

■ 教　科　書

書　名：PT臨床実習ルートマップ
著者名：柳澤健
出版社：メジカルビュー社

書　名：理学療法臨床実習サポートブック
著者名：岡田慎一郎　他
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

総合臨床実習実施要綱には、総合臨床実習Ⅲの目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	基礎作業療法学Ⅲ				
担 当 者	吉田　文・軸丸政代（オムニバス）			国家出題基準	Ⅳ-1-DEF
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

対象者へ作業活動を提供するためのプロセスと効果について学習する。またその集団の中で交流技能の評価について学び、学生自らの交流技能について振り返る。講義とグループ演習によって学習をすすめる。

■ 到達目標

1．対象者へ効果的に作業活動を提供する計画を立てることができる
2．集団作業活動の運営（補助）ができる
3．集団における交流技能について述べることができる
4．集団における交流技能の評価ができる
5．作業療法場面における学生自身の交流技能について認識し、課題について対策を挙げることができる

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション、スケジュールの説明など
第2回　作業活動を提供する対象者・施設等の説明
第3回　対象者の特徴を調べる　　介護予防教室・認知症デイサービスの対象者
　　対人交流技能とは
第4回　作業活動の目的を考える　　集団関係技能とは　　介護予防教室の活動
　　認知症デイサービスの活動
第5回　施設見学実習　　施設見学の準備
第6回　施設見学実習　　施設見学の準備　　施設見学の記録のまとめ　　作業活動の選択
第7回　施設見学実習　　施設見学の準備　　施設見学の記録のまとめ　　作業活動の選択
第8回　施設見学実習　　施設見学の準備　　施設見学の記録のまとめ　　作業活動の選択
第9回　施設見学実習　　施設見学の準備　　施設見学の記録のまとめ　　作業活動の選択
第10回　施設見学実習　　施設見学の準備　　施設見学の記録のまとめ　　作業活動の選択
第11回　施設見学実習　　施設見学の準備　　施設見学の記録のまとめ　　作業活動の選択
第12回　施設見学実習　　施設見学の準備　　施設見学の記録のまとめ　　作業活動の選択
第13回　見学記録等のまとめと作業活動計画の発表準備
第14回　見学記録等のまとめと作業活動計画の発表準備
第15回　見学記録等のまとめと作業活動計画の発表、授業の振り返り

■ 評価方法

参加態度20％、提出物30％、発表30％、最終レポート20％
出席を基本とする授業のため遅刻・早退－2点、欠席－5点の減点とする。但し事前に連絡がありやむを得ない遅刻・早退・欠席と認められた場合は考慮することがある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

＊毎回、提示する課題（復習と予習、Ａ４で1～2枚程度）を次回授業時または定められた期限内に提出すること

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学専門分野　基礎作業学第2版
出版社：医学書院

書　名：レクリエーション―社会参加を促す治療的レクリエーション
出版社：三輪書店

■ 参 考 図 書

書　名：完全図解　介護予防リハビリ体操大全集
出版社：講談社

書　名：アクティビティと作業療法
出版社：三輪書店

書　名：高齢者のためのかんたんレクリエーション
出版社：日本工芸社

書　名：転倒予防のための棒体操
出版社：三輪書店

■ 留 意 事 項

授業科目	基礎作業療法学実習				
担 当 者	吉田　文・鳥屋邦子（オムニバス）			国家出題基準	Ⅱ-2-DE, Ⅳ
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

地域の施設を見学し、そこを利用する障害がある方と共に作業活動を計画し、実行する。
グループでの実習を通して、地域の特徴、地域施設の目的や特徴、利用者のみなさんの
生活、障がいの特徴、目的に沿って適切に作業活動を提供することを学習する。

■ 到 達 目 標

1．施設がある地域について分析できる
2．施設の目的や特徴について述べることができる
3．施設利用者の障がいと生活への影響、施設が果たす役割について述べることができる
4．目的に合わせて作業活動を計画することができる
5．施設利用者の方に適切に作業活動を提供できる

■ 授 業 計 画

第1回　オリエンテーション　スケジュール説明
第2回　地域分析、障害者総合支援法
第3回　施設利用者の障害特性と生活について
第4回　施設見学と施設利用者へのインタビュー準備
第5回　施設見学、施設利用者へのインタビュー、学内課題
第6回　施設見学、施設利用者へのインタビュー、情報収集のまとめ、学内課題
第7回　施設見学、施設利用者へのインタビュー、情報収集のまとめ、学内課題
第8回　施設見学、施設利用者へのインタビュー、情報収集のまとめ、学内課題
第9回　作業活動計画
第10回　作業活動計画
第11回　施設での作業活動提供、活動準備または発表準備
第12回　施設での作業活動提供、活動準備または発表準備
第13回　施設での作業活動提供、活動準備または発表準備
第14回　施設での作業活動提供、発表準備
第15回　施設での作業活動　実践報告会、授業の振り返り

■ 評 価 方 法

参加態度20%、提出物30%、発表30%、最終レポート20%
出席を基本とする授業のため遅刻・早退－2点、欠席－5点の減点とする。但し事前に連絡があり
やむを得ない遅刻・早退・欠席と認められた場合は考慮することがある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

＊毎回、提示する課題（復習と予習、Ａ４で1～ 2枚程度）を次回授業時または定められた期限内に提出すること

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学専門分野　基礎作業学
著者名：小林夏子、福田恵美子　編
出版社：医学書院

書　名：ICF　国際生活機能分類－国際障害分類改訂版―
著者名：世界保健機関（WHO）
出版社：中央法規

■ 参 考 図 書

書　名：レク活動の考え方と広がり方－作業療法士に学べ！「今」を演出するテクニック
著者名：岡野純毅
出版社：雲母書房

書　名：ひとと作業・作業活動―にとにとって作業とは？どのように使うのか？第２版
著者名：山根　寛
出版社：三輪書店

書　名：ひとと集団・場―人の集まりと場を利用する　第２版
著者名：山根　寛
出版社：三輪書店

書　名：精神障害と作業療法―治る・治すから生きるへ　第３版
著者名：山根　寛
出版社：三輪書店

■ 留 意 事 項

授業科目	作業療法研究法				
担当者	井口　知也	国家出題基準	Ⅰ-1-EF Ⅰ-2		
学科名	作業療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業療法の発展を支えるのは研究であることを理解し，研究に必要な基礎知識を学ぶ．また，演習を通じて，卒業論文実施計画書を作成する技術を身につける．

■ 到達目標

1）研究疑問を立て，研究を進める方法を理解する
2）研究の類型やデザインを理解する
3）研究計画の具体的な手順を学び，実践することができる

■ 授業計画

第1回　作業療法研究法の概論
第2回　研究とは何をするのか
第3回　研究の類型と論文構成
第4回　研究に関わる基礎知識
第5回　研究論文の発表と手続き
第6回　実際の作業療法研究事例について
第7回　研究疑問の立て方と解決法
第8回　文献検索（演習）
第9回　文献検索（演習）
第10回　研究計画の報告①
第11回　研究計画の報告②
第12回　研究計画書の作成（演習）
第13回　研究計画書の作成（演習）
第14回　研究計画書の作成（演習）
第15回　まとめ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
レポート：50%，報告：30%，取り組み態度：20%（欠席，遅刻早退も評価される）
なお，欠席，遅刻早退は減点対象　（無断遅刻･無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻･欠席は－5点とする）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義ごとにレポート課題を設定するので，次回の講義開始までに提出する．
レポートの内容および予習範囲は講義の最後にアナウンスする．

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	作業療法評価学Ⅰ（概論）				
担当者	清水　大輔	国家出題基準	Ⅱ-1 ～ 3-ABD		
学科名	作業療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業療法過程において、対象者・児の評価は重要である。心身の構造・機能のみでなく、活動や（社会）参加の制約についても理解する。また、個人因子のみでなく生活全般を取り巻く環境についても把握しておく必要がある。この講義では、作業療法の基礎となる評価について学び、自らの知識・技術を高める。

■ 到達目標

1）作業療法の評価過程を理解する
2）評価方法について知識を整理する
3）評価に関する目的を理解し、適切な評価技術を身につける

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション
　　評価の意義
第2回　評価の流れ・評価する時期
第3回　評価項目　ICF に基づいた視点
第4回　面接法
第5回　面接法演習
第6回　観察法
第7回　観察法演習
第8回　バイタルサインの解説
　　バイタルサインの測定方法の演習
第9回　バイタルサインの測定方法の演習
第10回　バイタルサインの測定方法の実技テスト
第11回　形態計測（四肢長）
第12回　形態計測（周径）
第13回　関節可動域測定（上肢）
第14回　関節可動域測定（上肢）
第15回　関節可動域測定実技テスト

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
レポート および実技試験を40%，定期試験を60%で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業までに教科書の該当箇所を一読しておくこと。
毎授業ごとにレポート課題があるため、提出期限を厳守し提出すること。
実技に関しては、講義時間のみでは習得することは難しい。そのため、授業時間以外に学習内容を復習し、確実に技術を習得できるようにすること。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学　作業療法評価学　　「献本不要」
著者名：編集：岩崎テル子　他
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

作業療法活動にとって、対象者・児の評価は基本となる。過程と方法を正しく理解し、適切な知識と技術を身につけてほしい。実技時間は学校指定のジャージ上下で動きやすい靴（ハイヒール、ハイカットのスニーカーやブーツ等は禁止）で授業に参加すること。
無断欠席や遅刻に注意してください.

授業科目	作業療法評価学Ⅱ（測定と評価）				
担当者	清水　大輔			国家出題基準	Ⅱ-3 ～ 4
学科名	作業療法学専攻	学　　年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業療法評価場面で用いる各種検査・測定にはどのようなものがあるかを知り、その方法を理解する。

■ 到達目標

1.作業療法場面で用いる検査・測定を知る
2.作業療法場面で用いいる検査・測定を正しい方法で行う
3.作業療法場面で用いる検査・測定を正確に実施する（オリエンテーション含む）

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション
　　関節の動きと各種測定（下肢）
　　関節の動きと各種測定（下肢）
第2回　関節の動きと各種測定（体幹）
　　関節の動きと各種測定（手指）
第3回　ROM 測定実技試験
　　ROM 測定実技試験
第4回　筋力測定の方法
　　筋力測定の方法
第5回　筋力測定の方法
　　筋力測定の方法
第6回　筋力測定　実技試験
　　筋力測定　実技試験
第7回　反射のみかた
　　反射のみかた、筋緊張のみかた
第8回　筋の随意運動のみかた
　　筋の随意運動のみかた
第9回　筋の随意運動のみかた
　　筋の随意運動のみかた
第10回　筋の随意運動みかた試験
　　高次脳機能障害のみかた
第11回　高次脳機能障害のみかた
　　高次脳機能障害のみかた
第12回　バランスの見方
　　バランスの見方
第13回　12脳神経のみかた
　　12脳神経のみかた
第14回　ADL 評価について
　　ADL 評価について
第15回　感覚障害のみかた
　　感覚障害のみかた

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
配点は筆記試験70%、レポート・報告30% とする。いずれの試験も60% 以上で合格とする。筆記試験は再試験を実施する。遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は－5点とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

解剖学・生理学・運動学等の基礎知識や各疾患の知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。また、授業時間内ですべてを網羅することは困難である。そのため、解剖学、生理学、運動学の知識の整理、復習を行っておくこと。授業後のレポート課題を必ず提出すること。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学 作業療法評価学 第２版
著者名：岩崎テル子他
出版社：医学書院

書　名：新・徒手筋力検査法 第８版
著者名：津山直一他
出版社：協同医書出版社

書　名：改訂第２版　神経診察クローズアップ正しい病巣診断のコツ
著者名：鈴木則宏
出版社：メジカルギュー社

■ 参考図書

書　名：身体障害作業療法学（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト ４）
著者名：長崎 重信
出版社：メジカルビュー社

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	作業療法評価学Ⅲ（評価プロセス）				
担当者	辻　郁・吉田　文・井口知也・清水大輔・橋本卓也（オムニバス）			国家出題基準	Ⅱ -3 ～ 7
学科名	作業療法学専攻	学　年	２年	総単位数	２単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

提示された事例等の情報を十分読み込み理解して整理することで、作業療法評価の方法と考え方を学ぶものである。

■ 到達目標

提示された事例の

1．記述内容が理解でき専門用語が系統的に知識として蓄積できる。
2．情報を生活機能（あるいは障害）の階層に分類・整理できる。
3．情報の収集法（面接・観察・検査測定等）と、その実施方法が分かる。
4．全体像が分かる（情報を統合し解釈できる）
5．作業療法ニーズが抽出でき、その理由を説明できる。
6．作業療法計画（長期・短期目標、具体的なプログラム、判定指標等）が立案できる。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション　作業療法過程における評価の目的と意義　　橋本担当
第２回　ICF 分類と作業療法評価項目について　　橋本担当
第３回　見学実習事例分析２　　演習により学習とレポート作成　　辻担当
第４回　見学実習事例分析３　　演習により学習とレポート作成　　辻担当
第５回　精神障害者の分析及び統合と解釈１(統合失調症の障害特徴、事例提示、用語調べ)　　吉田担当
第６回　精神障害者の分析及び統合と解釈１(統合失調症の障害特徴、事例提示、用語調べ)２　吉田担当
第７回　精神障害者の分析及び統合と解釈３（精神障害事例の情報分析：ICF）３　　吉田担当
第８回　精神障害者の分析及び統合と解釈３（精神障害事例の情報分析：ICF）４　　吉田担当
第９回　精神障害者の分析及び統合と解釈（事例における評価・治療への ICF の利用）５　　吉田先生
第10回　精神障害者の分析及び統合と解釈（事例における評価・治療への ICF の利用）６　　吉田担当
第11回　中枢身体障害事例の分析及び統合と解釈１（作業療法評価とは？人体の構造と機能）　井口担当
第12回　中枢身体障害事例の分析及び統合と解釈２　　井口担当
第13回　中枢身体障害事例の分析及び統合と解釈３　　井口担当
第14回　中枢身体障害事例の分析及び統合と解釈４　　井口担当
第15回　中枢身体障害事例の分析及び統合と解釈５　　井口担当
第16回　中枢身体障害事例の分析及び統合と解釈６　　井口担当
第17回　整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈１
　　（骨折の治癒過程それに伴って起こる機能障害、活動制限や参加制約について）　　清水担当
第18回　整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈２（事例検討）　　清水担当
第19回　整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈３（事例検討）　　清水担当
第20回　整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈４（事例検討）　　清水担当
第21回　整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈５（事例検討）　　清水担当
第22回　整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈６（事例検討）　　清水担当
第23回　発達障害事例の分析及び統合と解釈１（運動機能障害をもつ子どもを中心に）
　　－評価の視点と過程－　　橋本担当
第24回　発達障害事例の分析及び統合と解釈２（運動機能障害をもつ子どもを中心に）
　　－評価の視点と過程－　　橋本担当
第25回　発達障害事例の分析及び統合と解釈３
　　（脳性マヒをもつ子どもの異常運動パターンの発達過程について）　　橋本担当

第26回　同上４（事例検討、原始反射の国試問題含む）　　橋本担当
第27回　運動機能障害をもつ子どもの評価の過程とポイント・発達障害をもつ子どもの評価について
　　橋本担当
第28回　同上６（感覚統合アプローチ含む）　橋本担当
第29回　評価プロセスのまとめ１　　辻担当
第30回　評価プロセスのまとめ２　　辻担当

■ 評 価 方 法

各領域科目のレポートの総合点（平均）で評価する。欠席・遅刻・早退は減点対象とする。
（事前届出なし－10点、届出あり－5点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各領域の授業について予習を行っておくこと（指定教科書、その他、授業に関する他の参考書等を読み込んでおくこと次回の授業につながる内容に関しては、その日習った内容について復習しておくこと。
指定されたレポートについては必ず期日までに提出すること。また、小テストの実施につては必ず指定された範囲を予習して臨むこと。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学（専門分野）作業療法評価学
著者名：岩崎テル子　他（編集）
出版社：医学書院

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

他者に説明できるまで、調べて熟考すること。分からないままにしないこと。
事例ついては、
①事例を読み込み用語を丁寧に調べる事、
②事例を読み込み全体像を把握する、
③事例の全体像を ICF の相互作用図で示し、文章化する。

授業科目	身体障害治療学Ⅰ				
担 当 者	清水大輔・熊野宏治（オムニバス）			国家出題基準	Ⅲ-2, 6CDGK
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

身体障害に対する作業療法における基本的知識を学ぶ。疾患に共通して用いられる手技を実技を交えて実施する。また、治療原理や作業療法の実施に必要な考え方を疾患ごとの特徴を踏まえ、事例を交えて学ぶ。

■ 到 達 目 標

1. 作業療法に必要な推論を理解できる。
2. 作業療法の治療原理を理解し、実践できる技術を習得する。
3. 各疾患ごとの治療の考え方が分かる。

■ 授 業 計 画

第１回　身体機能作業療法の作業療法原理
第２回　身体機能作業療法の作業療法原理
第３回　様々な治療手技
第４回　様々な治療手技
第５回　様々な治療手技
第６回　様々な治療手技
第７回　身体機能作業療法学の基礎
第８回　身体機能作業療法学の基礎
第９回　脊髄損傷の作業療法
第10回　脊髄損傷の作業療法
第11回　脊髄損傷の作業療法
第12回　脊髄損傷の作業療法
第13回　切断の作業療法
第14回　熱傷・呼吸器疾患・心疾患・糖尿病の作業療法
第15回　熱傷・呼吸器疾患・心疾患・糖尿病の作業療法

■ 評 価 方 法

以下の素材と割合で総合的に評価する
配点は筆記試験70%、レポート・報告30% とする。いずれの試験も60% 以上で合格とする。筆記試験は再試験を実施する。遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は -10点、事前連絡のある遅刻・欠席は -5点とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

解剖学・生理学・運動学等の基礎知識や各疾患の知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。また、授業時間内ですべてを網羅することは困難である。そのため、解剖学、生理学、運動学の知識の整理、復習を行っておくこと。授業後のレポート課題を必ず提出すること。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学 - 専門分野 身体機能作業療法学
著者名：編集：岩崎テル子他
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：身体障害作業療法学（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト 4）
著者名：長崎 重信
出版社：メジカルビュー社

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	身体障害治療学Ⅱ				
担 当 者	島田　康雄			国家出題基準	Ⅲ-6CDE
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

身体障害に対する作業療法における基本的知識を学ぶ。疾患に共通して用いられる手技を実技を交えて実施する。また、治療原理や作業療法の実施に必要な考え方を疾患ごとの特徴を踏まえ、事例を交えて学ぶ。

■ 到 達 目 標

1. 作業療法に必要な推論を理解できる。
2. 作業療法の治療原理を理解し、実践できる技術を習得する。
3. 各疾患ごとの治療の考え方が分かる。

■ 授 業 計 画

第１回　慢性関節リウマチの作業療法
第２回　慢性関節リウマチの作業療法
第３回　慢性関節リウマチの作業療法
第４回　慢性関節リウマチの作業療法
第５回　末梢神経系の作業療法
第６回　末梢神経系の作業療法
第７回　末梢神経系の作業療法
第８回　末梢神経系の作業療法
第９回　脳血管障害の作業療法
第10回　脳血管障害の作業療法
第11回　脳血管障害の作業療法
第12回　脳血管障害の作業療法
第13回　脳血管障害の作業療法
第14回　脳血管障害の作業療法
第15回　まとめ

■ 評 価 方 法

以下の素材と割合で総合的に評価する
配点は筆記試験70%、レポート・報告30% とする。いずれの試験も60% 以上で合格とする。筆記試験は再試験を実施する。遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は－5点とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

解剖学・生理学・運動学等の基礎知識や各疾患の知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。また、授業時間内ですべてを網羅することは困難である。そのため、解剖学、生理学、運動学の知識の整理、復習を行っておくこと。授業後のレポート課題を必ず提出すること。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学 - 専門分野 身体機能作業療法学
著者名：編集：岩崎テル子他
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：身体障害作業療法学（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト 4）
著者名：長崎 重信
出版社：メジカルビュー社

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	身体障害治療学Ⅲ				
担 当 者	清水大輔・熊野宏治（オムニバス）			国家出題基準	Ⅲ-6CDE
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

身体障害に対する作業療法における基本的知識を学ぶ。疾患に共通して用いられる手技を実技を交えて実施する。また、治療原理や作業療法の実施に必要な考え方を疾患ごとの特徴を踏まえ、事例を交えて学ぶ。

■ 到 達 目 標

1. 作業療法に必要な推論を理解できる。
2. 作業療法の治療原理を理解し、実践できる技術を習得する。
3. 各疾患ごとの治療の考え方が分かる。

■ 授 業 計 画

第１回　骨疾患の作業療法
第２回　骨疾患の作業療法
第３回　骨疾患の作業療法
第４回　骨疾患の作業療法
第５回　神経変性疾患
第６回　神経変性疾患
第７回　神経・筋疾患の作業療法
第８回　神経・筋疾患の作業療法
第９回　ターミナルケアの作業療法
第10回　作業療法実践の枠組み
第11回　作業療法実践の枠組み
第12回　作業療法実践の枠組み
第13回　作業療法実践の枠組み
第14回　作業療法実践の枠組み
第15回　作業療法実践の枠組み

■ 評 価 方 法

以下の素材と割合で総合的に評価する
配点は筆記試験70%、レポート・報告30% とする。いずれの試験も60% 以上で合格とする。筆記試験は再試験を実施する。遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は－5点とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

解剖学・生理学・運動学等の基礎知識や各疾患の知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。また、授業時間内ですべてを網羅することは困難である。そのため、解剖学、生理学、運動学の知識の整理、復習を行っておくこと。授業後のレポート課題を必ず提出すること。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学 - 専門分野 身体機能作業療法学
著者名：編集：岩崎テル子他
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：身体障害作業療法学（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト 4）
著者名：長崎 重信
出版社：メジカルビュー社

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	精神障害治療学Ⅰ				
担当者	足立　一	国家出題基準	Ⅰ-1-E, Ⅰ-1-F, Ⅰ-1-F, Ⅱ-2-F, Ⅱ-2-G, Ⅲ-1-A, Ⅲ-1-B, Ⅲ-2-K, Ⅲ-2-L, Ⅲ-3-B, Ⅲ-3-D, Ⅲ-4-A, Ⅲ-3-C, Ⅳ-1- C		
学科名	作業療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　容

教科書を用いた講義と演習。

■ 到達目標

精神障害者に対する作業療法評価・治療に必要な基本的視点と方法を理解する。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
第２回　精神科医療・リハビリテーションの概要
第３回　統合失調症の作業療法
第４回　統合失調症の作業療法
第５回　感情障害の作業療法
第６回　感情障害の作業療法
第７回　神経症性障害の作業療法
第８回　神経症性障害の作業療法
第９回　アルコール依存症の作業療法
第10回　摂食障害の作業療法
第11回　人格障害の作業療法
第12回　てんかんの作業療法
第13回　器質性精神障害の作業療法
第14回　知的障害・発達障害の作業療法
第15回　まとめ

■ 評価方法

小テスト40%　定期テスト60%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

定期的に小テストを行うため、その都度、復習を促す。

■ 教　科　書

書　名：作業療法学全書改訂第３版第５巻作業治療学２精神障害
著者名：社団法人日本作業療法士協会監修　冨岡詔子・小林正義編集
出版社：協同医書出版社

書　名：標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　精神医学
著者名：奈良勲　鎌倉矩子　監修
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：統合失調症の臨床 第３巻 リハビリテーション [DVD]
著者名：肥田裕久 監修
出版社：株式会社中島映像教材出版

■ 留意事項

授業科目	精神障害治療学Ⅱ				
担当者	足立　一	国家出題基準	Ⅰ-1-F, Ⅰ-1-G, Ⅰ-2-A, Ⅱ-2-F, Ⅱ-2-G, Ⅱ-2-J, Ⅲ-1-A, Ⅲ-1-B. Ⅲ-2-K, Ⅲ-2-L, Ⅲ-3-B, Ⅲ-3-C, Ⅳ-1-B, Ⅳ-1-C		
学科名	作業療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

教科書を用いた講義と演習。

■ 到達目標

精神障害者に対する作業療法評価・治療に必要な基本的技術を習得する

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
第２回　疾患別の作業療法（復習）
第３回　精神科作業療法の評価の手順
第４回　精神科作業療法の検査測定演習
第５回　精神科作業療法の面接技術
第６回　集団作業療法の理論と実際
第７回　ACT
第８回　精神障害者の就労支援
第９回　IPS
第10回　精神障害者の社会生活技能訓練
第11回　精神障害者の心理教育・家族支援
第12回　精神障害者の認知行動療法
第13回　精神障害者の社会的認知訓練
第14回　作業療法プログラムの立案演習
第15回　まとめ

■ 評価方法

小テスト40%　定期テスト60%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

定期的に小テストを行うため、その都度、復習を促す。

■ 教　科　書

書　名：作業療法学ゴールド・マスターテキスト６精神障害作業療法学
著者名：長崎重信監修　山口芳文編集
出版社：株式会社メジカルビュー社

■ 参考図書

書　名：職業リハビリテーション学―キャリア発達と社会参加に向けた就労支援体系
著者名：松為 信雄 菊池 恵美子
出版社：協同医書出版社

■ 留意事項

授業科目	発達障害治療学Ⅰ				
担当者	丸田　千津	国家出題基準	Ⅱ-7-EF，Ⅲ-6-EF		
学科名	作業療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

発達障害領域における作業療法の対象疾患（障害）について学び，作業療法士としての支援のあり方を学ぶ．

■ 到達目標

①発達障害領域における作業療法の対象（主に運動障害）について理解する．
②発達障害領域の作業療法の実際について理解する．

■ 授業計画

第１回　定型発達と子どもの遊び①
第２回　定型発達と子どもの遊び②
第３回　脳性まひ　～グループワーク～
第４回　脳性まひ　～グループワーク～
第５回　脳性まひ　～グループワーク発表とまとめ～
第６回　脳性まひ　～グループワーク発表とまとめ～
第７回　脳性まひ　作業療法の実際　①評価と分析
第８回　脳性まひ　作業療法の実際　②運動分析演習
第９回　重症心身障害　概説
第10回　重症心身障害児・者への支援　① Positioning
第11回　重症心身障害児・者への支援　②摂食指導
第12回　重症心身障害児・者への支援　③コミュニケーション技能への支援
第13回　分娩麻痺／二分脊椎
第14回　筋ジストロフィー症　概説
第15回　Duchenne 型筋ジストロフィー症への支援

■ 評価方法

筆記試験（80%），グループワーク課題（20%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後に（毎回とは限らないが），授業内容に関する復習プリントを配布しますので，各自で学習資料として活用して下さい．

■ 教　科　書

書　名：作業療法学全書　改訂第３版　第６巻「作業治療学３　発達障害」
著者名：田村　良子
出版社：協同医書出版社（2010年）

■ 参考図書

書　名：「発達障害を持つ子どもと成人、家族のための ADL　作業療法士のための技術の絵本」，
　　「発達障害を持つ子どもと成人、家族のための ADL　作業療法士のための技術の絵本　実践編」
著者名：辛島　千恵子
出版社：三輪書店

■ 留意事項

授業科目	発達障害治療学Ⅱ				
担当者	丸田　千津	国家出題基準	Ⅱ-7-EF，Ⅲ-6-EF		
学科名	作業療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

発達障害領域における作業療法の対象疾患（障害）について学び，作業療法士としての支援のあり方を学ぶ．

■ 到達目標

①発達障害領域における作業療法の対象（主に知的障害，発達障害）について理解する．
②発達障害領域の作業療法の実際について理解する．

■ 授業計画

第１回　感覚統合理論①
第２回　感覚統合理論②
第３回　感覚統合理論③
第４回　知的障害　概説
第５回　知的障害　行動観察演習
第６回　注意欠如多動性障害（ADHD）　概説
第７回　注意欠如多動性障害（ADHD）　作業療法の実際
第８回　学習障害（LD）　概説
第９回　学習障害（LD）　作業療法の実際
第10回　学習障害（LD）　作業療法の実際　②行動観察演習
第11回　自閉症スペクトラム障害（ASD）　概説
第12回　自閉症スペクトラム障害（ASD）　作業療法の実際
第13回　自閉症スペクトラム障害（ASD）　作業療法の実際　②行動観察演習
第14回　不適応行動の理解と対応
第15回　不適応行動の理解と対応②

■ 評価方法

筆記試験（80％），グループワーク課題（20％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後に（毎回とは限らないが），授業内容に関する復習プリントを配布しますので，各自で学習資料として活用して下さい．

■ 教　科　書

書　名：作業療法学全書　改訂第３版　第６巻「作業治療学３　発達障害」
著者名：田村　良子
出版社：協同医書出版社（2010年）

■ 参考図書

書　名：「発達障害を持つ子どもと成人、家族のための ADL　作業療法士のための技術の絵本」，
　　「発達障害を持つ子どもと成人、家族のための ADL　作業療法士のための技術の絵本　実践編」
著者名：辛島　千恵子
出版社：三輪書店

■ 留意事項

授業科目	老年期障害治療学Ⅰ				
担当者	井口知也・森本かえで・池本和博（オムニバス）	国家出題基準	Ⅱ-3-BC(a-c)，Ⅱ-3D, Ⅱ-7-C, Ⅲ-1-D, Ⅲ-2-A,		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

高齢者の加齢による身体的，心理的，社会的な変化や老年期障害に対する評価，治療に関する基礎知識を学ぶ．老年期特有の障害に対する作業療法アプローチの概要やマネジメントを教授する．

■ 到達目標

1）高齢者の生きてきた時代背景・社会の推移について理解する．
2）高齢者の心身機能，その特性について理解する．
3）老年期障害の生活・障害構造，社会資源を理解し，それらに対する具体的援助を考えられる．
4）老年期作業療法で活用できる検査・測定方法を理解する．

■ 授業計画

第1回　高齢社会に伴う諸問題
第2回　高齢者の生きてきた時代背景・社会の推移について1
第3回　高齢者の生きてきた時代背景・社会の推移について2
第4回　高齢期の特徴1
第5回　高齢期の特徴2
第6回　介護保険制度
第7回　老年期作業療法の実践（基本的枠組み）
第8回　老年期作業療法の実践（特定高齢者，一般高齢者について）
第9回　老年期障害のマネジメント1
第10回　老年期障害のマネジメント2
第11回　老年期疾患別作業療法（認知症）①
第12回　老年期疾患別作業療法（認知症）②
第13回　老年期疾患別作業療法（整形疾患）
第14回　老年期疾患別作業療法（中枢神経疾患）
第15回　まとめ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
レポートおよび発表，小テスト　40%，定期試験　60%するが，いずれも60%以上ないと合格としない．
なお，欠席，遅刻早退は減点対象　（無断遅刻･無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻･欠席は－5点とする）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義の際，前回の内容に関しての小テストを実施したり，レポートを提出する．また，講義前に予習として教科書を読んでくること．小テストやレポートの内容および予習範囲は講義の最後にアナウンスする．

■ 教　科　書

書　名：作業療法学全書第7巻　老年期
著者名：村田　和香　編集
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

書　名：老年期障害領域の作業療法
著者名：山田　孝　編集
出版社：中央法規

書　名：作業療法学全書第13巻　地域作業療法学
著者名：太田　睦美　編集
出版社：協同医書出版社

書　名：認知症の作業療法
著者名：小川　敬之，竹田　徳則　編集
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

個々の文脈にある人間と生活という視点に立ち，作業の意味をしっかり捉えること．その上で，高齢者にとっての作業とは何かを考え，生活を支援する者としての作業療法士の役割の意味を吟味してほしい．

授業科目	老年期障害治療学Ⅱ				
担当者	井口知也・熊野宏治・森本かえで（オムニバス）	国家出題基準	Ⅱ-3-BCGH, Ⅱ-7-A Ⅱ-9-D, Ⅲ-1-A, Ⅲ-2-B		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

高齢者の特性に合わせた評価の方法，高齢者に対して使用頻度の高い生活評価，身体機能評価、認知機能評価，心理機能評価の実施方法などについて演習を実施する．評価から得られた情報をもとに全体像を把握する方法を学び，個々の文脈に沿った意味ある作業を提供し実践できる手だてを教授する．

■ 到達目標

老年期での作業療法実践に必要となる技術の習得を目指す．

■ 授業計画

第１回　老年期障害治療学Ⅰの振り返りと老年期障害治療学Ⅱのオリエンテーション
第２回　老年期作業療法の実際（プロセス）
第３回　老年期作業療法の実際（検査測定）
第４回　老年期作業療法の実際（計画立案と実施，再考）①
第５回　老年期作業療法の実際（計画立案と実施，再考）②
第６回　入所系サービスにおける作業療法
第７回　施設系サービスにおける作業療法
第８回　通所，訪問系における作業療法
第９回　認知症高齢者に対する事例検討１
第10回　認知症高齢者に対する事例検討２
第11回　中枢神経疾患に対する事例検討１
第12回　中枢神経疾患に対する事例検討２
第13回　整形疾患に対する事例検討１
第14回　整形疾患に対する事例検討２
第15回　まとめ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
レポートおよび発表，小テスト　40%，定期試験　60%するが，いずれも60%以上ないと合格としない．
なお，欠席，遅刻早退は減点対象　（無断遅刻･無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻･欠席は－5点とする）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義の際，前回の内容に関しての小テストを実施したり，レポートを提出する．また，講義前に予習として教科書を読んでくること．小テストやレポートの内容および予習範囲は講義の最後にアナウンスする．

■ 教　科　書

書　名：作業療法学全書第７巻　老年期
著者名：村田　和香　編集
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

書　名：老年期障害領域の作業療法
著者名：山田　孝　編集
出版社：中央法規

書　名：作業療法学全書第13巻　地域作業療法学
著者名：太田　睦美　編集
出版社：協同医書出版社

書　名：認知症の作業療法
著者名：小川　敬之，竹田　徳則　編集
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

個々の文脈にある人間と生活という視点に立ち，作業の意味をしっかり捉えること．その上で，高齢者にとっての作業とは何かを考え，生活を支援する者としての作業療法士の役割の意味を吟味してほしい．

授業科目	作業療法治療学実習Ⅰ				
担当者	清水　大輔			国家出題基準	Ⅱ
学科名	作業療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

教育課程で習得した種々の評価技法を実際の対象者に実施し，身体的・心理的・社会的状況を系統立てて報告する

■ 到達目標

①対象者に合わせた評価が適切に行えること
②情報を整理し，統合することができること
③評価から得た対象者の全体像をレポートにまとめ，報告ができること

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　評価の復習
第２回　評価の復習
第３回　対象者Ⅰ（脳血管障害者）の情報公開・評価計画の立案
第４回　対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施①
第５回　実習後フィードバック①
第６回　対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施②
第７回　実習後フィードバック②
第８回　対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施③
第９回　対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施④
第10回　実習後フィードバック①
第11回　対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施⑤
第12回　実習後フィードバック②
第13回　事例まとめ
第14回　事例報告会Ⅰ
第15回　事例報告会Ⅱ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
レポート：50%　報告：30%　実習態度：20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

この科目は作業療法評価で習得した知識・技術が不可欠である。事前準備やOT評価学で学習した評価は必ず復習し、まずは学生間で面接や観察、検査・測定が無駄なく、的確に出来る状態に在ること。
実習後にはレポートをまとめ提出すること。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学　作業療法評価学　　「献本不要」
著者名：編集：岩崎テル子　他
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

実習に適した態度・服装・身だしなみで社会性を持って協調的な姿勢で取り組むこと。

授業科目	作業療法治療学実習Ⅱ				
担 当 者	井口　知也	国家出題基準	Ⅱ-3-BCE，G Ⅲ-1，2-E		
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

教育課程で習得した種々の評価方法および治療技法を，実際の対象者に実施し，ICF の観点から系統立てて，報告する

■ 到達目標

1．作業療法治療学実習Ⅰで習得した知識・技術をもとに，臨床場面で対象者のニーズに合わせた作業療法案が立案できる
2．立案した作業療法計画を実践できる
3．実践結果をフィードバック出来る
4．上記の実践を報告できる

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション
　　障害特性の学習，情報収集案作成
第2回　障害特性の学習，情報収集案作成
第3回　情報の分析と統合
第4回　情報の分析と統合
第5回　作業療法プログラム立案
第6回　作業療法プログラム修正・立案
第7回　実習フィードバック
第8回　事例報告書作成
第9回　障害特性の学習，情報収集案作成
第10回　情報の分析と統合
第11回　作業療法プログラム立案
第12回　作業療法プログラム修正・立案
第13回　実習フィードバック・事例報告書作成
第14回　事例報告
第15回　事例報告

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
レポート：50%，報告：30%，取り組み態度：20%（欠席，遅刻早退も評価される）
なお，欠席，遅刻早退は減点対象　（無断遅刻･無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻･欠席は－5点とする）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義ごとにレポート課題を設定するので，次回の講義開始までに提出する．また，予習として担当事例の医学的情報や評価に必要な検査・測定方法を調べて練習すること．

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	作業療法技術論Ⅲ				
担当者	山田　隆人	国家出題基準	Ⅰ-3-A，Ⅴ-1-D，2-BD		
学科名	作業療法学専攻	学　　年	２年	総単位数	１単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では障がい者スポーツイベントの運営を通して、障がい者の就労支援および社会参加する過程を学びます。具体的には、知的障害を持つ方々が社会参加する機会としてのサッカー大会を就労を目指している精神障害を持つ方々と一緒に演習・実習との形で企画・運営します。障がい者スポーツイベントを運営体験を通して、障がいを持つ方々の社会参加の方法を具体的に学ぶ

■ 到達目標

障がいを持つ方々の社会参加について理解する
協働の意味を知る・実践できる
障がいを持つ方々と障がい者スポーツイベントの運営に関するコミュニケーションを取る
障がいを持つ方々と障がい者スポーツイベントを企画・運営する

■ 授業計画

第１回　コースオリエンテーションと障がい者の就労支援（学内）
第２回　作業療法のプレゼン作成（学内）
第３回　就労支援施設見学と作業療法の紹介（学外）
第４回　就労支援グループ作り（学内）
第５回　障がい者スポーツイベント演習Ⅰ（学外）
第６回　障がい者サッカースクール支援Ⅱ（学外）
第７回　障がい者サッカーフェスティバルの役割検討および準備Ⅰ（学内）
第８回　障がい者サッカーフェスティバルの役割検討および準備Ⅰ（学内）
第９回　障がい者サッカーフェスティバルの役割検討および準備Ⅰ（学内）
第10回　障がい者サッカーフェスティバル２（学外）
第11回　障がい者サッカーフェスティバル２（学外）
第12回　障がい者サッカーフェスティバル２（学外）
第13回　報告内容の作成Ⅰ（学内）
第14回　報告内容の作成Ⅰ（学内）
第15回　報告会（学内）

■ 評価方法

提出課題の提出状況およびその内容（70%）、外部団体および協力者の評価（30%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

外部団体との協業においては、次週までの課題、行うべき内容を提示する必要がある為、次回の講義までの課題を確認する。また、授業開始時には、課題の準備・遂行状況の確認を行う。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：障害者スポーツ始動教本　初級・中級〈改訂版〉
著者名：（公財）日本障害者スポーツ協会　編
出版社：株式会社　ぎょうせい

■ 留意事項

本講義は、外部団体（就労移行支援事業所、プロスポーツクラブ）と協業して行う。また、外部での活動を行う予定にしている。その為、日程等は外部との調整により、講義日程は変更されることがある。

授業科目	臨床ゼミナールⅠ				
担当者	吉田　文　他（オムニバス）			国家出題基準	Ⅰ-2，3
学科名	作業療法学専攻	学　　年	２年	総単位数	１単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

様々な作業活動を用い、様々な環境の中で行われる作業療法を専門の講師から学ぶ。
各テーマに従って学んだことを基礎として、学生自身が得意なまたは興味のある作業活動・作業療法について、その意味を考え、どのように臨床で展開できるかを検討する。

■ 到達目標

1．様々な作業活動を用い、様々な環境で行われている作業療法について説明できる
2．その作業活動の意味や治療効果、その作業療法の必要性について述べることができる
3．自分の得意な作業活動または興味のある作業活動について、作業療法における意味・治療効果、臨床での用い方について検討することができる

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション　動物介在療法と作業療法①
第２回　動物介在療法と作業療法②
第３回　介助犬と作業療法①
第４回　介助犬と作業療法②
第５回　介助犬と作業療法③
第６回　介助犬と作業療法④
第７回　動物リハビリテーション①
第８回　動物リハビリテーション②
第９回　動物リハビリテーション③
第10回　動物リハビリテーション④
第11回　音楽療法と作業療法①
第12回　音楽療法と作業療法②
第13回　ダンスセラピーと作業療法①
第14回　ダンスセラピーと作業療法②
第15回　まとめ（吉田）

■ 評価方法

参加態度（リアクションペーパー含む）20%、提出物30%、最終レポート50%
毎回違うテーマで授業を行うため出席を基本とする。遅刻・早退－2点、欠席－5点の減点とする。但し事前に連絡があり、やむを得ない遅刻・早退・欠席と認められた場合は考慮することがある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

＊毎回のリアクションペーパーと提示する課題（復習と予習、Ａ４で1～2枚程度）を次回授業時または定められた期限内に提出すること

■ 教　科　書

不要

■ 参考図書

書　名：別冊総合ケア　医療と福祉のための　動物介在療法
著者名：高柳友子他
出版社：医歯薬出版

書　名：よくわかるアニマルセラピー―動物介在療法の基礎とケーススタディ
著者名：メリー・R．バーチ
出版社：インターズー

書　名：BSAVA 犬と猫におけるリハビリテーション、支持療法および緩和療法
著者名：長谷川篤彦　監修
出版社：学窓社

書　名：犬のリハビリテーション
著者名：北尾貴史　他監訳
出版社：インターズー

書　名：犬と猫のリハビリテーション実践テクニック
著者名：枝村一弥他　訳
出版社：インターズー

書　名：パーキンソン病はこうすれば変わる！
　　－日常生活の工夫とパーキンソンダンスで生活機能を改善
著者名：橋本　弘子
出版社：三輪書店

書　名：こころを癒す音楽
著者名：北山修
出版社：講談社

書　名：音楽療法入門（上）　理論編
著者名：日野原重明　他
出版社：春秋社

書　名：音楽療法入門（下）　実践編
著者名：日野原重明　他
出版社：春秋社

書　名：介助犬を知る
著者名：高柳哲也
出版社：名古屋大学出版会

書　名：介助犬を育てる少女たち―荒れた心の扉を開くドッグ・プログラム
著者名：大塚敦子
出版社：講談社

書　名：介助犬僕に生きる力をくれた犬：青年刑務所ドッグ・プログラムの３か月
著者名：NHK プリズンドッグ取材班
出版社：ポット出版

書　名：月刊　作業療法ジャーナル47巻７号　増刊号
著者名：高畑進一　他
出版社：三輪書店

書　名：介助犬僕に生きる力をくれた犬：青年刑務所ドッグ・プログラムの３か月
著者名：NHK プリズンドッグ取材班
出版社：ポット出版

■ 留意事項

授業科目	臨床ゼミナールⅡ				
担当者	吉田　文	国家出題基準	Ⅱ -1-G, Ⅱ -1-F		
学科名	作業療法学専攻	学　　年	２年	総単位数	１単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

基礎作業療法実習で行うグループ実習を通して、記録の書き方を学ぶ。記録の目的、記録形式の理解、記録の実践、記録の分析、教員からのフィードバックへの応答など、臨床実習を踏まえた作業療法に役立つ記録方法を身につける。記録から作業療法対象者への理解を促進する。基礎作業療法学実習と連動して授業が進行していく。

■ 到達目標

1．記録の目的について述べることができる
2．形式を理解し、記録を書くことができる
3．作業療法の視点から記録を実施することができる
4．記載した内容について考察し、次の作業療法評価計画・作業療法治療計画を立てられる
5．記録への質問・フィードバックに対し応答できる

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション、スケジュールの説明
第２回　記録の目的、形式復習、プロセスレコード
第３回　記録の利用、分析について
第４回　観察・面接と記録の演習
第５回　基礎作業療法学実習施設見学グループ①は実習記録の討議、その他インタビューと記録の練習
第６回　基礎作業療法学実習施設見学グループ②は実習記録の討議、その他インタビューと記録の練習
第７回　基礎作業療法学実習施設見学グループ③は実習記録の討議、その他インタビューと記録の練習
第８回　基礎作業療法学実習施設見学グループ④は実習記録の討議、その他は実習記録修正の対策立案
第９回　インタビュー記録からわかる対象者の特徴および作業活動提供へのヒント
第10回　作業活動運営と記録の演習①、グループからの FB
第11回　作業活動運営と記録の演習②、グループからの FB、実習記録作成
第12回　作業活動運営と記録の演習③、グループからの FB、実習記録作成
第13回　作業活動運営と記録の演習④、グループからの FB、実習記録作成
第14回　実習記録のまとめ①
第15回　実習記録のまとめ②　授業の振り返り

■ 評価方法

参加態度20%、提出物30%、最終レポート50%
毎回違うテーマで授業を行うため出席を基本とする。遅刻・早退－2点、欠席－5点の減点とする。但し事前に連絡があり、やむを得ない遅刻・早退・欠席と認められた場合は考慮することがある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

＊毎回、提示する課題（復習と予習、Ａ４で1～ 2枚程度）を次回授業時または定められた期限内に提出すること

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学専門分野　基礎作業学
著者名：小林夏子、福田恵美子　編
出版社：医学書院

書　名：ICF　国際生活機能分類－国際障害分類改訂版―
著者名：世界保健機関（WHO）
出版社：中央法規

■ 参 考 図 書

書　名：標準作業療法学専門分野　臨床実習とケーススタディ
著者名：小林夏子、福田恵美子　編
出版社：医学書院

書　名：理学療法士・作業療法士の SOAP ノートマニュアル
著者名：柳沢　健　監訳
出版社：協同医書出版

書　名：SOAP パーフェクトトレーニング―POS を活用するすべての医療者のために
著者名：柳沢　健　監訳
出版社：協同医書出版

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床ゼミナールⅢ				
担当者	辻　郁	国家出題基準	Ⅱ-2-（O ～ R）		
学科名	作業療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

専門基礎科目及び作業療法評価学，作業療法治療学等専門科目で学んだことを基盤とする．
1．国家試験問題を活用し，これまで得た知識をグループ学習によって強化する．2．人の生活機能（障害）を構造的に捉えることを習得するため，事例報告からの情報収集を行い，ICF に沿って事例分析及び統合を行い，その結果を報告する．

■ 到達目標

1．国家試験過去問題から専門基礎科目を学習し，理解できる
2．事例を読み込んで ICF に沿った分析と統合を行える

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション　ICF 確認テスト　国家試験過去問題試験
第2回　国家試験過去問題グループ学習　1
第3回　国家試験過去問題グループ学習　2
第4回　事例分析　1－1
第5回　事例分析　1－2
第6回　国家試験過去問題グループ学習　3
第7回　国家試験過去問題グループ学習　4
第8回　国家試験過去問題グループ学習　5
第9回　事例分析　2－1
第10回　事例分析　2－2
第11回　国家試験過去問題グループ学習　6
第12回　国家試験過去問題グループ学習　7
第13回　事例分析　3－1
第14回　事例分析　3－2
第15回　結果報告とまとめ

■ 評価方法

筆記試験（ミニテスト・定期試験）：60%　　事例分析のポートフォリオ：40%
各々 60%以上を獲得した場合合格とする
取り組み態度：事前届出なしの欠席、遅刻、早退は減点の対象となる

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

本科目はすべてグループ学習を基本とし，具体的な学習計画を立てたうえでの進行であるため，それぞれの課題を予習として仕上げておくこと．授業の翌回にミニテストを実施するので，復習しておくこと

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：国際生活機能分類　- 国際障害分類改訂版 -
著者名：世界保健機関（WHO）
出版社：中央法規

■ 留意事項

これまでの学習内容が実践への橋渡しとなるよう，自ら積極的に取り組むこと
自ら取り組むことで，学習の楽しさや作業療法の面白さ，大切さが実感できることを期待する

授業科目	臨床ゼミナールⅣ				
担当者	辻　郁			国家出題基準	
学科名	作業療法学専攻	学　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

臨床現場での実習直前の準備のための科目とする
情報の統合の方法と国家試験問題を基盤にした知識の定着化を図るためにグループ単位で学習する

■ 到達目標

事例を読み込めて全体像が把握出来る
専門基礎科目で学んだ知識が定着している
グループ学習の方法を掴んでいる

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション
第2回　事例分析　1−1
第3回　事例分析　1−2
第4回　関連する国家試験過去問題グループ学習　1
第5回　関連する国家試験過去問題グループ学習　2
第6回　関連する国家試験過去問題グループ学習　3
第7回　結果報告とまとめ
第8回　事例分析　2−1
第9回　事例分析　2−2
第10回　関連する国家試験過去問題グループ学習　4
第11回　関連する国家試験過去問題グループ学習　5
第12回　関連する国家試験過去問題グループ学習　6
第13回　事例分析　3−1
第14回　事例分析　3−2
第15回　結果報告とまとめ

■ 評価方法

筆記試験（ミニテスト・定期試験）：80%　グループ学習のポートフォリオ：20%　各々60%以上を獲得した場合に合格とする
取り組み態度（無断の欠席や早退などは減点の対象となる）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

グループ学習を基本とし，具体的な学習計画を立てたうえでの進行であるため，それぞれの課題を予習として仕上げておくこと
学習した内容を復習し，その内容をポートフォリオに追加しておくこと

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

これまでの学習内容が実践への橋渡しとなるよう，自ら積極的に取り組むこと
自ら取り組むことで，学習の楽しさや作業療法の面白さ，大切さが実感できることを期待する

授業科目	在宅ケア論				
担 当 者	山田隆人・奥田　真・益子千枝・平川隆啓・木戸貴之（オムニバス）			国家出題基準	Ⅳ-1-B, 2-A,3
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	４年	総単位数	１単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

知的、高次脳障害を持つ方の生活支援、社会福祉に置いて実施されている生活支援の実際を学びます。それら障害者福祉の生活支援の範囲や内容・方法について学びます。さらに、生活行為向上マネジメントについて、学び支援過程を学びます。

■ 到 達 目 標

障がいを持つ方々の生活支援の法制度について理解する
障がいを持つ方々の生活支援について理解する
学んだ内容をまとめ、自身の意見を記述することができる
生活行為向上マネジメントを理解する
生活行為向上マネジメントの流れを理解する

■ 授 業 計 画

第１回　オリエンテーションと在宅ケアとは
第２回　社会福祉と法制度
第３回　社会福祉の現状の姿とその実践状況の理解
第４回　社会福祉の現状の姿とその実践状況の理解
第５回　社会福祉の現状の課題のまとめ
第６回　知的障がい者の生活支援について
第７回　知的障がい者の生活や就労の支援の理解
第８回　高次脳機能障害の生活支援について
第９回　高次脳機能障害の生活や就労の支援
第10回　MTDLP の概要
第11回　MTDLP の概要の評価内容
第12回　MTDLP の支援内容の検討の流れ
第13回　MTDLP 事例検討１
第14回　MTDLP 事例検討２
第15回　MTDLP 事例検討３

■ 評 価 方 法

提出物の有無が60％、提出物の内容40％で評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

次回の講義までの課題を提示する。講義開始までの課題を行っておくこと。

■ 教　科　書

書　名：作業療法マニュアル57　生活行為向上マネジメント
著者名：一般社団法人　日本作業療法士協会
出版社：一般社団法人　日本作業療法士協会

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

本講義は、外部講師の協力の下に計画進行している部分がある。その為、日程等は外部との調整により、講義日程は変更されることがある。

授業科目	地域作業療法学Ⅰ				
担当者	橋本卓也・酒井京子（オムニバス）	国家出題基準	Ⅰ-4-B, Ⅱ-4-B, Ⅲ-1-A, Ⅲ-1-B, Ⅲ-1-C, Ⅱ-2-E		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

さまざまなニーズをもつ障害児・者や高齢者等が地域社会の中で“いきいき”と、そして質の高い生活を送ることができるために作業療法士は何を提供することができるのか？彼（彼女）らの豊かな生活を支えるために必要な作業療法の機能・役割について学ぶ。また、ライフステージにおける生活の変化と、それらに対応した法制度等とを関連づけながら地域作業療法についての考察を深める。

■ 到達目標

①地域作業療法の理念や目的を理解する
②ライフステージ及び障害等に起因する生活の変化に応じた地域作業療法の実践を理解する
③ライフステージの変化や障害児・者の希求する生活に応じた関連法制度を理解する
④地域作業療法展開過程における他職種・他機関との連携について理解する

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
　　地域リハビリテーションおよび地域作業療法について（歴史・理念および目的、機能と役割）
第２回　地域で生活することの意味（作業療法の視点から捉えた『地域』とは、『生活』とは）
　　個と環境の相互作用における生活の変化について
第３回　ライフステージごとの生活特性と健康・生活ニーズ（Ⅰ）（乳児期～学童期～思春期）
第４回　ライフステージごとの生活特性と健康・生活ニーズ（Ⅱ）（青年期～壮年期～老年期）
第５回　地域において作業療法の対象となる人たち及びその人たちに対する支援の視点　Ⅰ
　　（発達期：就学前）
第６回　地域において作業療法の対象となる人たち及びその人たちに対する支援の視点　Ⅱ
　　（発達期：就学後～青年期）
第７回　地域作業療法とターミナルケア（癌など）について
第８回　現行の社会保障制度において作業療法の対象となりにくい人たちへの支援とその可能性
第９回　地域作業療法に関連する制度・施策Ⅰ
第10回　地域作業療法に関連する制度・施策Ⅱ
第11回　地域における認知症高齢者への支援について
第12回　発達障害についてⅠ　－その特徴と理解について－
第13回　発達障害についてⅡ　－就労支援に焦点をあてて－
第14回　地域作業療法における評価の視点
第15回　発達障害者への就労支援の実際（就労支援の現場より：非常勤講師）

■ 評価方法

定期試験　80%　　レポート　20%
その他、出欠状況・授業中の態度等を加味し総合的に評価する

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に参考図書等を紹介するので読んでくること。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：地域作業療法学（作業療法学全書　第13巻）
著者名：太田睦美　編著
出版社：協同医書出版社

書　名：地域作業療法学（標準作業療法学　専門分野）
著者名：小川恵子　編集
出版社：医学書院

書　名：作業療法が関わる医療保険・介護保険・自立支援制度の手引き
著者名：日本作業療法士協会
出版社：日本作業療法士協会

■ 留意事項

授業への積極的な参加を望む

授業科目	地域作業療法学Ⅱ				
担 当 者	橋本卓也・小野稿樹・多崎沙綾香（オムニバス）			国家出題基準	Ⅳ -1-A
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

人々の生活の環境因子としての地域概況から医療・保健・福祉等に関する情報を把握し、作業療法の視点から地域の健康・生活ニーズを推測するとともに、その解決方法を考察する。ACT モデルの実践者からその現状・方法等を学び既存の精神科作業療法を振り返る機会をもつ。

■ 到 達 目 標

①既存のデータから地域の人びとの健康・生活課題を推測できる（地域診断）
②導きだされた健康・生活ニーズに対して作業療法視点から解決方法が立案できる。
③地域作業療法の全体像が理解できる。

■ 授 業 計 画

第１回　高齢者リハビリテーションの現状と課題
第２回　介護保険制度領域における作業療法の実践と課題（訪問リハビリテーションについて）
第３回　介護保険制度領域における作業療法の実践と課題（医療機関と在宅リハ業務の違い）
第４回　地域作業療法におけるコミュニケーション技法について
第５回　地域作業療法における多職種連携とチームアプローチについて
第６回　訪問リハビリテ―ションの実際（神経難病者に対するリハビリテ―ション）について（非常勤講師）
第７回　地域（地区）診断について
第８回　既存のデータから地域の医療・保健・福祉等に関する課題を整理する（GW）
第９回　既存のデータから地域の医療・保健・福祉等に関する課題を整理する（GW）
第10回　既存のデータから地域の医療・保健・福祉等に関する課題を整理する（GW）
第11回　地区診断について（発表）
第12回　地域診断について（発表）
第13回　社会保障制度の枠外におかれている人たちへの作業療法の可能性（触法障害者等）
第14回　包括型地域生活支援アプローチ（ACT モデル）について
第15回　包括型地域生活支援アプローチ（ACT モデル）の実際（非常勤講師）

■ 評 価 方 法

授業中に課すレポート・発表等にて評価する（100%）　その他、授業中の態度も評価対象とする

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に参考図書等を紹介するので読んでくること。

■ 教　科　書

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業への積極的参加を望む。

授業科目	日常生活活動学				
担当者	山田　隆人	国家出題基準	Ⅱ-4，5，Ⅲ-3～5，Ⅴ-あ-GH		
学科名	作業療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業療法は人の生活行為を広く社会の場において支援する。それら支援を行うには、ADL の概念を理解する必要がある。さらに、ADL 支援を行うためには、対象者の生活機能を評価、生活行為への支援方法を検討し、実施していく。本講義では、これら ADL の支援を行うための過程を学ぶ。

■ 到達目標

・ADL について理解する
・ADL 評価に関して一連の手続きについて理解する
・ADL 支援計画立案の構造について理解する

■ 授業計画

第１回　ADL の基礎
第２回　ADL の評価
第３回　ADL の治療理論
第４回　起居移動
第５回　整容
第６回　更衣
第７回　排泄
第８回　入浴
第９回　睡眠・栄養・運動
第10回　炊事
第11回　掃除
第12回　買い物・経済管理
第13回　事例検討１
第14回　事例検討２
第15回　事例検討３

■ 評価方法

課題の提出およびその内容（100%），取り組み態度等の結果を総合的に評価する．

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前に教科書の該当ページを全て読んでくること。
確認のための課題・テストなどを実施する場合がある。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学　日常生活活動・社会生活行為学
著者名：編集　濱口豊太
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：“作業”の捉え方と評価・支援技術
著者名：社団法人　日本作業療法士協会　監修
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	卒業研究論文				
担当者	辻　郁			国家出題基準	Ⅰ-1-l
学科名	作業療法学専攻	学　年	3～4年	総単位数	4単位
		開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　容

作業療法領域における具体的なテーマを設定し，研究計画を立て，それに沿って必要な情報や資料を収集し，整理し，結果を導き出さす．研究の基本手法を実践から学ぶ．その集大成を卒業論文として完成させる．研究の結果を報告する．

■ 到達目標

作業療法における問題を科学的根拠に基づいて解決する姿勢と能力を高める
卒業論文を完成させ，報告できる

■ 授業計画

第１回～第15回
　ゼミ単位で進行する
　オリエンテーション
　研究テーマの決定／先行研究論文の抄読
　研究計画書の作成
　研究データの収集
　収集したデータの整理・解析
　結果についての考察
　論文作成
　報告準備
　報告

■ 評価方法

ゼミへの出席率：40%　　論文内容：30%　　報告姿勢（質疑応答を含む）と内容：30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

研究の進行に沿って，課題を仕上げ，ゼミではディスカッションによって考えをまとめることが出来るように準備すること

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

自らが興味を持って取り組んでいることなので，積極的であってほしい．
研究の大変さと楽しさ，達成感，さらには，作業療法の面白さ，大切さが実感できることを期待する

授業科目	評価学実習				
担 当 者	作業療法学専攻教員（オムニバス）			国家出題基準	Ⅰ，Ⅱ，Ⅴ
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	3年	総単位数	3単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

1．実習前学習，臨床実習，終了後のまとめと報告会で構成する
2．実習施設：一般病院，リハビリテーション病院など大学が依頼し決定した施設
3．臨床現場での実習期間：3週間（2月）
4．実習形態：同一施設で臨床実習指導者の指導体制のもと対象者の作業療法評価を行う

■ 到達目標

1．作業療法評価の位置づけと過程がわかる
2．対象者の作業療法評価（情報収集，検査測定，統合と解釈，作業療法プログラムの立案）が出来る
3．上記を適切に記録できる

■ 授業計画

第1回　全体オリエンテーション
第2回　実習前課題
第3回　実習前課題へのフィードバック
第4回　実習前技能演習1
第5回　実習前技能演習2
第6回　臨床評価学実習（3週間）
第7回　臨床評価学実習のまとめ
第8回　臨床評価学実習報告会

■ 評価方法

実習への取り組み態度（50%）
実習事前学習・終了後のまとめへの取り組み態度（25%）
提出物と報告内容（25%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各回に担当教員および臨床実習指導者の指示に従って，予習復習を行うこと

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

1．実習は対象者や関係者，実習施設の好意により行われるため感謝と礼儀を忘れないこと
2．日頃から健康管理に努め，特に臨床実習期間は健康に留意すること
3．全体を通して，身だしなみや取り組み態度が不適切であると判断した場合，また，無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として実習を中止する

授業科目	総合臨床実習Ⅰ				
担当者	作業療法学専攻教員（オムニバス）	国家出題基準	Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅴ		
学科名	作業療法学専攻	学　　年	４年	総単位数	８単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

1．実習前学習，臨床実習，終了後のまとめと報告会で構成する
2．実習施設：一般病院，リハビリテーション病院など大学が依頼し決定した施設
3．現場での実習期間：９週間
4．実習形態：同一施設で臨床実習指導者の指導体制のもと対象者の作業療法を行う

■ 到達目標

1．作業療法士としての知識・技術・臨床推論・態度など基本的資質を習得できる
2．指導者の指導のもと，一連の作業療法を実践できる
3．チームにおける作業療法の役割と機能がわかる
4．義務と責任および倫理観を修得できる

■ 授業計画

第１回　全体オリエンテーション
第２回　実習前課題
第３回　実習前課題へのフィードバック
第４回　実習前技能演習１
第５回　実習前技能演習２
第６回　総合臨床実習（４週間）
第７回　総合臨床実習学内演習（１週間）
第８回　総合臨床実習（４週間）
第９回　総合臨床実習のまとめ
第10回　総合臨床実習報告会

■ 評価方法

実習への取り組み態度（50%）
実習事前学習・終了後のまとめへの取り組み態度（25%）
提出物と報告内容（25%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各回に担当教員および臨床実習指導者の指示に従って，予習復習を行うこと

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

1．実習は対象者や関係者，実習施設の好意により行われるため感謝と礼儀を忘れないこと
2．日頃から健康管理に努め，特に臨床実習期間は健康に留意すること
3．全体を通して，身だしなみや取り組み態度が不適切であると判断した場合，また，無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として実習を中止する

授業科目	総合臨床実習Ⅱ				
担 当 者	作業療法学専攻教員（オムニバス）	国家出題基準	Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅴ		
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	4年	総単位数	8単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

1．実習前学習，臨床実習，終了後のまとめと報告会で構成する
2．実習施設：一般病院，リハビリテーション病院など大学が依頼し決定した施設
3．現場での実習期間：9週間
4．実習形態：同一施設で臨床実習指導者の指導体制のもと対象者の作業療法を行う

■ 到達目標

1．作業療法士としての知識・技術・臨床推論・態度など基本的資質を十分習得できる
2．指導者の指導のもと，一連の作業療法を2例以上実践できる
3．チームにおける作業療法の役割と機能が十分にわかる
4．義務と責任および倫理観を修得できる

■ 授業計画

第1回　全体オリエンテーション
第2回　実習前課題
第3回　実習前課題へのフィードバック
第4回　実習前技能演習1
第5回　実習前技能演習2
第6回　総合臨床実習（4週間）
第7回　総合臨床実習学内演習（1週間）
第8回　総合臨床実習（4週間）
第9回　総合臨床実習のまとめ
第10回　総合臨床実習報告会

■ 評価方法

実習への取り組み態度（50%）
実習事前学習・終了後のまとめへの取り組み態度（25%）
提出物と報告内容（25%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各回に担当教員および臨床実習指導者の指示に従って，予習復習を行うこと

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

1．実習は対象者や関係者，実習施設の好意により行われるため感謝と礼儀を忘れないこと
2．日頃から健康管理に努め，特に臨床実習期間は健康に留意すること
3．全体を通して，身だしなみや取り組み態度が不適切であると判断した場合，また，無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として実習を中止する

授業科目	医学総論（公衆衛生・精神保健含む）				
担当者	板倉登志子・松井理直・山本永人・吉機俊雄　他（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　年	２年	総単位数	１単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士に必要な医学的地理機について学ぶ。

■ 到達目標

言語聴覚士国家試験に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

第１回　専門基礎分野　（講師非公表）
第２回　専門基礎分野　（講師非公表）
第３回　専門基礎分野　音響学（松井理直）
第４回　専門基礎分野　音響学（松井理直）
第５回　専門基礎分野　音声学（松井理直）
第６回　専門基礎分野　音声学（松井理直）
第７回　社会保障制度・関係法規（山本永人）
第８回　社会保障制度・関係法規（山本永人）
第９回　専門分野　失語・高次脳機能障害（板倉登志子）
第10回　専門分野　失語・高次脳機能障害（板倉登志子）
第11回　専門分野　失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）
第12回　専門分野　失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）
第13回　専門分野　失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）
第14回　専門分野　失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）
第15回　専門分野　失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）

■ 評価方法

試験100％　（国家試験と同形式の試験を２回実施、問題は五者択一形式）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

言語聴覚士過去問題を中心に分からないところを質問・確認し合って受験勉強を進めること。

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士テキスト
著者名：廣瀬肇　監修
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書　名：言語聴覚士のための基礎知識（シリーズ各本）
出版社：医学書院

書　名：標準言語聴覚障害学（シリーズ各本）
出版社：医学書院

書　名：言語聴覚療法シリーズ改訂版（シリーズ各本）
出版社：建帛社

■ 留意事項

授業科目	解剖学				
担 当 者	柴田　雅朗			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

頭・頚部の解剖学的な構造を学び、言語聴覚領域の学習の礎とする。

■ 到 達 目 標

中枢神経系、末梢神経系ならびに口腔、喉頭を構成している各部の名称や機能を説明できる。

■ 授 業 計 画

第１回　神経系Ⅰ
　　１．神経系の構成　２．中枢神経系とは　３．脊髄　４．延髄と橋　５．中脳　６．小脳
第２回　神経系Ⅱ
　　１．間脳（視床と視床下部）　２．大脳　（大脳皮質、大脳基底核、大脳白質）
第３回　脳神経
　　１．脳神経の概略
　　２．脳神経（三叉神経、顔面神経、内耳神経、舌咽神経、迷走神経、舌下神経）
第４回　脳室系と脳の血管
　　１．脳室　２．髄膜（硬膜、クモ膜、軟膜）　３．脳脊髄液
　　４．脳の血管（内頸動脈とその枝、椎骨動脈とその枝、ウイリス動脈輪、硬膜静脈洞）
第５回　顔面と口腔の解剖
　　１．口蓋　２．口腔底　３．舌と味蕾　４．舌の発生　５．咀嚼筋　６．嚥下に働く筋
第６回　喉頭の解剖と
　　１．舌骨と喉頭の軟骨　２．声帯靱帯と声帯ヒダ　３．声門　４．喉頭の筋　５．喉頭の神経
第７回　平衡・聴覚器の解剖
　　１．外耳・中耳・内耳の構造　２．聴覚と平衡覚の伝導路と反射路
第８回　三層性胚盤および鰓弓と総復習
　　１.三層性胚盤　２．鰓弓　３．鰓弓由来の筋とその支配神経

■ 評 価 方 法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習は必要ありませんが、復習を必ず毎回やって、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教　科　書

書　名：PT・OT・ST のための解剖学
著者名：渡辺正仁　監修
出版社：廣川書店

■ 参考図書

書　名：ネッター解剖学アトラス
著者名：相磯貞和　訳
出版社：南江堂

■ 留意事項

欠席や遅刻をしないように心がけること。

授業科目	生理学				
担当者	宮井　潔			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

生理学は人体機能のしくみを知る基礎的な学問であるが、かなり範囲が広く深いので、
各項目ごとにできるだけ基本的な考え方や重点事項を解説する。

■ 到達目標

各分野において、それぞれ基礎となる解剖学と、臨床医学特に内科学との関連づけを
理解するように努める。

■ 授業計画

第１回　細胞と内部環境
第２回　血液・生体防御
第３回　循環系
　　小テストと解説
第４回　呼吸機能
第５回　消化と吸収
第６回　胃臓と排泄
第７回　酸・塩基平衡
第８回　内分泌・代謝

■ 評価方法

筆記試験95%　筆記小テスト５%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義終了後、講義内容の復習をし、疑問があれば次回授業時に必ず質問する事。

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法・作業療法専門分野　生理学
著者名：石澤光郎、冨永淳
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：スタンダード生理学
著者名：二宮石雄、安藤啓司、彼末一之、木川寛二
出版社：文光堂

■ 留意事項

講義では重点のみ（主としてキーワードの説明）述べるので、それをもとに教科書などでしっかり自習
してほしい

授業科目	病理学				
担 当 者	橋本　和明			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

疾病の基礎知識を会得する。

■ 到 達 目 標

疾病の基礎知識を会得し、個々の病気の理解を行うことを可能とする。

■ 授 業 計 画

第１回　病因論・退行性病変
第２回　代謝異常・進行性病変
第３回　循環障害
第４回　免疫
第５回　炎症・感染症
第６回　腫瘍
第７回　放射線障害・老化
第８回　先天異常・奇形

■ 評 価 方 法

筆記試験　100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適時授業中に指示をする。

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　病理学第３版
著者名：梶原博毅・横井豊治
出版社：医学書院

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	**内科学**（老年医学含む）				
担 当 者	**宮井　潔**			国家出題基準	
学 科 名	**言語聴覚専攻科**	学　　年	**２年**	総単位数	**１単位**
		開講時期	**前期**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

まず健常人の解剖・生理・生化学の基礎知識を簡単に復習してそれを把握した上で、内科学の総論・各論の全領域にわたる基礎的な重要項目について臨床現場での経験も交えて講義する。

■ 到 達 目 標

内科学は臨床医学の基礎であるが、その範囲は余りにも広く、内容も深いため短期間でそのすべてをマスターするのは大変むずかしい。そこで基礎的な内科学の考え方、必要最小限の知識、専門用語などを理解するよう努める。

■ 授 業 計 画

第１回　内科学総論－病因論（遺伝・感染・腫瘍・代謝異常等）
　　診断学・検査学
第２回　内科学総論－治療医学、予防医学
第３回　内科学各論－血液疾患
第４回　内科学各論－膠原病・アレルギー・免疫疾患
第５回　内科学各論－膠原病・アレルギー・免疫疾患
　　小テスト及び解説
第６回　内科学各論－感染症
第７回　内科学各論－内分泌疾患
第８回　内科学各論－代謝疾患
第９回　内科学各論－循環器疾患
第10回　内科学各論－呼吸器疾患
第11回　内科学各論－胃・泌尿器疾患
第12回　内科学各論－消化管疾患
第13回　内科学各論－肝・胆・膵疾患
第14回　内科学各論－中毒・環境要因による疾患
第15回　老年医学

■ 評 価 方 法

筆記試験95％　筆記小テスト５％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義終了後、講義内容の復習をし、疑問があれば次回授業時に必ず質問する事。

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法・作業療法専門分野　内科学
著者名：石澤光郎、冨永淳
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：新臨床内科学
著者名：髙久史麿・尾形悦郎
出版社：医学書院

書　名：標準理学療法・作業療法専門分野　老年医学
著者名：大内尉義
出版社：医学書院

書　名：NEW 臨床検査診断学
著者名：宮井潔
出版社：南江堂

■ 留意事項

講義では要点（基本的な考え方・各事項の用語説明などいわば“さわり”）だけを述べることになるので、それをもとに教科書などでしっかり自習してほしい

授業科目	小児科学				
担 当 者	田平　公子			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

小児の成長・発達、形態的特徴・生理的特徴、よくみられる疾患、見逃せない疾患を中心とした小児の病気及び予防接種・母子保健について述べる。

■ 到達目標

小児の成長・発達、生理・病理上の特徴の把握、小児疾病、小児保健等を理解すること

■ 授業計画

第１回　小児の発育・発達、生理的特徴
第２回　小児の発育・発達、生理的特徴
第３回　出生前小児科学
第４回　新生児学、周産期学
第５回　新生児・乳幼児の栄養と生活
第６回　母子保健、予防接種
第７回　小児の感染症
第８回　中枢性疾患及び運動器疾患
第９回　中枢性疾患及び運動器疾患
第10回　小児の内科学　　循環、呼吸
第11回　小児の内科学　　アレルギー、免疫、内分泌代謝
第12回　小児の内科学　　消化器、腎臓、泌尿器
第13回　発達障害
第14回　小児治療の特徴、事故、救急
第15回　まとめ

■ 評価方法

筆記100％（小テスト20％本テスト80％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書を必ず熟読すること。

■ 教　科　書

書　名：最新育児小児病学
著者名：黒田恭弘
出版社：南江堂

書　名：小児・思春期診療　最新マニュアル
著者名：五十嵐　隆
出版社：日本医師会

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	精神医学				
担 当 者	山田　一朗			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

精神症状の捉え方，代表的な精神疾患の特質および対処法の基本を講義する

■ 到 達 目 標

精神疾患の特質を理解し，患者への望ましい接近方法を習得できる

■ 授 業 計 画

第１回　オリエンテーション 精神医学を理解するための心理学の基礎
第２回　精神機能と精神症状
第３回　精神疾患の基本分類と診断基準
第４回　代表的な精神疾患と，その対応（1）内因性精神疾患
第５回　代表的な精神疾患と，その対応（2）外因性精神疾患
第６回　代表的な精神疾患と，その対応（3）心因性精神疾患
第７回　代表的な精神疾患と，その対応（4）人格障害等
第８回　精神保健の今日的課題

■ 評 価 方 法

筆記試験（95%）　　受講態度（５%）欠席・遅刻も受講態度の対象とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適時授業中に指示をする

■ 教　科　書

■ 参 考 図 書

書　名：専門医がやさしく語る はじめての精神医学
著者名：渡辺雅幸
出版社：中山書店

書　名：好きになる精神医学 第2版
著者名：越野好文・志野靖史
出版社：講談社

■ 留 意 事 項

教科書指定はありません

授業科目	リハビリテーション医学				
担当者	今井公一・辻　郁・澤井里香子　他（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・理学療法の歴史や定義、理学療法過程、理論的な背景などについて学ぶ。（今井）
・講義形式で、作業療法の歴史や理論的背景、種々の展開例から作業療法実践の枠組みと実際を学ぶ。（辻ほか）
・言語聴覚療法に必要なリハ医学の基礎知識及び臨床場面で重要となる事柄を、心理的問題も含めて講義する。（澤井）

■ 到達目標

1）理学療法の治療体系について説明できる。2）理学療法の対象について説明できる。3）リスク管理など理学療法の実際について説明できる。（今井）
1）作業療法の枠組みを概観できる。2）作業療法の実践例を知ることで、その専門性を理解できる。（辻ほか）
1）言語聴覚療法に必要な医学的基礎知識及び代表的な疾患について、患者個人の全体像を把みアプローチするために必要な臨床上の考え方を身につける。（澤井）

■ 授業計画

第1回　理学療法の歴史と定義・対象（今井）
第2回　理学療法の過程と治療体系　（今井）
第3回　理学療法の実際　（今井）
第4回　理学療法の実際　（今井）
第5回　作業療法概論
第6回　身体障害領域における作業療法の実際
第7回　精神障害領域における作業療法の実際
第8回　発達障害領域における作業療法の実際
第9回　リハビリテーション医学の概念と障害学　（澤井）
第10回　廃用症候群・過用 / 誤用症候群
　　中枢性神経麻痺の回復　（澤井）
第11回　脳卒中のリハビリ　　運動学習　（澤井）
第12回　目標設定レベルの階層性　　留守居能力
　　ケアマネージメント　　パーキンソン病のリハビリ　（澤井）
第13回　神経疾患のリハビリ（ALS,SCD）　ターミナルケア　呼吸リハ　（澤井）
第14回　心理的問題について（障害受容、チームワークなど）（澤井）
第15回　授業全体の総合的演習　（澤井）
第16回　授業全体の総合的演習　（澤井）

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義前にプリントを配布する。講義までに必ず読んでおくこと。（澤井）
講義終了後は復習し、分からないことがあれば次回の講義時に質問すること。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：図説　パーキンソン病の理解とリハビリテーション
著者名：山永　裕明、野尻　晋一
出版社：三輪書店

書　名：動画で学ぶ脳卒中のリハビリテーション
著者名：園田　茂
出版社：医学書院

書　名：臨床リハ
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	耳鼻咽喉科学				
担 当 者	藤木暢也・岡野高之　他（オムニバス）			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

耳鼻咽喉科疾患の病態と治療について講義を行う

■ 到達目標

耳鼻咽喉科疾患について、言語聴覚士に必要な知識を身につけることを目標とする

■ 授業計画

第１回　総論 / 鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖（1）（藤木）
第２回　鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖（2）（藤木）
第３回　鼻・咽喉頭・頸部疾患の病態と治療（1）（藤木）
第４回　鼻・咽喉頭・頸部疾患の病態と治療（2）（藤木）
第５回　聴器の構造と機能（外耳と中耳）（岡野）
第６回　聴器の構造と機能（内耳および中枢伝導路）（岡野）
第７回　外耳・中耳の疾患とその治療　１　（岡野）
第８回　外耳・中耳の疾患とその治療　２　（岡野）
第９回　外耳疾患の病態と治療　（講師非公表）
第10回　外耳疾患の病態と治療　（講師非公表）
第11回　外耳疾患の病態と治療　（講師非公表）
第12回　聴力改善術　（講師非公表）
第13回　前庭・平衡系の構造と機能　（講師非公表）
第14回　めまい疾患　（講師非公表）
第15回　まとめ　（講師非公表）

■ 評価方法

試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業後には、学習内容について必ず復習をしておくこと。

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学
著者名：鳥山　稔
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	臨床神経学				
担当者	小倉　光博			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

スライドを中心に、臨床的に頻度の高い神経疾患をわかりやすく解説する。あわせて、神経解剖、神経生理、神経症候学、神経放射線診断についても解説する。

■ 到達目標

神経解剖、神経生理などの基本的知識をもとに、臨床でよく経験する神経疾患の病態、診断、治療を理解すること。

■ 授業計画

第１回　神経解剖・神経生理
第２回　神経解剖・神経生理
第３回　脳血管障害
第４回　脳血管障害
第５回　脳腫瘍
第６回　脳腫瘍
第７回　頭部外傷
第８回　頭部外傷
第９回　小児頭部外傷・先天奇形
第10回　神経血管症候群
第11回　パーキンソン病
第12回　認知症
第13回　頭痛
第14回　神経変性疾患・感染症
第15回　神経画像診断

■ 評価方法

筆記試験　100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後復習をし、わからないところは次回の授業で積極的に質問すること。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：絵でみる脳と神経　第３版
著者名：馬場元毅
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	**形成外科学**				
担 当 者	**大倉　正也**			国家出題基準	
学 科 名	**言語聴覚専攻科**	学　　年	**２年**	総単位数	**１単位**
		開講時期	**後期**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

言語聴覚士に必要な顎顔面形成外科学

■ 到 達 目 標

基礎知識と臨床知識の習得と理解

■ 授 業 計 画

第１回　総論（嚥下を含む）
第２回　口唇口蓋裂
第３回　口腔腫瘍
第４回　顎変形症
第５回　顎顔面の再建
第６回　唾液腺の機能と唾液腺疾患
第７回　試験対策
第８回　試験対策

■ 評 価 方 法

筆記試験（80％）　　受講態度（20％）欠席や遅刻は受講態度の評価対象とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

嚥下についてまず理解すること。　試験対策では、具体的に問題を解いていきます。授業中に理解し、覚えていきながら、試験に慣れるようについてきて下さい。

■ 教　科　書

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

欠席に注意してください。

授業科目	臨床歯科医学				
担当者	山西　整			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士に必要な歯科的知識について学ぶ。

■ 到達目標

歯科的知識の習得と理解

■ 授業計画

第１回　歯科概論
　　歯と歯周組織について（発生、構造と機能）
第２回　歯と歯周組織について　１
　　疾患と治療（う蝕、歯髄炎、歯周病、歯列不正、歯の欠損）
第３回　歯と歯周組織について　２
　　疾患と治療（う蝕、歯髄炎、歯周病、歯列不正、歯の欠損）
第４回　口腔、顎、顔面について
　　発生、構造と機能（摂食、咀嚼、嚥下、構音）
第５回　顎関節、唾液腺について
　　発生、構造と機能（摂食、咀嚼、嚥下、構音）
第６回　口腔ケアについて
　　歯科医学的処置（補綴、保存、歯科矯正など）について
第７回　口蓋裂治療と ST
第８回　口蓋裂治療と ST

■ 評価方法

試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、疑問点は次回の講義で質問をすること

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学
著者名：道健一
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	**口腔外科学**				
担 当 者	**窪　寛仁**			国家出題基準	
学 科 名	**言語聴覚専攻科**	学　　年	**1年**	総単位数	**1単位**
		開講時期	**後期**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

顎・口腔の構造と機能および顎・口腔領域の疾患について講義を行う。

■ 到達目標

言語聴覚士として必要な顎・口腔の構造および顎・口腔領域の疾患について理解する。

■ 授業計画

第１回　口腔、顎・顔面領域の先天異常、変形
第２回　顎・口腔領域の炎症性疾患、口腔粘膜疾患
第３回　顎・口腔領域の嚢胞性疾患
第４回　顎・口腔領域の損傷・外傷 、顎関節疾患
第５回　顎・口腔領域の神経疾患、唾液腺疾患
第６回　顎・口腔領域の腫瘍および腫瘍類似疾患
第７回　口腔、顎・顔面領域の手術と機能回復
第８回　まとめ試験と解説

■ 評価方法

筆記試験　100％
（必要な出席日数を満たした者に試験の受験資格を与え、定期試験（筆記試験）で評価する。）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎回の講義内容に関連した問題を配布するので、講義後に自学自習することを課す。

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学
著者名：道　健一編
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	**呼吸発生系医学**（呼吸発声発語系の構造、機能、病態）				
担 当 者	**本多知行・楯谷一郎（オムニバス）**			国家出題基準	
学 科 名	**言語聴覚専攻科**	学　　年	**２年**	総単位数	**１単位**
		開講時期	**前期**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

嚥下障害分野：嚥下障害の臨床に必要な医学的知識および支援のあり方について学ぶ。（本多）
音声障害分野：音声障害の基礎及び臨床について、医学的な観点から講義を行う。（楯谷）

■ 到 達 目 標

嚥下障害分野：嚥下障害の理解を深め、人間の根源的欲求である「口から食べる」という QOL の向上を目的として、言語聴覚士が支援できる技術と考え方を習得する。（本多）
音声障害分野：音声障害のリハビリテーションを行う際に必要となる耳鼻咽喉科学的知識を習得する。（楯谷）

■ 授 業 計 画

第１回　嚥下障害の理解のために必要な解剖・生理（本多）
第２回　嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練１（本多）
第３回　嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練２（本多）
第４回　嚥下障害におけるチームアプローチと関連事項（本多）
第５回　偽（仮）性球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ　（本多）
　　球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ
第６回　変性疾患の嚥下障害に対する特徴とアプローチ（本多）
第７回　嚥下障害の重症度分類と最近の話題（本多）
第８回　喉頭の解剖（楯谷）
第９回　発声の生理機構（楯谷）
第10回　喉頭検査法（楯谷）
第11回　喉頭疾患の診断と治療：器質的病変（楯谷）
第12回　喉頭疾患の診断と治療：器質的病変（楯谷）
第13回　喉頭疾患の診断と治療：非器質的病変（楯谷）
第14回　音響分析・音声検査法（楯谷）
第15回　まとめ（楯谷）

■ 評 価 方 法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

受講後は、その都度レジメやノート搭を読み返し、必ず復習をしておくこと。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：「摂食・嚥下リハビリテーション」第２版
著者名：金子芳洋　　千野直一監修
出版社：医歯薬出版

書　名：「嚥下障害の臨床」第２版
著者名：日本嚥下障害臨床研究会監修
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	聴覚系医学（聴覚系の構造、機能、病態）				
担当者	金丸　眞一			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

聴覚系の構造・機能・病態と疾患について解説する。

■ 到達目標

聴覚系の構造や機能を理解し、その疾患について言語聴覚士に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

第１回　耳科学の概説と聴覚系の構造①（外耳・中耳・内耳）
第２回　聴覚系の機能①（外耳・中耳）
第３回　聴覚系の機能②（内耳）
第４回　聴覚系の機能③（聴神経と視聴中枢経路）
第５回　聴覚系の機能④（聴覚中枢機構、両耳聴能と方向感覚）
第６回　聴覚検査と耳疾患
第７回　聴覚器官の病態①（外耳・中耳疾患①）
第８回　聴覚器官の病態②（外耳・中耳疾患②）
第９回　鼓室形成手術
第10回　聴覚器官の病態③（内耳疾患①）
第11回　聴覚器官の病態④（内耳疾患②）
第12回　内耳再生医学
第13回　聴覚器官の病態⑤（後迷路・中枢性難聴疾患）
第14回　聴覚と音声・言語・音楽
第15回　まとめ

■ 評価方法

試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、分からないことは随時授業内で質問すること。

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士のための聴覚障害学
著者名：喜多村健　編著
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	**神経系医学**（神経系の構造、機能、病態）				
担 当 者	**西林宏起・尾崎充宣（オムニバス）**			国家出題基準	
学 科 名	**言語聴覚専攻科**	学　　年	**1年**	総単位数	**1単位**
		開講時期	**前期**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

脳神経外科疾患を含む、神経疾患から機能解剖を学ぶ。

■ 到達目標

日常臨床で遭遇する患者の神経症状、高次脳機能障害を理解する。

■ 授業計画

第１回　頭蓋骨、硬膜、くも膜、軟膜、灰白質、白質の解剖（西林）
第２回　脳断面図と神経画像（西林）
第３回　脳回、脳溝と大脳皮質機能局在①（西林）
第４回　脳回、脳溝と大脳皮質機能局在②（西林）
第５回　連合線維、投射線維、交連線維（西林）
第６回　脳脊髄液系、脳血管の解剖①（西林）
第７回　脳血管の解剖②（西林）
第８回　大脳基底核、視床、脳幹、小脳の構造、機能、病態（尾崎）
第９回　末梢神経（脳神経、脊髄神経、自律神経）の構造、機能、病態（尾崎）
第10回　脊髄の構造、機能、病態（尾崎）
第11回　高次機能障害（尾崎）
第12回　運動機能障害（尾崎）
第13回　感覚障害、自律神経障害（尾崎）
第14回　生理学的検査、画像検査（尾崎）
第15回　まとめ（尾崎）

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業後、必ず復習をしておくこと

■ 教　科　書

書　名：絵でみる脳と神経　しくみと障害のメカニズム
著者名：馬場　元毅
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	臨床心理学Ⅰ（理論と分類）				
担当者	藤井　章乃			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

臨床心理学の基本である人格理論、発達理論を中心に学習する。

■ 到達目標

自己理解、他者理解を通して人間理解を深め、理想的な人間関係について考える。

■ 授業計画

第１回　臨床心理学とは
第２回　心とは何か
第３回　心理援助演習
第４回　人格理論　フロイトの精神分析理論①
第５回　人格理論　フロイトの精神分析理論②
第６回　実習　交流分析人格理論
第７回　人格理論　ユングの分析的心理学①
第８回　人格理論　ユングの分析的心理学②
第９回　人格理論　ロジャーズの自己理論
第10回　人格理論　マーラー／ウィニコット／フロイト以降の人格理論
第11回　発達理論　エリクソンの心理・社会的発達理論
第12回　精神医学　①
第13回　精神医学　②
第14回　心理アセスメント・パーソナリティ理論
第15回　心理援助演習

■ 評価方法

筆記試験　80％　提出課題　20％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業後に、授業の振り返りとして感想を提出し、実習後には結果の分析を提出する場合がある。

■ 教　科　書

書　名：心とかかわる臨床心理
著者名：川瀬正裕・松本真理子・松本英夫
出版社：ナカニシヤ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	臨床心理学Ⅱ（査定と心理療法）				
担当者	藤井　章乃			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

心理アセスメント、心理療法を中心に、自己分析を通して自己理解を深め、援助技術を具体的に学ぶ。

■ 到達目標

臨床心理学の援助の方法を理論と実習によって学ぶことにより、実践において役立てることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　心理アセスメント①　概論
第２回　心理アセスメント②　質問紙法
第３回　心理アセスメント③　投映法
第４回　心理アセスメント④　まとめ
第５回　心理療法とは
第６回　心理療法①　クライエント中心療法
第７回　実習　傾聴訓練
第８回　心理療法②　精神分析療法
第９回　心理療法③　分析心理療法
第10回　心理療法④　芸術療法Ⅰ
第11回　心理療法⑤　芸術療法Ⅱ
第12回　心理療法⑥　遊戯療法　家族療法
第13回　心理療法⑦　行動療法
第14回　心理療法⑧　認知行動療法　リラクゼーション法
第15回　実習　まとめ

■ 評価方法

筆記試験80％　提出課題20％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業後に、授業の振り返りとして感想を提出し、実習後には結果の分析を提出する場合がある。

■ 教　科　書

書　名：心とかかわる臨床心理
著者名：川瀬正裕・松本真理子・松本英夫
出版社：ナカニシヤ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	生涯発達心理学Ⅰ（乳幼児期）				
担当者	工藤　芳幸			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

生涯発達心理学とは、生まれてから死ぬまでの人の一生において、環境（人や物、社会）との相互作用を通じた時系列的な変化を扱う。いわば生老病死、生成と喪失の心理学である。具体的な発達アセスメントにもつなげていく為に、新版Ｋ式発達検査2001やWISC-Ⅳなどの検査課題も参照して進めたい。第６回までは便宜的に年齢ごとの子どもの姿を学ぶ。前半終了後に、第７回からは、アタッチメントや認知、社会性といった領域ごとの発達についての理解を深める。第13回からは、複合的な領域である概念やメタ認知機能、注意･記憶機能（ワーキングメモリ）、知能の捉え方について学ぶ。最終回は、人との関係の中で育っていくパーソナリティーや自己について取り上げたい。

■ 到達目標

乳幼児期の発達の流れを大まかに掴むことと、各領域でポイントになる項目の理解を目標とする。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション：胎生期・新生児期～小学校に上がる頃までの発達と成長を俯瞰する。また受講に当たっての留意事項、学習形式について話したい。
第２回　乳児期前半の子どもの発達：乳児期前半の子どもの大まかな姿について学ぶ。
第３回　乳児期後半の子どもの発達：乳児期後半の子どもの大まかな姿について学ぶ。
第４回　幼児期前半の子どもの発達：幼児期前半の子どもの大まかな姿について学ぶ。
第５回　幼児期後半の子どもの発達：幼児期後半の子どもの大まかな姿について学ぶ。
第６回　乳幼児期の復習。乳幼児期の小テストを実施し、フィードバックを行なう。
第７回　アタッチメントと社会性の発達：Bowlbyのアタッチメント理論を中心に、母子関係における愛着行動、人見知りのメカニズムなどについて解説する。
第８回　認知の発達：乳幼児の認知の発生について理論的体系を築いたスイスの心理学者・ピアジェについて取り上げる。第５回までの講義とリンクさせながら、基本的な考え方について解説する。
第９回　情緒の発達:大人には喜怒哀楽といった感情が確かに「ある」ことが当然と思われるかも知れない。感情もまた、乳児期からの発達過程において学習される。気分・感情・情動・情緒といった言葉で表される状態の初期発達を学ぶ。
第10回　遊びの発達:遊びは総合力である。子どもは手持ちの力を発揮して多様に遊ぶ。遊びを媒介にして、認知や言語、社会性や感情制御といった力を身につけていく。遊びというものについて考えてみたい。
第11回　言語･コミュニケーションの発達:「言語発達学」と重複する箇所もあるが、ことばやコミュニケーション発達の過程で重要なポイントについて学ぶ。
第12回　注意・記憶の発達：注意（attention）機能、記憶の発達について取り上げる。
第13回　知能：知能測定の歴史的背景から、現在、使われている知能テストについて解説する。WISC－Ⅲ（Ⅳ）、田中ビネー知能検査Ⅴ、K-ABC Ⅱについて、概要を取り挙げる。
第14回　パーソナリティー・自己の発達：人格形成についても遺伝子の設計図で決定されるわけではなく、後天的な学習の要因が大きい。社会的な問題解決や教科学習との関係、レジリエンスという概念などを取り挙げる。
第15回　小テストと全体のまとめ：講義前半で第７回から第14回までの項目についての小テストを実施する。後半は講義全体のまとめの時間とする。

■ 評価方法

期末試験80%、小テスト20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

15回の講義スケジュール中に小テストを2回実施しますので、各回ごとに講義内容の復習をお薦めします。

■ 教　科　書

書　名：コメディカルのための専門分野基礎テキスト 人間発達学
著者名：福田恵美子編
出版社：中外医学社

■ 参考図書

書　名：よくわかる発達心理学
著者名：無藤隆，岡本祐子，大坪治彦（編）
出版社：ミネルヴァ書房

■ 留意事項

適宜、ハンドアウトを配布します。小児関係の講義資料は他科目を含めてファイリングすることをお薦めします。

授業科目	生涯発達心理学Ⅱ（幼児期～老年期）				
担当者	森田喜治・阪本裕子・森定美也子　他（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

森田：人間関係論から見た人間の発達
坂本・森定ほか：老年期のエイジングとパーソナリティー、認知症の問題、死への対応について解説する。
老年期のエイジングとパーソナリティーについて理解を深め、ST が如何に対応すべきかを学んで頂きたい。

■ 到達目標

生物学的発達の理解だけでなく、人間であるがゆえに重要となる人間関係の観点から発達を理解する。
各発達段階の課題や病理について理解し、適切なアプローチについて考えることが出来る。

■ 授業計画

第１回　発達について、人間関係学、間主観性、精神分析からの理解（森田）
第２回　乳幼児期の人間関係の発達と機能の発達との関連（森田）
第３回　児童期、思春期の関係の発達と精神的成長との関連（森田）
第４回　児童期、思春期の問題形成とその心理療法（森田）
第５回　青年期、成人期の人間関係の発達（特に家族との関係）（森田）
第６回　青年期、成人期の人間関係上の問題とその心理療法（特に家族との関係）（森田）
第７回　成人期、中年期の人間関係の発達（特に夫婦の関係と、子どもとの関係）（森田）
第８回　成人期、中年期の人間関係上の問題とその心理療法（老いの受け入れと、老いの意味）（森田）
第９回　老年期の位置づけとコミュニケーションの基本（森定）
第10回　老年期の課題とコミュニケーション方法　－認知症の特徴と対応について－（森定）
第11回　老年期の方へコミュニケーション方法
　　－老人保健施設での集団療法、回想法、コラージュ療法－（森定）
第12回　老年期の知的機能　－認知症について－（阪本）
第13回　老年期の知的機能　－認知症のケアについて－（阪本）
第14回　死への対応１（講師非公表）
第15回　死への対応２（講師非公表）

■ 評価方法

レポート100%、（尚、レポートは心理学的観点からの自分史理解になりますので専門書の記述も必要です）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

森田：生涯発達という分野は、それぞれの先生によってさまざまではありますが、私のスタイルとしましては、多分に現象学的な見方からの　人間関係学を主体としています、その意味で、特に誰のというのでもありませんが、人間関係に関する知識を得るためのあらゆる書物が予習、復習で必要になると思います。特に、現在成人期に達している自己に目を向け、「私」を分析していく癖をつけるために、どのような分野の本でも構いませんが、自分自身を振り返るのに必要な書物はなんでも予習としてお読みください。インターネットの発達によって、知識に関することはいくらでも探すことができますが、分野違いの本の中にも、人を知るための様々な切り口があります。それを知るための学習が、すべて予習であるといえます。最後のレポートで自分を見つめるときに、その予習してきたものが如何に現れるかを評価の基準としていきたいと思います。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	学習・認知心理学Ⅰ（感覚・知覚・学習・記憶）				
担当者	田中　大貴			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学について学ぶ。前期は感覚・知覚・学習・記憶について習得する。

■ 到達目標

人間がどのように外の世界をとらえているのか（感覚・知覚）、またどのように新しい行動や知識を獲得していくのか（学習・記憶）を理解できるようになる。

■ 授業計画

第１回　心理学とは何か？
第２回　感覚の分化と統合Ⅰ（感覚・知覚）
第３回　感覚の分化と統合Ⅱ（感覚・知覚）
第４回　視知覚Ⅰ（感覚・知覚）
第５回　視知覚Ⅱ（感覚・知覚）
第６回　古典的条件付け（学習）
第７回　オペラント条件付け（学習）
第８回　強化スケジュール（学習）
第９回　技能学習（学習）
第10回　社会的学習（学習）
第11回　記憶の過程（記憶）
第12回　短期記憶（記憶）
第13回　長期記憶（記憶）
第14回　記憶の神経過程（記憶）
第15回　前期のまとめ

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義内で配布した資料を次回までに改めて読み通しておくこと（参考図書の該当部分も参照のこと）。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：心理学（第５版）
著者名：鹿取 廣人 , 杉本 敏夫 , 鳥居 修晃
出版社：東京大学出版会

■ 留意事項

授業科目	学習・認知心理学Ⅱ（思考・言語）				
担当者	田中　大貴			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学について学ぶ。後期は、より高次の認知過程を必要とする思考・言語について習得する。

■ 到達目標

学習・認知心理学において扱われる人間の問題解決の仕方や知識の構造（思考）、また言語を獲得するにあたり必要な認知発達（言語）に関して理解できるようになる。

■ 授業計画

第１回　前期のおさらい
第２回　問題解決（思考）
第３回　問題解決と認知発達（思考）
第４回　知識（思考）
第５回　推論と発見（思考）
第６回　言語獲得（言語）
第７回　非言語コミュニケーション（言語）
第８回　前期・後期のまとめ

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義内で配布した資料を次回までに改めて読み通しておくこと（参考図書の該当部分も参照のこと）。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：心理学（第５版）
著者名：鹿取 廣人 , 杉本 敏夫 , 鳥居 修晃
出版社：東京大学出版会

■ 留意事項

授業科目	心理測定法				
担 当 者	松井　理直			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語聴覚士の仕事で用いられる各種心理測定法の意味に関する理解を深めると共に、人間の心理を客観的に把握する方法の習得を目指す。

■ 到達目標

言語聴覚士として必要不可欠な心理学の知識を身につけると共に、国家試験問題に対応できる応用力を身につけること。

■ 授業計画

第１回　心理テストの特徴とテストの信頼性・再現性
第２回　精神物理学的測定法（1）―調整法
第３回　精神物理学的測定法（2）―極限法と恒常法
第４回　尺度構成について
第５回　一対比較法と感覚尺度
第６回　Weber の法則について
第７回　Fechner の法則について
第８回　Weber-Fechner の法則と音響学の関係
第９回　Stevens のベキ法則について
第10回　信号検出理論について
第11回　統計学の基礎
第12回　各種統計学の考え方
第13回　各種心理テスト法の特徴について
第14回　認知能力とことばの心理
第15回　心理測定法の総復習

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間１時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、１時間程度。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

授業科目	言語学Ⅰ（音声学・形態論）				
担当者	松井　理直			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

日本語という言語の特徴をよく理解し、言語障害の分析に応用する。

■ 到達目標

日本語の音声・文字について、習熟する。

■ 授業計画

日本語の音声・文字といった「表現手段」について習熟する。
第１回　言語とは何か
第２回　構音器官について
第３回　国際音声記号の考え方
第４回　発声（有声・無声）と声帯の特性
第５回　調音方法の詳細
第６回　調音位置の詳細
第７回　日本語の母音について
第８回　日本語の無声阻害音の発音について
第９回　日本の濁音の特徴
第10回　その他の日本語分節音の特徴
第11回　アクセントとイントネーションについて
第12回　東京方言とアクセント核
第13回　日本語のそのほかの方言アクセントとイントネーション
第14回　文字について
第15回　漢字の種類とかな文字の特徴

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間１時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、１時間程度。

■ 教　科　書

書　名：日本語音声学入門
著者名：斎藤純男
出版社：三省堂

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

授業科目	言語学Ⅱ（文法・意味・社会言語学）				
担当者	松井　理直			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

日本語という言語の特徴をよく理解し、言語障害の分析に応用する。

■ 到達目標

日本語の形態現象・文法・意味について習熟する。

■ 授業計画

日本語の持つ膠着性・主辞後置性といった性質および意味現象について理解を深める。
第１回　形態素の概念
第２回　日本語の語種について
第３回　同意語と下位語・語彙の構造について
第４回　形態素と語の関係
第５回　日本語の複合名詞・複合動詞について
第６回　動詞形態素の特性
第７回　テンスとアスペクト
第８回　ヴォイスと極性
第９回　特殊なヴォイスとモダリティ
第10回　日本語の構造
第11回　生成文法の考え方
第12回　日本語の意味について
第13回　比喩と言語理解
第14回　ムードとダイクシス
第15回　その他の意味現象

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間１時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、１時間程度。

■ 教　科　書

書　名：日本語音声学入門
著者名：斎藤純男
出版社：三省堂

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

授業科目	**音声学**				
担 当 者	**松井　理直**			国家出題基準	
学 科 名	**言語聴覚専攻科**	学　　年	**２年**	総単位数	**２単位**
		開講時期	**前期**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

音声の構音と音響特性について正確な知識を習得する

■ 到 達 目 標

発音記号・音節とモーラ・アクセントとイントネーション・音声の音響特性について習熟する

■ 授 業 計 画

音声と言語現象について理解を深める
第１回　音声器官の復習
第２回　IPA 発音記号と構音障害の発音記号について
第３回　舌の特性
第４回　調音方法の分類
第５回　子音の詳細（1）
第６回　子音の詳細（2）
第７回　母音について
第８回　二重調音と二次的調音
第９回　各種音声変異について
第10回　日本語の分節音（1）
第11回　日本語の分節音（2）
第12回　日本語の分節音（3）
第13回　母音無声化について
第14回　日本語のモーラと音節
第15回　重音節の意味
第16回　アクセントとイントネーション
第17回　東京方言名詞アクセントの特徴
第18回　動詞・形容詞のアクセント
第19回　イントネーションの詳細
第20回　リズム・ポーズ・話速
第21回　プロミネンスとインテンシティ
第22回　音韻論：音素の考え方
第23回　相補分布と最小対立
第24回　弁別素性と音韻理論の基本
第25回　音声と形態現象
第26回　動詞を巡る形態現象
第27回　ヴォイス・アスペクト・テンス・モダリティ
第28回　母音の音響特性に関する復習
第29回　子音の音響特性に関する復習
第30回　アクセントと基本周波数

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間１時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、１時間程度。

■ 教　科　書

書　名：日本語音声学入門（１年次に使った本なので新たに購入の必要はない）
著者名：斎藤純男
出版社：三省堂

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

授業科目	音響学Ⅰ（一般音響学）				
担当者	松井　理直			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

音の周波数・音圧に関する基本事項を理解する。

■ 到達目標

周波数・波長の計算、dB の計算方法とその意味することに精通する。

■ 授業計画

聴覚障害を理解する上で不可欠な概念である周波数・音圧について理解する。
第１回　音とは何か
第２回　振動の伝播と音圧波形
第３回　原波形の見方：音圧波形と粒子速度波形
第４回　周波数の可聴範囲と周波数・周期の計算
第５回　波長と周波数の計算
第６回　周波数レベル：オクターブの概念
第７回　音の高さ：mel 尺度
第８回　音の強さと音圧
第９回　デシベルの基本計算
第10回　強さレベルと音圧レベル
第11回　聴力レベルと聴覚検査関係
第12回　感覚レベルと聴覚障害
第13回　等ラウドネス曲線と音の大きさ
第14回　ソーン尺度と音圧との関係
第15回　複合音の特性

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間１時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、１時間程度。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

授業科目	音響学Ⅱ（音響音声学・聴覚心理学）				
担当者	松井　理直			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

音声の音響的特徴について理解する。

■ 到達目標

日本語音声のフォルマントをはじめとした音響特性について正しく理解する。

■ 授業計画

音声の音響的特性について
第１回　調波複合音と非調波複合音
第２回　倍音と missing fundamental
第３回　聴覚の時間説と場所説
第４回　線スペクトルと連続スペクトル
第５回　短時間スペクトルについて
第６回　音源フィルタ理論
第７回　声帯のスペクトルの特性
第８回　共鳴という現象
第９回　閉管と開管の共鳴特性
第10回　中舌母音の共鳴特性の計算
第11回　日本語５母音の音響特性
第12回　スペクトログラムと接近音の音響特性
第13回　摩擦音と破裂音の音響特性
第14回　音声知覚について
第15回　マスキングとデジタル音声処理

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間１時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、１時間程度。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

授業科目	言語発達学				
担 当 者	齋藤　典昭			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

子どもの発達の中でも０歳～学齢までの言語の発達について学びます。 前言語期・単語獲得期・前期構文獲得期・中期構文獲得期と進んでいきます 。コミュニケーションはことばの前からあるのだろうか？ どんなことばから覚えていくのだろうか？話せるようになるのはいつ頃か？字を読んだり書いたりできるのはいつ頃か？ことばを育むにはどうしたらよいのか。 これらのことは、ことばの障害とどのような関係にあるのか。 といったことを学びます。

■ 到 達 目 標

１．年齢を聞いて , その年齢の言語発達について説明できる
２．子どもを観察し , その子の言語発達について概要を評価できる
３．言語発達についての基礎知識を獲得したことで , 言語発達障害が理解できる

■ 授 業 計 画

第１回　ガイダンス，発達の区分について，0ヵ月～ 12ヵ月の言語発達チャート
第２回　０ヵ月～ 12ヵ月の言語発達チャート解題
第３回　Language - Speech - Communication，表象と象徴と AAC
第４回　AAC の機器紹介，0ヵ月～６ヵ月のことばの育ち
第５回　喃語について
第６回　６ヵ月～ 12ヵ月のことばの育ち
第７回　初語について，ポインティングの重要性について
第８回　言語音知覚の発達
第９回　復習 : 前言語期のことばの発達
第10回　語彙獲得の第１段階，12ヵ月～ 18ヵ月のことばの育ち
第11回　語彙獲得の第２段階，18ヵ月～ 24ヵ月のことばの育ち
第12回　24ヵ月～ 36ヵ月のことばの育ち，会話・語り , かんしゃく , 構音ほか
第13回　３歳～４歳のことばの育ち
第14回　４歳～５歳のことばの育ち，会話の発達
第15回　語りの発達，語意味の獲得，Red Flags

■ 評 価 方 法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

次回の授業内容と準備を伝えるので，それにそって教科書，資料等に目を通しておくこと。

■ 教　科　書

書　名：乳幼児期のことばの発達とその遅れ
著者名：小椋たみ子，小山正，水野久美
出版社：ミネルヴァ書房

教　材 : ブログ playing with words 365 の記事 speech and language 101 など
著者名：Katie
ＵＲＬ：http://www.playingwithwords365.com

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	リハビリテーション概論				
担 当 者	吉機俊雄・ＳＴ教員（オムニバス）			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	１年	総単位数	１単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

リハビリテーションの概要についての講義と言語聴覚障害の方との対話会を行う。

■ 到 達 目 標

リハビリテーションの考え方について知る。
言語聴覚障害者とのコミュニケーションについて理解を深め、コミュニケーションに関する自己の課題を知る。言語聴覚障害の方との対話を通じて、リハビリテーションへの取り組みや生活の実際を知る。

■ 授 業 計 画

第１回　リハビリテーションとは
　　リハビリテーションの考え方とその概要
第２回　対話会の実施にあたって
　　対話会の意義と取り組むべき課題について
第３回　第１回　言語聴覚障害の方との対話会
第４回　第１回　言語聴覚障害の方との対話会
第５回　第１回　言語聴覚障害の方との対話会
第６回　第２回　言語聴覚障害の方との対話会
第７回　第２回　言語聴覚障害の方との対話会
第８回　第２回　言語聴覚障害の方との対話会
　　対話会を振り返って　－コミュニケーションの課題－

■ 評 価 方 法

レポート100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

グループで対話会の準備を行う。また、終了後は対話会のビデオを見ながらレポートを作成する。
参加される方の時代背景（戦前・前後、それ以降）について調べておくこと。

■ 教　科　書

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	社会保障制度				
担当者	山本　永人			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

わが国の社会福祉と社会保障制度の概略を俯瞰する。

■ 到達目標

言語聴覚士に求められる基本的な社会福祉および社会保障制度の知識を習得する。

■ 授業計画

第１回　社会福祉の定義とその専門性について
第２回　わが国の障害者福祉の理念
第３回　ICF とソーシャルインクルージョン
第４回　わが国の社会福祉の歴史
第５回　社会保障の基本的な枠組み
第６回　社会保険制度（1）医療保険
第７回　社会保険制度（2）年金保険
第８回　社会保険制度（3）労働保険
第９回　社会保険制度（4）介護保険①
第10回　社会保険制度（4）介護保険②
第11回　公的扶助制度と社会手当
第12回　障害者の福祉サービスについて
第13回　障害者総合支援制度の概略
第14回　児童の福祉
第15回　社会福祉援助技術について

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業においては、教科書の該当部分を熟読しておくこと。(30分）また、授業終了後には授業で配布したプリントの赤文字で記入した部分を中心に振り返りを行うこと。(30分）本授業は言語聴覚士の国家試験対策としても対応できるように組み立てているので、積極的に授業に参加してください。

■ 教　科　書

書　名：よくわかる社会福祉　第10版
著者名：山縣文治・岡田忠克篇
出版社：ミネルヴァ書房

■ 参考図書

書　名：はじめての社会保障
著者名：椋野美智子・田中耕太郎
出版社：有斐閣アルマ

■ 留意事項

授業科目	医療福祉教育・関係法規				
担当者	山本永人・藤井達也・吉見剛二（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	２年	総単位数	１単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

わが国の社会福祉と社会保障制度に関連する法規の概要を説明する。（山本）
言語聴覚士に関する法規、言語聴覚士法の成り立ち、聴覚障害者福祉に関する講義を行う。（藤井・吉見）

■ 到達目標

言語聴覚士に求められる基本的な社会福祉および社会保障制度の知識を習得する。

■ 授業計画

第１回　言語聴覚士法・社会福祉法について（山本）
第２回　障害者福祉に関連する関係法規（山本）
第３回　児童福祉に関連する関係法規（山本）
第４回　公的扶助に関する関係法規（山本）
第５回　聴覚障害者福祉の歴史と現状（吉見）
第６回　聴覚障害者を巡る状況　福祉分野の取り組みと課題（吉見）
第７回　言語聴覚士法の歴史（藤井）
第８回　職能組織について（藤井）

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

山本：授業においては、教科書の該当部分を熟読しておくこと。(30分）また、授業終了後には授業で配布したプリントの赤文字で記入した部分を中心に振り返りを行うこと。(30分）本授業は言語聴覚士の国家試験対策としても対応できるように組み立てているので、積極的に授業に参加してください。

■ 教　科　書

書　名：よくわかる社会福祉　第10版
著者名：山縣文治・岡田忠克篇
出版社：ミネルヴァ書房

■ 参考図書

書　名：はじめての社会保障
著者名：椋野美智子・田中耕太郎
出版社：有斐閣アルマ

■ 留意事項

授業科目	言語聴覚障害学概論				
担当者	森田婦美子・ＳＴ教員　他（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	１年	総単位数	１単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・神経系や発声発語器官、頭頸部解剖への導入
・言語聴覚療法の各領域の臨床について現任者が講義を行う
・Ｉ期実習ガイダンス

■ 到達目標

・神経系や発声発語器官、頭頸部の概要を理解する
・様々な臨床現場における言語聴覚療法の臨床を知る
・実習に先立ち、言語聴覚士として必要な各領域の知識や技術の基礎的事項を身につける

■ 授業計画

第１回　言語聴覚障害とは
第２回　神経系の解剖学
第３回　発声発語器官の解剖学
第４回　頭頸部の解剖学
第５回　言語聴覚士の現場の声をきく　－臨床の実際を知る（1）
第６回　言語聴覚士の現場の声をきく　－臨床の実際を知る（2）
第７回　言語聴覚士の役割とは　ディスカッションと課題学習
第８回　言語聴覚士現場の声をきく会から学んだこと　発表
第９回　Ｉ期実習ガイダンス　トランスファーと車椅子操作　講義及び演習（1）
第10回　Ｉ期実習ガイダンス　トランスファーと車椅子操作　講義及び演習（2）
第11回　Ｉ期実習ガイダンス　トランスファーと車椅子操作　講義及び演習（3）
第12回　Ｉ期実習ガイダンス　バイタルサインのみかた（1）
第13回　Ｉ期実習ガイダンス　バイタルサインのみかた（2）
第14回　Ｉ期実習ガイダンス　感染症について（1）
第15回　Ｉ期実習ガイダンス　感染症における注意点（2）

■ 評価方法

小テスト　100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

グループでの課題を課す。積極的に参加すること。

■ 教　科　書

書　名：図解　言語聴覚療法技術ガイド
著者名：深浦順一　編集主幹
出版社：文光堂

■ 参考図書

■ 留意事項

臨床実習Ｉのシラバスも参照すること。

授業科目	言語聴覚障害診断学				
担当者	森田婦美子・高木卓司・中村靖子　他（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえ、障害レベルに応じた評価を行い、適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。運動障害性発話障害の原因と、それに応じた発声発語器官の形態。機能の検査、発話の検査による評価と訓練、および発話補助手段について述べる。（講師非公表）
②一日実習に関する情報提供と目的設定、高齢者の摂取・嚥下障害を取巻く状況、経管栄養の方法と種類、経口栄養摂取と経管栄養摂取との相違、リスクを超えて経口摂取を行う意義について学ぶ。（高木）

■ 到達目標

①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえて発声発語器官の形態、機能の検査、発話の検査による評価ができるようになる。（講師非公表）
②摂食･嚥下の援助に関する経験不足の補塡、現場におけるチームアプローチのリーダー育成、実質（具体･現実）的援助内容の理解、論理的、対象者本位の考え方の芽生え、経口摂取が QOL を向上させる根拠を得る。（高木）

■ 授業計画

第１回　導入：運動障害性発話障害の障害レベルと評価について（講師非公表）
第２回　発話の検査（標準ディサースリア検査、発話明瞭度検査）（講師非公表）
第３回　呼吸機能、発声機能の評価（講師非公表）
第４回　鼻咽腔閉鎖機能の評価（講師非公表）
第５回　口腔構音機能の評価（運動範囲）（講師非公表）
第６回　口腔構音機能の評価（運動速度）（講師非公表）
第７回　口腔構音機能の評価（筋力）（講師非公表）
第８回　機器を用いた検査、反射検査など（講師非公表）
第９回　VTR による症例呈示と検査の実施（講師非公表）
第10回　VTR による症例呈示と検査の要約（講師非公表）
第11回　評価結果のまとめと所見作成（講師非公表）
第12回　評価結果の分析と考察（講師非公表）
第13回　上記の内容について POWERPOINT（写真、図を含む）を用いて解説する。（高木）
第14回　上記の内容についてグループディスカッションを行い、各自の知見を深める。（高木）
第15回　Ⅱ期実習ガイダンス　カルテのみかた（森田）
第16回　嚥下実習（中村）

■ 評価方法

成績は、定期試験100% の結果にて評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予め授業前にテキストの準備物と評価手順と基準の箇所について目を通してきてください。

■ 教　科　書

書　名：標準ディサースリア検査
著者名：西尾正輝
出版社：インテルナ出版

■ 参考図書

書　名：「胃ろうとシュークリーム」
著者名：熊田梨恵
出版社：ロハスメディカル叢書

書　名：「枯れるように死にたい」
著者名：田中奈保美
出版社：新潮書

■ 留意事項

臨床実習Ⅱのシラバスも参照すること。

授業科目	言語聴覚障害特論				
担当者	山本一郎・名徳倫明・江頭智香子・五味田裕・染川けいこ・ST 教員　他（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえ、ディサースリアの障害レベルに応じた適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。ディサースリア検査の評価データーから総合的な分析を適切に行い、計画立案の考え方について述べる。（講師非公表）
②口腔の果たす２大機能である食べるということ､話すことについてその発生と発達について学ぶ。（山本）
③言語聴覚療法や摂食･嚥下療法を行うに当たって知っておくべき薬の知識について学ぶ。（名徳･五味田）
④虐待問題について講義を行う。（江頭）
⑤摂食・嚥下障害の訓練を行う上で、器質的口腔ケアによる口腔内保清は必須である。本授業では口腔内アセスメント方法から、具体的な器質的口腔ケア方法について学ぶ。（染川）
⑥国家試験を想定し、領域別問題に取り組む。（ST 教員）

■ 到達目標

①ディサースリア検査の評価データーからディサースリアの障害レベルに応じて、総合的な分析を適切に行い、計画立案ができるようにする。（講師非公表）
②発生と発達の視点から口腔機能を学び、様々な病態に対処できる知識を養う。（山本）
③薬に関する基礎的知識を身につける。（名徳・五味田）
④虐待について理解を深める。（江頭）
⑤口腔ケアの基礎知識、器質的口腔ケアが出来るようになる。（染川）
⑥国家試験の受験にあたって受験対策を立て、実践できるようになる。（ST 教員）

■ 授業計画

第１回　総論：ディサースリアの障害レベルとそれに対応した訓練について（講師非公表）
第２回　呼吸機能の治療アプローチ（講師非公表）
第３回　発声機能の治療アプローチ（講師非公表）
第４回　鼻咽腔閉鎖機能の治療アプローチ（講師非公表）
第５回　口腔構音機能の治療アプローチ（講師非公表）
第６回　発話速度の調節法１（講師非公表）
第７回　発話速度の調節法と構音訓練など（講師非公表）
第８回　まとめ（講師非公表）
第９回　顔面・口腔の発生　口腔機能の発達（山本）
第10回　唇顎口蓋裂児における哺乳・摂食障害とその対処法（山本）
第11回　唇顎口蓋裂児者における異常構音の分析と治療について
　　エレクトロパラトグラフィー（EPG) を用いた異常構音の分析と治療について（山本）
第12回　薬の基礎知識①用法・用量など（名徳）
第13回　薬の基礎知識②副作用・相互作用など（名徳）
第14回　薬の薬理作用（摂食・嚥下に影響する薬剤）（名徳）
第15回　輸液の基礎と栄養（名徳）
第16回　ST の臨床と薬剤　１　（五味田）
　　脳血管障害、精神科領域、神経内科領域の薬物治療について　発達障害の薬物治療
第17回　ST の臨床と薬剤　２　（五味田）
　　生活習慣病と薬物治療　下痢、睡眠導入剤、薬物乱用、喫煙による健康被害など
第18回　子供の虐待　　歴史、制度の変遷、虐待の種類（江頭）

第19回　虐待に関わる発達的課題（被虐待児の心理的特徴等）（江頭）
第20回　虐待を取り巻く社会的背景（江頭）
第21回　虐待に対しての対応　被虐待児の支援について（江頭）
第22回　口腔ケアの基礎知識　講義（染川）
第23回　口腔ケアの実技演習（染川）
第24回　国家試験対策　課題の解説及び国家試験対策用復習試験　（ST 教員）
第25回　言語聴覚士のための基礎知識　～国家試験対策～　（ST 教員）
　　領域別問題の実践　1
第26回　言語聴覚士のための基礎知識　～国家試験対策～　（ST 教員）
　　領域別問題の実践　2
第27回　言語聴覚士のための基礎知識　～国家試験対策～　（ST 教員）
　　領域別問題の実践　3
第28回　言語聴覚士のための基礎知識　～国家試験対策～　（ST 教員）
　　領域別問題の実践　4
第29回　言語聴覚士のための基礎知識　～国家試験対策～　（ST 教員）
　　領域別問題の実践　5
第30回　言語聴覚士のための基礎知識　～国家試験対策～　（ST 教員）
　　領域別問題の実践　6

■ 評価方法

定期試験50%　　国家試験対策用復習試験40%　レポート10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後にテキストのそれぞれの治療アプローチ、訓練手技についての箇所を読み直して講義内容の復習を行うこと。

■ 教　科　書

書　名：標準ディサースリアテキスト
著者名：西尾正輝
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	失語症Ⅰ（基礎）				
担当者	大西　環			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

失語症とはどのような言語障害であるか、基礎的な内容を中心に講義を行う。

■ 到達目標

失語症の言語症状やタイプ分類等、失語症の基礎および観察の仕方を理解する。

■ 授業計画

第１回　失語症とは
　　定義と障害の特徴　　臨床の流れ
第２回　失語症の言語症状　　流暢性発話と非流暢性発話
第３回　失語症の言語症状　　発話症状（各症状と用語の解説）
第４回　失語症の言語症状　　発話症状（各症状と用語の解説）
第５回　失語症の言語症状　　聴覚的理解障害（各症状と用語の解説）
第６回　失語症の言語症状　　読み書きの障害（各症状と用語の解説）
第７回　失語症のタイプ分類　古典分類について
第８回　失語症のタイプ分類　古典分類について
第９回　失語症のタイプ分類　皮質下性失語、交叉性失語、小児失語ほか
第10回　純粋失読と失読失書
第11回　症状の観察の仕方
第12回　症状の観察の仕方
第13回　症状の観察の仕方
第14回　復習
第15回　まとめ

■ 評価方法

試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後は復習し、疑問点は次回の授業時に質問すること。

■ 教　科　書

書　名：脳卒中後のコミュニケーション障害
著者名：竹内愛子　河内十郎　編著
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	失語症Ⅱ（評価）				
担当者	大根茂夫・中村靖子（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

失語症の治療・訓練・指導に必要な各種失語症検査法の概略を学ぶ。
検査から評価の仕方、結果の解釈の仕方、訓練法の立案を学ぶ。
各種失語症検査を標準的な実施方法で実施できるように演習を行う。

■ 到達目標

各種失語症検査の概要を知る。
各種失語症検査および関連検査を標準的な方法で実施できる。
検査結果から、結果の解釈、問題点の抽出、訓練の立案ができる。
評価報告書が書ける。

■ 授業計画

第１回　急性期・回復期・維持期の失語症患者の容態、医学的情報の収集の仕方、面接の仕方
第２回　スクリーニング検査の意義と実施方法
第３回　標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
第４回　標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
第５回　WAB 失語症検査の概略
第６回　重度失語症検査の概略
第７回　標準失語症検査補助検査（SLTA － ST）の概略
第８回　失語症語彙検査の概略
第９回　実用コミュニケーション能力検査（CADL）の概略
第10回　掘り下げ検査（失語症構文検査、トークンテスト）の概略
第11回　掘り下げ検査（語音弁別検査、モーラ分解・抽出検査）の概略
第12回　検査演習
第13回　検査演習
第14回　鑑別診断、経過と予後、訓練・援助の方針の決定
第15回　評価サマリーの書き方

■ 評価方法

筆記試験（100点満点）、実技試験（100点満点）　※筆記試験、実技試験とも60点以上が合格

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で各種検査法の手技の説明を受けた後、学生同士でペアを作り、お互いに検査者、被検者になり検査練習を行うこと。ペアを変え、3例以上の検査を行い、記録用紙を担当教員に提出すること。検査練習は空き時間を有効に使うこと。
すべての検査マニュアルを熟読し暗記すること。

■ 教　科　書

書　名：標準失語症検査マニュアル　改訂第２版
著者名：日本高次脳機能障害学会（旧　日本失語症学会）
出版社：新興医学出版社

書　名：なるほど!失語症の評価と治療　－検査結果の解釈から訓練法の立案まで－
著者名：編著　小嶋知幸　　執筆　大塚裕一　宮本恵美
出版社：金原出版株式会社

■ 参 考 図 書

書　名：失語症Ｑ＆Ａ　検査結果のみかたとリハビリテーション
著者名：種村　純
出版社：新興医学出版社

■ 留 意 事 項

必要に応じて各種失語症検査の実施方法を習得するための補講を行います。

授業科目	失語症Ⅲ（訓練）				
担当者	林　正弘			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

失語症を改善させる訓練法の習得、さらに失語症の障害構造の仮説を設定し、その考察に基づいた対処や訓練の選択方法を学習します。

■ 到達目標

単なる知識ではなく、実際にアプローチをするための評価から、訓練プランの立案までを学習します。

■ 授業計画

第１回　臨床の中での失語
第２回　失語症臨床の目標
第３回　評価の目的と着眼点
第４回　失語症訓練の歴史とエビデンス
第５回　訓練法１　　伝統的刺激法
第６回　訓練プランの構築方法
第７回　ビデオ症例１
第８回　ビデオ症例１
第９回　訓練法２　　遮断除去法
第10回　ビデオ症例２
第11回　ビデオ症例３
第12回　発話障害（発語失行）
第13回　訓練法３　　機能再編成法
第14回　訓練法４　　実用的代償法
第15回　訓練計画と訓練手続き

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

配布資料による予習・復習。症例 VTR での評価練習。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	失語症Ⅳ（臨床講義）				
担当者	大根茂夫・中村靖子・大西　環			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

①失語症者の機能障害・能力障害・社会参加、QOL について考え、支援のポイントを学ぶ。
②失語症者に対し、スクリーニング検査、総合的失語症検査、掘り下げ検査を実施し、評価、訓練プログラムの立案、訓練までを行い、グループで報告書を作成し発表する。適宜次の内容を指導する。（失語症回復の理論と介入の実際、回復時期に合わせた援助、ゴール設定とプログラム立案、訓練の実施、評価報告書の作成）

■ 到達目標

各種失語症検査が標準的な実施方法で実施できる。
検査結果から評価（結果の解釈、問題点の抽出）ができる。
問題点に対し具体的な訓練法を立案できる。
訓練に必要な教材を作成し、訓練を実施できる。
評価報告書を作成し発表できる。

■ 授業計画

第１回　臨床講義１回目　セッションの準備
第２回　臨床講義１回目　失語症者に検査を実施する
第３回　臨床講義１回目　グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成
　　グループによる発表とフィードバック
第４回　臨床講義２回目　セッションの準備
第５回　臨床講義２回目　失語症者に検査を実施する
第６回　臨床講義２回目　グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成
　　グループによる発表とフィードバック
第７回　臨床講義３回目　セッションの準備
第８回　臨床講義３回目　失語症者に検査を実施する
第９回　臨床講義３回目　グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成
　　グループによる発表とフィードバック
第10回　臨床講義４回目　セッションの準備
第11回　臨床講義４回目　失語症者に検査を実施する
第12回　臨床講義４回目　グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成
　　グループによる発表とフィードバック
第13回　臨床講義５回目　セッションの準備
第14回　臨床講義５回目　失語症者に検査を実施する
第15回　臨床講義５回目　グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成
　　グループによる発表とフィードバック

■ 評価方法

症例レポート　40%　筆記試験　60%　　両得点の合計で合否を決める。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

基本的にはグループ活動であるので、各自が積極的に意見を出し合い、レポートにまとめること。他人任せにしない。
本授業は総合的な学習であるので、失語症Ⅰ～Ⅲで学習した内容が基礎となる。実際の患者様に検査を行い、評価・訓練を考えていくためには、基礎知識が重要であり、Ⅰ～Ⅲの復習とともに、さらに基礎知識を広げていくことが必要である。また、積極的に研究論文を読み込んでいく必要もある。

■ 教　科　書

書　名：失語症臨床ガイド症状別－理論と42症例による訓練・治療の実際
著者名：竹内愛子編集
出版社：協同医書出版社

■ 参 考 図 書

書　名：失語症者の実用コミュニケーション臨床ガイド
著者名：竹内愛子編集
出版社：協同医書出版社

■ 留 意 事 項

活発なグループワーク・質問・討議を期待します。

授業科目	高次脳機能障害Ⅰ				
担 当 者	森岡悦子・中谷　謙（オムニバス）			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、注意、記憶、認知、行為、視空間認識、遂行など大脳の機能を理解し、それらが損傷された結果生じる高次脳機能障害の臨床像を病巣との関連から学ぶ。

■ 到 達 目 標

1．正常の高次脳機能を学び、各障害段階に出現する臨床像を理解できる。
2．各高次脳機能障害について、症状および病巣を説明することができる。
3．症状から、障害機序を判断できる。

■ 授 業 計 画

第1回　高次脳機能障害の概要：高次脳機能に関わる中枢神経系の機能と大脳の情報処理
第2回　注意：注意の機能と特性
第3回　記憶：記憶の種類．記憶の機能と主な回路．記憶障害の症状．
第4回　失認：認知のメカニズムと失認の臨床症状．
第5回　失行：行為のメカニズムと行為障害・行動障害の臨床症状
第6回　半側空間無視：発現メカニズムと症状
第7回　遂行機能障害：認知機能の柔軟性と前頭葉機能との関連
第8回　高次脳機能障害の臨床症状のまとめ

■ 評 価 方 法

定期試験80%、平常点（授業内提出、小テスト、授業への積極性）20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業の中で、特に重要な箇所を確認するので、次の授業までによく復習してきて下さい。また、予習が必要な場合は適宜伝えますので、準備をしてきて下さい。

■ 教　科　書

書　名：高次脳機能障害学　第2版
著者名：石合純夫
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参 考 図 書

書　名：言語聴覚療法シリーズ 3　改訂 高次脳機能障害
著者名：長谷川賢一
出版社：建帛社

■ 留 意 事 項

授業科目	高次脳機能障害Ⅱ				
担当者	森岡悦子・中谷　謙・圓越広嗣（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、高次脳機能障害の症状を捉え分析するための検査について、目的と方法、結果の解釈法を学び、高次脳機能障害の臨床像に対する理解を深める。また、脳画像、臨床情報をもとに、高次脳機能障害の症状をまとめる能力を習得する。

■ 到達目標

1. 高次脳機能障害の各検査を正しく実施できる。
2. 高次脳機能の検査結果を適切に分析し、考察できるようになる。
3. 高次脳機能障害の症状を、検査以外の情報を併せて適切にまとめることができる。

■ 授業計画

第１回　注意機能（1）注意機能の特性
第２回　注意機能（2）注意機能の評価とリハビリテーション
第３回　記憶（1）記憶のメカニズム、記憶障害の症状と病巣との関係
第４回　記憶（2）記憶機能評価　リバーミード行動記憶検査（RBMT）の目的と手順の理解
第５回　記憶（3）記憶機能評価結果の解釈と分析
第６回　失行の評価と診断
第７回　失認の評価と診断
第８回　視空間障害（1）：半側空間無視、構成障害、バリント症候群
第９回　視空間障害（2）：BIT 行動性無視検査の目的と実施手順の理解
第10回　視空間障害（3）：BIT 行動性無視検査の演習と、結果の解釈
第11回　遂行機能：前頭葉機能との関連
第12回　外傷性脳損傷による高次脳機能障害、認知コミュニケーション障害
第13回　脳梁離断：脳の側性化と脳梁の連絡
第14回　高次脳機能の評価（1）
第15回　高次脳機能の評価（2）

■ 評価方法

定期試験80%、平常点（授業内提出物、小テスト、授業への積極性）20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業の中で特に重要な箇所を確認するので、次の授業までによく復習してきて下さい。また、予習が必要な場合は適宜伝えますので、準備をしてきて下さい。

■ 教　科　書

書　名：高次脳機能障害学　第２版
著者名：石合純夫
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：標準言語聴覚障害学　高次脳機能障害学
著者名：藤田郁代　監修
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：言語聴覚療法シリーズ 3　改訂 高次脳機能障害
著者名：長谷川賢一
出版社：建帛社

■ 留意事項

授業科目	高次脳機能障害Ⅲ				
担 当 者	森岡悦子・中谷　謙・圓越広嗣（オムニバス）			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

本講義では、高次脳機能障害の検査結果を分析し、症状や障害機序について論理的に考察する能力を習得する。また、結果より症状を適切にまとめ、障害機序に沿った治療プログラムの立案について学ぶ。

■ 到 達 目 標

1．検査結果と他の情報から、多角的視点から適切に分析できる。
2．病巣との関連から、高次脳機能障害の症状を論理的に考察できる。
3．障害機序に基づいた治療プログラムが立案できるようになる。

■ 授 業 計 画

第１回　高次脳機能障害と離断症状
第２回　記憶障害とリハビリテーション
第３回　失行・失認のリハビリテーション
第４回　半側空間無視の評価結果の解釈とリハビリテーション
第５回　遂行機能（1）評価　（BADS）
第６回　遂行機能（2）リハビリテーション
第７回　認知症の病型別初期症状の特徴、せん妄
第８回　高次脳機能障害のリハビリテーションのまとめ

■ 評 価 方 法

定期試験80%、平常点（授業内提出、小テスト、授業への積極性）20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業の中で、特に重要な箇所を確認するので、次の授業までによく復習してきて下さい。また、予習が必要な場合は適宜伝えますので、準備をしてきて下さい。

■ 教　科　書

書　名：高次脳機能障害学　第２版
著者名：石合純夫
出版社：医歯薬出版株式会社

書　名：標準言語聴覚障害学　高次脳機能障害学
著者名：藤田郁代　監修
出版社：医学書院

■ 参 考 図 書

書　名：言語聴覚療法シリーズ ３　改訂 高次脳機能障害
著者名：長谷川賢一
出版社：建帛社

■ 留 意 事 項

授業科目	言語発達障害Ⅰ（援助法－基礎）				
担当者	工藤芳幸・中村靖子（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

対人援助職として仕事を進めていく上で必要な観察の視点・方法とそれらを言語化・文字化してまとめ、実習日誌や報告書やカルテ等を通して伝えることを学ぶ。第１回～第10回まで（工藤）は、観察と記録の初歩的な事項と、主に小児領域の VTR 等を活用した講義と演習を実施する。第11回～第15回まで（中村）は、成人領域の VTR 等を活用した講義と演習を実施する。

■ 到達目標

臨床実習Ⅰの日誌作成を念頭に、基本的な行動観察や記述の視点・方法を習得する。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション：人間の行動を観察することと記録すること（工藤）
第２回　観察記録の文章作成法（講義・演習）（工藤）
第３回　観察記録の視点（保育所見学実習に向けて）・文章作成法演習（工藤）
第４回　観察記録のまとめ方１（保育所見学実習の記録を用いた演習・記録を再検討する）（工藤）
第５回　観察記録のまとめ方２（保育所見学実習の記録を用いた演習・リライトする）（工藤）
第６回　複数の事象の関係をまとめる・実践に向けた記録法（講義・演習）（工藤）
第７回　ロールプレイ or VTR 視聴を用いた観察記録演習１（ライブで記録を取る）（工藤）
第８回　ロールプレイ or VTR 視聴を用いた観察記録演習２（リライトする）（工藤）
第９回　ロールプレイ or VTR 視聴を用いた観察記録園主３（ライブで記録を取り、整理する）（工藤）
第10回　小児領域の観察と記録　まとめ（工藤）
第11回　成人の観察と記録　概要（中村）
第12回　成人の観察と記録　１（中村）
第13回　成人の観察と記録　２（中村）
第14回　成人の観察と記録　解説（中村）
第15回　成人の観察と記録　まとめ（中村）

■ 評価方法

提出物100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

演習が多い講義内容となっています。講義内にて適宜、各自で取り組んでもらう課題を出す予定です。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害Ⅱ（概論）				
担当者	齋藤典昭・吉田紀子（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

言語発達障害の基礎的な概念と各障害の特性を学ぶ。

■ 到達目標

言語発達障害の概念と特性を理解し、それぞれの言語発達障害について説明できる。

■ 授業計画

第１回　小児の発達と言語発達障害概論
第２回　知的障害
第３回　自閉症スペクトラム障害①
第４回　自閉症スペクトラム障害②
第５回　注意欠陥多動性障害①
第６回　注意欠陥多動性障害②
第７回　学習障害／発達性ディスレクシア①
第８回　学習障害／発達性ディスレクシア②
第９回　特異的言語発達障害
第10回　言語発達障害のまとめ
第11回　姿勢・運動の発達　基礎知識
第12回　脳性麻痺・重複障害　定義
第13回　脳性麻痺・重複障害　評価
第14回　脳性麻痺・重複障害　支援
第15回　保育所見学学習　記録作成・提出

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書「言語発達障害学」の該当箇所に目を通しておくこと

■ 教　科　書

書　名：標準言語聴覚障害学　言語発達障害
著者名：藤田郁代　監修
出版社：医学書院

書　名：絵でわかる言語障害　第２版
著者名：毛束真知子
出版社：学研

書　名：乳幼児の発達障害診療マニュアル　健診の診かた・発達の促しかた
著者名：洲鎌盛一
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：小児リハビリテーション医学　第２版
著者名：栗原まな
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害Ⅲ（評価法－基礎）				
担当者	山本　良平			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

精神発達に遅れやつまずきを持つ児・者に対して、正確なアセスメントを行って特性を把握し支援計画を立て、効果をみていく必要がある。そのアセスメントツールのひとつが新版Ｋ式発達検査2001であり、本実習では、この検査の開発とその背景、実施法を学ぶ。

■ 到達目標

新版Ｋ式発達検査2001の歴史、成り立ち、実施法を学び、実施結果の処理が正しくできるようになり、臨床現場での活用を目指す。

■ 授業計画

第１回　発達検査の歴史、Ｋ式発達検査の成り立ちと標準化
第２回　新版Ｋ式発達検査2001　検査実施手引き書・検査用紙の見方、検査用具の紹介
第３回　新版Ｋ式発達検査2001　～乳児期～　第１葉～２葉：各項目の実施手順・正答基準の説明
第４回　乳児の検査；ビデオから反応記録・検査結果の整理
第５回　新版Ｋ式発達検査2001　～幼児期～　第３葉：各項目の実施手順・正答基準の説明
第６回　幼児の検査①：ビデオから反応記録・検査結果の整理
第７回　幼児の検査②：ビデオから反応記録・検査結果の整理
第８回　新版Ｋ式発達検査2001　～幼児期～　第４葉：各項目の実施手順・正答基準の説明
第９回　幼児の検査③；ビデオから反応記録・検査結果の整理
第10回　幼児の検査④；ビデオから反応記録・検査結果の整理
第11回　幼児の検査⑤；非定型発達の場合
第12回　新版Ｋ式発達検査2001　～小学生以上～　第５・６葉：各項目の実施手順・正答基準の説明
第13回　小学生以上の検査①；ビデオから反応記録・検査結果の整理
第14回　小学生以上の検査②；ビデオから反応記録・検査結果の整理
第15回　小学生以上の検査③；非定型発達の場合　検査記録と生活状況

■ 評価方法

授業中の事例ビデオ記録結果（50%），出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価）（50%）などの結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

自習上の注意：
(1) 健常児者の発達、PDD・ADHD・LD などの発達障害、知的障害など、基本的な事項について知っておくこと。
(2) 次の授業で学ぶ予定の範囲の実施手引書・検査記録用紙・検査用具に目を通しておく。

■ 教　科　書

書　名：新版Ｋ式発達検査2001　実施手引書
著者名：編著者　生澤雅夫・松下　裕・中瀬　惇
出版社：京都国際社会福祉センター

■ 参考図書

書　名：新版Ｋ式発達検査法2001年版　発達のアセスメントと支援
著者名：編著者　松下　裕・郷間英世
出版社：ナカニシヤ出版

■ 留意事項

各回３コマ連続。実習科目であることから、全授業への出席、および授業中指定された全課題の提出を求めます。

授業科目	言語発達障害Ⅳ（評価法－各論）				
担 当 者	工藤芳幸・齋藤典昭（オムニバス）			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

スクリーニング検査として「遠城寺式乳幼児分析的発達検査法」，発達検査として「乳幼児精神発達検査」「新版 K 式発達検査2001」，言語検査として「国リハ式 <S-S 法 > 言語発達遅滞検査」「質問－応答関係検査」を学ぶ.
新版 K 式発達検査2001については言語発達障害Ⅲで学んだ内容を踏まえて検査実技から所見作成までを行う.

■ 到 達 目 標

1．各検査の概要を述べることができる
2．各検査を実施することができる
3．検査所見を作成することができる

■ 授 業 計 画

第１回 「国リハ式 <S-S 法 > 言語発達遅滞検査」 考え方と理論 （齋藤）
第２回 「国リハ式 <S-S 法 > 言語発達遅滞検査」 考え方と理論，学生同士で演習 （齋藤）
第３回 「国リハ式 <S-S 法 > 言語発達遅滞検査」 学生同士で演習 （齋藤）
第４回 「国リハ式 <S-S 法 > 言語発達遅滞検査」 ロールプレイ （齋藤）
第５回 「国リハ式 <S-S 法 > 言語発達遅滞検査」 記録方法，検査のまとめ，評価のまとめ （齋藤）
第６回 「質問－応答関係検査」「FOSCOM」（齋藤）
第７回 遠城寺式乳幼児分析的発達検査法（齋藤）
第８回 新版 K 式発達検査2001検査実技（工藤）
第９回 新版 K 式発達検査2001プロフィール作成演習（工藤）
第10回 検査所見作成演習（工藤）
第11回 検査実施報告書作成演習（工藤）
第12回 新版 K 式発達検査2001検査実技（工藤）
第13回 新版 K 式発達検査2001プロフィール作成演習（工藤）
第14回 検査所見作成演習（工藤）
第15回 検査実施報告書作成演習（工藤）

■ 評 価 方 法

齋藤担当部分については課題提出物40%，グループワーク参加10% で評価する.
工藤担当分については新版 K 式発達検査の検査結果及び報告書提出２回分で50％で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

新版 K 式発達検査の演習形式の講義については、言語発達障害Ⅲ（検査法）の該当箇所と検査マニュアルを復習し、実際の検査場面の記録と結果処理の仕方（採点や計算など）を確認しておいて下さい。演習は検査を実施する学生と観察室から検査用紙に記載する学生に分けます。実施する学生については、事前に担当教員との相談をして下さい。（工藤）

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：新版 K 式発達検査法2001年版　発達のアセスメントと支援
著者名：松下裕 , 郷間英世
出版社：ナカニシヤ出版

書　名：発達相談と新版 K 式発達検査 —— 子ども・家族支援に役立つ知恵と工夫
著者名：大島剛，川畑隆，伏見真理子　ほか
出版社：明石書店

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害Ⅴ（援助法－各論）				
担当者	齋藤典昭・ネグロンちひろ・中山清司（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	２年	総単位数	１単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・発達障害の特性と臨床的な視点・支援・介入について学ぶ.
・ネグロンは代表的な介入技法のひとつである応用行動分析（ABA）に基づくアプローチについて講義をする.
・中山は TEACCH を背景として、ASD 児者のライフステージやコミュニケーション支援，地域生活支援などを講義する.

■ 到達目標

・各障害特性についての知識習得.
・視野を拡大し生活支援や環境調整，療育の考え方，アセスメント，介入技法を理解する.

■ 授業計画

第１回　知的能力障害　評価と支援（齋藤）
第２回　自閉症スペクトラム障害　評価と支援（齋藤）
第３回　注意欠如・多動性障害　評価と支援（齋藤）
第４回　読み書き障害　評価と支援（齋藤）
第５回　特異的言語発達障害　評価と支援（齋藤）
第６回　応用行動分析の基礎（新しい行動の学習、学習とは？）（ネグロン）
第７回　応用行動分析学の内容を使った学習を促進するためのガイドライン（ネグロン）
第８回　応用行動分析学の内容を使った学習を促進するためのガイドライン（ネグロン）
第９回　PECS（PECS について、PECS を実施する用意、PECS のフェイズ）（ネグロン）
第10回　PECS（PECS のフェイズ）（ネグロン）
第11回　PECS（PECS のフェイズ）、生徒の皆さんの事例発表か、事例紹介（ネグロン）
第12回　自閉症・発達障害の特性理解に基づく支援の基本（中山）
第13回　自閉症・発達障害の人への地域生活支援に関する事例検討（中山）
第14回　自閉症のコミュニケーションプログラムの開発（中山）
第15回　自閉症のコミュニケーションプログラムに関する事例検討（中山）

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

・言語発達障害学の教科書に目を通しておくこと
・応用行動分析に関する書籍に目を通しておくこと
・指定教科書「自閉症支援のスタンダード　Ver.2　～余暇支援の展開～」に目を通しておくこと

■ 教　科　書

書　名：標準言語聴覚障害学　言語発達障害学
著者名：玉井ふみ・深浦順一　編
出版社：医学書院

書　名：自閉症支援のスタンダード　Ver.2　～余暇支援の展開～
著者名：中山清司ほか
出版社：自閉症 e サービス

■ 参考図書

書　名：絵カード交換式コミュニケーション・システム　トレーニング・マニュアル　第2版
著者名：ロリ・フロスト（著），アンディ・ボンディ（著）
出版社：ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン

書　名：自閉症を持つ生徒のためのピラミッド教育アプローチ　特別支援に使える行動分析学ガイド
著者名：Ph.D. &ベス・サルザ - アザロフ，Ph.D. アンディ・ボンディ（著）
出版社：ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害Ⅵ（援助法－応用）				
担当者	松下眞一郎　他（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	２年	総単位数	１単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・AAC の実際について学ぶ.
・脳性麻痺児の姿勢・運動・コミュニケーション・摂食について学びを深める.
・言語発達及び言語発達障害の先行研究をもとに、言語の獲得プロセスを推測し、言語発達障害の特徴を理解する。また、その特徴からみられる臨床像を解説していく。

■ 到達目標

1．AAC の適用について判断できる.
2．脳性麻痺の子どもに対して障害特性を理解した関わりができる.
3．これまでの言語発達に関する授業内容や、先行研究から言語発達障害の特徴を仮説立てる経験をする。

■ 授業計画

第１回　日本版 PIC シンボルの概要、指導方法（講師非公表）
第２回　シンボルを使ったコミュニケーション指導の事例（講師非公表）
第３回　マカトンサイン，サウンズ＆シンボルズ　AAC 概論（講師非公表）
第４回　マカトンサイン，サウンズ＆シンボルズ　理論（講師非公表）
第５回　マカトンサイン，サウンズ＆シンボルズ　演習（講師非公表）
第６回　マカトンサイン，サウンズ＆シンボルズ　当事者に来ていただき演習（講師非公表）
第７回　マカトンサイン，サウンズ＆シンボルズ　当事者に来ていただき演習（講師非公表）
第８回　脳性麻痺児の言語障害概論（口腔機能の正常発達も含めて）（講師非公表）
第９回　脳性麻痺児のコミュニケーションの問題と援助（講師非公表）
第10回　ボバース概念による言語治療・評価（講師非公表）
第11回　摂食指導について（実技練習）（講師非公表）
第12回　視線や表情を中心としたコミュニケーションの発達に関する先行研究や臨床像の紹介（松下）
第13回　視線や表情を中心としたコミュニケーション障害の特徴を仮説立てる（松下）
第14回　音韻獲得や身体表象の発達における先行研究や臨床像の紹介（松下）
第15回　音韻獲得や身体表象の発達の問題や特徴を仮説立てる（松下）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

・AAC に関する書籍に目を通しておくこと
・脳性麻痺児・者に対する関わりについて知識を整理しておくこと
・コミュニケーション・言語に関する書籍に目を通しておくこと

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害 VII（援助法－臨床）				
担 当 者	齋藤　典昭			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	２年	総単位数	１単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・子どもさんに協力していただき，一緒に遊び，その後で「子どもさんの課題」と関わる「学生の課題」について検討します.

■ 到達目標

1．子どもの多様性に気づくことができる
2．子どもに合わせて上手に遊ぶことができる
3．遊びを通じて子どもの能力を評価することができる

■ 授業計画

第１回　設定第１回　前回の振り返りとセッションプログラムの確認
第２回　設定第１回　セッション
第３回　設定第１回　フィードバックとディスカッション
第４回　設定第２回　前回の振り返りとセッションプログラムの確認
第５回　設定第２回　セッション
第６回　設定第２回　フィードバックとディスカッション
第７回　設定第３回　前回の振り返りとセッションプログラムの確認
第８回　設定第３回　セッション
第９回　設定第３回　フィードバックとディスカッション
第10回　設定第４回　前回の振り返りとセッションプログラムの確認
第11回　設定第４回　セッション
第12回　設定第４回　フィードバックとディスカッション
第13回　設定第５回　前回の振り返りとセッションプログラムの確認
第14回　設定第５回　セッション
第15回　設定第５回　フィードバックとディスカッション
第16回　設定第６回　前回の振り返りとセッションプログラムの確認
第17回　設定第６回　セッション
第18回　設定第６回　フィードバックとディスカッション

■ 評価方法

提出レポート100% で評価

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

・授業後，次回授業までにレポート課題についてグループディスカッションを行い，レポートを作成・提出すること。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：発達障害と子育てを考える本1，2，3，4
　　１－からだ，２－ことば，３－て・ゆび，４－きく・みる・かんじる
出版社：ミネルヴァ書房

■ 留意事項

授業科目	音声障害				
担 当 者	宮田恵里・大西　環（オムニバス）			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

①正常な喉頭の解剖および呼吸と発声の仕組みを学ぶ
②音声障害の種類と評価方法を学ぶ
③音声治療の適応および実際のアプローチ方法を学ぶ
④音声外科と薬物療法について学ぶ
⑤気管カニューレや気管切開患者への対応および無喉頭音声について学ぶ

■ 到 達 目 標

正常な喉頭の解剖および呼吸と発声について理解する。
患者の病態から音声障害が生じている原因について理論的に説明を行うことができ、
適切な治療法の選択や、適切な音声治療のアプローチ方法を考察出来るようになる。

■ 授 業 計 画

第１回　声の特性、喉頭の解剖（宮田）
第２回　呼吸と発声の仕組み（宮田）
第３回　音声障害の診断と評価１（宮田）
第４回　音声障害の診断と評価２（宮田）
第５回　音声障害疾患の分類１（宮田）
第６回　音声障害疾患の分類２（宮田）
第７回　音声治療の実際（宮田）
第８回　音声治療 - 間接訓練（宮田）
第９回　音声治療 - 直接訓練 - 症状対処的音声治療１（宮田）
第10回　音声治療 - 直接訓練 - 症状対処的音声治療２（宮田）
第11回　音声治療 - 包括的音声治療（宮田）
第12回　音声外科と薬物療法（宮田）
第13回　気管切開患者への対応、無喉頭音声（宮田）
第14回　病態から考える音声治療（宮田）
第15回　食道発声教室の見学（大西）

■ 評 価 方 法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎講義後にテキストや配布資料を用いて復習を行うこと

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚療法シリーズ14　改訂　音声障害
著者名：苅安誠 / 城本修　編著
出版社：建帛社

■ 参考図書

書　名：ST のための音声障害診療マニュアル
著者名：廣瀬肇　監修
出版社：インテルナ出版

書　名：標準言語聴覚障害学　発声発語障害学　第２版
著者名：シリーズ監修：藤田郁代、編集：熊倉勇美 / 今井智子
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	構音障害Ⅰ（臨床の基礎）				
担当者	松本　治雄			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

話しことばの三要素である「音声」「構音」「パターン」のうち、構音の障害はもっとも中核をなす障害要素である。言語聴覚士の仕事の大半は構音指導であるとも言える。
講義は言語聴覚士が構音指導上基本として身につけるべき内容を演習的に修得することを目指している。

■ 到達目標

・コミュニケーションにおける話ことばの役割を知る。
・構音の概念を理解し、正常構音の産生の過程を知る。
・構音障害の概念を理解し障害像を知る。
・構音障害の種類について理解し、その検査、分類、治療方法を知る。

■ 授業計画

第１回　障害児の音声の聞き取り
第２回　日本語音声の成り立ち①
第３回　日本語音声の成り立ち②
第４回　日本語音声の成り立ち（子音①）
第５回　日本語音声の成り立ち（子音②）
第６回　日本語音声の成り立ち（子音③）
第７回　言語障害に関わる要因①
第８回　言語障害に関わる要因②
第９回　構音障害の検査と評価①
第10回　構音障害の検査と評価②
第11回　構音指導の方法①
第12回　構音指導の方法②
第13回　事例による演習①
第14回　事例による演習②
第15回　事例による演習③　と　まとめ

■ 評価方法

小テスト（10%）を期末テスト（90%）に加味して評価する予定

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

①日本語音声すべての音の構音操作の理解と自身で構音仕分ける
②発音記号の熟達（様々な音を聴取してすぐに記述できるよう身体動作として身につける）
③原則、毎回小テストを実施していくので，自己の熟達度を測り100%を達成する

■ 教　科　書

書　名：改定機能性構音障害
著者名：本間慎治編著
出版社：建帛社

■ 参考図書

書　名：日本語音声学入門（改訂版）
著者名：斉藤純男
出版社：三省堂

■ 留意事項

受講に際しては知識として頭で覚えるので無く、聴覚、視覚、触覚、筋運動覚を駆使して身体で身につけてもらうことを目指している。

授業科目	構音障害Ⅱ（機能性）				
担当者	吉田紀子・松本治雄（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

機能性構音障害の指導に必要な基礎知識を学ぶ。
構音の評価および結果の分析、指導のすすめかたについて演習を中心に学ぶ。

■ 到達目標

・構音発達の過程と機能性構音障害について理解する。
・構音を正確に聴き取り記録することができる。
・構音障害の検査、結果の分析、構音指導を考え、実施することができる。

■ 授業計画

第１回　機能性構音障害とは（吉田）
第２回　幼児期の構音発達（吉田）
第３回　構音の聴き取りと記録（吉田）
第４回　機能性構音障害における構音の誤り①（吉田）
第５回　機能性構音障害における構音の誤り②（異常構音）（吉田）
第６回　構音検査（実習）（吉田）
第７回　構音検査（結果の分析）（吉田）
第８回　指導プログラムの立案（吉田）
第９回　構音別の指導方法（吉田）
第10回　ケーススタディー①（吉田）
第11回　ケーススタディー②（吉田）
第12回　事例紹介①（松本）
第13回　事例紹介②（松本）
第14回　事例紹介③（松本）
第15回　事例紹介④（松本）

■ 評価方法

提出物10%、筆記試験90%、なお出欠および授業態度を考慮する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後に復習をして、分からない事柄は次回の授業で質問すること。

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚療法シリーズ　改訂機能性構音障害
著者名：本間　慎治
出版社：建帛社

■ 参考図書

書　名：特別支援教育における構音障害のある子どもの理解と支援
著者名：加藤正子ら　編
出版社：学苑社

■ 留意事項

授業科目	構音障害Ⅲ（器質性）				
担当者	藤原　百合			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

器質性構音障害（口蓋裂）について、基礎的知識、口蓋裂に伴う様々な問題点や、チームアプローチについて学ぶ。また、鼻咽腔閉鎖機能検査や構音検査の実施、治療計画の立て方や構音訓練について学ぶ。

■ 到達目標

口蓋裂に伴う異常の評価・診断、指導・訓練に関する知識・技能・態度を身につける

■ 授業計画

第１回　正常な発話のプロセス：呼吸、発声、共鳴、構音
第２回　器質性構音障害の定義、原因疾患、発症メカニズム、関連障害
第３回　口蓋裂言語の特徴（発声、共鳴、構音）
第４回　評価：発話の聴覚的印象
第５回　評価：口腔顔面の形態・機能
第６回　評価：口蓋裂言語検査（ビデオ）
第７回　機器を用いた評価：鼻咽腔閉鎖機能、構音機能
第８回　器質的異常に対する医学的治療：外科的、歯科補綴的治療
第９回　言語治療：機能訓練
第10回　言語治療：系統的構音訓練、視覚的フィードバック訓練
第11回　口蓋裂に伴う問題：哺乳・離乳、発達、聴力、心理社会的問題
第12回　チーム医療、年齢による対応の変化
第13回　症例検討（グループ演習）
第14回　症例検討（グループ演習）
第15回　まとめ、国家試験過去問

■ 評価方法

筆記試験（90%）　演習（10%）出席状況（無断欠席はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書を読んで、予習・復習すること。口蓋裂のサンプル CD を用いて、構音障害の聴覚的評価の練習をすること。DVD「目で見る日本語音の産生」「目で見る構音障害」を視聴して、正常な発話と異常な発話の違いを理解すること。

■ 教　科　書

書　名：標準言語聴覚診断学　発声発語障害学
著者名：熊倉勇美、小林範子、今井智子　編集
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：DVD 「目で見る日本語音の産生」「目で見る構音障害」
著者名：藤原百合、山本一郎
出版社：EPG 研究会

■ 留意事項

授業科目	構音障害Ⅳ（運動障害性）				
担当者	熊倉　勇美			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

発話障害の鑑別診断、評価、訓練が出来るよう、演習を含めて実際的・具体的に学習する。

■ 到達目標

患者の発話障害を評価・分析し、実際に訓練が出来るようになること。

■ 授業計画

第１回　発話のしくみ
第２回　運動障害性構音障害とは
第３回　運動障害性構音障害の原因疾患とその頻度
第４回　患者や家族の主訴、発話障害の評価、鑑別診断、検査法の考え方
第５回　検査法のいろいろ（AMSD,SLTA-ST の紹介と実習）
第６回　運動障害性構音障害の６分類と発話特徴（1）
第７回　運動障害性構音障害の６分類と発話特徴（2）
第８回　訓練法（1）
第９回　訓練法（2）
第10回　訓練法（3）、補綴治療
第11回　器質性構音障害とは
第12回　口腔（舌を中心に）の解剖学
第13回　口腔がんの治療（放射線治療、化学療法、外科治療など）
第14回　構音障害の評価・分析（実習含む）
第15回　リハビリテーションの考え方と実際（構音訓練、補綴治療など）

■ 評価方法

筆記試験：100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

＊講義中に指示された箇所の教科書については、次の授業までに必ず目を通しておくこと。

■ 教　科　書

書　名：改訂運動障害性構音障害
著者名：熊倉勇美
出版社：建帛社

書　名：口腔・中咽頭がんのリハビリテーションー構音障害、摂食嚥下障害ー
著者名：溝尻源太郎・熊倉勇美編著
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	嚥下障害Ⅰ（基礎と評価）				
担当者	中村　靖子			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

正常嚥下のメカニズムや嚥下障害の検査や評価等基本的な事項について学ぶ

■ 到達目標

嚥下障害の基礎的な知識を理解する

■ 授業計画

第１回　嚥下障害とは
第２回　解剖と神経（1）
第３回　解剖と神経（2）
第４回　生理と神経機構（1）
第５回　生理と神経機構（2）
第６回　年齢的変化
第７回　原因と病態（1）
第８回　原因と病態（2）
第９回　原因と病態（3）
第10回　情報収集及び摂食観察
第11回　検査及び評価（1）
第12回　検査及び評価（2）
第13回　検査及び評価（3）
第14回　検査及び評価（4）
第15回　まとめ

■ 評価方法

試験100％
筆記試験（100点満点）と実技試験（100点満点）。どちらも60点以上で合格。両試験に合格すること。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行うこと。
検査練習は学生同士でペアとなり練習を行うこと。

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学
著者名：倉智雅子
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	嚥下障害Ⅱ（訓練と画像診断）				
担当者	戸倉晶子・田上恵美子（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

摂食・嚥下障害の基本的な訓練法について学び、訓練計画を考える。
嚥下造影検査（VF）・嚥下内視鏡検査（VE）の目的、手順、評価方法について学習し、実際の画像を用いて解析を行う。

■ 到達目標

臨床上必要な知識を身につけ、手技を実践できるようになる。
VF・VE の評価方法を習得し、嚥下障害の症状を理解できるようになる。

■ 授業計画

第１回　嚥下関連筋の解剖、呼吸・構音器官評価の復習（田上）
第２回　評価から訓練へ、間接訓練（呼吸・咳嗽など）演習（田上）
第３回　間接訓練（頸部・顎・シャキア・メンデルソンなど）演習（田上）
第４回　間接訓練（舌・口唇・軟口蓋・ガムラビングなど）演習（田上）
第５回　直接訓練（頸部聴診・意識嚥下・横向き嚥下・ひと口量・丸のみ・顎引き・頭頸部など）（田上）
第６回　直接訓練（複数回嚥下・交互嚥下・一側嚥下・姿勢など）演習（田上）
第７回　姿勢調整・介助法（田上）
第８回　経口移行の目安、段階的摂食訓練（田上）
第９回　嚥下造影検査の目的・手順について（戸倉）
第10回　嚥下造影検査の評価方法（戸倉）
第11回　グループワーク①：ビデオ解析（戸倉）
第12回　グループワーク②：ビデオ解析（戸倉）
第13回　症例検討（戸倉）
第14回　嚥下内視鏡検査の目的・手順について（戸倉）
第15回　嚥下内視鏡検査の評価方法、VE と VF の比較（戸倉）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習・復習を行うこと。また、空き時間を利用して実技の練習も積極的に行い、知識と技術の習得に努めること。

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学
著者名：倉智雅子
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書　名：脳卒中の摂食・嚥下障害
著者名：藤島一郎
出版社：医歯薬出版

書　名：目で見る嚥下障害－嚥下内視鏡・嚥下造影の所見を中心として
著者名：藤島一郎
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	嚥下障害Ⅲ（事例と臨床）				
担当者	田上恵美子・糸田昌隆・大根茂夫（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

摂食・嚥下リハビリテーションの取り組みの実際について学ぶ
成人・高齢者における摂食・嚥下障害の病態診断とリハビリテーションの具体的対応法、周辺事項への対応法

■ 到達目標

個々のケースについて評価し、訓練プランを立案できるようになる
病態別嚥下障害に関する臨床現場における具体的対応法の立案が可能になる

■ 授業計画

第１回　変性疾患の嚥下障害学概論（田上）
第２回　ALS 事例による嚥下リハの進め方（田上）
第３回　ALS 事例に対する意思伝達演習（空書・読唇・50音表・透明板・読み上げ法）（田上）
第４回　パーキンソン病事例による嚥下リハの進め方（田上）
第５回　多系統萎縮症・筋ジストロフィー・重症筋無力症などの事例による嚥下リハの進め方（田上）
第６回　ST 訪問訓練について、その実際と課題（田上）
第７回　事例による嚥下リハの進め方（脳血管障害・廃用症候群）（大根）
第８回　事例による嚥下リハの進め方（脳血管障害・廃用症候群）（大根）
第９回　成人・高齢者の正常嚥下の理解Ⅰ（医療環境と制度を含む）（糸田）
第10回　成人・高齢者の正常嚥下の理解Ⅱ（糸田）
第11回　咀嚼・嚥下機能の神経・生理（糸田）
第12回　摂食・嚥下障害への具体的対応法（糸田）
第13回　摂食・嚥下障害への具体的対応法Ⅱ（糸田）
第14回　摂食・嚥下障害の栄養法を中心とした全身管理（糸田）
第15回　グループワーク：医療倫理（糸田）

■ 評価方法

試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、質問等で疑問点の解決に努めること

■ 教　科　書

書　名：ケーススタディ摂食嚥下リハビリテーション　in　DVD ～ 50症例から学ぶ実践的アプローチ～
著者名：里宇明元，藤原俊之監修
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書　名：事例でわかる摂食・嚥下リハビリテーション　現場力を高めるヒント
著者名：出江紳一，近藤健男，瀬田拓編集
出版社：中央法規

■ 留意事項

授業科目	嚥下障害Ⅳ（チームアプローチ）				
担当者	林　直子・大塚佳代子・岡田和子・染川けいこ・森田婦美子・大根茂夫（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

摂食嚥下リハビリテーションに必要な知識と技術を演習を交えて学ぶ。
気管切開患者の嚥下・発声発語障害と訓練法（大塚）
チームアプローチを行うにあたり、まず他職種の業務内容を知らなければならない。本授業では歯科衛生士の業務内容を知り連携内容について学ぶ。（染川）

■ 到達目標

臨床上必要な知識を身につけ、手技を実践できるようになる。
気管切開患者の嚥下障害と発声発語障害について理解し、訓練方法を学ぶ。（大塚）
他職種の業務を知る。歯科衛生士が行う口腔リハビリテーションについて知識を得る。（染川）

■ 授業計画

第１回　栄養管理について（岡田）
第２回　嚥下について（岡田）
第３回　NST について（岡田）
第４回　カニューレの構造・役割・種類と取り扱いについて（大根）
第５回　嚥下障害のリスク管理について（大根）
第６回　気管切開患者の嚥下障害と発声発語器官障害（大塚）
第７回　気管切開患者の嚥下障害と発声発語訓練（大塚）
第８回　摂食嚥下障害のリハビリテーションについて病棟ナースが ST に期待すること①（林）
第９回　摂食嚥下障害のリハビリテーションについて病棟ナースが ST に期待すること②（林）
第10回　歯科衛生士の業務内容と口腔リハビリテーションについて　（染川）
第11回　口腔リハビリテーションについて　実技演習　（染川）
第12回　吸引の技術と目的根拠の理解（森田）
第13回　吸引の手順の理解（森田）
第14回　吸引の演習①（森田）
第15回　吸引の演習②（森田）

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

耳鼻咽喉科学、嚥下障害学教科書の気管切開の項目を読んでおくこと（大塚）
適宜授業中に指示をする。

■ 教　科　書

書　名：発声発語障害学
著者名：藤田郁代
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	**吃　音**				
担 当 者	**土屋　美智子**			国家出題基準	
学 科 名	**言語聴覚専攻科**	学　　年	**1年**	総単位数	**1単位**
		開講時期	**後期**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

吃音の基礎知識や臨床に必要な基本的技能について学習する。

■ 到達目標

吃音児・者のおかれている現状を知り、言語聴覚士としての援助のあり方を理解する。
「吃音とは何か」を理解し、情報収集（検査含む)、評価および指導・訓練など臨床に必要な基本的知識・技能を身につける。

■ 授業計画

第１回　【吃音の基本的知識】
第２回　【吃音症状】　吃音中核症状とその他の非流暢性などについて
　　【進展段階】　吃音の進展段階について理解する
第３回　【吃音児・者のおかれている現状】　吃音児・者のおかれている現状を知り、言語聴覚士としてどのように援助すべきかを考える
第４回　【吃音臨床①】　吃音臨床における情報収集ついて
第５回　【吃音臨床②】　吃音検査法
第６回　【吃音臨床③】　吃音の総合評価について（症例検討）
第７回　【吃音臨床④】　吃音の指導・訓練法①
第８回　【吃音臨床⑤】　吃音の指導・訓練法②

■ 評価方法

試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に教科書Ｐ２～５「ある吃音者の体験談」を読んでおいて下さい

■ 教　科　書

書　名：改訂吃音
著者名：都筑澄夫編著
出版社：建帛社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	**聴覚障害Ⅰ（概論）**				
担当者	**矢吹裕栄・山口　忍（オムニバス）**			国家出題基準	
学科名	**言語聴覚専攻科**	学　　年	**1年**	総単位数	**1単位**
		開講時期	**前期**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

・聴覚障害学の基礎となる聴覚の器官の解剖と機能を理解し、難聴と聴覚検査との関係を学習する。（矢吹）

■ 到達目標

・聴こえの仕組みの基礎知識を習得する。難聴のタイプ分類と聴覚検査法の基礎を習得し、検査結果から難聴のタイプを推定できるようになる。（矢吹）

■ 授業計画

第１回　基礎用語の確認
　　音とは何か、「きこえる」と言うこと。（矢吹）
第２回　聴覚器の解剖
　　外耳・中耳の解剖と機能（矢吹）
第３回　聴覚器の解剖
　　内耳の解剖・機能（矢吹）
第４回　前半のまとめと復習（矢吹）
第５回　聴覚障害とは何か（矢吹）
第６回　難聴の分類（矢吹）
第７回　聴覚検査法１（矢吹）
第８回　聴覚検査法２（矢吹）
第９回　聴覚障害の実態（山口）
第10回　聴覚障害をきたす疾患（山口）
第11回　聴覚障害への対応（山口）
第12回　補聴器の仕組みと適応（山口）
第13回　人工内耳の仕組みと適応（山口）
第14回　聴力検査の復習と結果の見方（山口）
第15回　まとめ（山口）

■ 評価方法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

学習内容が多くなるため、日々の復習が欠かせません。基本的事項の理解の積み重ねが重要な分野であり、基礎が疎かになるとその先の理解が難しくなります。その日のうちにその日の学習内容を復習する事が望ましいです。（矢吹）
聴覚器の解剖と働きについて、復習すること。聴覚路の図を、毎日見て暗記すること。聴覚検査名と目的、障害を来す疾患名を覚えること。補聴機器の種類と仕組みについて、説明できるようにしておくこと。講義中に質問し、口頭で応答を求めます。（山口）

■ 教　科　書

書　名：聴覚検査の実際　（改訂３版）
著者名：日本聴覚医学会　編集
出版社：南山堂

書　名：標準言語聴覚障害学　聴覚障害学
著者名：中村公枝　城間将江　鈴木恵子

書　名：言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　第２版
著者名：鳥山稔
出版社：医学書院

書　名：聴覚活用の実際
著者名：田中美郷　廣田栄子
出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	聴覚障害Ⅱ（聴覚検査法）				
担当者	福田章一郎・矢吹裕栄・田村薫・野田祥子・山口　忍（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・聴覚障害が言語、心理および社会性の発達にどのような影響を与えるかを具体的な教材などを通して紹介し、聴覚障害児・者の発達および社会生活上の困難さの理解を促す。（福田）
・前期の学習内容を整理し、基礎知識の関連を確認する。また、人工内耳の原理とマスキングに関する基礎を学習する。（矢吹）
・聴覚の検査法とその評価、及び聴覚発達を中心とした援助について講義を行う。（田村、野田、山口）

■ 到達目標

・難聴発見から介入に必要な聴覚評価、digitalHA および人工内耳などの補聴、保護者のカウンセリングとそれらに必要な療育法およびコミュニケーション手段について具体的に解説する。（福田）
・聴覚器・疾患・検査結果の関連を整理する。人工内耳の仕組みを理解する。また、マスキングの考え方を基本的な数的処理とグラフを利用して習得する。（矢吹）
・聴覚障害を有する対象者に基本的な検査が実施でき、その結果を評価するとともに、発達を含めた援助を提案することができるようになる。（田村、野田、山口）

■ 授業計画

第１回　聴覚障害の理解に必要な基礎的に知識について解説する（福田）
第２回　スクリーニングから精密検査までに必要とされる諸検査とその評価法について解説する（福田）
第３回　難聴の原因について遺伝をふくめ解説する（福田）
第４回　聴覚の発達および幼児聴力検査法を映像を通し具体的に解説する（福田）
第５回　聴覚障害児の補聴に必要な知識と fitting 法および人工内耳の適応とそのメカニズムについて解説する（福田）
第６回　聴覚障害児のコミュニケーション法と療育法の目標と評価を解説する（福田）
第７回　聴覚障害の原因疾患（矢吹）
第８回　聴覚器・疾患・検査結果の関連（矢吹）
第９回　人工内耳の仕組み１（矢吹）
第10回　人工内耳の仕組み２（矢吹）
第11回　マスキングとは（矢吹）
第12回　マスキングの考え方（矢吹）
第13回　マスキングの考え方２（矢吹）
第14回　標準聴力検査について（野田または田村）
第15回　標準聴力検査の検査演習（野田または田村）
第16回　Bekesy 検査について（野田または田村）
第17回　Bekesy 検査の演習（野田または田村）
第18回　閾値上聴覚検査について（野田または田村）
第19回　閾値上聴覚検査の演習（野田または田村）
第20回　聴性脳幹反応の測定方法（野田または田村）
第21回　聴性脳幹反応の検査演習（野田または田村）
第22回　インピーダンスオ―ジオメータについて（野田または田村）
第23回　語音聴力検査について（野田または田村）
第24回　聴覚検査結果の解説　検査の目的とその意義について　症例提示①（山口）

第25回　聴覚検査結果の解説　検査の目的とその意義について　症例提示②（山口）
第26回　幼小児の聴力検査（山口）
第27回　幼小児の聴力検査（山口）
第28回　臨床の実際－発達遅滞例の聴力評価－（山口）
第29回　臨床の実際－補聴機器フィッテイングの考え方－（山口）
第30回　まとめ（山口）

■ 評 価 方 法

筆記試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

前期の聴覚障害Ⅰの内容を踏まえて授業が進みます。聴覚障害Ⅰに理解に不安のある場合は復習をしておく必要があります。（矢吹）
聴覚障害児・者の困難について、復習すること。純音聴力検査、語音聴力検査・閾値上検査はST室の検査機器を用いて、互いに測定し合い、手順を覚えること。インピーダンスオージオメトリーは、プローブ装着が可能になるよう、練習すること。乳幼児の聴力検査の種類と内容、適応年齢について覚えること。補聴機器のフィッテイングの原則について説明できるようになること。講義中に質問し、口頭で応答を求めます。（山口）

■ 教　科　書

書　名：聴覚検査の実際　（改訂３版）
著者名：日本聴覚医学会　編集
出版社：南山堂

書　名：標準言語聴覚障害学　聴覚障害学
著者名：中村公枝　城間将江　鈴木恵子

書　名：言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　第２版
著者名：鳥山稔
出版社：医学書院

書　名：聴覚活用の実際
著者名：田中美郷　廣田栄子
出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	聴覚障害Ⅲ（各論）				
担当者	田中美郷・大森千代美・中井弘征・山口　忍（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　　年	２年	総単位数	２単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・聴覚障害児が社会に出て活躍するうえで求められる条件は言語（日本語）力及び人間形成にある。言語力を豊かに身につけるには色々な方法があるが、どのような選択があるか、社会的視点で考えてみたい。（田中）
・聴覚障害乳幼児の発見から療育までの実際の様子を講義とともにビデオで供覧しながら、三項関係の重要性、難聴児のことばを育てるための療育技術、療育者の役割などについて考える。（大森）
・聴覚障害教育における指導・支援の実際（中井）
・聴覚障害の臨床の目的と実際について学ぶ。（山口）

■ 到達目標

・自分なりの思考を深めること。講義はそのための手助けでもある。（田中）
・聴覚障害乳児の BOA の実際、初期の言語機能を獲得するために重要な発達課題、難聴児のことばの獲得を支援する関わり方の要点、療育者に求められる役割などについて知る。（大森）
・個々の実態に合わせたコミュニケーション方法や指導・支援のあり方を学ぶ。（中井）
・聴覚障害児･者の適切な援助について、検査結果をふまえ適切な援助について提案できるようになる。（山口）

■ 授業計画

第１回　人間の聴覚系と情報処理機構。聴覚系の階層構造に着目して（田中）
第２回　人間の高次聴覚機能。４つのコード系が考えられる（田中）
第３回　聴覚の発達。聴覚的認知の発達でもある。これに関係するのは耳だけではない（田中）
第４回　聴能とその訓練法。脳の可塑性及び心の働きと関係づけて（田中）
第５回　補聴器と人工内耳（田中）
第６回　手話について：日本手話対日本語対応手話（田中）
第７回　人工内耳装用児に対する言語指導法。①ボトムアップ方式　②トップダウン方式（田中）
第８回　聴覚障害児に対する日本語教育法。①聴覚口話法　②同時法　③ Bi-Bi 教育法（田中）
第９回　聴覚障害児の早期発見、聴力検査法、家族支援
第10回　バリアフリー社会の実現をめざして～インテグレーションからインクルーシブ教育へ～（田中）
第11回　乳児期の聴覚言語機能の発達と難聴乳幼児の発見について　BOA の実際（大森）
第12回　初期の言語機能を獲得するために大切な発達課題について（大森）
第13回　難聴幼児の療育の実際Ⅰ（大森）
第14回　難聴幼児の療育の実際Ⅱ（大森）
第15回　聴覚障害教育を理解するための歴史的経過（中井）
第16回　聴覚障害教育の実際１（聴力の把握と補聴器適合、聴覚学習）（中井）
第17回　聴覚障害教育の実際２（言語指導・自立活動、進路）（中井）
第18回　聴覚障害の心理的援助１（山口）
第19回　聴覚障害の心理的援助２（山口）
第20回　聴覚障害の遺伝子診断（山口）
第21回　聴覚障害の検査と評価１（山口）
第22回　聴覚障害の検査と評価２（山口）
第23回　聴覚障害の検査と評価３（山口）
第24回　聴覚障害の検査と評価４（山口）
第25回　聴覚障害児ケースワーク１（山口）

第26回　聴覚障害児ケースワーク２（山口）
第27回　聴覚障害児ケースワーク３（山口）
第28回　聴覚障害児ケースワーク４（山口）
第29回　聴覚障害児ケースワーク５（山口）
第30回　まとめ（山口）

■ 評価方法

試験100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書指定されている「聴覚障害の実際」の1. 基礎編を、第1回～ 10回の集中講義前に読了しておくこと。同じく「聴覚障害の実際」のⅡ. 実践編を、集中講義第11回～ 14回の集中講義前に読了しておくこと。1年時に学習した検査、補聴機器のフィッテイングの考え方、言語発達について復習したうえで、講義に臨むこと。講義中質問し、口頭で応答を求めます。

■ 教　科　書

書　名：聴覚検査の実際　（改訂３版）
著者名：日本聴覚医学会　編集
出版社：南山堂

書　名：標準言語聴覚障害学　聴覚障害学
著者名：中村公枝　城間将江　鈴木恵子

書　名：言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　第２版
著者名：鳥山稔
出版社：医学書院

書　名：聴覚活用の実際
著者名：田中美郷　廣田栄子
出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	補聴器・人工内耳				
担当者	竹田利一・北野庸子・梅澤尚美・山口　忍（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

・補聴器のフィッティングにおいての総合的な知識、補聴器適応の決定、補聴器の調整選択、補聴器適合検査の指針（竹田）
・人工内耳の仕組みや適応、マッピング、臨床の実際について学ぶ。（梅澤　北野　山口）

■ 到達目標

・補聴器のフィッティングにおいての総合的な知識、補聴器適応の決定、調整と選択の基礎、補聴器適合検査結果の評価（竹田）
・人工内耳の原理を知り、適応や装着、リハビリテーションの手順について説明できる。人工内耳装用者に対して適切な関わり方ができ、適切なリハビリテーション・調整を提案することができる。（梅澤　北野　山口）

■ 授業計画

第１回　補聴器の種類と仕組み（竹田）
第２回　補聴器の性能（補聴器の最新デジタル機能）（竹田）
第３回　補聴器に関する測定、JIS、カプラの違い、実耳測定、補聴器特性検査装置を使った実習（竹田）
第４回　補聴器調整器の使い方、調整器の意味（竹田）
第５回　イヤモールドに関する講義（竹田）
第６回　補聴器のフィッティングの考え方（リニア、ノンリニア増幅）（竹田）
第７回　補聴器の適応と選択、補聴器装用指導（竹田）
第８回　補聴器装用効果の評価と補聴器適合検査の指針2010の解説（竹田）
第９回　人工内耳の原理、仕組みや適応基準について（梅澤）
第10回　音声処理方式とマッピング、人工内耳リハビリテーション（成人・小児）について（梅澤）
第11回　難聴幼児の母親指導（北野）
第12回　難聴を有する大学生の支援（北野）
第13回　補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（山口）
第14回　補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（山口）
第15回　補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（山口）

■ 評価方法

試験　100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

１年時および２年時前期に学習した補聴機器の仕組み、フィッテイングの考え方、適応について復習して講義に臨むこと。第13回～ 15回は、補聴機器の知識に加え、聴覚障害を来す疾患、検査の適応と内容、手順、聴覚障害のもたらす困難さを社会的･歴史的視点からどうとらえるか、言語発達と聴覚障害の関連など、これまで学んだすべての事を総括する。講義中質問し、口頭で応答を求めます。

■ 教　科　書

書　名：補聴器のフィッティングの考え方
著者名：小寺一興
出版社：診断と治療社

書　名：聴覚検査の実際　（改訂３版）
著者名：日本聴覚医学会　編集
出版社：南山堂

書　名：標準言語聴覚障害学　聴覚障害学
著者名：中村公枝　城間将江　鈴木恵子

書　名：言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　第２版
著者名：鳥山稔
出版社：医学書院

書　名：聴覚活用の実際
著者名：田中美郷　廣田栄子
出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	視覚聴覚二重障害				
担当者	森　尚彫・大城克彦・大西　環（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

①視覚聴覚二重障害について概説する。（森）
②コミュニケーション代替手段の導入から実際の支援について、評価，実施手順，実施上の留意点について習得する。（大城）
③視覚障害者の福祉施設の見学と講義（大西）

■ 到達目標

①視覚聴覚二重障害の概要、特徴等を知り理解を深める。（森）
②コミュニケーション代替手段について，臨床における目的またその意味を理解する。（大城）
③視覚障害者をとりまく現状を知り、理解を深める。（大西）

■ 授業計画

第１回　視覚障害、聴覚障害の概説とそれらによる視覚聴覚二重障害について（森）
第２回　視覚聴覚二重障害におけるコミュニケーションモード､実例の紹介､過去の国家試験の解説等（森）
第３回　コミュニケーション代替手段の概要①　適応，各種方法，導入（大城）
第４回　コミュニケーション代替手段の概要②　訪問リハビリ及び病棟における対応､導入事例（ALS 等）（大城）
第５回　各種コミュニケーション機器体験，簡易スイッチ作製（大城）
第６回　各種コミュニケーション機器体験，簡易スイッチ作製，まとめ（大城）
第７回　視覚障害者福祉の歴史と現状１（施設見学を含む）（大西）
第８回　視覚障害者福祉の歴史と現状２（施設見学を含む）（大西）

■ 評価方法

レポート100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業の後で復習を行っておくこと。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	臨床実習Ⅰ				
担 当 者	大西　環・大根茂夫・齋藤典昭・工藤芳幸・中村靖子（オムニバス）			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

Ⅰ期臨床実習（見学実習）
設定期間：１週間

■ 到達目標

言語聴覚士の業務の流れを理解し、関連職種との連携を理解する。

■ 授業計画

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。
実習協力施設・病院にて、ご指導を頂くスーパーバイザー（SV）の言語聴覚療法を見学させて頂く。
毎日実習日誌を作成し、提出する。
SV から与えられた課題のレポートなどを作成する。
「実習のふり返り」を作成する。
詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

① 実習ガイダンスの出席状況と取組み
② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
③ SV からの種々の情報
④ SV 記載の成績表・所見
⑤ 実習日誌
⑥ 出席状況
⑦ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表準備の状況
⑧ 実習報告会に向けての取り組み
①～⑧を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。
実習終了後は、実習で把握した自分の課題にとりくみ、次の実習に向けて準備すること。

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚療法臨床マニュアル
著者名：小寺富子監修
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

出席日数が規定の４/５に満たないものは、科目履修の認定はされない。

授業科目	臨床実習Ⅱ				
担 当 者	大西　環・大根茂夫・齋藤典昭・工藤芳幸・中村靖子（オムニバス）			国家出題基準	
学 科 名	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	5単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

Ⅱ期臨床実習（評価実習）
設定期間：５週間

■ 到達目標

臨床実習Ⅰ及び学内で学んだ検査手順や評価に関する知識を基に、指導を受けながら言語聴覚療法における検査及び評価が出来るようになる。また、指導援助プログラムの立案について考えることが出来る。

■ 授業計画

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。
実習協力施設、病院様にて、ご指導いただく SV の指示、監督のもと、患者（児）様に検査等を行い、その結果を分析して他の所見と併せて総合評価を行う。さらにその評価に基づき、指導援助プログラムを立案する。
実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などをする。
「実習のふり返り」を作成する。
症例報告書を作成する。
詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

① 実習ガイダンスの出席状況と取組み
② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
③ SV からの種々の情報
④ SV 記載の成績表・所見
⑤ 症例報告書
⑥ 実習日誌
⑦ 出席状況
⑧ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
⑨ 実習報告会に向けての取り組み
①～⑨を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。
実習終了後は、実習で把握した自分の課題にとりくみ、次の実習に向けて準備すること。

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚療法臨床マニュアル
著者名：小寺富子監修
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

出席日数が規定の４/５に満たないものは、科目履修の認定はされない。

授業科目	臨床実習Ⅲ				
担当者	大西　環・大根茂夫・齋藤典昭・工藤芳幸・中村靖子（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学　年	2年	総単位数	6単位
		開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

Ⅲ期臨床実習（総合実習）
設定期間：８週間

■ 到達目標

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。
検査及び評価に基づき、指導援助プログラムの立案を行い、言語聴覚療法を指導を受けながら実施できる。

■ 授業計画

実習施設・病院で、臨床実習指導者（スーパーバイザー・SV）のご指導・監督のもと、患者（児）様の検査、評価、指導訓練プログラムの立案、訓練等実際の言語聴覚療法を経験する。
実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などを作成する。
「実習のふり返り」を作成する。
症例報告書を作成する。
詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

① 実習ガイダンスの出席状況と取組み
② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
③ SV からの種々の情報
④ SV 記載の成績表・所見
⑤ 症例報告書
⑥ 実習日誌
⑦ 出席状況
⑧ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
⑨ 実習報告会に向けての取り組み
①～⑨を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。
Ⅰ期臨床実習、Ⅱ期臨床実習で明らかになった自己の課題を解決すべく、しっかり準備をして臨むこと。

■ 教　科　書

書　名：言語聴覚療法臨床マニュアル
著者名：小寺富子監修
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

出席日数が規定の４/５に満たないものは、科目履修の認定はされない。

授業科目	英語コミュニケーション（英会話初級）				
担当者	近藤　未奈			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　年	1年	総単位数	2
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

この授業では、語彙、リスニング、会話、文法の各技能の演習をバランス良く行い、医療実務に役立つ総合的な英語力の養成をはかります。基礎的な英語文法の確認をしつつ医療関連の語彙を増やし、ロールプレイ方式での会話練習を行うことにより、実際の現場で英語を使うことのできる能力の習得を目指します。

■ 到達目標

医療専門分野に関係した基礎的な英語表現に慣れ、現場で実際に英語が必要とされた時に適切な対応ができる英語運用能力を身につける。

■ 授業計画

第１回　医療現場での英語の必要性について／医療分野の英語とは
第２回　Meeting Patients（患者登録と生活習慣アンケートをする）
第３回　Taking a Medical History（病歴および健康状態を把握する）
第４回　Assessing Patients' Symptoms（病状や症状をアセスメントする）
第５回　Taking Vital Signs（バイタルサインを確認する）
第６回　Taking a Specimen（検体を採取する）
第７回　Conducting Medical Examinations（検査の注意や指示をする）
第８回　Directions（道案内の英語）
第９回　Assessing Pain（疾病・負傷による痛みをアセスメントする）
第10回　Advising about Medication（処方された投薬についてアドバイスする）
第11回　Improving Patients' Mobility（体の機能回復を介助・援助する）
第12回　Appointments（病院の予約・日時の表現）
第13回　Maintaining a Good Diet（栄養についてアドバイスする）
第14回　Caring for Inpatients（入院患者のケアをする）
第15回　Coping with Emergencies（緊急事態に対処する）

■ 評価方法

受講態度（予習･授業への取り組みなど:40%)、小テスト（20%)、筆記試験（40%）を総合的に評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書の予習指示があった場合、指定の箇所の英文を読み、必要に応じて英和辞書を使い、内容を日本語で理解・説明できるようにしておく。小テスト対策の勉強は教科書の内容をスムースに理解するための予習も兼ねているので、範囲として指定された語句の意味を覚えておくこと。

■ 教　科　書

書　名：Caring for People（医療分野で働くためのコミュニケーションコース）
著者名：黛美智子 , 宮津多美子 , Philip Hinder, 志田京子 , 杉田雅子 , 山下巌
出版社：センゲージ ラーニング株式会社

■ 参考図書

書　名：チーム医療のためのメディカル英語 基本表現100
著者名：矢田公 , 西村甲 , 小林由直 , 鈴木哲
出版社：講談社

■ 留意事項

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語以上に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。

授業科目	国語表現学（レポート作成法）				
担当者	岡崎　昌宏			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

レポートの作成など、大学では、自身の考えを練り、それを正確に、過不足なく表現する能力が一層求められる。そしてそれは、社会の様々な場面でも必要となる能力である。この授業では、正確な表現のために必要な知識や技術を習得するとともに、レポートの作成方法を実践的に学ぶ。また、優れた文章を読み、表現技術への意識を高める。

■ 到達目標

自身の考えを整理し、それをレポートなどの形で正確に表現できるようになる。

■ 授業計画

第１回　概説―正確な表現の重要性
第２回　文章を書くための知識（1）―表記など
第３回　文章を書くための知識（2）―原稿用紙の使い方、段落など
第４回　正確な文章のために（1）―説明不足の文をなくす
第５回　正確な文章のために（2）―過度な説明、重複説明をなくす
第６回　正確な文章のために（3）―長くなってしまった文を、短くする
第７回　正確な文章のために（4）―句読点への意識を高める、語彙力を高める
第８回　論文・レポートの文章を読み、その表現の特徴を学ぶ
第９回　レポートを書く（1）―様々な事実を集める
第10回　レポートを書く（2）―意見の方向を定める
第11回　レポートを書く（3）―自説の明確な根拠を考える
第12回　レポートを書く（4）―基本的な展開方法を知る
第13回　レポートを書く（5）―レポートを書き、推敲する
第14回　様々な文章に接し、表現への意識を高める
第15回　まとめ

■ 評価方法

平常点（授業中の課題への取り組みも含む）100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

前回までの内容をよく復習したうえで授業にのぞむこと。

■ 教　科　書

授業中に配布するプリントを用いる。

■ 参考図書

必要に応じて授業中に紹介する。

■ 留意事項

授業科目	人間関係学				
担当者	小海　宏之			国家出題基準	Ⅱ-4-B
学科名	理学療法学専攻	学　年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　容

人間関係学とは、人間関係におけるヒトの心の仕組みや機能に関する心理学が基礎にある。そこで、本論では、発達心理学、社会心理学、臨床心理学などさまざまな視点も含めて体系的に概説する。なお、理解を深めるために毎回ワークを行う。

■ 到達目標

人間関係の基本的な構造と機能について理解できるようになる。また、リハビリテーションスタッフとしての関係の作り方、治療的な自己や集団の活用法について理解できるようになる。

■ 授業計画

第１回　人間関係学の概論
第２回　心の理解
第３回　対人関係の心理
第４回　パーソナリティの心理
第５回　生涯発達の心理
第６回　親子関係の心理
第７回　青年の心理
第８回　職場の人間関係の心理
第９回　恋愛と結婚の心理
第10回　流行とマス・コミュニケーション
第11回　社会病理と犯罪
第12回　脳の機能と行動
第13回　夢と意識・無意識
第14回　心の健康と不適応
第15回　心の癒し

■ 評価方法

毎回のワークやコミュニケーションカードへの取り組み40％、到達度の確認としての平常レポート60％の評価割合とする評価方法によって、本講義で学習した知識や理解の程度を評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

理解が難しかった領域は、授業後に必ず教科書の該当ページで復習をすること。

■ 教　科　書

書　名：人間関係の心理学：体験をとおして学ぶ心理学
著者名：蓮見将敏，小山望（編）
出版社：福村出版，1998

■ 参考図書

書　名：神経心理学的アセスメント・ハンドブック
著者名：小海宏之
出版社：金剛出版，2015

書　名：高齢者こころのケアの実践：上巻　認知症ケアのための心理アセスメント
著者名：小海宏之，若松直樹（編）
出版社：創元社，201259:66

書　名：高齢者こころのケアの実践：下巻　認知症ケアのためのリハビリテーション
著者名：小海宏之，若松直樹（編）
出版社：創元社，2012

■ 留意事項

授業科目	心理学				
担当者	鈴木　暁子			国家出題基準	Ⅱ-4
学科名	理学療法学専攻（選択）	学　　年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻（必修）	開講時期	前期	選択･必修	選択 / 必修

■ 内　　容

心理学は人間の心や行動を客観的に理解するための学問である。人間の心というブラックボックスを科学的に解き明かしていく心理学の研究方法は、私たちの身の回りの事象を客観的に理解する事にも役立つ。この広く深い学問の魅力をできる限り伝えたい。

■ 到達目標

人を援助する職業に必要な人間理解の糸口となる心理学の基礎知識を学習するとともに、国家試験科目である臨床心理学の基礎となる知識も身につける事を目標とする。

■ 授業計画

第１回　心理学の考え方①
第２回　心理学の考え方②
第３回　トラウマについて
第４回　人の性格①
第５回　人の性格②
第６回　知能と記憶
第７回　学習①
第８回　学習②
第９回　動機づけと情動①
第10回　動機づけと情動②
第11回　グループワーク
第12回　社会心理学入門①
第13回　社会心理学入門②
第14回　人と音楽
第15回　臨床に活かすコーチング

■ 評価方法

定期試験80%　提出課題10%、授業態度10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講師の指示に従ってください。

■ 教　科　書

書　名：改訂版　はじめて出会う心理学
著者名：長谷川寿一　他
出版社：有斐閣アルマ

■ 参考図書

書　名：心理学概論
著者名：山内弘継・橋本宰監修
出版社：ナカニシヤ出版

■ 留意事項

配布資料が多いので整理方法をよく考えて下さい。

授業科目	医療英語				
担当者	近藤　未奈			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

この授業では、医療の現場で使われている英語表現や基本的用語、また、専門用語の単語の成り立ちを学びます。英語文献・論文の内容を正確に読むために必要な文法項目を復習し、ある程度の長さの英文や、英語論文の抄録を読む演習も適宜行います。以上を通じて、理学療法士・作業療法士として必要不可欠な英語で書かれた学術論文を理解する土台を養います。

■ 到達目標

医学英語に特有の語彙や表現に慣れ、国際的な学術雑誌やデータベースに掲載されている英語文献の内容を正確に、かつ効率的に理解できる力を身に付ける。

■ 授業計画

第１回　医学英語の基本構造
第２回　接尾辞と接頭辞
第３回　英文法の重要項目（1）
第４回　身体部位の用語
第５回　骨の用語
第６回　英文法の重要項目（2）
第７回　筋肉の用語
第８回　神経の用語
第９回　英文法の重要項目（3）
第10回　英文読解（1）症例を読む
第11回　英語論文の基礎知識（1）論文・抄録の構造と内容の読み取り方
第12回　英文読解（2）　論文の抄録を読む
第13回　英語論文の基礎知識（2）　英語データベースの利用
第14回　カルテに関する用語
第15回　英文読解（3）

■ 評価方法

受講態度（予習や授業中の発表など：30％）、小テストおよびレポート課題（30%）、筆記試験（40%）の結果を総合的に評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎回の授業で学んだ新しい内容はすぐに復習し、覚えるべき内容を確実に定着させていくこと。語句についての学習事項は特に、意識して覚えるようにすることで後の授業内容にも役立ちます。英文読解の予習課題が出た場合は辞書や用語集でわからない語句の意味をあらかじめ調べ、適切な和訳を作成してくること。

■ 教　科　書

書　名：音声と例文でおぼえる基本医療単語1000
著者名：笹島茂 , Chad Godfrey, 小島さつき
出版社：南雲堂

■ 参考図書

■ 留意事項

小テストは指定の教科書より出題します。テストの詳細は初回授業で説明します。
授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。
毎回配布される資料は教科書として扱い、過去に配布されたものも毎回持ってきてください。
成績評価基準の詳細や、その他諸注意については初回授業で伝えるので、受講の意思のある場合は必ず初回から出席してください。

授業科目	**情報処理学**				
担 当 者	**永井　文子**			国家出題基準	
学 科 名	**理学療法学専攻**	学　　年	**1年**	総単位数	**2単位**
	作業療法学専攻	開講時期	**前期**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

Microsoft Windows© および Microsoft Office© アプリケーションを使用し、ファイル・フォルダの管理、文書作成、レポート作成、表計算、グラフ作成、発表資料作成等、学習に必要な PC 操作スキルを学習する。さらに、セキュリティと情報モラルの基礎を学習する。

■ 到 達 目 標

・講義支援システム「Moodle」へのアクセス方法とファイル提出方法を理解し利用できる。
・PC から利用する Web メールシステムを使用し、学校発行のメールアドレスでの送受信ができる。
・文書作成ソフトを使用し、見やすく体裁の整った文書やレポートを作成できる。
・表計算ソフトを使用し、数式や書式設定を応用した表やグラフを作成・操作できる。
・プレゼンテーション資料作成ソフトを使用し、簡単な発表用スライドを作成できる。
・レポートの特徴と作成の流れ、ルールとマナーの存在を理解してレポートを作成できる。
・セキュリティと情報モラルの一般的な事例における、適切な対応／対策を理解し各自の ID、メールアドレスおよびそれぞれのパスワードの管理ができる。

■ 授 業 計 画

第１回　授業概要。ブラウザの利用。学校メールアドレス／パスワード設定。e メール送受信。フォルダ及びファイル作成。メールへのファイル添付。タイピング練習方法。
第２回　情報倫理、講義支援システム Moodle の ID ／パスワード設定、ログイン／ログアウト。ファイル取得と提出操作。
第３回　文書作成①　　Word2013概要、日本語入力（変換操作）、文書作成における書式設定①
第４回　文書作成②　　文書作成と書式設定②、表の作成と編集、印刷機能紹介
第５回　文書作成③　　各種オブジェクトの利用と文書構成支援機能
第６回　文書作成課題（Word 課題）　　作成・提出
第７回　表計算①　　Excel2013概要、入力、集計表作成、シート操作
第８回　表計算②　　集計表における数式（四則計算、関数）
第９回　表計算③　　グラフ作成、文書ファイルとの連携利用、データベース機能紹介
第10回　表計算課題（Excel 課題）　　作成・提出
第11回　プレゼンテーション①　　PowerPoint2013概要、入力、保存、各種オブジェクトの利用
第12回　プレゼンテーション②　　発表資料作成と特殊効果の設定
第13回　プレゼンテーション③　　画像の加工とスライドショー関連機能
第14回　総合演習準備　　文書及び集計表の作成と連携利用、ファイル管理操作
第15回　総合演習課題　　作成・提出

■ 評 価 方 法

提出課題（８～ 10回）40%、総合演習課題60%（但し、受講態度に著しく問題がある場合は減点対象とします）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

PC キーボートのタイピングスキルを各自時間と環境を工夫してトレーニングすることを時間外の学習として必須とする。期初に案内する「オンライン上の練習サイト」上での「目標レベル」に到達するよう継続して練習すること。

■ 教　科　書

書　名：30時間アカデミック　情報リテラシー Office2013 （ISBN978-4-407-33253-7）
著者名：杉本くみ子／大澤栄子
出版社：実教出版株式会社

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	医療情報学				
担当者	周藤　俊治			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　年	1年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

現代の保健・医療・福祉の分野において欠かせない ICT の活用に必要な基礎知識として①デジタルデータがどのように発生しネットワーク上を流れているのか、②医療機関にどのようなシステムが導入・運用されているのか、③情報の収集や活用に関して講義を行なう。

■ 到達目標

①情報に関する計算ができる（情報量（A/D 変換），転送速度)。
②保健医療情報システムの概要や、関連法規について説明できる。
③データのとりまとめ（代表値，散布度）や統計資料について説明できる。

■ 授業計画

第１回　情報学（Ⅰ） 情報とは
第２回　情報学（Ⅱ） 情報量の計算について
第３回　情報学（Ⅲ） ネットワーク技術について
第４回　情報学（Ⅳ） 情報セキュリティ
第５回　保健医療情報システム（Ⅰ）医用画像について
第６回　保健医療情報システム（Ⅱ）電子カルテについて
第７回　保健医療情報システム（Ⅲ） 施設内の情報システムについて
第８回　保健医療情報システム（Ⅳ） 施設間の情報システムについて
第９回　統計基礎（Ⅰ）尺度・度数分布について
第10回　統計基礎（Ⅱ）代表値について
第11回　統計基礎（Ⅲ）散布度について
第12回　医療統計（Ⅰ）病院の統計資料
第13回　医療統計（Ⅱ）比と率と割合
第14回　医療統計（Ⅲ）相対危険度
第15回　医療情報の倫理　医の倫理・情報の倫理・関連法規について

■ 評価方法

筆記試験50％　授業内課題（到達度確認） 50％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義情報（http://www.medbb.net ）および、講義中に配付した資料を基に予習･復習すること。特に「到達度確認」は、確実に理解しておくこと。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

講義資料は適宜配布します。また講義情報は http://www.medbb.net に掲載します。

授業科目	医療情報学				
担当者	星　雅丈			国家出題基準	
学科名	作業療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

現代の医療・介護・福祉の分野においてICTの活用は必須事項である。将来、医療・介護の現場で働くセラピストは、あるレベル以上の情報処理技術や、医療情報に関する基礎知識を身に着けておかなければ、恥をかくに留まらず、現場に迷惑をかけることになる。本講義では、医療における情報の役割や守るべき倫理・セキュリティ、および、医療情報システムが現場で如何に利用されているかを解説する。そして、今後の調査研究活動に必要なデータ解析に関する情報処理技術や統計の基礎知識について講義する。

■ 到達目標

・情報の役割・重要性・危険性を理解し、基本情報処理技術を身に着け、ICTを適切に利用できる。
・医療における情報システムの目的と利用方法を理解し、実習病院における診療情報の流れをイメージできる。
・調査研究活動において必要とされる最低限のデータ処理・解析技術を身に着け、情報の利活用に資する資料を作成することができる。

■ 授業計画

第１回　情報学（Ⅰ）　情報と社会の関わりについて
第２回　情報学（Ⅱ）　情報の特質と医療情報について
第３回　情報学（Ⅲ）　医療における情報と情報処理技術について
第４回　情報学（Ⅳ）　情報通信・ネットワーク技術について
第５回　医療情報の倫理（Ⅰ）　関係法規・セキュリティ技術について
第６回　医療情報の倫理（Ⅱ）　個人情報保護・情報倫理について
第７回　医療情報システム（Ⅰ）　オーダーエントリー・電子カルテシステムについて
第８回　医療情報システム（Ⅱ）　医用画像システム・リハビリテーション部門システムについて
第９回　医療情報システム（Ⅲ）　わが国の医療制度と医療情報システムの活用について
第10回　演習：表計算ソフト基本操作の復習／小テストの解説
第11回　演習：医療統計（Ⅰ）　尺度と度数分布・基本統計量について
第12回　演習：医療統計（Ⅱ）　医療評価指標について
第13回　演習：医療統計（Ⅲ）　統計的仮説検定について（パラメトリックな検定手法）
第14回　演習：医療統計（Ⅳ）　統計的仮説検定について（ノンパラメトリックな検定手法）
第15回　演習：調査研究（Ⅴ）　精度と真度／コホート研究とケースコントロール研究について

■ 評価方法

小テスト：30%　課題提出：20%　期末テスト（課題）：50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

皆さんが医療現場に入職した際、新人として期待されることのひとつにコンピュータを扱う技術があります。四年制大学から病院に入る皆さんは、技術を中心として学んできた専門学校生とは異なり、研究活動や演習などで身に着けた、より幅の広い知識やアカデミックな経験が求められるのです。

本科目ではその一端を学びますので、情報処理用語やセキュリティ・情報倫理に関する小テストでは、それまでの講義の内容を配布資料を元にしっかり復習してください。演習では、できる限り他人の力を借りずに、試行錯誤することを望みます。卒業研究や入職後の研究活動に必要な、データ処理技術を習得する第一歩と考え、労をいとわず毎回真剣に自分自身で取り組んでください。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：新版　医療情報　医療情報システム編　（第3版（2016年4月発刊予定）まで購入をお待ちください）
著者名：日本医療情報学会編集
出版社：篠原出版新社

書　名：新版　医療情報　情報処理技術編　（第３版（2016年４月発刊予定）まで購入をお待ちください）
著者名：日本医療情報学会編集
出版社：篠原出版新社

書　名：第３版　医療情報サブノート
著者名：日本医療情報学会医療情報技師育成部会　編集
出版社：篠原出版新社

■ 留意事項

授業科目	物理学				
担 当 者	萩原　直樹			国家出題基準	Ⅰ-3 の基礎
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

医療に携わる者に必要な「状況の正確な把握と分析する力」･「原因分析のための論理的思考力」･「モデルと仮説を設定し課題を解決する力」を育成する。そのために、リハビリステーションの基礎となる力学分野と医療機器への応用のもとになる電磁気学のの分野の解説と演習を行う。

■ 到 達 目 標

現象を、原子論に基づいて理解と解釈を行う思考方式の定着。現象を構成する要素を見出し、成立する法則を適用して、課題を解決するステップの習得。場の概念を理解し、電磁場と要素の相互作用をアナロジーとした、「治療場」の概念の作成。新しいリハビリステーション法開発のための、物理学の研究スキーマの修得。

■ 授 業 計 画

第１回　物理学の発想法と方法（教科書ｐ .1～ 14）（講義ノート1）
第２回　ベクトルによる力の表記（教科書ｐ .15～ 18）（講義ノート2）
第３回　運動の解析（Ⅰ）（教科書ｐ .19～ 22）（講義ノート2.2’）
第４回　運動の解析（Ⅱ）運動の法則（Ⅰ）（教科書 p.22～ 25）（講義ノート2’）
第５回　運動の解析（Ⅱ）演習（教科書ｐ .26～ 30）（講義ノート３）
第６回　運動の法則（Ⅲ）運動量　エネルギー（教科書ｐ．29～ 41）（講義ノート4）
第７回　モーメントと応力（教科書ｐ .42～ 47）（講義ノート5）
第８回　回転運動（Ⅰ）（教科書 p.48～ 52）（講義ノート6）前半部分のテスト
第９回　回転運動（Ⅱ）（教科書 p.53～ 55）（講義ノート6）
第10回　流体（教科書 p.189～ 200）（講義ノート７）テスト解説　結果連絡
第11回　電気力と電場（教科書 p.59～ 71）（講義ノート8）
第12回　電場のエネルギー　コンデンサー（教科書 p.71～ 94）（講義ノート9）
第13回　電気回路（教科書 p.95～ 110）（講義ノート10）
第14回　電流と磁気（教科書 p.111～ 136）（講義ノート11）
第15回　放射線　医療機器（教科書 p.201～ 218）（講義資料）

■ 評 価 方 法

平常点30％（講義ノートほかの提出物）, 筆記試験70％（前半30％後半40％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習：事前配布の講義ノートをできる限り完成させておく。
講義：講義ノートを完成させ、同時に自己採点を行う。講義後に担当者に質問する。
復讐：講義終了時に配布された復習用講義ノートを完成させ、次回提出。

■ 教　科　書

書　名：生命科学のための基礎シリーズ　物理
著者名：大島　泰郎　他四名
出版社：実教出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	生物学				
担当者	林　　研	国家出題基準	Ⅰ-1，2の基礎		
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

細胞・遺伝子など生物の基本的な仕組みを踏まえつつ、人間の身体のはたらきを学ぶ。

■ 到達目標

生物学の基礎を習得し、マクロな人体とミクロの世界を結びつけて理解できるようになる。

■ 授業計画

第１回　ガイダンス、生物とは何か
第２回　細胞の構造
第３回　細胞分裂と発生
第４回　細胞の分化と幹細胞
第５回　神経・筋・骨
第６回　遺伝
第７回　遺伝子と DNA
第８回　遺伝子の発現
第９回　酵素と ATP
第10回　エネルギーの生成
第11回　血液と免疫
第12回　内分泌系と自律神経系
第13回　生体調節
第14回　刺激の受容
第15回　まとめ

■ 評価方法

筆記試験（80%）、小テスト１回（20%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎回配布する復習問題を、次の週までに解いておくこと。

■ 教　科　書

書　名：生物学　ヒトと環境の生命科学
著者名：川﨑祥二・古庄律　編著
出版社：建帛社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	自然科学概論				
担当者	林　　研			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

■ 到達目標

人間の身体を理解する土台となる基礎知識と科学的素養を身につける。

■ 授業計画

第１回　ガイダンス、科学の歴史
第２回　科学の方法
第３回　ニュートンと力学
第４回　回転運動と仕事
第５回　宇宙と物理
第６回　物質
第７回　物質の状態
第８回　物質の変化
第９回　エネルギーと環境
第10回　地球科学
第11回　進化と遺伝子
第12回　人体理解の歴史
第13回　脳科学
第14回　新しい科学
第15回　まとめ

■ 評価方法

筆記試験（100%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

補助資料で復習問題を出したときは、各自解いておくこと。

■ 教　科　書

使用しません。適宜プリントを配布します。

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	基礎ゼミナール				
担当者	専任教員　他（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

自分自身の療法士として将来像を具体化し，求められる学習態度･学習方法，療法士としてのコミュニケーション技能，対象者の理解，リスク管理の概要，プレゼンテーション方法，レポートの書き方などについて，講義とグループ活動を通して学ぶ．さらに，自己の生活を見直すセッションも設ける．

■ 到達目標

1．自分の将来像をイメージし，早期に大学生としての学習方法や学習に対する構えをつくることができる
2．療法士として求められる態度・知識・技能を知り，一歩でも近づくための方向付けを行うことができる
3．他者の意見を理解する能力，自分の考えを整理して表現する能力，情報を収集し整理する力，問題解決能力，コミュニケーション能力，プレゼンテーション能力を修得する

■ 授業計画

第1回　在学生の話：高校と大学の違い / 大学ポリシー　カリキュラム構造など
第2回　ソーシャルネットサービスの利用時のマナーと防犯について学ぼう
第3回　違法薬物について学ぼう（薬物乱用防止講演会）
第4回　先輩セラピストの話を聞いてみよう　（ディスカッション・まとめ）
第5回　先輩セラピストの話を聞いてみよう　（ディスカッション・まとめ）
第6回　障がいのある当事者の話　1　　身体障害を有する方　　高次脳機能障害を有する方
第7回　障がいのある当事者の話（ディスカッション・まとめ）
第8回　療法士としてのリスク管理について学ぼう①（一次救急救命法 AED の使用方法）
第9回　療法士としてのリスク管理について学ぼう②
第10回　興味あるテーマについて調べてレポートしよう　（講義）
第11回　自分自身のマナーについて見直そう（マナーアップ研修）
第12回　障がいのある当事者の話　2　　知的障害を有する方
第13回　障がいのある当事者の話（ディスカッション・まとめ）
第14回　興味あるテーマについて調べてレポートしよう
第15回　興味あるテーマについて調べてレポートしよう
第16回　国家試験の問題を解いてみよう　　勉強の方法を学ぼう
第17回　ハラスメントについて学ぼう
第18回　障がいのある当事者の話　3
　　精神障害をお持ちの方
第19回　障がいのある当事者の話（ディスカッション・まとめ）
第20回　技能としてのコミュニケーション
第21回　障がいのある当事者の話　4
　　発達障害をお持ちの方・ご家族
第22回　障がいのある当事者の話（ディスカッション・まとめ）
第23回　障がいのある当事者の話　5
　　障害者スポーツに取り組んでおられる方
第24回　障がいのある当事者の話（ディスカッション・まとめ）
第25回　興味あるテーマについて調べてレポートしよう
第26回　興味あるテーマについて調べてレポートしよう
第27回　興味あるテーマについて調べてレポートしよう

第28回　医療職を目指す学生としての基本的資質
　　自分の生活（生活リズム，学習時間や方法，社会的な態度など）を振り返り，次に備えよう
第29回　目指すセラピスト像となすべきこと　ディスカッション
第30回　目指すセラピスト像となすべきこと　ディスカッション 発表

■ 評価方法

授業への取り組み態度・貢献度：60%，授業ノート：30%，発表点：10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

提示された「次回の課題」に取り組んで授業に臨むこと
特に，ディスカッションの前には，自分に考えをまとめておく（各回考えておくべき事項を伝えます）
各授業終了後には，担当教員とのディスカッションとリアクションペーパーの作成により，授業内容を振り返る

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

積極的に参加し，取り組みましょう
講師の都合により日程を変更する可能性があります
授業に欠席した場合は，取り組み態度の点数と発表点は0点となります.

授業科目	医の倫理				
担当者	浅野　遼二			国家出題基準	Ⅱ-1-A
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

「医の倫理」の思想的系譜を明らかにし、「医の倫理」の中心問題を講義する。

■ 到達目標

理学療法や作業療法などのリハビリステーション医療を学ぶ者に必要な「医の倫理」の知識を習得することにある。

■ 授業計画

第１回　医療の現在
『病院で死ぬということ』（山崎彰朗、主婦の友社）を読み、末期患者のおかれている状況を知り、医療学としての心構えを準備する。
第２回　死生観の問題
『死ぬ瞬間』（エリザベス・キューブラー・ロス著、読売新聞社）より末期患者の心理過程を示し、末期医療における医療者と患者の諸問題を論究する。
第３回　「医の倫理」思想史
「ヒポクテラスの誓い」から「リスボン宣言」までの「医の倫理」の系譜と思想を簡潔に講義する。
第４回　理学療法士と作業療法士の綱領
理学療法士と作業療法士の倫理規定の内容を検討する。
第５回　「医の倫理」の中心問題～恩恵と自律
「医の倫理」の諸原理～自律、恩恵、正義、無危害等～講義する。
第６回　「医の倫理」の中心問題～医師患者関係・パターナリズム～
医師と患者関係を規定した過去の「パターナリズム」思想を講義する。
第７回　「医の倫理」の中心問題～医師患者関係・インフォームド・コンセント～
医師と患者関係を規定する現代の「インフォームド・コンセント」思想を講義する。
第８回　「ケア倫理」としての「医の倫理」
20世紀後半において一躍注目を集めた「ケア倫理」を講義し、「医の倫理」の進むべき方向を明らかにする。

■ 評価方法

定期レポート70%　平常レポート（授業態度を含む）30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義プリントと講義資料は丁寧に読んどくこと。

■ 教　科　書

講義プリントと講義資料を配布する

■ 参考図書

１）「生と死の文化史」、懐徳堂記念会編著、和泉書院
２）「医療倫理Ｑ＆Ａ」、関東医学哲学・倫理学会編、太陽出版
３）「慈恵医大青戸病院事件」、小松秀樹著、日本経済評論社
４）「医療倫理」、浅井篤編著、勁草書房
５）「病院で死ぬということ」山崎彰郎著、主婦の友社（或は文春文庫）

■ 留意事項

無断欠席や遅刻、早退、、早退、特に注意すること

授業科目	障害者スポーツ入門				
担当者	島　雅人			国家出題基準	
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	自由

■ 内　　容

障がい者福祉施策と障がい者スポーツについて、講義と実技実習を交えて学ぶ。障がい者スポーツの意義と理念を理解し、身体障害、知的障害、精神障害とスポーツについて理解を深めるとともに、日本国内における障がい者スポーツの現状と指導者育成制度について学ぶ。また、障がいに応じたスポーツの工夫や、障がい者との交流をはかり、障がい者スポーツ指導者としての導入を図る。本講義を履修することで、地域の障がい者で初めてスポーツを行う方に対して、スポーツの喜びや楽しさを重視したスポーツの導入を支援できるような知識と技術を身につける。

■ 到達目標

1．障がい者福祉施策と障がい者スポーツについて概説できる。
2．障がい者スポーツの意義と理念を理解できる。
3．身体障害、知的障害、精神障害とスポーツについて理解できる。
4．日本国内における障がい者スポーツの現状と指導者育成制度について説明できる。
5．障がい者との交流をはかり、スポーツの喜びや楽しさを重視したスポーツの導入を支援できる。

■ 授業計画

第1回　障がい者福祉施策と障がい者スポーツ1（0.5)、障がい者スポーツの意義と理念1（1.0）
第2回　障がい者スポーツの意義と理念（1.0)、文化としてのスポーツ（0.5）
第3回　全国障がい者スポーツ大会の歴史と目的と意義（1.5）
第4回　全国障がい者スポーツ大会の歴史と目的と意義（0.5）
　　（公財）日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導者制度（1.0）
第5回　全国障がい者スポーツ大会の概要（1.0）
　　全国障害者スポーツ大会選手団の編成とコーチの役割（0.5）
第6回　全国障害者スポーツ大会の実施競技（1.0）　安全管理1（0.5）
第7回　安全管理2（0.5）ボランティア論1（1.0）
第8回　ボランティア論2（1.0)、スポーツと栄養（0.5）
第9回　スポーツと心理（1.5）
第10回　障がいの理解とスポーツ（身体、知的、精神、視覚など）（1.5）
第11回　障がい者のスポーツ指導における留意点1（1.5）
第12回　障がいに応じたスポーツの工夫・実施（実技）（1.5）
第13回　障がいに応じたスポーツの工夫・実施（実技）（1.5）
第14回　障がい者との交流（実技）　学外（1.5）
第15回　障がい者との交流（実技）　学外（1.5）

■ 評価方法

筆記試験50%、課題レポート　50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

日頃から障がい者スポーツに関する情報を意識して得るようにしてください。テレビやインターネットで多くの情報を得ることができます。また、地域や大学が主催するイベントに参加して、できる限り障がい者スポーツに関わる機会を多く設定し、実体験を通じて障がい者スポーツの魅力を感じ、自分自身が出来ることについて考え行動することを望みます。

■ 教　科　書

書　名：障害者スポーツ指導教本　初級・中級＜改訂版＞
著者名：（公財）日本障がい者スポーツ協会　編
出版社：ぎょうせい

■ 参 考 図 書

書　名：ようこそ、障害者スポーツへ　パラリンピックを目指すアスリートたち
著者名：伊藤数子
出版社：廣済堂出版

書　名：障害者（アダプテッド）スポーツの世界―アダプテッド・スポーツとは何か
著者名：藤田 紀昭
出版社：角川学芸出版

書　名：障害者スポーツの環境と可能性
著者名：藤田 紀昭
出版社：創文企画

■ 留 意 事 項

本科目は、中級障がい者スポーツ指導員資格を取得するために必修となる科目である。
欠席した場合は資格取得ができなくなるため、出席に関しては十分に注意すること。

授業科目	リハビリテーション概論				
担 当 者	井上　悟			国家出題基準	Ⅲ-2
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

リハビリという言葉は、一般社会でも非常によく使われるようになった。通常、疾病や外傷によって生じた障害に対する機能回復のための治療･訓練として用いられてきている。しかし､この解釈は､リハビリテーションの中の極めて狭い領域を示しているに過ぎない。リハビリテーション本来の理念を歴史的背景を含め紹介する。

■ 到 達 目 標

リハビリテーション（rehabilitation）を正しく理解する。正しい知識をもって、リハビリテーション医療の対象や現状、各専門職の役割について知る。

■ 授 業 計 画

第１回　リハビリテーションとは？　その概念・理念・定義
第２回　健康・疾病・障害の概念と分類
第３回　障害論（国際障害分類、国際生活機能分類）
第４回　廃用症候群とは
第５回　障害の心理と障害受容
第６回　リハビリテーションの過程（評価とは？）
第７回　リハビリテーションの諸段階：医学的・職業的リハビリテーション
第８回　リハビリテーションの諸段階：社会的・教育的リハビリテーション
第９回　医療と各職種に関わる諸問題
第10回　リハビリテーション専門職とその役割
第11回　チーム・アプローチ：評価と記録の重要性
第12回　ADL,QOL の概念と評価法
第13回　地域リハビリテーションと高齢者対策
第14回　リハビリテーションを支える社会保障制度と法律１
第15回　リハビリテーションを支える社会保障制度と法律２

■ 評 価 方 法

筆記試験　70%、授業態度・他　30%　で総合評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業前には、教科書の授業該当範囲を予習しておくこと

■ 教　科　書

書　名：リハビリテーション概論　（第３版）
著者名：上好秋孝・田島文博
出版社：永井書店，2014年（最新版で），3000円税別

■ 参 考 図 書

書　名：リハビリテーション総論（第２版）
著者名：椿原　彰夫
出版社：診断と治療社：2011年、3600円

■ 留 意 事 項

指定の教科書は後期開講のリハビリテーション医学の参考書として利用可能。各回の講義テーマ、内容については関連する講義の進捗状況により変更することがあります。

授業科目	リハビリテーション医学				
担当者	須貝　文宣	国家出題基準	Ⅱ-3-ABC　Ⅱ-6，8，9，10，13		
学科名	理学療法学専攻	学　年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

リハビリテーション医学の目的は、病気や外傷により生じた障害を医学的に診断・治療し、機能回復と社会復帰を総合的に提供することです。その目的を、どのように達成したら良いのかを受講者とともに考えたいと思います。

■ 到達目標

講義を参考にして、リハビリテーションに対する自分の考えを持つことができ、リハビリテーション関連職種の専門家を目指すための明確な動機付けができることを期待しています。

■ 授業計画

第１回　障害の評価（主に神経学的所見の取り方・診かた）
第２回　脳卒中各論①（脳梗塞・診断）
第３回　脳卒中各論②（脳梗塞・治療）
第４回　脳卒中各論③（出血性脳卒中）
第５回　脳卒中各論④（脳卒中のリハビリテーションⅠ）
第６回　脳卒中各論⑤（脳卒中のリハビリテーションⅡ）
第７回　脊髄損傷①
第８回　脊髄損傷②
第９回　末梢神経障害
第10回　神経変性疾患
第11回　骨・関節疾患
第12回　内部疾患（循環器・呼吸器）
第13回　小児疾患
第14回　まとめ①（高齢者における諸問題）
第15回　まとめ②（補遺）

■ 評価方法

筆記試験（100％）。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前に教科書の該当箇所を読んでおくこと。授業後も、教科書（資料が配布された場合はその資料も）を参考にして復習すること。

■ 教　科　書

書　名：リハビリテーション医学テキスト　改訂第３版
著者名：三上真弘、出江紳一（編）
出版社：南江堂

■ 参考図書

書　名：リハビリテーション概論　改訂第２版
著者名：上好昭孝、土肥伸之（編）
出版社：永井書店

書　名：神経の病気
著者名：図説カラダ大辞典編集委員会　編
出版社：金沢医科大学出版局

■ 留意事項

私語など、他の受講者および講師の迷惑になる行為は、言うまでもなく厳禁です。医療業界で働くための最低限の常識を身につけて講義に臨んでください。

授業科目	疫学・公衆衛生学				
担当者	白井　文恵			国家出題基準	Ⅲ-1-B
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

地域で生活する人々の健康の維持・増進・向上のために必要な公衆衛生学について学ぶ。

■ 到達目標

①健康とは何か理解する。
②健康に生活するとはどのようなことか理解する。
③健康に生活することを保障する社会の仕組みを理解する。

■ 授業計画

第１回　公衆衛生学序論、保健予防概念
第２回　保健統計
第３回　疾病予防と健康管理、健康増進
第４回　環境保健
第５回　母子保健
第６回　高齢者保健、精神保健
第７回　感染症対策
第８回　学校保健・産業保健

■ 評価方法

筆記試験80％、レポート20％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前には教科書の目次で該当するところを読んでくること

■ 教　科　書

書　名：シンプル衛生公衆衛生学2016
著者名：鈴木庄亮、久道茂　監修
出版社：南江堂

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	**基礎解剖学**				
担 当 者	**柴田　雅朗**			国家出題基準	**Ⅰ-1-A**
学 科 名	**理学療法学専攻**	学　　年	**1年**	総単位数	**1単位**
	作業療法学専攻	開講時期	**前期**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

人体および人体を構成している細胞・組織・器官の形態・構造の基本を系統的に学ぶ.

■ 到達目標

人体の構造を理解するための基礎的知識を身につけ、説明することが出来る。

■ 授業計画

第１回　解剖学総論
　１．細胞・組織・器官・系　２．肉眼解剖と組織学　３．系統解剖と局所解剖学　４．発生学
　５．体表解剖学　６．人体の正常・異常・個体差　７．解剖学的姿勢　８．基本的な解剖学用語
第２回　骨学総論　１．骨の肉眼的構造　２．髄腔と骨髄　３．体腔
第３回　関節靱帯学総論
　１．線維性連結　２．軟骨性連結　３．滑膜性連結　４．関節の一般構造（関節包、滑膜、滑液）
　５．関節の特殊構造（関節円板、関節半月、関節靱帯、関節唇）
第４回　筋学総論
　１．筋の分類（平滑筋と横紋筋）　２．随意筋と不随意筋　３．骨格筋の基本形態
　４．腱と腱膜　５．筋の付着（起始と停止）　６．筋の作用（屈曲･伸展、内転･外転、内旋･外旋）
　７．主動筋、拮抗筋、協力筋
　８．骨格筋の補助装置（筋膜、支帯、筋間中隔、筋滑車、滑液包、腱鞘）
第５回　神経学総論１
　１．中枢神経系と末梢神経系　　２．求心性神経と遠心性神経　３．白質と灰白質
　４．神経細胞（神経細胞体、樹状突起、軸索、髄鞘）　５．神経線維と神経
第６回　神経学総論２
　１．脊髄の白質と灰白質　（前柱、後柱、前索、側索、後索）　２．脊髄の区分（頚髄～尾髄）
　３．脊髄髄節と脊髄神経（髄節、前根と後根、前枝と後枝）
第７回　組織および胚葉
　１．組織（上皮組織、支持組織）　２．胚葉（外胚葉、中胚葉、内胚葉）
　３.三層性胚盤と器官・組織形成
第８回　循環器系総論
　１．血管系の役割　２．血管（動脈・毛細血管・静脈の構造）
　３．動脈・静脈と動脈血・静脈血
　４．吻合　５．終動脈
第９回　心臓
　１．心筋細胞　２．心臓の位置　３．心臓を包む膜　４．心臓の内腔（心房と心室）
　５．肺循環と体循環
第10回　心臓
　１．房室弁（腱索と乳頭筋、左房室弁・右房室弁）　２．動脈弁（肺動脈弁・大動脈弁）
　３．心臓の血管（冠状動脈、冠状静脈洞）
第11回　動脈系
　１．大動脈　２．大動脈弓（腕頭動脈、左総頚動脈、左鎖骨下動脈）
　２．頭頚部に分布する動脈
　３．上肢帯と上肢に分布する動脈　４．胸部内臓・腹部内臓に分布する動脈

第12回　動脈系（続き）
　　1.脳の動脈
　　静脈系
　　1．右心房に注ぐ静脈　2．頭頚部からの静脈　3．上肢帯と上肢からの静脈
　　3．奇静脈　4．門脈
第13回　胎児循環
　　1．胎盤　2．臍静脈と臍動脈　3．静脈管（アランチウス管）　4．卵円孔
　　5．動脈管（ボタロー管）
　　リンパ系　1．リンパ管とリンパ節　2．胸管　3．右リンパ本幹　4．脾臓
　　練習問題配布
第14回　総復習１
　　復習のための練習問題（国家試験形式）とその解説
第15回　総復習２
　　復習のための練習問題（国家試験形式）とその解説

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習は必要ありませんが、復習を必ず毎回やって、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教　科　書

書　名：PT・OT・ST のための解剖学
著者名：渡辺正仁　監修
出版社：廣川書店

書　名：ネッター解剖学アトラス
著者名：相磯貞和　訳
出版社：南江堂

書　名：消っして忘れない解剖学　要点整理ノート
著者名：井上　馨・松村譲兒　編集
出版社：羊土社

■ 参考図書

■ 留意事項

欠席や遅刻をしないように心がけること。

授業科目	**運動器系の解剖学**				
担 当 者	**柴田　雅朗**			国家出題基準	Ⅰ-1-C
学 科 名	**理学療法学専攻**	学　　年	**1年**	総単位数	**1単位**
	作業療法学専攻	開講時期	**後期**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

運動器系のうち骨・関節靱帯については、解剖学基礎実習で既に学んだ。本科目では運動器系を構成しているもののうち、筋について詳細に学ぶ。

■ 到達目標

身体の各部を構成している筋の名称、支配神経、主な作用を説明することが出来る。

■ 授業計画

第１回　体幹の筋
　　１．固有背筋
第２回　体幹の筋（続き）
　　１．胸部の筋
第３回　体幹の筋（続き）
　　１．腹部の筋　２．骨盤の筋
第４回　上肢の筋　（軸骨格から上肢帯への筋）
　　１．僧帽筋　２．肩甲挙筋　３．菱形筋　４．前鋸筋　５．鎖骨下筋　６.広背筋
　　７．大胸筋　８．小胸筋
第５回　上肢の筋　（上肢帯から上腕骨への筋）
　　１．肩甲下筋　２．棘上筋　３．棘下筋　４．小円筋　５．大円筋　６.烏口腕筋
　　７．三角筋
第６回　上肢の筋　（上肢帯から上腕骨への筋）（続き）
　　１．上腕前面の筋　２．上腕後面の筋
第７回　上肢の筋　（上肢帯から上腕骨への筋）（続き）
　　１．前腕前面の筋　　２．前腕後面の筋
第８回　手の筋
　　１．母指球筋　２．小指球筋　３．中手筋
第９回　下肢の筋
　　１．寛骨筋　２．大腿前面の筋　３．大腿内側の筋　４．大腿後面の筋
第10回　下肢の筋（続き）
　　１．下腿前面の筋　２．下腿外側の筋　３．下腿後面の筋
第11回　下肢の筋（続き）
　　１．足底の筋
　　頭部の筋
　　１．表情筋　２．咀嚼筋　３．舌筋
第12回　頚部の筋
　　１．広頚筋　２．胸鎖乳突筋　３．舌骨筋群
第13回　頚部の筋（続き）
　　１．椎前筋群　２．斜角筋群
　　総復習のための練習問題配布
第14回　総復習１
　　復習のための練習問題（国家試験形式）とその解説
第15回　総復習２
　　復習のための練習問題（国家試験形式）とその解説

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習は必要ありませんが、復習を必ず毎回やって、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教　科　書

書　名：PT・OT・ST のための解剖学
著者名：渡辺正仁　監修
出版社：廣川書店

書　名：ネッター解剖学アトラス
著者名：相磯貞和　訳
出版社：南江堂

書　名：消っして忘れない解剖学　要点整理ノート
著者名：井上　馨・松村譲兒　編集
出版社：羊土社

■ 参考図書

■ 留意事項

欠席や遅刻をしないように心がけること。

授業科目	神経系の解剖学				
担当者	柴田　雅朗			国家出題基準	Ⅰ-1-D
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

中枢神経系および末梢神経系の各部について学習し、上行性および下行性伝導路についてを学ぶ。

■ 到達目標

中枢神経系および末梢神経系を構成している各部の名称や機能を説明でき、上行性および下行性伝導路の種類と各伝導路の主要な部位が言える。

■ 授業計画

第１回　神経系総論のまとめ
　　１．基礎解剖学で学んだ神経学総論の復習　２．髄膜、脳室、脳脊髄液
第２回　神経系の発生：１．大脳、中脳、橋、延髄、小脳の発生
　　脊髄の構造：１．基礎解剖学で学んだ脊髄の復習
第３回　脳の総論：１．大脳　２．間脳　３．中脳　４．橋　５．延髄　６．小脳
　　大脳：１．溝、回、葉　２．大脳皮質
第４回　大脳　（続き）：１．ブロードマン野　２．運動野、感覚野、連合野　３．優位半球
　　４．神経線維の種類
第５回　大脳　（続き）：１．大脳基底核　（機能、構造、障害）　２．内包　（構造、血管分布、脳卒中）
第６回　大脳　（続き）：１．扁桃体
　　間脳：１．視床　２．視床下部
　　中脳：１．中脳蓋　２．中脳被蓋　３．大脳脚
第７回　橋：１．橋底部　２．橋被蓋
　　延髄：１．オリーブ　２．錐体交叉　３．網様体
　　小脳：１．構成 [区分]　２．皮質と髄質　３．小脳脚
第８回　末梢神経系：１．脊髄神経とは　２．脊髄神経前枝　３．脊髄神経後枝
第９回　末梢神経系　（続き）：１．腕神経叢の構成　２．腕神経叢の障害
第10回　末梢神経系　（続き）：１．脳神経の総論　２．嗅神経、視神経　３．動眼神経　４．滑車神経
　　５.三叉神経　６．外転神経
第11回　末梢神経系　（脳神経続き）：１．顔面神経　２．内耳神経　３．舌咽神経　４．迷走神経
　　５．副神経　６．舌下神経
　　自律神経系：１．自律神経とは　２．交感神経　３．副交感神経
第12回　下行性伝導路：１.錐体路　（皮質脊髄路、皮質核路）　２．錐体外路　３．反射路
第13回　上行性伝導路：１.温痛覚（外側脊髄視床路）　２．粗大触圧角（前脊髄視床路）
　　３．精細触圧角（後索 - 内側毛帯路）　４．深部感覚（意識的な深部感覚：後索 - 内側毛帯路、無意識的な深部感覚：脊髄小脳路・楔状束小脳路）５．関連痛
　　総復習のための練習問題配布
第14回　総復習１：復習のための練習問題（国家試験形式）とその解説
第15回　総復習２：復習のための練習問題（国家試験形式）とその解説

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習は必要ありませんが、復習を必ず毎回やって、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教　科　書

書　名：PT・OT・ST のための解剖学
著者名：渡辺正仁　監修
出版社：廣川書店

書　名：ネッター解剖学アトラス
著者名：相磯貞和　訳
出版社：南江堂

書　名：消っして忘れない解剖学　要点整理ノート
著者名：井上　馨・松村譲兒　編集
出版社：羊土社

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	内臓系の解剖学				
担 当 者	赤松　香奈子			国家出題基準	Ⅰ-1-FG
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

医学の基礎である解剖学のうち内臓系について、単なる形態構造のみの学習にとどまらず、関連する器官とあわせてその構造と機能を学ぶ

■ 到達目標

医療専門職として必要な内臓系の構造と機能を、関連器官と合わせて理解する。
さらには適切な専門用語を用いて説明することができることを目標とする。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション、呼吸器系：鼻腔、咽頭、喉頭
第２回　呼吸器系：気管、肺
第３回　消化器系：口腔、食道
第４回　消化器系：胃、小腸
第５回　消化器系：大腸、直腸、肛門
第６回　消化器系：唾液腺、肝臓、胆嚢、膵臓
第７回　泌尿器系：腎臓
第８回　泌尿器系：尿管、膀胱
第９回　生殖器系：男性生殖器
第10回　生殖器系：女性生殖器
第11回　内分泌器系：膵臓、腎臓、副腎、甲状腺
第12回　内分泌器系：精巣、卵巣、消化管、脳下垂体
第13回　感覚器系：特殊感覚器（視覚器、聴覚器）
第14回　感覚器系：特殊感覚器（嗅覚器、味覚器）、皮膚感覚器
第15回　内臓諸器官の断層解剖学、まとめとふり返り

■ 評価方法

筆記試験　100％とする

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で配布する資料を各自、予習・復習すること

■ 教　科　書

書　名：PT・OT・ST のための解剖学
著者名：渡辺　正仁
出版社：廣川書店

書　名：ネッター　解剖学アトラス
著者名：相磯　貞和
出版社：廣川書店

■ 参考図書

書　名：イラスト解剖学
著者名：松村　譲児
出版社：中外医学書

■ 留意事項

授業科目	生理学Ⅰ				
担当者	木村　晃大			国家出題基準	Ⅰ-2-A ～ G
学科名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

人体の各臓器がいかに正常の機能を維持し、１個体としての機能を発揮しているのかを学習する。

■ 到達目標

各臓器における構造と機能を理解するだけでなく、生理学を通じて生命現象を理論的に考察する力を養う事を目標とする。

■ 授業計画

第１回　細胞と内部環境
第２回　筋肉１
第３回　筋肉２
第４回　神経１
第５回　神経２
第６回　末梢神経
第７回　自律神経
第８回　中枢神経１
第９回　中枢神経２
第10回　中枢神経３
第11回　中枢神経４
第12回　中枢神経５
第13回　代謝１
第14回　代謝２
第15回　前期総括

■ 評価方法

試験（90%:講義中に行われた小テストもこれに含める）と提出物（５%)･授業態度（５%）により評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

生理学は解剖学とならんで医療従事者にとって必須の科目であり、臨床医学を学ぶ上での土台となります。また国家試験でも、幅広く深い知識が問われます。そのことを意識して授業に臨んで下さい。
また、授業時間のみでは理解は深まりません。自分に適した自己学習方法を見つけ、積極的に予習・復習を行う習慣を身につけましょう。
また、毎授業ごとに渡される復習プリントは、講義プリントや参考書を見ながら次の講義までに完成させ、講義の最初に提出すること。

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　専門分野　生理学（第４版）
著者名：岡田　隆夫・長岡　正範
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：標準生理学（第７版）
著者名：小澤　瀞司　他
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	生理学Ⅱ				
担 当 者	木村　晃大			国家出題基準	Ⅰ-2-H ～ P
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

人体の各臓器がいかに正常の機能を維持し、１個体としての機能を発揮しているのかを学習する。

■ 到達目標

各臓器における構造と機能を理解するだけでなく、生理学を通じて生命現象を理論的に考察する力を養う事を目標とする。

■ 授業計画

第１回　血液１
第２回　血液２（免疫）
第３回　循環器１
第４回　循環器２
第５回　呼吸器１
第６回　呼吸器２
第７回　腎臓１
第８回　腎臓２
第９回　消化器１
第10回　消化器２
第11回　内分泌１
第12回　内分泌２
第13回　内分泌３
第14回　性と生殖
第15回　後期総括

■ 評価方法

試験（90%:講義中に行われた小テストもこれに含める）と提出物（５%)･授業態度（５%）により評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

生理学は解剖学とならんで医療従事者にとって必須の科目であり、臨床医学を学ぶ上での土台となります。また国家試験でも、幅広く深い知識が問われます。そのことを意識して授業に臨んで下さい。
また、授業時間のみでは理解は深まりません。自分に適した自己学習方法を見つけ、積極的に予習・復習を行う習慣を身につけましょう。
また、毎授業ごとに渡される復習プリントは、講義プリントや参考書を見ながら次の講義までに完成させ、講義の最初に提出すること。

■ 教　科　書

書　名：標準理学療法学・作業療法学　専門分野　生理学（第４版）
著者名：岡田　隆夫・長岡　正範
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：標準生理学（第７版）
著者名：小澤　瀞司　他
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	運動学総論				
担当者	境　隆弘			国家出題基準	Ⅰ-3-A
学科名	理学療法学専攻	学　年	1年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法にとっての運動学（Kinesiology）は、「人間の運動の科学」であり、人間のからだの構造を学ぶ解剖学、人間のからだの機能を学ぶ生理学、そして、身体および身体各部を物体とみなした時の力学を基礎とした応用科学であることについて学ぶ。

■ 到達目標

運動学用語を理解し、使用できるようになる。
運動力学を理解する。
上肢の関節運動学を理解し、触診やデモンストレーションが出来るようになる。

■ 授業計画

第１回　コース・ガイダンス
　　講義の進め方、評定方法の他、理学療法士にとっての運動学の重要性を学ぶ
第２回　運動学（Kinesiology）総説
　　解剖学・生理学ならびに運動療法学との関連、Kinematics と Kinetics について学ぶ
第３回　身体運動①基本面
　　運動学を学ぶにあたって必要な身体における運動面と軸について学ぶ
第４回　身体運動②名称
　　運動学を学ぶにあたって必要な身体各部の運動方向の名称について学ぶ
第５回　身体運動③演習
　　①②で学んだ身体運動について、演習を行い理解を深める
第６回　運動を構成する要素と器官①
　　ヒトの運動を生む器官のうち、骨と関節について学ぶ
第７回　運動を構成する要素と器官②
　　ヒトの運動を生む器官のうち、筋について学ぶ
第８回　運動を構成する要素と器官③
　　①②で学んだ運動を構成する要素と器官について、演習を行い理解を深める
第９回　力学の基礎①
　　運動学を学ぶにあたって必要なニュートン力学について学ぶ
第10回　力学の基礎②
　　運動学を学ぶにあたって必要な身体とてこについて学ぶ
第11回　力学の基礎③
　　運動学を学ぶにあたって必要なモーメント（トルク）について学ぶ
第12回　力学の基礎④
　　運動学を学ぶにあたって必要な生体における力とモーメントについて学ぶ
第13回　構えと姿勢①
　　ヒトの運動にかかわる構えと姿勢の名称について学ぶ
第14回　構えと姿勢②
　　①で学んだ構えと姿勢について、演習を行い理解を深める
第15回　上肢の関節運動学①
　　肩甲帯に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第16回　上肢の関節運動学演習①
　　肩甲帯の関節運動学について、演習を行い理解を深める

第17回　上肢の関節運動学②
　　肩関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第18回　上肢の関節運動学演習②
　　肩関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第19回　上肢の関節運動学③
　　肘関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第20回　上肢の関節運動学演習③
　　肘関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第21回　上肢の関節運動学④
　　前腕に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第22回　上肢の関節運動学演習④
　　前腕の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第23回　上肢の関節運動学⑤
　　手関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第24回　上肢の関節運動学演習⑤
　　手関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第25回　上肢の関節運動学⑥
　　手指に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
第26回　上肢の関節運動学演習⑥
　　手指の関節運動学について、演習を行い理解を深める
第27回　実技試験
　　学んだ関節運動学について実技試験を実施する
第28回　実技試験のフィードバック
　　実技試験の解説、講評を行う
第29回　総括①
　　本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う
第30回　総括②
　　本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験　80％
小テスト・実技テストで20％（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

（予習）
運動学は、解剖学、生理学、物理学（力学）の知識が無ければ、理解が進まない。
毎回、授業内容に応じた解剖学、生理学、物理学（力学）の復習をしてくること。
例：肩関節の授業の前は、肩関節の解剖の復習をしてくる。
（復習）
授業の翌週に必ず小テストを行うので、授業での学習内容が身に付くよう復習すること。

■ 教　科　書

書　名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版

書　名：基礎運動学 PT・OT のための運動学テキスト
著者名：小柳磨毅　他編
出版社：金原出版

■ 参考図書

書　名：エッセンシャル・キネシオロジー　機能的運動学の基礎と臨床
著者名：弓岡光徳　他監訳
出版社：南江堂

書　名：臨床運動学ワークブック
著者名：辻下守弘　他監訳
出版社：医学書院

■ 留意事項

理学療法の基礎学問として重要な科目であり、２年生に進んで、運動学各論、運動学実習、
臨床運動学と引き続く勉強なのでしっかり学んでほしい。

授業科目	運動学総論				
担 当 者	長谷川昌士			国家出題基準	Ⅰ-3-A
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

関節の基本構造と機能を学習する。運動器である上肢の運動、下肢の運動、脊柱・体幹の運動について理解を深める。

■ 到達目標

1．運動器の構造と機能を理解する。
2．上肢の運動，下肢の運動，脊柱・体幹の運動を理解する。

■ 授業計画

第１回　コースオリエンテーション
第２回　運動のとらえ方について学習する。
第３回　運動の面と軸について学習する。
第４回　関節の基本的構造と機能について学習する。
第５回　肩複合体の関節構造について学習する。
第６回　肩複合体の筋と関節の相互作用について学習する。
第７回　肘関節の関節構造と機能について学習する。
第８回　肘関節の靱帯構造について学習する。
第９回　前腕の関節構造と機能について学習する。
第10回　前腕の運動について学習する。
第11回　手関節の関節構造と機能について学習する。
第12回　手のアーチ構造について学習する。
第13回　手指の関節構造と機能について学習する。
第14回　手指の内在筋と外在筋の相互作用について学習する。
第15回　上肢確認試験と振り返り
第16回　股関節の関節構造について学習する。
第17回　股関節の筋と関節の相互作用について学習する。
第18回　膝関節の関節構造について学習する。
第19回　膝関節の筋と関節の相互作用について学習する。
第20回　足関節の関節構造と機能について学習する。
第21回　足関節の運動について学習する。
第22回　下肢確認試験と振り返り
第23回　頭頸部における関節構造について学習する。
第24回　胸腰部における関節構造について学習する。
第25回　肩関節の運動について演習形式で学習する。
第26回　肘関節・前腕の運動について演習形式で学習する。
第27回　手・手指関節の運動について演習形式で学習する。
第28回　股関節の運動について演習形式で学習する。
第29回　膝・足関節の運動について演習形式で学習する。
第30回　最終確認試験と振り返り

■ 評価方法

筆記試験　80%　小テスト　20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内容は必ず教科書で見直し、学習したことを授業ノートに追記しておくこと。

■ 教　科　書

書　名：筋骨格系のキネシオロジー
著者名：嶋田智明ほか監訳
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書　名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	スタディースキルⅠ				
担 当 者	1年チューター（オムニバス）			国家出題基準	該当なし
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

各科目での学習が円滑に進められるように、学習計画や方法について実践を通じて学ぶ

■ 到達目標

学習習慣の確立と各科目の理解度向上

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション，大学での学びについて（ノートテイクを含む）
第２回　図書館オリエンテーション
第３回　基礎学力確認
第４回　学習ノートの確認，連休中の課題説明
第５回　学習到達度確認
第６回　グループ学習（生理学）
第７回　グループ学習（生理学）
第８回　グループ学習（解剖学）
第９回　グループ学習（解剖学）
第10回　後期試験に向けての学習計画立案
第11回　生理学・解剖学　課題学習　1
第12回　生理学・解剖学　課題学習　2
第13回　理学療法概論実習に向けての事前学習 1
第14回　理学療法概論実習に向けての事前学習 2
第15回　前期まとめテスト
第16回　後期オリエンテーション，夏期休暇中の自己学習振り返り
第17回　前期振り返りテスト
第18回　グループ学習（生理学）
第19回　到達度確認（生理学）
第20回　グループ学習（解剖学）
第21回　到達度確認（解剖学）
第22回　身体の動きについて
第23回　グループ学習（運動学）
第24回　到達度確認（運動学）
第25回　国家試験問題にチャレンジ 1
第26回　国家試験問題にチャレンジ 2
第27回　冬期休暇～後期試験の学習計画立案
第28回　生理学・解剖学・運動学 課題学習 1
第29回　生理学・解剖学・運動学 課題学習 2
第30回　後期まとめテスト

■ 評価方法

講義時間内に実施するテスト…30%　　課題…70%　　※定期試験は実施しない
課題は講義中のみでなく、４～５月連休、夏期休暇、冬期休暇、春期休暇にも課す。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜指示をする

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

スケジュールが変更となる可能性があるので、チューターからのメールや Moodle を各自定期的に確認すること。

授業科目	理学療法概論				
担 当 者	藪中良彦・佐藤睦美・岩田　篤（オムニバス）		国家出題基準	専門分野 I-1, 2	
学 科 名	理学療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

理学療法士になる事を目標に入学してきてはいるが、理学療法のわずかな部分の知識しかない学生に対して、今後４年間学ぶ理学療法の大枠を示す。

■ 到 達 目 標

理学療法の大枠を理解することにより、今後４年間で学ばなければならない内容の概略を把握する。

■ 授 業 計 画

第１回　当大学の理学療法学専攻のカリキュラムの解説.
理学療法の歴史，理学療法の定義，理学療法を構成する各種技術の概要，理学療法とリハビリテーション.
第２回　理学療法と障害，医学の領域，理学療法の対象.
第３回　理学療法の流れ（理学療法過程），クリニカルパス，理学療法における診療ガイドラインの適用.
第４回　理学療法士の使命と倫理，理学療法士に関する法律，理学療法士に求められる資質，接遇･コミュニケーション
第５回　理学療法士が働く現場
第６回　理学療法士の職能
第７回　理学療法（士）教育
第８回　中枢神経疾患理学療法概論
第９回　骨関節疾患理学療法概論（スポーツリハビリテーションを含む）
第10回　小児理学療法概論
第11回　理学療法研究
第12回　理学療法士と報酬
第13回　理学療法記録とまとめ方，医療事故
第14回　リスク管理と感染予防
第15回　臨床実習において学生に求められるもの

■ 評 価 方 法

出席（欠席－4点、遅刻／早退－2点）
小テスト（50点）
定期試験（50点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

次の授業の教科書の範囲を明確に提示して，予習を促す．また，毎回授業の最後に小テスト（40問程度の穴埋め問題）を行い，予習及び授業を集中して受講する態度を育てる.

■ 教　科　書

書　名：理学療法概論テキスト（理学療法入門テキスト　改訂第２版）
著者名：監修　細田多穂、編集　中島喜代彦、森田正治、久保田章仁
出版社：南江堂

■ 参考図書

書　名：理学療法学概論　第３版
著者名：監修　千住秀明
出版社：神陵文庫

■ 留意事項

授業科目	理学療法概論実習				
担当者	棚　千磨･伊禮まり子（オムニバス）	国家出題基準	専門分野 V-1, 2-A,I		
学科名	理学療法学専攻	学　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　容

専任教員と共に国内医療施設で見学実習を行う。事前にオリエンテーションと演習を行う。また、見学後も、演習を実施する。

■ 到達目標

現在の国内医療施設における理学療法の概観を理解する。また、障害について実際の対象者様の生活像を理解する。特に理学療法士の仕事を理解することと、対象者様や病院スタッフの方とスムーズにコミュニケーションを取れるようになることが具体的な目標である。

■ 授業計画

学内オリエンテーション：安全管理、個人情報保護、事故・過誤の対応、対人関係技法、医療面接、基本的臨床技能について取り上げる。

実習施設　協力医療機関

実習期間　学内演習・学外実習合わせて５日

実習形態　協力病院において、専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下、患者と直接に対応する。専任教員は学生の臨床現場を観察し、学生の臨床実習に臨む態度などを適切に把握し、臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。

実習の進め方　理学療法概論で学んだ問診、情報収集、評価、運動療法、物理療法などを実際の臨床現場で体験し、理解を深める。実習の進め方は、臨床現場の見学と専任教員のフォローを織り交ぜて実施する。

■ 評価方法

授業態度：30%、発表：15%、デイリーノート：７％、実習評価：48%で判定する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

学内演習で学んだコミュニケーションに関する知識を整理し、問診の練習を積んで臨むこと。本実習終了後は、自身の課題を整理し、次の実習に繋げることができるように心がけておくこと。

■ 教　科　書

書　名：理学療法臨床実習サポートブック
著者名：岡田　慎一郎／上村　忠正／永井　絢也／長谷川　真人／村上　京子／守澤　幸晃
出版社：医学書院

書　名：PT 臨床実習ルートマップ
著者名：柳澤健
出版社：メジカルビュー社

■ 参考図書

■ 留意事項

臨床現場での学習であるため、事前準備を充分に行い、現場の規則を厳守し、事故がないように努めること。

授業科目	**理学療法評価学 I**				
担 当 者	**今井　公一**	国家出題基準	**専門分野 II-1 ～ 3**		
学 科 名	**理学療法学専攻**	学　　年	**1 年**	総単位数	**1 単位**
		開講時期	**後期**	選択･必修	**必修**

■ 内　　容

理学療法の対象者をどのような視点で理解すればよいのか、また対象者の生活像の理解と問題分析のためにどのような具体的な方法があるのか、総論的な内容を学習した後、評価法の各論を学びます。各論の個々の内容は目標を参照。

■ 到 達 目 標

1．生活機能について説明できる　2．理学療法評価の過程について説明できる　3．理学療法評価実施にあたってのリスクについて説明できる　4．形態測定及び関節可動域測定の方法について説明できる

■ 授 業 計 画

第１回　生活機能と理学療法評価
第２回　理学療法プロセス
第３回　理学療法評価の過程
第４回　日常生活活動と評価
第５回　日常生活活動を支える心身機能（1）
第６回　日常生活活動を支える心身機能（2）
第７回　筋骨格系の評価　形態・測定（1）
第８回　筋骨格系の評価　形態・測定（2）
第９回　筋骨格系の評価　形態・測定（3）
第10回　筋骨格系の評価　ROM 測定（1）
第11回　筋骨格系の評価　ROM 測定（2）
第12回　筋骨格系の評価　ROM 測定（3）
第13回　筋骨格系の評価　ROM 測定（4）
第14回　筋骨格系の評価　ROM 測定（5）
第15回　総括

■ 評 価 方 法

筆記試験　80%　提出物　20%　但し課題の未提出は10点の減点

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習として毎回主たる教科書及び授業資料をしっかりと読み確実に理解してください。

■ 教　科　書

書　名：理学療法評価学
著者名：松澤　正、江口　勝彦
出版社：金原出版

書　名：絵でみる脳と神経
著者名：馬場元毅
出版社：医学書院

書　名：新・徒手筋力検査法
著者名：津山直一他訳
出版社：協同医書出版

書　名：リハビリテーション評価
著者名：正門由久
出版社：医歯薬出版

書　名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎　義昭
出版社：南山堂

■ 参 考 図 書

書　名：理学療法評価学Ⅰ、Ⅱ
著者名：石川　朗
出版社：中山書店

書　名：運動療法のための機能解剖学的触診技術　上肢 / 下肢・体幹
著者名：林　典雄
出版社：メジカルビュー社

書　名：筋骨格系のキネシオロジー
著者名：嶋田智明　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：ブルンストローム臨床運動学
著者名：武田　功　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：オーチスのキネシオロジー
著者名：山﨑　敦　他　監訳
出版社：有限会社　ラウンドフラット

書　名：know the body 筋・骨格の理解と触診のすべて
著者名：日高　正巳　監訳
出版社：医歯薬出版

書　名：筋骨格系の触診マニュアル
著者名：丸山　仁司　監修
出版社：ガイアブック

書　名：バランス評価
著者名：星　文彦　他
出版社：三輪書店

書　名：形態測定・感覚検査・反射検査
著者名：伊藤　俊一　他
出版社：三輪書店

書　名：ROM ナビ（DVD）
著者名：青木主税　他
出版社：Round　Flat

■ 留 意 事 項

授業科目	国際リハビリテーション				
担当者	辻　郁			国家出題基準	Ⅰ-1-A
学科名	理学療法学専攻	学　年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択･必修	自由

■ 内　容

スタディツアーに参加し、他国の障害児者など人々と交流し、生活やリハビリテーションの現状に触れる
交流するための活動の準備をする
帰国後は、レポート作成を通して、ツアーを振り返り、人々の生活やリハビリテーションの現状を自国と比較しその相違を明らかにする。同時にセラピストのなるための自己課題を明らかにする

■ 到達目標

体調管理に努め、一連の活動に参加する
帰国後に活動全体を振り返りレポート作成ができる

■ 授業計画

スタディツアー準備
スタディツアーへの参加（6泊5日程度）
スタディツアー振り返り

■ 評価方法

準備から振り返りまでの取り組み態度（70%）
レポート内容（30%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

必要の応じて調べ物をしたり、期限までに準備等ができるよう取り組むこと

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

国外に出かけることは学生時代に与えられた良い機会です。多くの学生が参加することを期待します。
参加する者は十分な体調管理に努めてください

授業科目	作業療法概論				
担当者	辻　　郁	国家出題基準	Ⅰ-1-A, Ⅰ-1-C, Ⅰ-1-H		
学科名	作業療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業療法は人生活機能の改善・向上や活動性の発達・拡大を通して、社会参加の可能性を引き出す働きかけをする。
作業療法の基礎概念や歴史的変遷、実際、専門用語などについて講義や演習で学ぶ

■ 到達目標

1）作業療法士の活動内容を知る
2）作業療法の歴史と理論的背景を知る
3）作業療法の専門用語がわかる

■ 授業計画

第1回　作業療法士の活動内容、職域
第2回　作業療法の定義　関連法規
第3回　作業療法の歴史的変遷
第4回　作業療法の理論的背景
第5回　国際障害分類
第6回　作業療法の実際
第7回　作業療法の実際
第8回　作業療法の実際
第9回　作業療法の研究
第10回　作業療法の管理運営
第11回　作業療法の今後の課題
第12回　作業療法専門用語しらべ
第13回　作業療法専門用語しらべ
第14回　作業療法専門用語しらべ
第15回　作業療法専門用語集作成

■ 評価方法

授業ノート（20%）、小テスト（20%）、定期試験（60%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業終了後のノート整理、小テストの事前学習に十分取り組むこと

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学・専門分野「作業療法概論」
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：作業療法学全書・改訂版「作業療法評価学」
出版社：協同医書出版社

■ 留意事項

授業科目	作業療法総合演習Ⅰ				
担当者	井口知也・小谷美紀（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	作業療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	通年	選択･必修	必修

■ 内　　容

リーダーシップとは作業療法士にとって必要な集団機能の一つである．それは広い意味で複数の個人を一定の目標達成に一致して貢献せしめる作用を指すが，狭い意味ではその作用がメンバーの自発性の刺激を通じて機能する場合をいう．作業療法総合演習では，相互関係学習システム（Learning Group System：LG）を用いて，同学年のみならず学年を越えて先輩と後輩が相互に関係する学生間コミュニケーションネットワーク演習を経験することでリーダーシップ力を身につける．特に作業療法総合演習Ⅰでは，演習を通じて積極的かつ主体的な大学生活を送り、学生や学年間の情報交換・交流を図ることや大阪保健医療大学作業療法学専攻の独自の自己啓発活動を学ぶ．

■ 到達目標

①上級生からの指導を通じてリーダーシップに必要な知識と技術を学ぶことができる．
②学生間コミュニケーションネットワーク演習を通じて学生や学年間の情報交換・交流ができる．
③積極的かつ主体的な大学生活を送ることができる．

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
第２回　学生間コミュニケーションネットワーク演習１-①演習課題の決定
第３回　学生間コミュニケーションネットワーク演習１-②進行スケジュールと方法の決定
第４回　学生間コミュニケーションネットワーク演習１-③課題の実施
第５回　学生間コミュニケーションネットワーク演習１-④課題の実施
第６回　学生間コミュニケーションネットワーク演習１-⑤取り組みと結果をまとめて報告の準備をする
第７回　報告会①（演習課題への取り組みと結果を報告する）
第８回　演習課題に対するフィードバック①
第９回　学生間コミュニケーションネットワーク演習２-①演習課題の決定
第10回　学生間コミュニケーションネットワーク演習２-②進行スケジュールと方法の決定
第11回　学生間コミュニケーションネットワーク演習２-③課題の実施
第12回　学生間コミュニケーションネットワーク演習２-④課題の実施
第13回　学生間コミュニケーションネットワーク演習２-⑤取り組みと結果をまとめて報告の準備をする
第14回　報告会②（演習課題への取り組みと結果を報告する）
第15回　演習課題に対するフィードバック②
第16回　特別講義①
第17回　学生間コミュニケーションネットワーク演習３-①テーマ課題の決定
第18回　学生間コミュニケーションネットワーク演習３-②テーマ課題のディスカッション
第19回　学生間コミュニケーションネットワーク演習３-③テーマ課題のディスカッション
第20回　学生間コミュニケーションネットワーク演習３-④ディスカッションのまとめと報告の準備をする
第21回　報告会③（テーマ課題への取り組みと結果を報告する）
第22回　テーマ課題に対するフィードバック①
第23回　特別講義②
第24回　学生間コミュニケーションネットワーク演習４-①テーマ課題の決定
第25回　学生間コミュニケーションネットワーク演習４-②テーマ課題のディスカッション
第26回　学生間コミュニケーションネットワーク演習４-③テーマ課題のディスカッション

第27回　学生間コミュニケーションネットワーク演習４-④ディスカッションのまとめと報告の準備をする
第28回　報告会③（テーマ課題への取り組みと結果を報告する）
第29回　テーマ課題に対するフィードバック①
第30回　まとめ

■ 評価方法

毎回提出するレポート50%、 平常点（演習への取り組みなど）50%、欠席，遅刻・早退は減点の対象（一回に付き，事前届出なし：－10点，事前届出あり：－2点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に重要ポイントとして指摘した箇所は，次の授業までに復習をする.
また，次回の演習に必要な情報は予習を行い，資料を準備する.

■ 教　科　書

適宜資料を配布

■ 参考図書

適宜資料を配布

■ 留意事項

授業科目	作業分析学				
担 当 者	足立　一・小谷美紀（オムニバス）			国家出題基準	Ⅰ-3-AC
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

作業分析の方法を講義し , 様々な作業分析の演習を行う。
※教科書は必ず購入し、持参すること。

■ 到達目標

作業活動を構造的に捉え , 分析することができる。

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション　作業とは何か？　作業の分類
第２回　工程分析の仕方
第３回　動作分析の仕方
第４回　運動方向の表現の仕方
第５回　運動レベル分析の演習
第６回　認知分析の仕方
第７回　認知レベル分析の演習
第８回　環境要因分析の仕方・演習
第９回　ADL 作業分析の演習
第10回　ADL 作業分析の演習
第11回　APDL 作業分析の演習
第12回　APDL 作業分析の演習
第13回　メイクアップ動作の体験・分析（林部先生）
第14回　メイクアップ動作の体験・分析（林部先生）
第15回　まとめ

■ 評価方法

演習時のレポート課題100％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

解剖学で学習した内容が活かせる授業となるため、授業の進行に合わせてその予習復習を促す。授業時間内で完成できなかったレポートは宿題とする。

■ 教　科　書

書　名：標準作業療法学
著者名：小林夏子　福田恵美子　編集
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：障害者の雇用・就労をすすめるジョブコーチハンドブック
著者名：小川 浩
出版社：エンパワメント

■ 留意事項

授業科目	作業療法評価学概論				
担当者	辻　郁	国家出題基準	Ⅱ-2-(C～F), Ⅱ-2-(H～K)、Ⅱ-2-(Q～R),		
学科名	作業療法学専攻	学　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　容

主として講義により，作業療法評価の枠組みを学習する
一部，演習によって生活機能の把握方法を学ぶ

■ 到達目標

1）作業療法評価とは何かを説明できる
2）作業療法評価の過程を説明できる
3）作業療法評価における記録と責任について説明できる
4）評価の方法やバッテリーなどを説明できる
5）得られた結果の解釈と情報間の相互作用の説明が出来る

■ 授業計画

第1回　作業療法評価概論
第2回　作業療法評価と情報の解釈
第3回　評価記録の方法と管理
第4回　作業療法ニーズとは
第5回　生活能力の評価方法
第6回　生活能力の評価方法
第7回　生活能力の評価方法
第8回　身体能力の評価方法
第9回　身体能力の評価方法
第10回　身体能力の評価方法
第11回　高次脳機能の評価方法
第12回　高次脳機能の評価方法
第13回　自己の生活能力を評価してみよう
第14回　自己の生活能力を評価し，得られた情報を統合してみよう
第15回　作業療法事例から評価の在り方を学ぼう

■ 評価方法

授業中のミニテスト50％と定期試験50％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

必ず復習をすること
毎回実施されるミニテストの勉強を十分にすること

■ 教　科　書

書　名：標準　作業療法学　専門分野　作業療法評価学
著者名：岩崎テル子他
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	臨床ゼミナールⅠ				
担当者	吉田　文	国家出題基準	Ⅱ -2-B, Ⅱ -3-B		
学科名	作業療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

この科目では、作業療法に欠かせないコミュニケーションスキルや面接・観察を中心に学習を行う。臨床見学実習でその知識・技術を活用できるようにグループワークによる演習を行い、事例を基にディスカッションする。他の科目で学んだ知識・技術も使いながら、作業療法場面における情報を掴み、作業療法と対象者について概説できる力をつける。

■ 到達目標

1．作業療法学生として対象者とコミュニケーションができる
2．面接により作業療法評価に必要な情報を収集する
3．観察により作業療法評価に必要な情報を収集する
4．得た情報をもとに作業療法と対象者について概説できる

■ 授業計画

第1回　オリエンテーション
第2回　コミュニケーションとは？人と接するための基本
　　コミュニケーションスキル演習①
第3回　人との関係づくりの基本　対象者・家族との関係づくり
　　コミュニケーションスキル演習②
第4回　人との関係づくりの基本　スタッフ・社会との関係づくり
　　コミュニケーションスキル演習③
第5回　作業療法における面接とは？
　　面接の演習①
第6回　面接に必要な知識・技術
　　面接の演習②
第7回　面接場面についてディスカッション　事例を用いて
　　面接の演習③
第8回　人との関係における自分の特徴を知る
第9回　作業療法における観察とは？
　　観察の演習①
第10回　観察に必要な知識・技術
　　観察の演習②
第11回　観察場面についてのディスカッション　事例を用いて
　　観察の演習③
第12回　作業療法の治療構造　作業療法士の行動の観察　作業療法における作業の効果
第13回　作業療法場面の捉え方　　作業療法に関する文献を治療構造に沿って捉える
第14回　作業療法場面の情報から作業療法と対象者を説明してみる
第15回　コミュニケーション・面接・観察における自分の特徴を知る
　　授業のまとめ

■ 評価方法

参加態度（リアクションペーパー含む）20%、提出物40%、最終レポート40%
グループワークや演習を交えながら進めるため出席を基本とする。遅刻・早退－2点、欠席－5点の減点とする。但し事前に連絡があり、やむを得ない遅刻・早退・欠席と認められた場合は考慮することがある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

＊毎回のリアクションペーパーと提示する課題（復習と予習、Ａ４で1～ 2枚程度）を次回授業時または定められた期限内に提出すること

■ 教　科　書

特に指定しない

■ 参 考 図 書

書　名：コミュニケーションスキルの磨き方
著者名：沢　俊二 , 鈴木　孝治
出版社：医歯薬出版

書　名：コミュニケーションスキルトレーニング　患者満足度の向上と効果的な診療のために
出版社：医学書院

書　名：医療コミュニケーション　実証研究への多面的アプローチ
著者名：医療コミュニケーション研究会 , 藤崎　和彦 , 橋本　英樹
出版社：篠原出版新社

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床見学実習				
担 当 者	作業療法学専攻教員（オムニバス）	国家出題基準	Ⅰ-2，Ⅴ-1，Ⅴ-2-BHI		
学 科 名	作業療法学専攻	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択･必修	必修

■ 内　　容

1．実習前学習，臨床見学，終了後のまとめと報告会で構成する
2．実習施設：一般病院，リハビリテーション病院など大学が依頼し決定した施設
3．臨床現場での実習期間：５日間（２月）
4．実習形態：同一施設で臨床実習指導者の指導体制のもと作業療法実践現場や関係部署の見学を行う

■ 到達目標

1．作業療法の実施状況を観察し，記録できる
2．リハビリテーションの流れの中の作業療法（士）の役割を理解できる
3．作業療法士を目指す学生として適切な取り組みが出来る

■ 授業計画

第１回　全体オリエンテーション
第２回　実習前課題
第３回　実習前課題へのフィードバック
第４回　実習前技能演習１
第５回　実習前技能演習２
第６回　臨床見学実習（５日間）
第７回　臨床見学実習のまとめ
第８回　臨床見学実習報告会

■ 評価方法

実習への取り組み態度（40%）
実習事前学習・終了後のまとめへの取り組み態度（30%）
提出物と報告内容（30%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各回に担当教員および臨床実習指導者の指示に従って，予習復習を行うこと

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

1．実習は対象者や関係者，実習施設の好意により行われるため感謝と礼儀を忘れないこと
2．日頃から健康管理に努め，特に臨床実習期間は健康に留意すること
3．全体を通して，身だしなみや取り組み態度が不適切であると判断した場合，また，無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として実習を中止する

授業科目	健康生活支援学概論				
担 当 者	藤岡重和・柴田雅朗（オムニバス）			国家出題基準	
学 科 名	保健医療学研究科	学　　年	1年 or 2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

健康に生活していくための支援の基礎知識として、病気にならないための方法論を感染予防、疾病予防の観点から学ぶ。感染・疾病予防に関する体内外環境の重要性を概説した後、感染症の疫学、微生物との関わり、感染防御機構、病態、検査と診断に関する基礎知識を習得する。また、代表的な感染症について、病原微生物と感染経路、臨床像、検査、診断と治療法を教授する。疾病予防では、特に生活習慣病の予防と軽減を目的として、植物や野菜などに含有されている天然成分に注目し、これらに科学的な裏付けを行い（遺伝子・タンパクレベルでの生理活性の証明と作用機序）、疾病予防に寄与できる新たな知見を導き出す。

■ 到 達 目 標

感染症と微生物の関わり、感染防御機構、感染症の病態と臨床像に関する基礎知識を習得し、感染予防について自ら考察できる能力を培う。また、生活習慣病についての発症機序を詳細に学び、それら経路に有効な天然成分とその作用機序を科学的に学び、健康維持・疾病予防に役立つ新たな知見を深める。

■ 授 業 計 画

第１回　感染・疾病予防の体内外環境の重要性、 感染症の疫学 （藤岡重和）
第２回　微生物と感染症 （藤岡重和）
第３回　感染防御機構、感染症の病態 （藤岡重和）
第４回　感染症の検査、診断、治療 （藤岡重和）
第５回　呼吸器感染症、消化器感染症 （藤岡重和）
第６回　尿路感染症、性感染症、皮膚、粘膜の感染症 （藤岡重和）
第７回　高齢者の感染症、母子感染 （藤岡重和）
第８回　新興感染症、感染症トピックス （藤岡重和）
第９回　生活習慣病の病理（柴田雅朗）
第10回　アポトーシスと疾病 （柴田雅朗）
第11回　血管新生とリンパ管新生 （柴田雅朗）
第12回　脈管新生と疾病 （柴田雅朗）
第13回　東南アジアのトロピカルフルーツマンゴスチンの健康パワー（柴田雅朗）
第14回　マンゴスチンの分子生物学的作用（柴田雅朗）
第15回　脈管新生を標的とした治療の基礎研究 （柴田雅朗）

■ 評 価 方 法

（藤岡）各講義での課題レポート　40%（各回レポートを100%で評価しその平均の40%） 筆記試験　10%
（柴田）レポート　25%　口頭試問　25%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

終了した講義について復習をしっかりして下さい。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：「病気がみえる　循環器　第３版」
著者名：医療情報科学研究所　編
出版社：メディックメディア

書　名：「病気がみえる　循環器　第３版」
著者名：医療情報科学研究所　編
出版社：メディックメディア

書　名：がんの分子生物学　メカニズム・分子標的・治療　第２版
著者名：Lauren Pecorino　著
出版社：メディカル・サイエンス・インターナショナル

書　名：「循環器疾患のサイエンス」
著者名：小室一成　編
出版社：南山堂

■ 留意事項

授業科目	脳神経疾患身体障害支援学概論				
担当者	石倉　隆・藪中良彦・伊禮まり子・岩田　篤（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　年	1年 or 2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

養成課程で修得した基礎的な身体・認知機能、日常生活活動の知識と個別の障害に対応する基本的な治療技術を基盤に、養成教育では不十分であるにもかかわらず、科学的根拠に基づいた技能の実践には必要不可欠な脳機能解剖学、神経生理学、運動生理学、脳画像読影法などを教授し、その知識を用いて evidence based rehabilitation（EBR）が実践できる能力を身に付ける。これらの能力を駆使して、各種脳神経疾患の評価、リハビリテーション方法論について討論し、模擬症例で教員主導のカンファレンスを実施する。

■ 到達目標

・身体機能に係る脳機能解剖、脳神経生理を理解する。
・身体機能に係る脳機能解剖、脳神経生理の知識をもとに脳画像に投影できる。
・EBR の実践方法を理解する。
・脳神経疾患の神経生理学、神経病理学、症候学を理解する。
・脳神経疾患の根拠あるリハビリテーションを構築できる。

■ 授業計画

（1回1コマ）
第1回　脳神経疾患リハビリテーションにおける脳科学の重要性（石倉）（実務家教員や実務家による授業）
第2回　身体機能に係る脳機能解剖学（石倉）（実務家教員や実務家による授業）
第3回　身体機能に係る神経生理学、運動生理学（伊禮）
第4回　身体機能に係る脳画像読影法（石倉）（実務家教員や実務家による授業）
第5回　脳神経疾患リハビリテーションにおける EBR 実践法演習（石倉）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第6回　脳神経疾患リハビリテーション評価法（成人）：講義と討論（石倉）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第7回　脳神経疾患リハビリテーション評価法（小児）：講義と討論（藪中）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第8回　脳卒中の病理学と症候障害学：講義と討論（石倉）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第9回　脳卒中のリハビリテーション方法論：講義と討論（石倉）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第10回　神経変性疾患の病理学と症候障害学：講義と討論（岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第11回　神経変性疾患のリハビリテーション方法論：講義と討論（岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第12回　脳性麻痺の病理学と症候障害学：講義と討論（藪中）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第13回　脳性麻痺のリハビリテーション方法論：講義と討論（藪中）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第14回　模擬症例によるリハビリテーションカンファレンス（成人）（石倉・藪中・伊禮・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第15回　模擬症例によるリハビリテーションカンファレンス（小児）（藪中・石倉・伊禮・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

■ 評価方法

第１回から第13回までに培った知識や臨床推論を駆使して、第14、15回のリハビリテーションカンファレンスを展開する。
リハビリテーションカンファレンスの討議内容　20％×２＝40％
リハビリテーションカンファレンスレポート　30％×２＝60％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各講義前に、次回の講義内容とそれまでに学習しておくべき課題を提示する。

■ 教　科　書

■ 参考図書

別途、紹介する。

■ 留意事項

模擬症例は、教員が施設や対象者から承諾を得た、実際の患者を提示する。十分に守秘することを求める。

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援学概論				
担当者	中村憲正・境　隆弘・佐藤睦美（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	1年 or 2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

生活機能を支援する科学的根拠に基づいた論理を構築するための運動器疾患並びにスポーツ傷害に関するリハビリテーション技術、知識の涵養を目的とする。運動器疾患並びにスポーツ傷害のリハビリテーションにおけるバイオメカニクスの重要性を踏まえ、スポーツ動作について講義したうえで、疾患別の症候、リハビリテーション評価、治療について模擬症例での演習を通じて科学的根拠ある理論を構築する。
（中村憲正）
運動器疾患のリハビリテーションにおけるバイオメカニクスを基礎に疾患別の症候、評価、治療について科学的根拠ある理論を構築できる知識を涵養し、模擬症例の検討を通じて理解を深める。
（境隆弘）
スポーツ・リハビリテーションにおけるバイオメカニクスを基礎に上肢疾患の症候、評価、治療について科学的根拠ある理論を構築できる知識を涵養し、模擬症例の検討を通じて理解を深める。
（佐藤睦美）
スポーツ・リハビリテーションにおけるバイオメカニクスを基礎に下肢疾患の症候、評価、治療について科学的根拠ある理論を構築できる知識を涵養し、模擬症例の検討を通じて理解を深める。

■ 到達目標

・運動器疾患およびスポーツ傷害のリハビリテーションにおけるバイオメカニクスを理解する。
・科学的根拠ある運動器疾患およびスポーツ傷害のリハビりテーションの実践方法を理解する。
・運動器疾患およびスポーツ傷害のリハビリテーションを構築できる。

■ 授業計画

第１回　運動器疾患のリハビリテーションにおけるバイオメカニクスの重要性　（境隆弘）
第２回　関節運動学と運動力学　（境隆弘）
第３回　骨折と脱臼のリハビリテーションの解説と模擬症例検討　（中村憲正）
第４回　骨と関節の感染症に対するリハビリテーションの解説と模擬症例検討　（中村憲正）
第５回　脊椎・脊髄疾患、外傷に対するリハビリテーションの解説と模擬症例検討　（中村憲正）
第６回　股関節疾患、外傷に対するリハビリテーションの解説と模擬症例検討　（中村憲正）
第７回　頭部外傷に対するリハビリテーションの解説と模擬症例検討　（中村憲正）
第８回　スポーツ傷害のリハビリテーションにおけるバイオメカニクスの重要性　（佐藤睦美）
第９回　膝のスポーツ・リハビリテーション　（佐藤睦美）
第10回　膝のスポーツ・リハビリテーションの模擬症例検討　（佐藤睦美）
第11回　足のスポーツ・リハビリテーション　（佐藤睦美）
第12回　足のスポーツ・リハビリテーションの模擬症例検討　（佐藤睦美）
第13回　肩・肘のスポーツ・リハビリテーション　（境隆弘）
第14回　肩・肘のスポーツ・リハビリテーションの模擬症例検討　（境隆弘）
第15回　まとめ　（境隆弘）

■ 評価方法

運動器疾患リハビリテーションに関する課題レポート　50%
スポーツ傷害リハビリテーションに関する課題レポート　50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

日頃、臨床業務で遭遇する各疾患について、予習としては疑問点や治療計画などを持ち寄ること。復習としては、授業で得た知識を臨床業務で実践し、効果を知ること。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：「理学療法 Mook 9　スポーツ傷害の理学療法第２版」
著者名：福井勉・小柳磨毅　編
出版社：三輪書店

■ 留意事項

授業科目	認知・コミュニケーション障害支援学概論				
担当者	山口　忍・松井理直・井口知也（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	1年 or 2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 内　　容

各領域における作業療法の評価目的，実施手順，実施上の留意点について学習し，それらを十分に理解した上で，具体的な評価技術を習得する．

■ 到達目標

面接，観察，検査，測定，計測から得られる結果（情報）を整理，分析し，結果の意味及びそれらが示す対象者の障害について理解できるようになる．

■ 授業計画

第１回　オリエンテーション
第２回　認知症の病態理解とコミュニケーションについての概要
第３回　認知症者に対するコミュニケーション方法①（アルツハイマー型認知症，脳血管性認知症）
第４回　認知症者に対するコミュニケーション方法②（前頭側頭型認知症，レビー小体型認知症）
第５回　認知症者に対するコミュニケーション方法③（APCD を用いたニーズ評価）
第６回　事例の臨床像から病態解釈と効果的なコミュニケーション方法を検討する
第７回　筋の微細構造：構音障害・嚥下障害の訓練のために「運動器にアプローチする」
第８回　筋の酵素組織化学：生理学的特徴による筋繊維の分類
第９回　聴覚障害がもたらすもの（1）：言語習得後失聴の成人で、人工内耳装用効果が不十分な症例に関する検討
第10回　聴覚障害がもたらすもの（2）：自己の形成と養育に必要な観点
第11回　医療の発展がセラピストに与えるもの
第12回　聴覚と言語との関わり
第13回　認知機能の特性と言語との関わり：特に推論機能を中心として
第14回　現代言語学に基づく言語機能の分類
第15回　言語と小丹生にケーションに関する総合的な論議

■ 評価方法

授業中の議論および最終提出物

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に随時指示を行う

■ 教　科　書

特に定めない

■ 参考図書

授業中に適宜紹介する

■ 留意事項

欠席等については事前に必ず連絡すること

授業科目	脳神経疾患身体障害支援学特論				
担当者	石倉　隆・藪中良彦・伊禮まり子　岩田　篤（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	1年	総単位数	4単位
		開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

「脳神経疾患身体障害支援学概論」で培った脳機能解剖学、神経生理学、運動生理学、脳画像読影法を活用して模擬症例の身体障害を見出し、そのメカニズムを討論する。ケースカンファレンスでは、「概論」で培ったEBR実践法を活用して、身体障害支援の方法論を学生主導で追及していく。これにより、現場の診療における経験則を脱し、「科学的に身体障害を見出し、その身体障害を科学的に分析し、科学的根拠に則った治療」が実践できる臨床推論力が構築される。さらには、昨今の臨床現場で活用されつつある最新の脳科学的評価・治療法についても教授し、最先端医療に資する知識を教授する。

（石倉　隆・岩田　篤）

脳卒中や神経変性疾患の評価とその結果や身体障害、リハビリテーションの科学的根拠を、脳機能解剖学的分析、脳画像読影から明らかにする知識を身につける。模擬症例のカンファレンスを通じて、実践的に応用できる知識に定着させる。さらに、神経リハビリテーションで注目されている経頭蓋脳刺激の臨床応用について概説し、今後の発展性を討論する。

（藪中良彦）

脳性麻痺児の独歩に関係している筋力や感覚障害に加えて、脳性麻痺児の最大の障害である協調運動障害の大きな要素であるSelective Motor Controlについて、最新の知見を講義する。また、これらの知識を用いて、脳性麻痺児の独歩獲得のために有効なアプローチについてディスカッションを行う。

（伊禮まり子）

姿勢制御の神経機構について、特に動的姿勢制御に焦点を当てて講義する。また、動的状態での脳機能測定法について概説するとともに、特に脳電位について、その測定法、分析法、評価法を教授し、リハビリテーションへの応用の可能性を討議する。

■ 到達目標

・神経学的症候のメカニズムを科学的根拠に基づいて説明できる。
・その際、脳神経疾患に関する脳神経生理、脳機能解剖、脳画像などの知識、情報を活用できる。

■ 授業計画

（1回2コマ）

第1回　脳卒中の分析の視点（評価結果と身体障害、リハビリテーションの神経科学的分析）（石倉）
（実務家教員や実務家による授業）

第2回　脳卒中模擬症例における身体障害のリハビリテーションの科学的根拠検討（石倉）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第3回　神経変性疾患の分析の視点（評価結果と身体障害､リハビリテーションの神経科学的分析）（岩田）
（実務家教員や実務家による授業）

第4回　神経変性疾患模擬症例における身体障害のリハビリテーションの科学的根拠検討（岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第5回　ケースカンファレンス1:脳卒中（新たに提示した模擬症例のカンファレンス）（石倉･藪中･伊禮･岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第6回　ケースカンファレンス2:神経変性疾患（新たに提示した模擬症例のカンファレンス）（石倉･藪中･伊禮・岩田）（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第7回　大脳皮質興奮性修飾のメカニズム；経頭蓋脳刺激法のリハビリテーションへの臨床応用理論（石倉・岩田）（実務家教員や実務家による授業）

第８回　大脳皮質興奮性修飾のメカニズム；経頭蓋脳刺激法のリハビリテーションへの臨床応用演習（石倉・岩田）（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第９回　脳性麻痺の分析の視点（評価結果と身体障害、リハビリテーションの神経科学的分析）（藪中）（実務家教員や実務家による授業）
第10回　脳性麻痺模擬症例における身体障害のリハビリテーションの科学的根拠検討（藪中）（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第11回　ケースカンファレンス３：脳性麻痺（新たに提示した模擬症例のカンファレンス）（石倉・藪中・伊禮・岩田）（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第12回　脳性麻痺児の独歩に影響している因子（藪中）（実務家教員や実務家による授業）
第13回　脳性麻痺児における Selective Motor Control とそのメカニズムを踏まえたアプローチの検討（藪中）（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第14回　動的姿勢制御の神経機構と脳機能測定の臨床的意義の検討（伊禮）（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）
第15回　脳電位測定の臨床応用演習（伊禮）（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）

■ 評価方法

・第５、６、11回講義のカンファレンスのレポートを提出させ、神経学的症候の科学的考察内容、神経学的症候に対するリハビリテーションの科学的考察内容で評価する。
第５回、第６回　33点　第11回　34点　計100点

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各講義前に、次回の講義内容とそれまでに学習しておくべき課題を提示する。
また、各疾患の臨床症状、評価、リハビリテーションについての科学的根拠を講義前に整理すること。

■ 教　科　書

■ 参考図書

別途、紹介する。

■ 留意事項

模擬症例は、教員が施設や対象者から承諾を得た、実際の患者を提示する。十分に守秘することを求める。

授業科目	脳神経疾患身体障害支援学特論演習				
担当者	石倉　隆・藪中良彦・伊禮まり子・岩田　篤（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	２年	総単位数	８単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

「脳神経疾患身体障害支援学概論」「脳神経疾患身体障害支援学特論」で修得した知識や臨床推論力を学生のそれぞれの職域に還元できる知識・技能へと高めていくことを目的とする。これまでに修得した知識や臨床推論力を用いて、最新の CPC、症例報告や治療法を分析して批判的に吟味することで、知識や臨床推論力を実践的に身に付けるとともに、学生の担当する対象者を提示して実践的にカンファレンスを実施する。さらに、提携病院で臨床を実践してケースカンファレンスを実施し、「概論」「特論」「特論演習」で修得した知識、技能、臨床推論力を実践的に整理する。

（石倉　隆・岩田　篤）

・経頭蓋脳刺激法を用いた大脳皮質興奮性修飾の科学的根拠を文献や実験を通して検討する。
・学生の臨床･臨地現場の症例を評価、分析し、「概論」「特論」で得た知識を応用するとともに、カンファレンスでその論理を展開する。「概論」「特論」で培った脳科学の知識をもとにした科学的な分析能力や批判的吟味の能力を現場で実践可能な技能へ発展させる。

（藪中良彦）

・脳性麻痺児の独歩獲得に影響する因子及びそれらの因子を客観的に測定する手段を文献を通して検討する。
・学生の臨地現場の GMFCS レベルⅡ及びⅢの脳性麻痺児症例を評価、分析し、「概論」「特論」で得た知識を基に、カンファレンスで機能障害と活動障害の関連について論理を展開する。脳性麻痺児に関する最新の知見をもとにした科学的な分析能力や批判的吟味の能力を現場で実践可能な技能へ発展させる。

（伊禮まり子）

動的姿勢制御と脳機能との関係について､文献や実験を通じて明らかにする。得られた知見をリハビリテーションにどのように応用できるかについて討論するとともに、脳神経疾患身体障害支援学特論で得た脳機能測定法を現場で実践させるための評価法・分析法について検討する。

■ 到 達 目 標

・実際の症例に対し、神経学的症候のメカニズムを科学的根拠に基づいて説明できる。
・実際の症例に対し、根拠あるリハビリテーションを構築できる。
・その際、脳神経生理、脳機能解剖、脳画像などの知識、情報を活用できる。

■ 授 業 計 画

（１回２コマ）

第１回　脳卒中 CPC 分析（石倉）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第２回　脳卒中症例報告分析（石倉）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第３回　神経変性疾患 CPC 分析（岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第４回　神経変性疾患症例報告分析（岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第５回　経頭蓋脳刺激法に係る最新知見の分析と実験（石倉・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第６回　脳性麻痺児の独歩獲得に係る最新知見の分析（藪中）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

授業科目	脳神経疾患身体障害支援学特別研究				
担当者	石倉　隆・伊禮まり子・岩田　篤			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	1年～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

高度専門職業人として社会で活躍していくための学修（職業実践力）の成果として「修士論文」あるいは「課題研究報告書」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究報告書」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、学生のそれぞれの職域を通じて社会に還元できるもの、つまり、学生が大学院修了後に高度専門職者として現場で活躍するための職業実践力として活用できる成果にする。
（石倉隆　伊禮まり子　岩田篤）
修士論文:脳神経疾患（成人）による身体障害にかかる研究を通じて､専門領域を深化させ現場に還元でき､職業実践力を向上させる研究成果を目指す。研究課題は、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に直接還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。例①：脳神経疾患により興奮性が低下した大脳皮質に、経頭蓋的に刺激を与えることで､大脳皮質興奮性修飾を試みる。運動関連領野をターゲットとした片麻痺の軽減､補足運動野をターゲットとしたパーキンソン症候群の軽減などの臨床応用を目的に、健常者でその有効性を確認していく。例②:健常者（成人）を対象に、床傾斜刺激による姿勢筋の適応的抑制に最適な刺激強度を明らかにし、その適応過程における運動準備状態の変化について事象関連電位を用いて検討する。
（石倉隆　岩田篤）
課題研究：脳神経疾患（成人）による身体障害にかかる臨床・臨地の実践から導き出された生活機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究」は、課題テーマに沿った３症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。３症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的・科学的考察、現場に直結する結論などを求める。

■ 到達目標

修士論文
・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
・研究成果について的確にプレゼンテーションできる。
・研究成果を社会に還元する術を説明できる。
課題研究
・専門領域の課題テーマについて文献の適切な収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
・課題研究の成果について的確にプレゼンテーションできる。
・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授業計画

（１回２コマ）
修士論文
第１回～第15回　研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
　　研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
　　関連文献や先行知見をもとに、指導教員と討論しながら研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する
　　（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

授業科目	脳神経疾患身体障害支援学特別研究				
担当者	藪中良彦・伊禮まり子			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学年	1年～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

高度専門職業人として社会で活躍していくための学修（職業実践力）の成果として「修士論文」あるいは「課題研究報告書」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究報告書」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、学生のそれぞれの職域を通じて社会に還元できるもの、つまり、学生が大学院修了後に高度専門職者として現場で活躍するための職業実践力として活用できる成果にする。

（藪中良彦　伊禮まり子）

修士論文:脳神経疾患（小児）による身体障害にかかる研究を通じて､専門領域を深化させ現場に還元でき､職業実践力を向上させる研究成果を目指す。研究課題は、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に直接還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。例①：実用的に独歩可能なGMFCSレベルⅡの痙直型両麻痺児と10歩の独歩は可能であるが実用的に独歩を使用できないGMFCSレベルⅢの痙直型両麻痺児の間の機能障害の違いを横断的に調査し、実用的な独歩獲得への各機能障害の影響の程度を調査する。例②：健常者（小児）を対象に、床傾斜刺激による姿勢筋の適応的抑制に最適な刺激強度を明らかにし、その適応過程における運動準備状態の変化について事象関連電位を用いて検討する。

（藪中良彦）

課題研究：脳神経疾患（小児）による身体障害にかかる臨床・臨地の実践から導き出された生活機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究」は、課題テーマに沿った３症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。３症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的・科学的考察、現場に直結する結論などを求める。

■ 到達目標

修士論文

・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
・研究成果について的確にプレゼンテーションできる。
・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

課題研究

・専門領域の課題テーマについて文献の適切な収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
・課題研究の成果について的確にプレゼンテーションできる。
・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授業計画

（１回２コマ）

修士論文

第１回～第15回　研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
　　研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
　　関連文献や先行知見をもとに、指導教員と討論しながら研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する
　　（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援学特論				
担当者	中村憲正・境　隆弘・佐藤睦美（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	1年	総単位数	4単位
		開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

運動器障害の解明に有用な動作解析技術と結果の解釈を理解し、運動器疾患で生じる運動器へのストレス解明のための知識とするとともに、運動器の修復過程と有効なリハビリテーションについて学ぶ。また、スポーツ傷害についても学ぶことで、スポーツに起因する身体障害のみならず、障害者スポーツの在り方も考えうる知識を培う。

（中村憲正）

運動器疾患やスポーツ傷害を惹起するメカニカルストレスを学ぶことで予防、治療の知識とするとともに、運動器疾患やスポーツ傷害の症候を明らかにする各種検査法とその結果の解釈、その症候の修復過程を科学的根拠あるリハビリテーション模索の基礎知識とする。

（境　隆弘）

運動器疾患のリハビリテーションにおける評価、治療法を検討し、学生が提示する運動器疾患症例の評価と治療をモデルに検討会を開催し、科学的根拠あるリハビリテーションにつなげる運動学、運動力学、運動器疾患のメカニズムを理解する。

（佐藤睦美）

スポーツ傷害のリハビリテーションにおける評価、治療法を検討し、学生が提示するスポーツ傷害症例の評価と治療をモデルに検討会を開催し、科学的根拠あるリハビリテーションにつなげるスポーツ傷害のメカニズムを理解する。また、生活機能支援としての障害者スポーツのあり方について論じる。

■ 到達目標

・運動器疾患・スポーツ傷害のメカニズムを科学的根拠に基づいて説明できる。
・その際、X-p、CT、MRI などの知識、情報を活用できる。

■ 授業計画

第１回　メカニカルストレスと運動器　（中村憲正）
第２回　運動器疾患、スポーツ傷害に関する画像読影法（X-p、CT、MRI）（中村憲正）
第３回　運動器疾患、スポーツ傷害に関する理学的所見検査法　（中村憲正）
第４回　運動器の修復過程（保存療法）（中村憲正）
第５回　運動器の修復過程（観血的治療）（中村憲正）
第６回　関節運動学と運動力学の理解　（境隆弘）
第７回　運動器疾患のメカニズムの理解　（境隆弘）
第８回　運動器疾患のリハビリテーションにおける評価法；第１回～第７回講義を踏まえて　（境隆弘）
第９回　運動器疾患のリハビリテーションにおける治療法；第１回～第７回講義を踏まえて　（境隆弘）
第10回　症例提示と検討会　（境隆弘）
第11回　スポーツ動作の理解　（佐藤睦美）
第12回　スポーツ傷害のメカニズムの理解　（佐藤睦美）
第13回　スポーツ・リハビリテーションにおける方法論；第１回～第５回、第11回、12回講義を踏まえて　（佐藤睦美）
第14回　障害者とスポーツ　（佐藤睦美）
第15回　症例提示と検討会　（佐藤睦美）

■ 評価方法

（中村憲正）課題レポート　100％
（境　隆弘）第10回検討会での科学的考察内容　100％
（佐藤睦美）第15回検討会での科学的考察内容　100％
※３名の教員評価の平均を最終評価とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業テーマに沿った専門書や文献を、洋邦問わず、目を通すこと。

■ 教　科　書

■ 参考図書

適宜紹介する。

■ 留意事項

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援学特論演習				
担当者	中村憲正・境　隆弘・佐藤睦美（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　年	２年	総単位数	８単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

運動器疾患・スポーツ傷害に起因する身体障害を対象とする学生が社会へ還元する知識・技能に照らして、身体障害支援学特論（運動器疾患・スポーツ傷害）で修得した知識を実践可能な高度専門知識・技能へと昇華させる。生活機能並びにスポーツ復帰支援を実施するうえでの課題解決のための方法論を文献検索やカンファレンスを通じて演習する。症例研究を批判的に抄読し、疑問点を解決することで、症例を深く追求する推論能力を養う。また、模擬症例を分析し、特論で得た知識を応用するとともに、カンファレンスでその論理を展開する。さらに、臨床・臨地現場から症例を提示し、カンファレンスを開催するとともに、顕在化した問題点を科学的に解決する。

（中村憲正）

整形外科疾患症例の最新の報告から病態を理解し、実践的臨床推論の知識とするとともに、模擬症例や学生が臨床・臨地現場で経験した症例の検査結果から臨床推論して、生活機能支援の礎となる論理的思考を養う。

（境　隆弘）

運動器疾患の最新の報告から障害像を理解し、展開されるリハビリテーションの科学的根拠を探る。また、運動器疾患シミュレーションの動作解析を演習し、導出された結果を分析する技能を養う。これらの知識、技能および実際に学生が経験した症例の評価結果から科学的根拠あるリハビリテーションを模索する臨床推論能力を培う。

（佐藤睦美）

スポーツ傷害の最新の報告から障害像を理解し、展開されるリハビリテーションの科学的根拠を探る。また、スポーツ傷害シミュレーションの動作解析を演習し、導出された結果を分析する技能を養う。これらの知識、技能および実際に学生が経験した症例の評価結果から科学的根拠あるリハビリテーションを模索する臨床推論能力を培う。

■ 到達目標

・実際の症例に対し、運動器疾患・スポーツ傷害のメカニズムを科学的根拠に基づいて説明できる。
・実際の症例に対し、根拠あるリハビリテーションを構築できる。
・その際、X-p、CT、MRI などの知識、情報を活用できる。

■ 授業計画

第１回　運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援における整形外科学の重要性は何か？　（中村憲正）
第２回　最新の整形外科疾患症例研究を批判的に吟味し、論理的に考察する　（中村憲正）
第３回　批判的に吟味し、論理的に考察した最新の整形外科疾患症例研究を発表してその病態を検討する　（中村憲正）
第４回　模擬症例 A の提示：画像、検査評価結果を提示　（中村憲正）
第５回　模擬症例 A の詳細分析　（中村憲正）
第６回　模擬症例 A の検討会　（中村憲正）
第７回　模擬症例 B の提示：画像、検査評価結果を提示　（中村憲正）
第８回　模擬症例 B の詳細分析　（中村憲正）
第９回　模擬症例 B の検討会　（中村憲正）
第10回　学生の臨床・臨地活動における整形外科疾患提示、カンファレンス　（中村憲正）
臨床現場からの症例を提示、検討会で病態を科学的に分析する。カンファレンスでの分析は、修士論文につながる着目点が明らかになるように発表する。

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援学特別研究				
担当者	中村　憲正			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	1年～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

再生医療を題材に運動器修復のメカニズムを細胞、分子レベルで解析する。

・幹細胞の調整法、増幅法の習得。
・幹細胞の組織分化法の習得。
・幹細胞の三次元培養法を人工組織との適合性の観点から理解する。
・動物実験（解剖、移植手術、術後管理）を習熟する。
・データ処理と統計学：データ解析、解釈に必要な統計技法の基本を理解する。

修士論文：研究テーマは、運動器修復・再生に関するもので、実際にその成果を臨床医療に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。研究の多くの時間を大阪大学整形外科学教室との共同で行うために時間調整が必要となる場合がある。

■ 到達目標

・運動器疾患・スポーツ傷害領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
・研究成果について的確にプレゼンテーションできる。
・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授業計画

修士論文

第１回～第15回　研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する。
　　研究テーマの関連文献収集をすると共に、その内容を十分理解し、先行研究の批判を行った上で、新たな知見を得るための研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する。

第16回～第30回　作業仮説および対立仮説を立て、、理論と現象の両面から結果を予測する。
　　作業仮説に基づき、先行研究に関する批判的な再検討を行う。
　　完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出し、発表する。

第31回～第45回　研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する。
　　収集したデータを解析して論理的な解釈を行う。

第46回～第60回　中間発表を行い、複数の教員や研究者からの意見を聞き、研究の再検討を行う。
　　研究手続きの修正を行った上で、実験、調査によるデータ収集を継続する。
　　収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する。

第61回～第75回　論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する。
　　論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける。

■ 評価方法

研究過程 20%、修士論文の内容 80% という割合で評価を行う。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

研究計画書の作成、それに伴う文献検索と考察、実験のシミュレーション、修論作成など、多くの時間が自学に費やされる。学修内容などは、適宜、指示する。

■ 教　科　書

■ 参 考 図 書

教科書・参考図書については、適宜紹介し、必要な資料については時間中に配布する。

■ 留 意 事 項

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援学特別研究				
担当者	境　隆弘			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　年	1年～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　容

身体障害支援学特論、特論演習で学修した知識や臨床推論能力をもとに、高度専門職業人として社会で活躍していくための学修の成果として「修士論文」あるいは「課題研究の成果」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究の成果」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、社会に還元できるものにする。身体障害支援学特論、特論演習で学んだ知識、技能をさらに深く学修しながら、研究を通じて現場に成果を還元する「修士論文」、科学的根拠ある臨床経験を設定課題に沿ってまとめる「課題研究の成果」の作成を指導する。

修士論文：運動器疾患による身体障害にかかる研究を通じて専門領域を深化させ現場に還元できる研究成果を目指す。研究テーマは、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。例：研究課題として、膝十字靭帯再建術後の安全かつ有効なトレーニングをフォースプレートによる運動力学的解析および筋電計による電気生理学的分析、その他の工学的手法を用いて分析するなどが考えられる。

課題研究：運動器疾患による身体障害にかかる臨床・臨地の実践から導き出された生活機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究の成果」にまとめる。「課題研究の成果」は、課題テーマに沿った３症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。３症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的･科学的考察、現場に直結する結論などを求める。なお、課題研究指導の過程で、当該学生の課題研究に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。

■ 到達目標

修士論文

・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
・研究成果について的確にプレゼンテーションできる。
・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

課題研究

・専門領域の課題テーマについて文献の適切な収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
・課題研究の成果について的確にプレゼンテーションできる。
・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授業計画

（修士論文）

第１回～第15回　研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
　研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
　関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する

第16回～第30回　ディスカッションを繰り返し、研究計画書を作成する
　研究計画書に基づき予備実験や予備調査を実施して研究計画の妥当性を検討、研究計画書を完成させる
　完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する

第31回～第45回　研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う
第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する
第61回～第75回　論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける
（課題研究）
第１回～第15回　課題研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する
第16回～第30回　ディスカッションを繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
完成させた課題研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
課題研究計画書の承認後、臨床・臨地での活動を開始する。
第31回～第45回　臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる３例以上の症例報告をまとめる
第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
３例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する
第61回～第75回　必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

■ 評価方法

修士論文：研究過程と修士論文の内容を総合的に勘案して評価する。
課題研究：３例以上の症例報告書および課題研究報告書の内容によって評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

修士論文、課題研究とも、科学的根拠に基づき、執筆作業をすること。

■ 教　科　書

■ 参考図書

適宜紹介する。

■ 留意事項

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援学特別研究				
担当者	佐藤　睦美			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	1年～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

身体障害支援学特論、特論演習で学修した知識や臨床推論能力をもとに、高度専門職業人として社会で活躍していくための学修の成果として「修士論文」あるいは「課題研究の成果」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究の成果」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、社会に還元できるものにする。身体障害支援学特論、特論演習で学んだ知識、技能をさらに深く学修しながら、研究を通じて現場に成果を還元する「修士論文」、科学的根拠ある臨床経験を設定課題に沿ってまとめる「課題研究の成果」の作成を指導する。

修士論文：運動器疾患による身体障害にかかる研究を通じて専門領域を深化させ現場に還元できる研究成果を目指す。研究テーマは、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。例：研究課題として、「膝十字靱帯再建術後に膝へのストレスが少ない着地動作」をフォースプレートによる運動力学的解析および筋電計による電気生理学的分析、その他の工学的手法を用いて分析するなどが考えられる。

課題研究：運動器疾患による身体障害にかかる臨床・臨地の実践から導き出された生活機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究の成果」にまとめる。「課題研究の成果」は、課題テーマに沿った3症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。3症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的･科学的考察、現場に直結する結論などを求める。なお、課題研究指導の過程で、当該学生の課題研究に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。

■ 到達目標

修士論文

・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
・研究成果について的確にプレゼンテーションできる。
・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

課題研究

・専門領域の課題テーマについて文献の適切な収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
・課題研究の成果について的確にプレゼンテーションできる。
・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授業計画

（修士論文）
第１回～第15回　研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する
第16回～第30回　ディスカッションを繰り返し、研究計画書を作成する
研究計画書に基づき予備実験や予備調査を実施して研究計画の妥当性を検討、研究計画書を完成させる
完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
第31回～第45回　研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う
第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する
第61回～第75回　論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける
（課題研究）
第１回～第15回　課題研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する
第16回～第30回　ディスカッションを繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
完成させた課題研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
課題研究計画書の承認後、臨床・臨地での活動を開始する。
第31回～第45回　臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる３例以上の症例報告をまとめる
第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
３例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する
第61回～第75回　必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

■ 評価方法

修士論文：研究過程と修士論文の内容を総合的に勘案して評価する。
課題研究：３例以上の症例報告書および課題研究報告書の内容によって評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

修士論文、課題研究いずれにおいても、先行研究を十分に渉猟し、科学的根拠に基づいた論文、報告書を作成するよう心がけて欲しい。
また、修士論文においては、統計学的解析手法についても自己学習を進めておくこと。
具体的な学習の内容については、適宜指示をする。

■ 教　科　書

■ 参考図書

適宜紹介する。

■ 留意事項

授業科目	認知・コミュニケーション障害支援学特論				
担当者	山口　忍・松井理直・井口知也（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	1年	総単位数	4単位
		開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

言語・コミュニケーション障害の障害像を科学的に分析し、その評価法やハビリ・リハビリテーションを探求する。特に障害の前提となる聴覚障害の構造や補聴・補聴援助システムなど基礎知識を深く理解したうえで、聴覚障害とコミュニケーション障害を学び、この領域の生活機能支援を包括的に実施できる知識を培う。先天難聴および後天的に起因する聴覚障害について、遺伝子診断や各種検査結果から現状を科学的に分析し、障害メカニズムとその結果を考察するために必要な基本的知識の涵養を目指す。また障害が生活にもたらす影響について理解する。最終回では講義で興味を持った分野をより深く自習し、ミニ講義を行う。

■ 到達目標

・聴覚障害例の医学的情報（遺伝子情報を含む)、発達や語音聴取能・構音状態など、症状を分析できる。
・分析した症状を基に障害機序を考察できる。
・障害が生活にもたらす影響について考えることができる。

■ 授業計画

第１回　聴覚障害の成り立ちと音響学的補聴の考え方について
第２回　聴覚障害に関わる脳機能
第３回　聴覚障害に関わる社会性
第４回　聴覚障害に関わる聴器解剖と生理
第５回　補聴器の仕組みと考え方
第６回　補聴器の選択と調整
第７回　人工内耳の仕組みと考え方
第８回　人工内耳の選択と調整
第９回　補聴支援機器の意義と種類
第10回　補聴支援機器の選択と調整
第11回　聴覚障害児の生活における支援
第12回　聴覚障害者の生活における支援
第13回　聴覚障害者の心理
第14回　症例検討（1）
第15回　症例検討（2）

■ 評価方法

症例検討における討論・口頭により、評価する

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義前に渡す資料を読了の上、受講すること

■ 教　科　書

不要

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	認知・コミュニケーション障害支援学特論演習				
担当者	山口　忍・松井理直・井口知也（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	２年	総単位数	８単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

認知・コミュニケーション障害を対象とする学生の社会へ還元する知識・技術に照らして、認知・コミュニケーション障害支援学特論で修得した知識を実践可能な高度専門知識・技能へと昇華させる。生活機能支援を実施する能力を培うため、前提となる基礎領域の知識を活用して、課題解決の方法論を文献検索やカンファレンスを通じて学修し、実践を通じて演習する。即ち、聴覚の機能が認知機能言語機能･･コミュニケーションににいかなる影響を及ぼすかを学び、それを補う機器の性能や効果、限界を知ることにより、より適切で高度な生活支援技術を実践的に学べ、経験則ではない科学的なアプローチにつながる。よって、これらを実践的に学ぶことにより、対象者に科学的根拠のあるコミュニケーション支援技術を提供する能力を培うと共に、内外の主要文献や資料を裏付けとした臨床的推論が可能となる。
研究協力施設において、実際の聴覚障害例の評価、リハビリテーション、検証を実施し、障害機序と介入を関連づけ、発達・再学習過程を論理的に考察し、聴覚障害が生活にもたらす影響と支援方法を文献を通して情報収集し考察する能力を育成する。カンファレンスを通して、問題点を具体的に解決する能力を涵養する。
なお、内容は受講生の関心に応じ、随時調整を行う。

■ 到達目標

・臨床活動における課題について文献を通して情報収集し検証点を明らかにすることができる。
・研究協力施設での臨床において、障害機序と介入を関連づけ、変化を論理的に考察できる。
・認知機能の障害が生活にもたらす影響と支援方法を文献を通して考察することができる。
なお、以下の内容は聴覚障害に関する例であり、受講生の関心に応じ、随時変更を行う。

■ 授業計画

第１回　聴覚障害の評価と、分析の方法
第２回　聴覚障害例の症状と検査所見
第３回　聴覚障害の障害機序の検討
第４回　障害機序に即したハビリ・リハビリテーションの考え方
第５回　発達や再学習過程から、ハビリ・リハビリを検証する
第６回　症例１（研究協力施設の臨床例、以下同様）の状態・検査とその結果
第７回　症例１の臨床像から、ハビリ・リハビリの課題を抽出する
第８回　症例１の臨床像から、ハビリ・リハビリの課題に即したアプローチを考える
第９回　症例１の臨床像に類似する例の長期的経過について、先行研究を検索し考察する
第10回　症例１の臨床像とそのハビリ・リハビリテーションを立案し、検証方法を検討する
第11回　症例１の臨床像が日常生活にもたらす影響と支援法を文献を通して考察する
第12回　症例１の検査・評価・ハビリ・リハビリについて、科学的根拠をもって説明する
第13回　症例２の状態・検査とその結果
第14回　症例２の臨床像から、ハビリ・リハビリの課題を抽出する
第15回　症例２の臨床像から、ハビリ・リハビリの課題に即したアプローチを考える
第16回　症例２の臨床像に類似する例の長期経過について、先行研究を検索し考察する
第17回　症例２の臨床像からハビリ・リハビリテーションを立案し、検証方法を検討する
第18回　症例２の臨床像が日常生活にもたらす影響と支援法を文献を通して考察する
第19回　症例２の検査・評価・ハビリ・リハビリについて、科学的根拠をもって説明する
第20回　症例３の状態・検査とその結果
第21回　症例３の臨床像から、ハビリ・リハビリの課題を抽出する

第22回　症例３の臨床像から、ハビリ・リハビリの課題に即したアプローチを考える
第23回　症例３の臨床像に類似する例の長期経過について、先行研究を検索し考察する
第24回　症例３の臨床像からハビリ・リハビリテーションを立案し、検証方法を検討する
第25回　症例３の臨床像が日常生活にもたらす影響と支援法を文献を通して考察する
第26回　症例３の検査・評価・リハビリについて、科学的根拠をもって説明する
第27回　研究協力施設にて、実際の症例の検査と評価を行う
第28回　研究協力施設にて、実際の症例の検査と評価を行う
第29回　研究協力施設にて、実際の症例の検査と評価を行う
第30回　研究協力施設で検査・評価した症例のハビリ・リハビリを立案し、プレゼンする

■ 評価方法

症例Ⅰ，2，3の説明と、最終プレゼンで評価する

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各症例ごとにレポートを作成する

■ 教　科　書

不要

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	認知・コミュニケーション障害支援学特別研究				
担当者	松井理直・井口知也（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学年	1年～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

認知・コミュニケーション障害支援学特論、特論演習で習得した知識、技能をもとに、実際の臨床現場における障害の事例に対して適切な考察と診断を行い、「修士論文」あるいは「課題研究報告書」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究報告書」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果を直接臨床現場に還元できるものにする。また、障害を考察する上で、音響学的・生理学的検査機器に習熟することも目的の１つである。指導対象とする機器類や工学的技法の、その他の例を以下に挙げる。

（松井）

・動的パラトグラフィ (EPG) による調音動態の測定法とその解釈。

・音声の分析・剛成：音響的特徴から構音障害の特性を解釈する。また、調音結合等の情報処理について理解を深める。

・マイボイス：ALS など構音が困難な対象者様の代替音声作成技術について習熟する。

（松井・井口）

・人間作業モデルを用いた高齢者への介入効果に関する実証的研究を行う。

・認知症に関する事例研究を通じ、効果的な介入方法、介護負担感の低減等の実証的研究を行う。

修士論文：研究テーマは、言語障害・音声障害・音声に関わる聴覚障害に関するもので、実際にその成果を臨床現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。（松井・井口）

課題研究：高次認知機能、およびコミュニケーション能力に関する運用能力を測定しつつ、認知機能の回復について、作業療法の実践的理論である人間作業モデルを適用し、高齢者への適用可能性について、介入研究を行いながら実証的に研究する。そこから得られた知見を論文としてまとめ、エビデンスに基づく医療の高度な適用を目指す。また、認知症に関する事例検討を中心に、作業療法の介入効果についてケーススタディを行う。（松井・井口）

■ 到達目標

修士論文

・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。

・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。

・研究成果について的確にプレゼンテーションできる。

・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

課題研究

・専門領域の課題テーマについて文献の適切な収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。

・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。

・課題研究の成果について的確にプレゼンテーションできる。

・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授業計画

修士論文

第１回～第15回　研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する。

第16回～第30回　ディスカッションを繰り返し、研究計画書を作成する
先行研究に基づき研究計画の妥当性を検討し、研究計画書を完成させる
完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する

第31回～第45回　研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う

第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する

第61回～第75回　論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

課題研究

第１回～第15回　課題研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する

第16回～第30回　ディスカッションを繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
完成させた課題研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
課題研究計画書の承認後、臨床・臨地での活動を開始する。

第31回～第45回　臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる3例以上の症例報告をまとめる

第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
３例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する

第61回～第75回　必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

■ 評価方法

修士論文：研究過程と修士論文の内容を総合的に勘案して評価する。
課題研究：３例以上の症例報告書および課題研究報告書の内容によって評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習には先行研究の理解・論文執筆などにより、週20時間程度を要する。
復習は、技術の習得度合いにもよるが、週10時間程度を要する。

■ 教　科　書

教科書・参考図書については、適宜紹介し、必要な資料については時間中に配布する。

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	認知・コミュニケーション障害支援学特別研究				
担当者	山口　忍・井口知也（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	1年～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

認知・コミュニケーション障害支援学特論、特論演習で学修した知識、技能をもとに、高度専門職業人として社会で活躍していくための学修の成果として「修士論文」あるいは「課題研究の成果」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究の成果」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、社会に還元できるものにする。認知･コミュニケーション障害支援学特論､特論演習では認知･コミュニケーション障害支援を包括的に 学んだが、これまでに学んだ知識や技能を用いて、学生の主たる対象者に特化した課題を設定し、認知・コミュニケーション障害支援学特論、特論演習で学んだ知識、技能をさらに深く学修しながら､「修士論文」､「課題研究の成果」にまとめる。　（山口・井口）

聴覚障害の症例において、機能評価、症状分析から障害メカニズムを考察し、治療介入による構築・再編成の可能性を模索し、認知・コミュンニケーション障害の支援にどのように貢献できるのかを探る。

修士論文：聴覚障害にかかる研究を通じて専門領域を深化させ現場に還元できる研究成果を目指す。研究テーマは、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。（山口）

課題研究：聴覚障害にかかる臨床・臨地の実践から導き出された対話・言語機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究の成果」にまとめる。「課題研究の成果」は、課題テーマに沿った３症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。３症例の実践経験から得られた知見を統合し､課題テーマを解決する結論へと導き､「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は､実際に展開された臨床的推論の明確さ､介入等による変化についての論理的･科学的考察、現場に直結する結論などを求める。なお、課題研究指導の過程で、当該学生の課題研究に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。　（山口）

■ 到 達 目 標

修士論文

・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
・研究成果について的確にプレゼンテーションできる。
・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

課題研究

・専門領域の課題テーマについて文献の適切な収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
・課題研究の成果について的確にプレゼンテーションできる。
・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授 業 計 画

修士論文

第１回～第15回　研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する。

第16回～第30回　ディスカッションを繰り返し、研究計画書を作成する
先行研究に基づき研究計画の妥当性を検討し、研究計画書を完成させる
完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する

第31回～第45回　研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う

第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する

第61回～第75回　論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

課題研究

第１回～第15回　課題研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する

第16回～第30回　ディスカッションを繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
完成させた課題研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
課題研究計画書の承認後、臨床・臨地での活動を開始する。

第31回～第45回　臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる3例以上の症例報告をまとめる

第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
3例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する

第61回～第75回　必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

■ 評 価 方 法

修士論文：研究過程と修士論文の内容を総合的に勘案して評価する。
課題研究：３例以上の症例報告書および課題研究報告書の内容によって評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

課題研究・修士論文いずれも「臨床研究」であるので、当該研究における研究対象の人権や利益を損なうことの無いようヘルシンキ宣言等の歴史について学ぶこと。ついで研究実施において、様々なリスクを想定、対応・対策について指導教員とともに検討する。
研究テーマについては、最低過去10年分の先行研究に当たり、研究の意義を明らかにした上で、データ採取は試行段階を経て本調査となるよう準備すること。
採取されたデータについて、検討する点・方法について指示するので、それを実施すること。
考察に当たっては、必要に応じて幅広く文献を渉猟、精読すること。
研究実施の時間管理については、適宜指示を出すので、それに従って作業を進めること。

■ 教　科　書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	健康生活支援学特論				
担 当 者	藤岡重和・柴田雅朗（オムニバス）			国家出題基準	
学 科 名	保健医療学研究科	学　　年	1年	総単位数	4単位
		開講時期	後期	選択･必修	選択

■ 内　　容

感染予防や疾病予防は、健康増進と要介護状態を防止する基盤である。要介護状態に至る過程では体力のみではなく、生活機能を低下させた原因が存在する。その大きな要因が感染や疾病であることは自明である。この特論では、健康に生活し要介護状態に陥らないための病気にならない知識と方法論を学ぶ。感染予防では、疫学的、科学的根拠を提示し、感染症予防の理論と方法論を探求する。次に、各種の感染症について感染症予防の基礎を理解する。これらの学習を通じて、感染予防の観点から健康生活を支援できる知識を培う。

■ 到 達 目 標

（藤岡）各種感染症のメカニズムおよび予防法を理解する。
（柴田）生活習慣病の病理とそれら発症機序となるシグナル経路の解析法とその理論を説明することができる。また、補完代替医療とは何かを理解し、その現状を捉えることができる。

■ 授 業 計 画

第１回　感染症予防の理論と方法 １（藤岡重和）
第２回　感染症予防の理論と方法 ２（藤岡重和）
第３回　感染症予防の理論と方法 ３（藤岡重和）
第４回　呼吸器感染症、消化器感染症予防（藤岡重和）
第５回　尿路感染症、性感染症、皮膚、粘膜の感染予防（藤岡重和）
第６回　人獣共通感染症、寄生虫感染予防、母子感染予防（藤岡重和）
第７回　感染防御機構と予防接種（藤岡重和）
第８回　院内感染対策（藤岡重和）
第９回　生活習慣病とは（柴田雅朗）
第10回　疾病予防のための生体内酸化ストレス解析法とその理論（柴田雅朗）
第11回　疾病予防のためのアポトーシス解析法とその理論（柴田雅朗）
第12回　疾病予防のための脈管新生解析法とその理論（柴田雅朗）
第13回　疾病予防のための細胞周期・タンパクリン酸化解析法とその理論（柴田雅朗）
第14回　疾病予防のための免疫能解析法とその理論（柴田雅朗）
第15回　補完代替医療の有効性とその問題点 - 発表と検討会（柴田雅朗）

■ 評 価 方 法

（藤岡）　各講義での課題レポート　40%（各回レポートを100%で評価しその平均の40%）
　　筆記試験　10%
（柴田）　レポート　25%　口頭試問　25%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

終了した講義について復習をしっかりして下さい。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：「カラーアトラス　基礎組織病理学　第４版」
著者名：A. スィーブンス　他著
出版社：西村書店

書　名：「病気がみえる　循環器　第３版」
著者名：医療情報科学研究所　編
出版社：メディックメディア

書　名：がんの分子生物学　メカニズム・分子標的・治療　第２版
著者名：Lauren Pecorino　著
出版社：メディカル・サイエンス・インターナショナル

書　名：「循環器疾患のサイエンス」
著者名：小室一成　編
出版社：南山堂

■ 留意事項

授業科目	健康生活支援学特論演習				
担 当 者	藤岡重和・柴田雅朗（オムニバス）			国家出題基準	
学 科 名	保健医療学研究科	学　　年	２年	総単位数	８単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

健康生活支援学特論（感染・疾病予防）で学んだ、健康に生活し要介護状態に陥らないための病気にならない知識と方法論、つまり、感染予防、疾病予防の方法論を基盤に、社会に還元できる実践的技能を養うと共に、健康に生活していくための疾病予防、感染予防の具体的実践方法の模索を行う。内外の主要な文献や資料をもとに科学的根拠ある疾病予防、感染予防の方法論を演習するとともに、院内感染対策活動を実際に体験することで、社会で実践できる感染予防技術を培う。

■ 到 達 目 標

（藤岡）米国疾病予防管理センター、日本感染症学会の各種感染症対策ガイドラインを講読し、感染症予防の具体的実践方法を習得する。次に、種々の感染症例提示と討議、協力医療施設での症例検討、分析、感染対策活動を通して社会で実践できる感染予防技術を培う。
（柴田）天然成分による生活習慣病の予防効果に関する内外の論文を理解でき、研究論文に対して科学的に肯定あるいは否定できる考察力を養い、論文の良し悪しを見抜く能力を修得する。その結果として得られた知見をデザイナーフーズ表にまとめ、対象者に適用できる形にまとめることができる。

■ 授 業 計 画

第１回　米国疾病予防管理センター感染症対策ガイドライン講読　（藤岡重和）
第２回　日本感染症学会感染症対策ガイドライン講読　（藤岡重和）
第３回　感染症 CPC 文献抄読会：学生が選択した文献抄読　（藤岡重和）
第４回　模擬呼吸器感染症例提示、消化器感染症例提示、症例分析　（藤岡重和）
第５回　模擬尿路感染症例、皮膚感染症例提示、症例分析　（藤岡重和）
第６回　第６回～８回を病院演習第１日目午後半日で演習する。
　　協力医療施設における症例分析：症例 A の臨床経過、臨床検査結果を提示（藤岡重和）
第７回　協力医療施設における症例分析：症例 A 検討会（藤岡重和）
第８回　協力医療施設における症例分析：学生の疑問点を分析、感染予防方法を探求する（藤岡重和）
第９回　第９回、10回を病院演習第３日目午後半日で演習する。
　　担当教員監督のもと、院内感染対策活動に参加し、感染予防の具体的実践方法を学修する。
第10回　協力医療施設における院内感染対策活動参加　（藤岡重和）
　　担当教員監督のもと、院内感染対策活動に参加し、感染予防の具体的実践方法を学修する。
第11回　第11回、12回を病院演習第４日目午後半日で演習する。
　　協力医療施設の院内感染対策カンファレンス参加　（藤岡重和）
　　担当教員監督のもと、院内感染対策カンファレンスに参加し感染予防の具体的実践方法を学修する。
第12回　協力医療施設の院内感染対策カンファレンス参加　（藤岡重和）
　　担当教員監督のもと、院内感染対策カンファレンスに参加し感染予防の具体的実践方法を学修する。
第13回　症例 A の分析発表、文献的考察、討議　（藤岡重和）
第14回　症例 A の分析発表、文献的考察、討議からレポート作成・指導　（藤岡重和）
第15回　感染対策活動等報告、レポート作成・指導　（藤岡重和）
第16～ 17回　生活習慣病の理解を深めるための論文抄読会および討論（消化器系）（柴田雅朗）
　　※「生活習慣病と主要部位のがん」（九州大学出版会）を用いて疾患毎に抄読する。
第18回　教員による論文紹介とその解説　（柴田雅朗）

第19～ 20回　生活習慣病の理解を深めるための論文抄読会および討論（呼吸器系および生殖器系）（柴田雅朗）
※「生活習慣病と主要部位のがん」（九州大学出版会）を用いて疾患毎に抄読する。
第21回　教員による最新の論文紹介とその解説　（柴田雅朗）
第22～ 23回　生活習慣病と天然成分の因果関係を学ぶための抄読会および討論　（柴田雅朗）
※「がんの疫学」（東京大学出版）を用いて、臓器毎に天然成分と発がん予防についての章を抄読する。
第24回　教員による最新の論文紹介とその解説　（柴田雅朗）
第25～ 27回　生活習慣病と天然成分の論文抄読会および討論　（柴田雅朗）
※α - マンゴスチンと生活習慣病の論文（英文）を詳細に読み説いていく。
第28～ 30回　各疾病予防に効果のある食品・成分のデザイナー・フーズ表の発表と検討　（柴田雅朗）

■ 評価方法

（藤岡）　各講義での課題レポート　40%（各回レポートを100%で評価しその平均の40%）
筆記試験　10%
（柴田）　レポート　25%　口頭試問　25%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

終了した講義について復習をしっかりして下さい。

■ 教　科　書

■ 参考図書

書　名：生活習慣病と主要部位のがん
著者名：日本がん疫学研究会がん予防指針検討委員会　編
出版社：九州大学出版会

書　名：がんの疫学
著者名：田島和雄　他編
出版社：東京大学出版会

書　名：がんの分子生物学　メカニズム・分子標的・治療　第２版
著者名：Lauren Pecorino　著
出版社：メディカル・サイエンス・インターナショナル

書　名：「循環器疾患のサイエンス」
著者名：小室一成　編
出版社：　南山堂

■ 留意事項

授業科目	健康生活支援学特別研究				
担当者	柴田　雅朗			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	1年～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

生活習慣病を中心とした疾病について、健康生活支援学特論演習（感染・疾病予防）の中から惹起された研究アイデアに基づき、新規天然物質の有効性の有無や、既存の天然物質の新たな生理活性などを、細胞などの生物系モデルを用いて、形態学的ならびに分子生物学的に追究し、かつその作用機序を解析し、「修士論文」にまとめる。

■ 到達目標

研究過程から修士論文をまとめるまでに以下のことを学ぶ。
・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
・研究成果について的確にプレゼンテーションできる。
・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授業計画

第１回～第15回　研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
　　研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
　　関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する
第16回～第30回　ディスカッションを繰り返し、研究計画書を作成する
　　研究計画書に基づき予備実験や予備調査を実施して研究計画の妥当性を検討、研究計画書を完成させる
　　完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
第31回～第45回　研究計画書に基づき実験を実施してデータを収集する
　　収集したデータを解析して論理的な解釈を行う
第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
　　軌道修正を行いながら、再実験ないしは追加実験を実施してデータ収集を継続する
　　収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する
第61回～第75回　論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
　　論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

■ 評価方法

修士論文を主査および副査が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

生活支援学概論、生活支援学特論、生活支援学特論演習で学修した内容をよく復習しておくこと。
研究テーマの関連文献収集と当該分野における最新情報の把握が重要です。担当教員より、必要に応じて参考図書、文献を提示するので、研究分野における最新情報を把握しておくこと。

■ 教　科　書

■ 参考図書

適宜紹介する。

■ 留意事項

授業科目	健康生活支援学特別研究				
担当者	藤岡　重和			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	1年～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

健康生活支援学特論、特論演習で学修した知識、技能をもとに、高度専門職業人として社会で活躍していくための学修の成果として「修士論文」あるいは「課題研究の成果」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究の成果」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、社会に還元できるものにする。健康生活支援学特論、特論演習では健康維持増進、感染予防、疾病予防を包括的に学んだが、これまでに学んだ知識や技能を用いて、学生の主たる対象者に特化した課題を設定し、健康生活支援学特論、特論演習で学んだ知識、技能をさらに深く学修しながら、「修士論文」、「課題研究の成果」にまとめる。

修士論文：感染予防にかかる研究を通じて専門領域を深化させ現場に還元できる研究成果を目指す。研究テーマは、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。例：感染予防における消毒薬、ワクチン、薬剤の有効性に関する課題を探求し、各種の感染予防のための方策の有効性を明らかにする。また、感染予防の観点から、微生物学、分子生物学的手法も取り入れ、感染症の原因となる病原微生物の検出、感染経路の同定、感染症診断のための技術開発を行い、研究成果を広く社会に還元する。

課題研究：感染予防にかかる臨床・臨地の実践から導き出された生活機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究の成果」にまとめる。「課題研究の成果」は、課題テーマに沿った３症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。３症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的・科学的考察、現場に直結する結論などを求める。なお、課題研究指導の過程で、当該学生の課題研究に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。

■ 到達目標

修士論文

・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
・研究成果について的確にプレゼンテーションできる。
・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

課題研究

・専門領域の課題テーマについて、文献の収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
・課題研究の成果について的確にプレゼンテーションできる。
・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授業計画

修士論文

第１回～第15回　研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する

第16回～第30回　ディスカッションを繰り返し研究計画書を作成する
研究計画書に基づき予備実験や予備調査を実施して、研究計画の妥当性を検討、研究計画書を完成させる。完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する

第31回～第45回　研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う

第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する

第61回～第75回　論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

課題研究

第１回～第15回　課題研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する

第16回～第30回　ディスカッションを繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
成させた課題研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
課題研究計画書の承認後、臨床・臨地での活動を開始する。

第31回～第45回　臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる３例以上の症例報告をまとめる

第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
３例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する

第61回～第75回　必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

■ 評価方法

修士論文、課題研究報告書を主査および副査が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

生活支援学概論、生活支援学特論、生活支援学特論演習で学修した内容をよく復習しておくこと。
研究テーマの関連文献収集と当該分野における最新情報の把握が重要です。担当教員より、必要に応じて参考図書、文献を提示するので、研究分野における最新情報を把握しておくこと。

■ 教　科　書

■ 参考図書

適宜紹介する。

■ 留意事項

授業科目	脳神経疾患身体障害支援学特論演習				
担当者	石倉　隆・藪中良彦・伊禮まり子・岩田　篤（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	２年	総単位数	８単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

「脳神経疾患身体障害支援学概論」「脳神経疾患身体障害支援学特論」で修得した知識や臨床推論力を学生のそれぞれの職域に還元できる知識・技能へと高めていくことを目的とする。これまでに修得した知識や臨床推論力を用いて、最新の CPC、症例報告や治療法を分析して批判的に吟味することで、知識や臨床推論力を実践的に身に付けるとともに、学生の担当する対象者を提示して実践的にカンファレンスを実施する。さらに、提携病院で臨床を実践してケースカンファレンスを実施し、「概論」「特論」「特論演習」で修得した知識、技能、臨床推論力を実践的に整理する。

（石倉　隆・岩田　篤）

・経頭蓋脳刺激法を用いた大脳皮質興奮性修飾の科学的根拠を文献や実験を通して検討する。
・学生の臨床･臨地現場の症例を評価、分析し、「概論」「特論」で得た知識を応用するとともに、カンファレンスでその論理を展開する。「概論」「特論」で培った脳科学の知識をもとにした科学的な分析能力や批判的吟味の能力を現場で実践可能な技能へ発展させる。

（藪中良彦）

・脳性麻痺児の独歩獲得に影響する因子及びそれらの因子を客観的に測定する手段を文献を通して検討する。
・学生の臨地現場の GMFCS レベルⅡ及びⅢの脳性麻痺児症例を評価、分析し、「概論」「特論」で得た知識を基に、カンファレンスで機能障害と活動障害の関連について論理を展開する。脳性麻痺児に関する最新の知見をもとにした科学的な分析能力や批判的吟味の能力を現場で実践可能な技能へ発展させる。

（伊禮まり子）

動的姿勢制御と脳機能との関係について､文献や実験を通じて明らかにする。得られた知見をリハビリテーションにどのように応用できるかについて討論するとともに、脳神経疾患身体障害支援学特論で得た脳機能測定法を現場で実践させるための評価法・分析法について検討する。

■ 到 達 目 標

・実際の症例に対し、神経学的症候のメカニズムを科学的根拠に基づいて説明できる。
・実際の症例に対し、根拠あるリハビリテーションを構築できる。
・その際、脳神経生理、脳機能解剖、脳画像などの知識、情報を活用できる。

■ 授 業 計 画

（１回２コマ）

第１回　脳卒中 CPC 分析（石倉）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第２回　脳卒中症例報告分析（石倉）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第３回　神経変性疾患 CPC 分析（岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第４回　神経変性疾患症例報告分析（岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第５回　経頭蓋脳刺激法に係る最新知見の分析と実験（石倉・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第６回　脳性麻痺児の独歩獲得に係る最新知見の分析（藪中）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第７回　脳性麻痺児の評価方法に係る最新知見の分析（藪中）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第８回　動的姿勢制御時の脳機能測定法に係る最新知見の分析と実験（伊禮）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）
第９回～第10回　学生の臨床活動における症例提示、リハビリテーションカンファレンス1－1
学生の現場から症例を提示、検討会で科学的根拠に基づく障害像とリハビリテーション、生活機能支援の分析を実施し、解決すべき課題を抽出する。（石倉・藪中・伊禮・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第11回～第12回　学生の臨床活動における症例提示、リハビリテーションカンファレンス1－2
前回抽出した解決すべき課題について討論し、課題の解決。（石倉・藪中・伊禮・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第13回～第14回　学生の臨床活動における症例提示、リハビリテーションカンファレンス2－1
学生の現場から症例を提示、検討会で科学的根拠に基づく障害像とリハビリテーション、生活機能支援の分析を実施し、解決すべき課題を抽出する。（石倉・藪中・伊禮・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第15回～第16回　学生の臨床活動における症例提示、リハビリテーションカンファレンス2－2
前回抽出した解決すべき課題について討論し、課題の解決。（石倉・藪中・伊禮・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第17回～第18回　学生の臨床活動における症例提示、リハビリテーションカンファレンス3－1
学生の現場から症例を提示、検討会で科学的根拠に基づく障害像とリハビリテーション、生活機能支援の分析を実施し、解決すべき課題を抽出する。（石倉・藪中・伊禮・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第19回～第20回　学生の臨床活動における症例提示、リハビリテーションカンファレンス3－2
前回抽出した解決すべき課題について討論し、課題の解決。（石倉・藪中・伊禮・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第21回～第22回　学生の臨床活動における症例提示、リハビリテーションカンファレンス4－1
学生の現場から症例を提示、検討会で科学的根拠に基づく障害像とリハビリテーション、生活機能支援の分析を実施し、解決すべき課題を抽出する。（石倉・藪中・伊禮・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第23回～第24回　学生の臨床活動における症例提示、リハビリテーションカンファレンス4－2
前回抽出した解決すべき課題について討論し、課題の解決。（石倉・藪中・伊禮・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第25回～第26回　特別研究の成果を領域の院生で共有し、リサーチカンファレンスを展開する
その成果を、臨床現場にいかに還元するか、その有用性と問題点も議論する。（石倉・藪中・伊禮・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第27回～第28回　特別研究の成果を領域の院生で共有し、リサーチカンファレンスを展開する
その成果を、臨床現場にいかに還元するか、その有用性と問題点も議論する。（石倉・藪中・伊禮・岩田）
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第29回～第30回　協力医療施設での症例分析
症例の分析と討論会（石倉・藪中・伊禮・岩田）
（実地での体験活動を伴う授業）（企業等と連携して行う授業）（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

■ 評価方法

第１回～第28回で培った知識・技能を、第29、30回の協力施設での実践で発揮する観点から、協力施設での症例の分析結果レポート（50%）、症例検討会での議論の明確さ（50%）で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

CPC、症例報告の分析を事前に実施すること。
臨床活動における症例の PPT、レジュメを事前に作成すること。
特別研究の現段階までのまとめを実施し、PPT、レジュメを事前に作成すること。

■ 教　科　書

■ 参考図書

別途、紹介する。

■ 留意事項

症例提示には、病院等および対象者の承諾を得るとともに個人情報の保護に努めること。

授業科目	脳神経疾患身体障害支援学特別研究				
担当者	石倉　隆・伊禮まり子・岩田　篤			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　　年	1年～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

高度専門職業人として社会で活躍していくための学修（職業実践力）の成果として「修士論文」あるいは「課題研究報告書」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究報告書」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、学生のそれぞれの職域を通じて社会に還元できるもの、つまり、学生が大学院修了後に高度専門職者として現場で活躍するための職業実践力として活用できる成果にする。
（石倉隆　伊禮まり子　岩田篤）
修士論文:脳神経疾患（成人）による身体障害にかかる研究を通じて､専門領域を深化させ現場に還元でき､職業実践力を向上させる研究成果を目指す。研究課題は、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に直接還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。例①：脳神経疾患により興奮性が低下した大脳皮質に、経頭蓋的に刺激を与えることで､大脳皮質興奮性修飾を試みる。運動関連領野をターゲットとした片麻痺の軽減､補足運動野をターゲットとしたパーキンソン症候群の軽減などの臨床応用を目的に、健常者でその有効性を確認していく。例②:健常者（成人）を対象に、床傾斜刺激による姿勢筋の適応的抑制に最適な刺激強度を明らかにし、その適応過程における運動準備状態の変化について事象関連電位を用いて検討する。
（石倉隆　岩田篤）
課題研究：脳神経疾患（成人）による身体障害にかかる臨床・臨地の実践から導き出された生活機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究」は、課題テーマに沿った３症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。３症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的・科学的考察、現場に直結する結論などを求める。

■ 到達目標

修士論文
・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
・研究成果について的確にプレゼンテーションできる。
・研究成果を社会に還元する術を説明できる。
課題研究
・専門領域の課題テーマについて文献の適切な収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
・課題研究の成果について的確にプレゼンテーションできる。
・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授業計画

（１回２コマ）
修士論文
第１回～第15回　研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
　　研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
　　関連文献や先行知見をもとに、指導教員と討論しながら研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する
　　（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第16回～第30回　討論を繰り返し、研究計画書を作成する
研究計画書に基づき予備実験や予備調査を実施して研究計画の妥当性を検討、研究計画書を完成させる
完成させた研究計画書を研究科委員会へ提出し、必要に応じ研究倫理委員会の審査を受ける
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第31回～第45回　研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを指導教員と討論しながら解析して論理的な解釈を行う
この間、所属施設における実験を実施する研究では、適宜、所属施設の実務家（所属施設監督者）の助言・指導を受ける。
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者、実務家から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを指導教員と討論しながら解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第61回～第75回　論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
課題研究
第１回～第15回　課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに、指導教員と討論しながら臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第16回～第30回　討論を繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
完成させた課題研究計画書を研究科委員会へ提出する
課題研究計画書の承認後、設定した課題テーマの最新知見をさらに追加し、課題解決の基礎となる知識を涵養する
随時、臨床・隣地現場での実践を開始する
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）
（実地での体験活動を伴う授業）
（企業等と連携して行う授業）
（実務家教員や実務家による授業）
第31回～第45回　臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
この間、指導教員と討論するとともに、適宜、所属施設の実務家（協力施設監督者）の助言・指導を受ける。
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる３例以上の症例報告をまとめる
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）
（実地での体験活動を伴う授業）
（企業等と連携して行う授業）
（実務家教員や実務家による授業）
第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や実務家から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
３例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）
（実地での体験活動を伴う授業）
（企業等と連携して行う授業）
（実務家教員や実務家による授業）
第61回～第75回　必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）
（実地での体験活動を伴う授業）
（企業等と連携して行う授業）
（実務家教員や実務家による授業）

■ 評価方法

修士論文：研究過程と修士論文の内容を総合的に勘案して評価する。
課題研究：３例以上の症例報告書および課題研究報告書の内容によって評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

（修士論文）
研究計画書の作成、それに伴う文献検索と考察、実験のシミュレーション、修論作成など、多くの時間が自学に費やされる。学修内容などは、適宜、指示する。
（課題研究）
日々の臨床活動が課題研究に直結する。その中で生じた疑問を文献的に考察したり、研究計画書に則ってデータを収集したりと、多くの時間が自学に費やされる。学修内容は、適宜、指示する。

■ 教　科　書

■ 参考図書

別途、紹介する。

■ 留意事項

特別研究は、修士論文も課題研究も厳正な審査で受理された研究計画書（課題研究計画書）に則って実施する。研究不正行為が絶対にないように留意すること。研究不正行為については、十分に指導するとともに、その行為が発覚した場合には厳しく罰する。

授業科目	脳神経疾患身体障害支援学特別研究				
担当者	藪中良彦・伊禮まり子			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学年	1年～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

高度専門職業人として社会で活躍していくための学修（職業実践力）の成果として「修士論文」あるいは「課題研究報告書」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究報告書」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、学生のそれぞれの職域を通じて社会に還元できるもの、つまり、学生が大学院修了後に高度専門職者として現場で活躍するための職業実践力として活用できる成果にする。

（藪中良彦　伊禮まり子）

修士論文:脳神経疾患（小児）による身体障害にかかる研究を通じて､専門領域を深化させ現場に還元でき､職業実践力を向上させる研究成果を目指す。研究課題は、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に直接還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。例①：実用的に独歩可能なGMFCSレベルⅡの痙直型両麻痺児と10歩の独歩は可能であるが実用的に独歩を使用できないGMFCSレベルⅢの痙直型両麻痺児の間の機能障害の違いを横断的に調査し、実用的な独歩獲得への各機能障害の影響の程度を調査する。例②：健常者（小児）を対象に、床傾斜刺激による姿勢筋の適応的抑制に最適な刺激強度を明らかにし、その適応過程における運動準備状態の変化について事象関連電位を用いて検討する。

（藪中良彦）

課題研究：脳神経疾患（小児）による身体障害にかかる臨床・臨地の実践から導き出された生活機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究」は、課題テーマに沿った３症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。３症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的・科学的考察、現場に直結する結論などを求める。

■ 到達目標

修士論文

・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
・研究成果について的確にプレゼンテーションできる。
・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

課題研究

・専門領域の課題テーマについて文献の適切な収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
・課題研究の成果について的確にプレゼンテーションできる。
・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授業計画

（１回２コマ）

修士論文

第１回～第15回　研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
　　研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
　　関連文献や先行知見をもとに、指導教員と討論しながら研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する
　　（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）

第16回～第30回　討論を繰り返し、研究計画書を作成する
研究計画書に基づき予備実験や予備調査を実施して研究計画の妥当性を検討、研究計画書を完成させる
完成させた研究計画書を研究科委員会へ提出し、必要に応じ研究倫理委員会の審査を受ける
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第31回～第45回　研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを指導教員と討論しながら解析して論理的な解釈を行う
この間、所属施設における実験を実施する研究では、適宜、所属施設の実務家（所属施設監督者）の助言・指導を受ける。
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や研究者、実務家から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを指導教員と討論しながら解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第61回～第75回　論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
課題研究
第１回～第15回　課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに、指導教員と討論しながら臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）（実務家教員や実務家による授業）
第16回～第30回　討論を繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
完成させた課題研究計画書を研究科委員会へ提出する
課題研究計画書の承認後、設定した課題テーマの最新知見をさらに追加し、課題解決の基礎となる知識を涵養する
随時、臨床・隣地現場での実践を開始する
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）
（実地での体験活動を伴う授業）
（企業等と連携して行う授業）
（実務家教員や実務家による授業）
第31回～第45回　臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
この間、指導教員と討論するとともに、適宜、所属施設の実務家（協力施設監督者）の助言・指導を受ける。
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる３例以上の症例報告をまとめる
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）
（実地での体験活動を伴う授業）
（企業等と連携して行う授業）
（実務家教員や実務家による授業）
第46回～第60回　中間発表を行って複数の教員や実務家から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
３例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）
（実地での体験活動を伴う授業）
（企業等と連携して行う授業）
（実務家教員や実務家による授業）

第61回～第75回　必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける
（双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業）
（実地での体験活動を伴う授業）
（企業等と連携して行う授業）
（実務家教員や実務家による授業）

■ 評 価 方 法

修士論文：研究過程と修士論文の内容を総合的に勘案して評価する。
課題研究：３例以上の症例報告書および課題研究報告書の内容によって評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

（修士論文）
研究計画書の作成、それに伴う文献検索と考察、実験のシミュレーション、修論作成など、多くの時間が自学に費やされる。学修内容などは、適宜、指示する。
（課題研究）
日々の臨床活動が課題研究に直結する。その中で生じた疑問を文献的に考察したり、研究計画書に　則ってデータを収集したりと、多くの時間が自学に費やされる。学修内容は、適宜、指示する。

■ 教　科　書

■ 参 考 図 書

別途、紹介する。

■ 留 意 事 項

特別研究は、修士論文も課題研究も厳正な審査で受理された研究計画書（課題研究計画書）に則って実施する。研究不正行為が絶対にないように留意すること。研究不正行為については、十分に指導するとともに、その行為が発覚した場合には厳しく罰する。

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援学特論演習				
担当者	中村憲正・境　隆弘・佐藤睦美（オムニバス）			国家出題基準	
学科名	保健医療学研究科	学　年	２年	総単位数	８単位
		開講時期	通年	選択･必修	選択

■ 内　　容

運動器疾患・スポーツ傷害に起因する身体障害を対象とする学生が社会へ還元する知識・技能に照らして、身体障害支援学特論（運動器疾患・スポーツ傷害）で修得した知識を実践可能な高度専門知識・技能へと昇華させる。生活機能並びにスポーツ復帰支援を実施するうえでの課題解決のための方法論を文献検索やカンファレンスを通じて演習する。症例研究を批判的に抄読し、疑問点を解決することで、症例を深く追求する推論能力を養う。また、模擬症例を分析し、特論で得た知識を応用するとともに、カンファレンスでその論理を展開する。さらに、臨床・臨地現場から症例を提示し、カンファレンスを開催するとともに、顕在化した問題点を科学的に解決する。

（中村憲正）

整形外科疾患症例の最新の報告から病態を理解し、実践的臨床推論の知識とするとともに、模擬症例や学生が臨床・臨地現場で経験した症例の検査結果から臨床推論して、生活機能支援の礎となる論理的思考を養う。

（境　隆弘）

運動器疾患の最新の報告から障害像を理解し、展開されるリハビリテーションの科学的根拠を探る。また、運動器疾患シミュレーションの動作解析を演習し、導出された結果を分析する技能を養う。これらの知識、技能および実際に学生が経験した症例の評価結果から科学的根拠あるリハビリテーションを模索する臨床推論能力を培う。

（佐藤睦美）

スポーツ傷害の最新の報告から障害像を理解し、展開されるリハビリテーションの科学的根拠を探る。また、スポーツ傷害シミュレーションの動作解析を演習し、導出された結果を分析する技能を養う。これらの知識、技能および実際に学生が経験した症例の評価結果から科学的根拠あるリハビリテーションを模索する臨床推論能力を培う。

■ 到達目標

・実際の症例に対し、運動器疾患・スポーツ傷害のメカニズムを科学的根拠に基づいて説明できる。
・実際の症例に対し、根拠あるリハビリテーションを構築できる。
・その際、X-p、CT、MRI などの知識、情報を活用できる。

■ 授業計画

第１回　運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援における整形外科学の重要性は何か？　（中村憲正）
第２回　最新の整形外科疾患症例研究を批判的に吟味し、論理的に考察する　（中村憲正）
第３回　批判的に吟味し、論理的に考察した最新の整形外科疾患症例研究を発表してその病態を検討する　（中村憲正）
第４回　模擬症例 A の提示：画像、検査評価結果を提示　（中村憲正）
第５回　模擬症例 A の詳細分析　（中村憲正）
第６回　模擬症例 A の検討会　（中村憲正）
第７回　模擬症例 B の提示：画像、検査評価結果を提示　（中村憲正）
第８回　模擬症例 B の詳細分析　（中村憲正）
第９回　模擬症例 B の検討会　（中村憲正）
第10回　学生の臨床・臨地活動における整形外科疾患提示、カンファレンス　（中村憲正）
臨床現場からの症例を提示、検討会で病態を科学的に分析する。カンファレンスでの分析は、修士論文につながる着目点が明らかになるように発表する。

第11回　学生が提示した症例の着眼点の文献的考察、エビデンステーブルの作成　（中村憲正）
※（修士論文選択学生）分析しようとする課題に関連した着眼点
第12回　学生の提示症例の着眼点整理、発表　（中村憲正）
※（修士論文選択学生）分析しようとする課題に関連した着眼点
第13回　運動器疾患による身体障害支援におけるリハビリテーションの重要性は何か？　（境隆弘）
第14回　最新の運動器疾患症例研究を批判的に吟味し、論理的に考察する　（境隆弘）
第15回　批判的に吟味し、論理的に考察した最新の運動器疾患症例研究を発表して
その障害解釈と科学的根拠あるリハビリテーションを検討する　（境隆弘）
第16回　３次元動作解析装置オペレーション技術演習（佐藤睦美）
※彩都スポーツ医科学研究所（彩都キャンパス）
第17回～第18回　運動器疾患シミュレーションによる動作解析演習　（境隆弘）
※彩都スポーツ医科学研究所（彩都キャンパス）
第19回　運動器疾患シミュレーションによる動作解析結果の検討会　（境隆弘）
※彩都スポーツ医科学研究所（彩都キャンパス）
第20回　学生の臨床・臨地活動における運動器疾患症例提示、リハビリテーションカンファレンス　（境隆弘）
臨床現場からの症例を提示、検討会で科学的根拠に基づく障害像とリハビリテーション、生活機能支援の分析を実施する。リハビリテーションカンファレンスでの分析、考察は、修士論文、課題研究につながる着目点が明らかになるように発表する。
第21回　学生が提示した症例の着眼点の文献的考察、エビデンステーブルの作成　（境隆弘）
※（修士論文選択学生）分析しようとする課題に関連した着眼点
※（課題研究選択学生）着目する臨床課題に関連した着眼点
第22回　スポーツ傷害による身体障害支援におけるリハビリテーションの重要性は何か？　（佐藤睦美）
第23回　最新のスポーツ傷害症例研究を批判的に吟味し、論理的に考察する　（佐藤睦美）
第24回　批判的に吟味し、論理的に考察した最新のスポーツ傷害症例研究を発表して
その障害解釈と科学的根拠あるリハビリテーションを検討する　（佐藤睦美）
第25回～第26回　スポーツ動作シミュレーションによる動作解析演習　（佐藤睦美）
※彩都スポーツ医科学研究所（彩都キャンパス）
第27回　スポーツ動作シミュレーションによる動作解析結果の検討会　（佐藤睦美）
※彩都スポーツ医科学研究所（彩都キャンパス）
第28回　学生の臨床・臨地活動におけるスポーツ傷害症例提示、リハビリテーションカンファレンス　（佐藤睦美）
臨床現場からの症例を提示、検討会で科学的根拠に基づく障害像とリハビリテーション、生活機能支援の分析を実施する。リハビリテーションカンファレンスでの分析、考察は、修士論文、課題研究につながる着目点が明らかになるように発表する。
第29回　学生が提示した症例の着眼点の文献的考察、エビデンステーブルの作成　（佐藤睦美）
※（修士論文選択学生）分析しようとする課題に関連した着眼点
※（課題研究選択学生）着目する臨床課題に関連した着眼点
第30回　学生の提示症例の着眼点整理、発表　（佐藤睦美）
※（修士論文選択学生）分析しようとする課題に関連した着眼点
※（課題研究選択学生）着目する臨床課題に関連した着眼点

■ 評価方法

学生が提示した症例のカンファレンス内容の科学的分析内容　50%　（中村：第11、12回演習　境：20,21回演習　佐藤：29,30回演習）
※各教員50点満点で採点し、その平均
学生が提示した症例のエビデンステーブルの内容　50%
※各教員50点満点で採点し、その平均

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

症例検討のための準備を周到に行うこと

■ 教　科　書

■ 参考図書

適宜紹介する。

■ 留意事項